

寺
町
旧
域

「貞安前之町における埋蔵文化財発掘調査報告書」

二〇一四年

株式会社
イビソク

寺 町 旧 域

—貞安前之町における埋蔵文化財発掘調査報告書—

2014 年

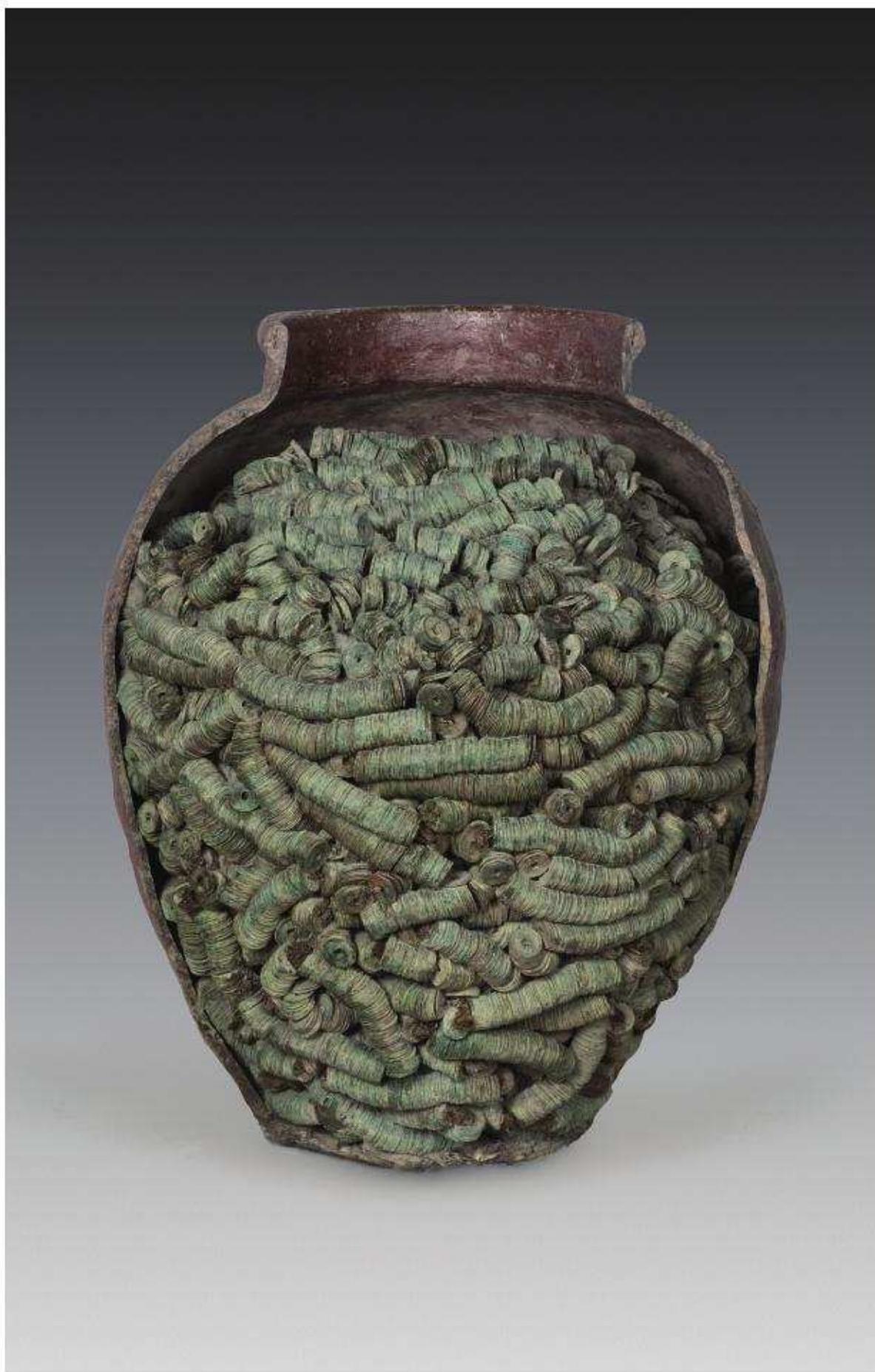
株式会社 イビソク

寺 町 旧 域

—貞安前之町における埋蔵文化財発掘調査報告書—

2014 年

株式会社 イビソク



一括出土錢



1. 豊臣秀次供養塔



砂岩



花崗岩



閃緑岩

スケール単位は1mm

砂岩は28番、花崗岩は2番、閃緑岩は3番。

2. 石塔の石材

例 言

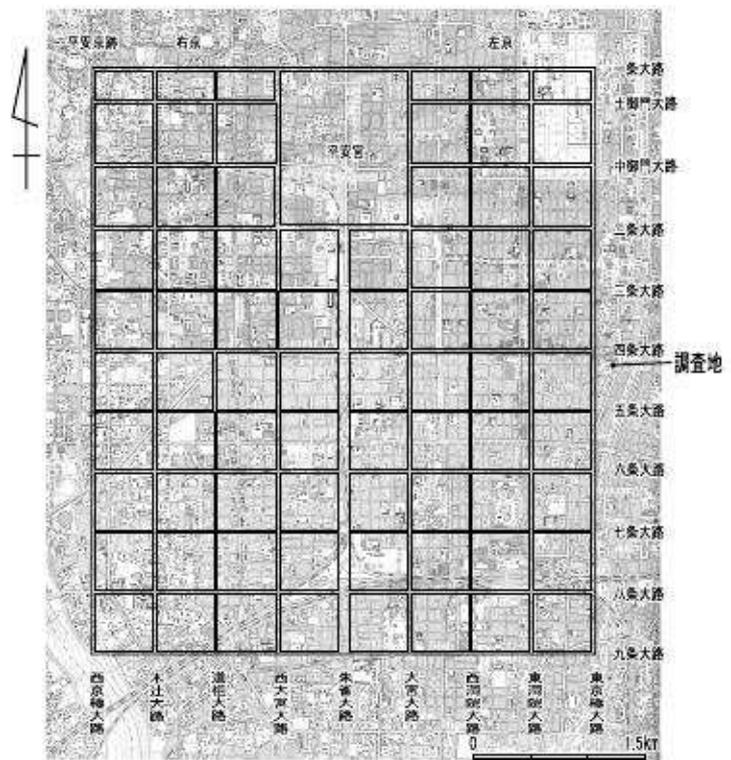
1. 本書は京都府京都市下京区寺町通四条下る貞安前之町614-2に所在する寺町旧域の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、文化財保護法第93条第1項に基づき平成23年10月20日付けで届出された土木工事に伴い、平成23年11月10・14～16日に京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が試掘調査を実施した結果、平安京跡に関連する遺構が検出されたため、同課により発掘調査の実施が指示されたものである。[京都市番号11S324・12S680]
3. 本調査は、土地開発を目的として、ユナイテッド・プロパティ合同会社の委託を受けた株式会社イビソクが実施した。
4. 発掘調査は、平成25年10月21日から平成26年3月6日にかけて実施した。
5. 発掘調査は、京都府教育庁指導部文化財保護課、および京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導・助言の下、株式会社イビソクが実施した。
6. 発掘調査は次の体制で行った。
調査主体 株式会社イビソク
調査員 持田透・熊谷洋一・稲垣裕二
調査補助員 須山貴史・今井満・桐山知子・香山周亮・吉村晶
7. 本報告書の編集は、小池智美・持田透が行った。
8. 本報告書の執筆分担は、以下の通りである。
第1・2章 持田、第3章 第1・3節 持田、第2節 小池、第4節 持田・熊谷・小池、
第5～7節 持田・小池、第4章 第1～4節 持田・小池、第5・7節 須山、第6節
兼康保明、第5章 小林克也・竹原弘展（パレオ・ラボ）、第6章 第1節 1・2・4 持田、
3 兼康、第2節 1 小池、2 須山、第3節 1 今井、2 兼康、位牌観察表・石塔
・墓標観察表 今井、出土遺物観察表 小池
9. 本報告書では次に示した地図を調整・使用している。
京都市地形図（1：2500）「三条大橋」京都市都市計画局発行
10. 本報告書で使用している条坊復元図は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所から座標資料の提供をうけて作成した。
11. 本報告書で示す方位・座標は、国土座標第VI系（世界測地系）、水準値は東京湾平均海面（T.P.）に基づく数値である。
12. 本報告書に掲載した写真は、遺構写真を持田が、遺物写真を横山亮（オフィスメガネ）が撮影した。
13. 報告書作成にあたり、下記の方々及び関係機関のご指導、ご協力を得ることができた。
石井啓、大場修、河内美代子、木下密運、篠原良吉、浜江善光、嶋谷和彦、下坂守、鈴木忠司、鈴木久男、中島圭一、乗岡実、藤井謙治、藤田恒春、藤原卓、水野正好、山本雅和、吉岡康暢（五十音順／敬称略）
公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、龍池山大雲院
14. 出土遺物については、関連する図面・写真等の記録類と共に、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課にて保管している。

凡 例

1. 遺構・遺物写真の縮尺は任意である。
2. 遺構番号は調査面毎に検出順に割り当てた。その後、編集段階で遺構の性格を付与して表記した。
3. 出土遺構の計測値は、小数点以下第2位まで表記し、現存値には（ ）を付けて表現する。
4. 表で示した出土遺物の計測値は、残存値に []、復元値に（ ）を付けて表現する。
5. 遺物番号は、遺物実測図・観察表・遺物写真図版でそれぞれ対応している。
6. 本報告書で用いた土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』を使用した。
7. 出土遺物の年代は、小森俊寛（2005）氏の編年（第1表）を基調とし、その他の出土遺物に関して、本文・表中で記述の煩雑さを避けるため下記の分類・編年を使用・参照した。
 - ・中世土器研究会 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
 - ・小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年的研究－日本律令的土器様式の成立と展開、7世紀～19世紀－』京都編集工房

平安時代	750	律令的土器様式	前期中世京師的土器様式	1250	前期中世京師的土器様式
	800	I期古		1300	前期中世京師的土器様式
	850	I期中		1350	前期中世京師的土器様式
	900	I期新		1400	前期中世京師的土器様式
	950	II期古		1450	前期中世京師的土器様式
	1000	II期中		1500	前期中世京師的土器様式
	1050	II期新		1550	前期中世京師的土器様式
	1100	III期古		1600	前期中世京師的土器様式
	1150	III期中		1650	前期中世京師的土器様式
	1200	III期新		1700	前期中世京師的土器様式
	1250	IV期古		1750	前期中世京師的土器様式
	1300	IV期中			
1350	IV期新				
1400	V期古				
1450	V期中				
1500	V期新				
1550	VI期古				
1600	VI期中				
1650	VI期新				
1700					
1750					

第1表 平安京土器形式一年代対応表



第1図 平安京復元図と調査地の位置

目 次

巻頭図版

例言・凡例

目次・挿図目次・表目次・図版目次・付録CD-R内容一覧

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査の経過	
第2章 位置と環境	3
第3章 遺 構	6
第1節 基本層序	
第2節 遺構の概要	
第3節 第1遺構面の遺構 (江戸時代：天明期～現代)	
第4節 第2遺構面の遺構 (安土桃山時代～江戸時代)	
第5節 第3遺構面の遺構 (室町時代)	
第6節 第4遺構面の遺構 (平安時代後期～鎌倉時代)	
第7節 第5遺構面の遺構 (平安時代後期以前)	
第4章 遺 物	44
第1節 遺物の概要	
第2節 第2遺構面の遺物 (桃山時代～江戸時代)	
第3節 第3遺構面の遺物 (室町時代)	
第4節 第4遺構面の遺物 (平安時代後期～鎌倉時代)	
第5節 木製品	
第6節 石塔・墓標	
第7節 一括出土銭	
第5章 科学分析	128
第6章 まとめ	130
第1節 当該地の変遷 1. 変遷 2. 道路遺構 3. 余部屋敷 4. 大雲院	
第2節 出土遺物 1. 赤色顔料付着土器 2. 一括出土銭	
第3節 豊臣秀次塔をめぐって 1. 院殿の院号をもつ石塔 2. 秀次供養塔造立の時期	
出土遺物観察表	
写真図版	
報告書抄録	
付録 CD-R 1枚	

挿 図 目 次

第1図	平安京復元図と調査地の位置	
第2図	調査地位置図	1
第3図	調査区配置図	2
第4図	周辺調査位置図	3
第5図	基本層序	6
第6図	北・西・南壁断面図	7
第7図	第1遺構面全体図	9
第8図	第2遺構面全体図	11
第9図	第3遺構面全体図	13
第10図	第4遺構面全体図	15
第11図	土坑1010石造品出土状況	19
第12図	第2遺構面遺構図1 土坑1034	19
第13図	第2遺構面遺構図2 石組1040	21
第14図	第2遺構面遺構図3 井戸2001、土坑2009・2023・2101	22
第15図	井戸2135	23
第16図	第2遺構面遺構図4 井戸2130、土坑2119・2153、埋甕土坑2201	24
第17図	第3遺構面遺構図1 柵1・2・3	26
第18図	第3遺構面遺構図2 井戸3007・3020・3021・3050・3090・3097	27
第19図	石積3000	28
第20図	石積3115	28
第21図	第3遺構面遺構図3 土坑3105、井戸3111・3112・3113	30
第22図	第3遺構面遺構図4 埋甕土坑3157	31
第23図	第3遺構面遺構図5 石組3140・3365	32
第24図	第3遺構面遺構図6 井戸3108・3170・3209・3260・3420、石組3154、土坑3155	33
第25図	第3遺構面遺構図7 石室3184・3202・3359・3362	34
第26図	第4遺構面遺構図1 道路4001平面図	36
第27図	第4遺構面遺構図2 道路4001断面図	37
第28図	第4遺構面遺構図3 土坑4032、井戸4791・4724・4844・4906	40
第29図	出土遺物実測図1 土坑1010・1034	45
第30図	出土遺物実測図2 石組1040	46
第31図	出土遺物実測図3 土坑2001・2006	47
第32図	出土遺物実測図4 土坑2009	48
第33図	出土遺物実測図5 土坑2023・2085	49
第34図	出土遺物実測図6 土坑2101・2119・2152	50

第35図	出土遺物実測図7	埋甕土坑2201	51
第36図	出土遺物実測図8	土坑3017・3020、井戸3097	52
第37図	出土遺物実測図9	土坑3103	53
第38図	出土遺物実測図10	土坑3105	54
第39図	出土遺物実測図11	石積3107、埋甕土坑3157	56
第40図	出土遺物実測図12	土坑3111・3112	57
第41図	出土遺物実測図13	土坑3117・3207	58
第42図	出土遺物実測図14	包含層3	59
第43図	出土遺物実測図15	道路4001	60
第44図	出土遺物実測図16	道路4002、土坑4032	61
第45図	出土遺物実測図17	土坑4101・4316	62
第46図	出土遺物実測図18	土坑4410・4520	63
第47図	出土遺物実測図19	土坑4543・4585・4590	65
第48図	出土遺物実測図20	土坑4605	66
第49図	出土遺物実測図21	土坑4623・4627・4670・4723	67
第50図	出土遺物実測図22	土坑4791	68
第51図	出土遺物実測図23	土坑4844・4867・4869・4968	69
第52図	出土木製品 櫛写真・実測図		71
第53図	出土木製品実測図1		72
第54図	出土木製品実測図2		73
第55図	出土木製品実測図3		74
第56図	墓標の分類		78
第57図	五輪塔・一石五輪塔仕上げ加工凡例		81
第58図	一石五輪塔底部形状凡例		81
第59図	出土石塔・墓標実測図1		84
第60図	出土石塔・墓標実測図2		85
第61図	出土石塔・墓標実測図3		86
第62図	出土石塔・墓標実測図4		87
第63図	出土石塔・墓標実測図5		88
第64図	出土石塔・墓標実測図6		89
第65図	出土石塔・墓標実測図7		90
第66図	出土石塔・墓標実測図8		91
第67図	出土石塔・墓標実測図9		92
第68図	出土石塔・墓標実測図10		93
第69図	出土石塔・墓標実測図11		94
第70図	出土石塔・墓標実測図12		95

第71図	出土石塔・墓標実測図13	96
第72図	出土石塔・墓標実測図14	97
第73図	取り上げ作業風景	117
第74図	一括出土銭（錆取り前）	117
第75図	錆取り作業	119
第76図	保存処理作業	119
第77図	一括出土銭取り上げ図	120
第78図	X線透過撮影による鑄造精度の区分	121
第79図	一括出土銭の重量別分布	121
第80図	絹銭表裏・重量グラフ	122
第81図	絹銭の表裏出現期待値	122
第82図	鑄造精度ごとの銭文鮮明度比率	123
第83図	寺町旧域出土絹銭紐と現生牛皮の実体・走査型電子顕微鏡写真	129
第84図	綾小路末想定図	130
第85図	青屋の状景（「東山名所図」より）	132
第86図	青屋遺構	132
第87図	調査区第1遺構面と『大雲院境内地坪并建坪縮図』（明治4年）合成図	133
第88図	赤色顔料元素分析結果（蛍光X線分析法）	134

表 目 次

第1表	平安京土器形式一年代対応表	
第2表	周辺調査地一覧	4
第3表	遺構概要表	17
第4表	遺物概要表	44
第5表	位牌観察表	75
第6表	石塔・墓標種類別点数	77
第7表	時代順の墓標数の変遷（10年単位）	79
第8表	石材加工比較	80
第9表	石塔・墓標観察表（実測分）	98
第10表	石塔・墓標観察表	104
第11表	銭貨観察表（種別年代順）	125
第12表	銭貨観察表（種別数量順）	126
第13表	銭貨観察表（絹銭）	127
第14表	出土遺物観察表	138

図版目次

- 巻頭図版一 一括出土銭
- 巻頭図版二 1. 豊臣秀次供養塔
2. 石塔の石材
- 図版一 1. 第1遺構面（東から）
2. 石組1と水路1044（南から）
3. 石組1（北西から）
- 図版二 1. 第2遺構面（北側）（西から）
2. 第2遺構面（南側）（西から）
3. 土坑1010墓石
- 図版三 1. 石組1040全景
2. 石組1040（断面）
- 図版四 1. 石組1040（南から）
2. 石組1040小区画（北東から）
3. 石組1040小区画裏込め（南東から）
4. 石組1040（東から）
- 図版五 1. 埋甕土坑2201（南から）
2. 埋甕土坑2201（北から）
- 図版六 1. 埋甕土坑2201出土状況1
2. 埋甕土坑2201出土状況2
3. 埋甕土坑2201出土状況3（上が南）
4. 埋甕土坑2201作業風景
5. 土坑2101断面（東から）
6. 土坑2101（東から）
- 図版七 1. 第3遺構面（北側）（西から）
2. 第3遺構面（南側）（西から）
3. 石組3140（南東から）
- 図版八 1. 石積3103（南東から）
2. 埋甕土坑3157（北から）
- 図版九 1. 井戸3007（東から）
2. 井戸3020（西から）
3. 井戸3050（西から）
4. 井戸3050完掘（西から）
- 図版十 1. 井戸3097（西から）
2. 調査区東側壁面（北西から）

- | | |
|-------|--|
| 図版十一 | 1. 第4遺構面（北側）（西から）
2. 第4遺構面（南側）（西から）
3. 道路4001全景（東から） |
| 図版十二 | 1. 道路4001断面（西から）
2. 道路4001版築断面（北から）
3. 道路4001（東から）
4. 道路4001断面（東から）
5. 道路4001断面（東から） |
| 図版十三 | 1. 道路4001断面（東から）
2. 道路4001断面（東から） |
| 図版十四 | 1. 道路4001断面（東から）
2. 道路4001断面（東から） |
| 図版十五 | 1. 道路4001と溝4520
2. 溝4520（東から）
3. 溝4893（西から） |
| 図版十六 | 1. 平安時代整地層除去後（北西から）
2. 平安時代整地層除去後（南東から） |
| 図版十七 | 1. 出土遺物 1 |
| 図版十八 | 1. 出土遺物 2 |
| 図版十九 | 1. 出土遺物 3 |
| 図版二十 | 1. 出土遺物 4 |
| 図版二十一 | 1. 出土遺物 5 |
| 図版二十二 | 1. 出土遺物 6 |
| 図版二十三 | 1. 出土遺物 7 |
| 図版二十四 | 1. 出土遺物 8 |
| 図版二十五 | 1. 出土遺物 9 |
| 図版二十六 | 1. 出土遺物10 |
| 図版二十七 | 1. 出土遺物11 |
| 図版二十八 | 1. 出土遺物12 |
| 図版二十九 | 1. 出土遺物13 |
| 図版三十 | 1. 出土遺物14 |
| 図版三十一 | 1. 出土遺物15 |
| 図版三十二 | 1. 出土遺物16 |
| 図版三十三 | 1. 出土遺物17 |
| 図版三十四 | 1. 出土遺物18
2. 出土遺物（石製品・銭） |

図版三十五	1. 位牌 1
図版三十六	1. 位牌 2
図版三十七	1. 位牌 3
図版三十八	1. 石塔・墓標 1
図版三十九	1. 石塔・墓標 2
図版四十	1. 石塔・墓標 3
図版四十一	1. 石塔・墓標 4
図版四十二	1. 石塔・墓標 5
図版四十三	1. 石塔・墓標 6
図版四十四	1. 石塔・墓標 7
図版四十五	1. 石塔・墓標 8
図版四十六	1. 石塔・墓標 9
図版四十七	1. 石塔・墓標 10
図版四十八	1. 石塔・墓標 11
図版四十九	1. 石塔・墓標 12

付録 CD-R内容一覧

第15表 錢貨観察表（個別）

仏説阿弥陀経—柿経対照図

一括出土錢拓本

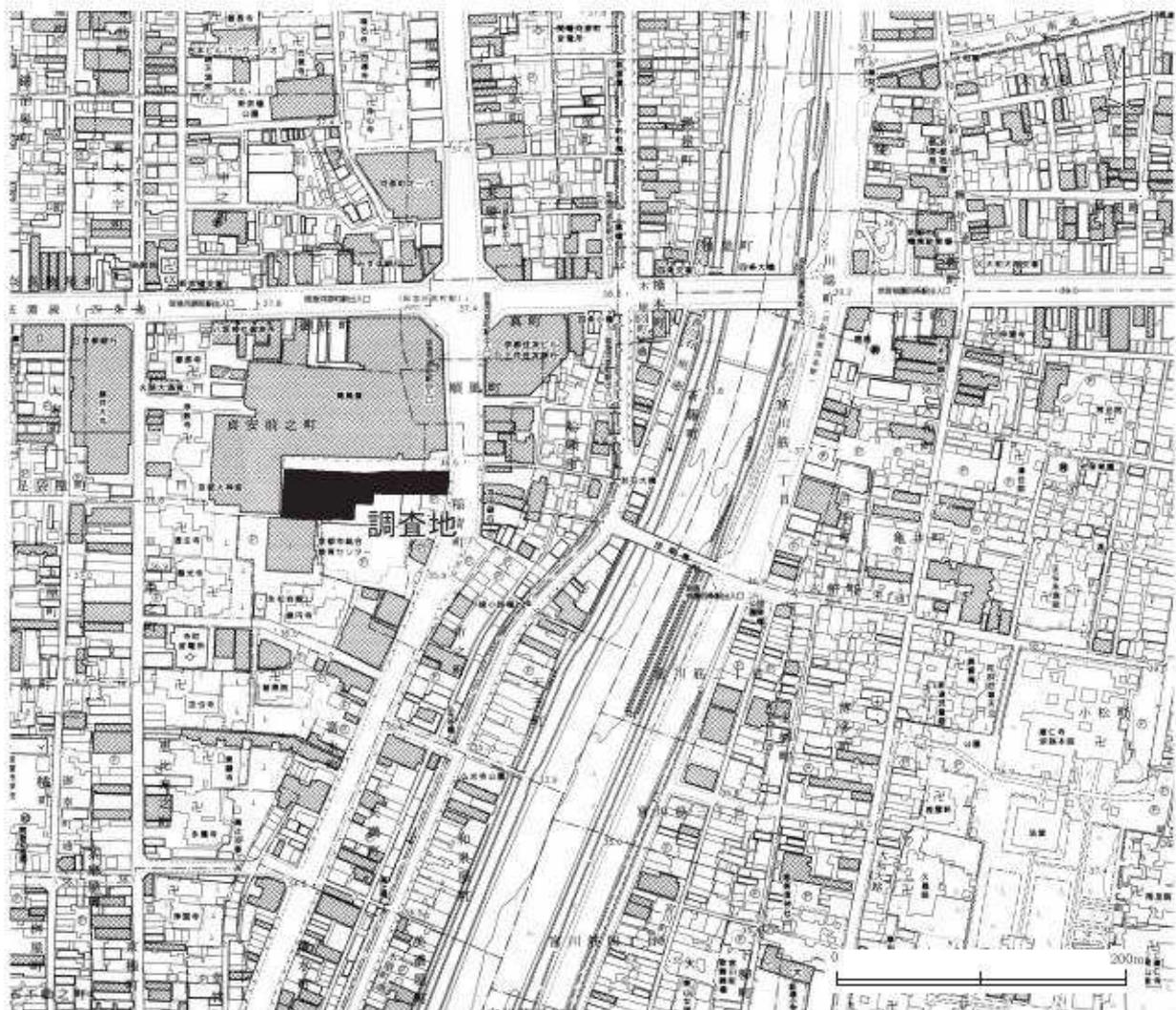
図版五十	一括出土錢X線写真 1
図版五十一	一括出土錢X線写真 2
図版五十二	一括出土錢X線写真 3
図版五十三	一括出土錢X線写真 4
図版五十四	一括出土錢X線写真 5
図版五十五	一括出土錢X線写真 6
図版五十六	一括出土錢X線写真 7
図版五十七	一括出土錢X線写真 8
図版五十八	一括出土錢X線写真 9
図版五十九	一括出土錢X線写真 10
図版六十	一括出土錢X線写真 11
図版六十一	一括出土錢X線写真 12
図版六十二	一括出土錢X線写真 13
図版六十三	一括出土錢X線写真 14

図版六十四	一括出土銭X線写真15
図版六十五	柿経 1
図版六十六	柿経 2
図版六十七	柿経 3
図版六十八	柿経 4
図版六十九	柿経 5
図版七十	柿経 6
図版七十一	柿経 7
図版七十二	柿経 8
図版七十三	柿経 9
図版七十四	柿経10
図版七十五	柿経11
図版七十六	柿経12
図版七十七	柿経13
図版七十八	柿経14
図版七十九	柿経15
図版八十	柿経16
図版八十一	柿経17
図版八十二	柿経18
図版八十三	柿経19
図版八十四	柿経20
図版八十五	柿経21
図版八十六	柿経22
図版八十七	柿経23
図版八十八	柿経24
図版八十九	柿経25
図版九十	柿経26
図版九十一	柿経27
図版九十二	柿経28
図版九十三	柿経29

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

調査は土地開発に伴う発掘調査である。調査地は、京都府京都市下京区貞安前之町 614-2 に所在する、寺町旧域（遺跡番号 170）である。当該地においてユナイテッド・プロパティ合同会社により土地開発が行われることになり、同社は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「京都市文化財保護課」という）へ、平成 23 年 10 月 20 日付で文化財保護法第 93 条第 1 項に基づく届出を行った。京都市文化財保護課はこれを受け、平成 23 年 11 月 10・14～16 日に試掘調査を実施したところ、当該地に江戸時代以前の遺物包含層と遺構が残存していることが確認された（受付番号 11S324・12S680）。そのため京都市文化財保護課から発掘調査の指導があり、調査については、ユナイテッド・プロパティ合同会社から発掘調査の委託を受けた株式会社イビソクが実施することになった。株式会社イビソクは、文化財保護法 92 条に基づき京都府教育委員会に埋蔵文化財発掘調査の届出をし、許可されたので平成 25 年 10 月 21 日より調査を開始した。



第2図 調査地位置図（縮尺 1/5,000）

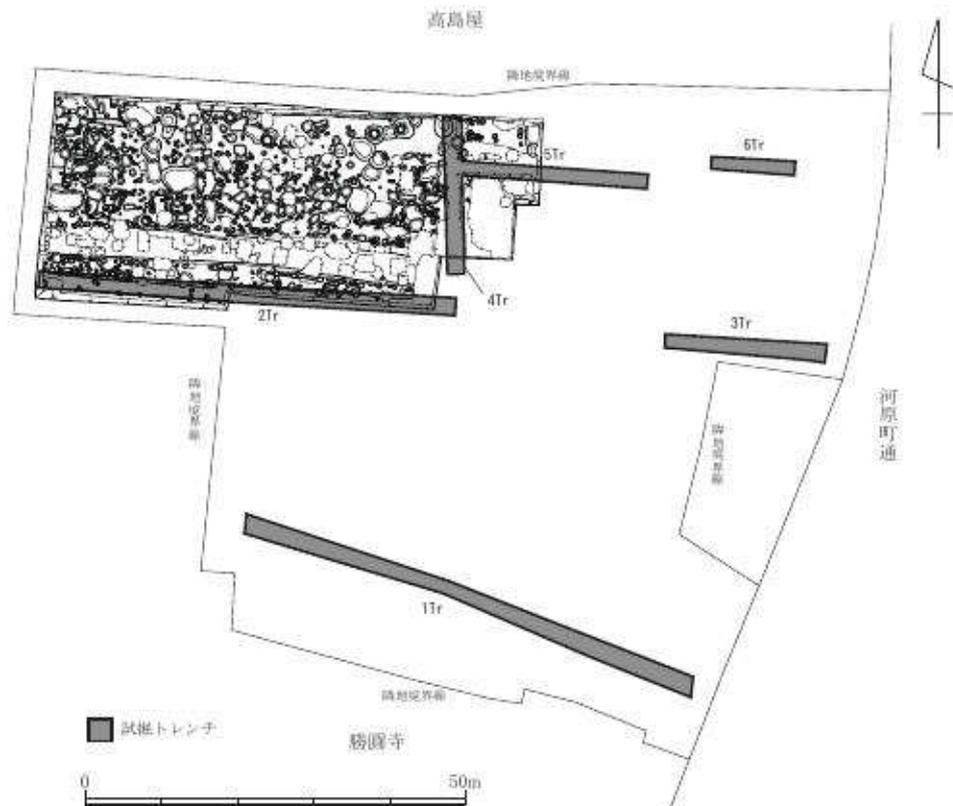
第2節 調査の経過

発掘調査は、平成25年10月21日から平成26年3月6日まで実施した。京都市文化財保護課の指導・監督の下、試掘調査の結果に基づいて調査区域を設定し（第3図）、バックホウによる近代以降の堆積層の除去作業を行った。調査面積は1,592㎡である。調査は機械掘削と並行して、攪乱の除去と土層の堆積状況を確認した。機械掘削後は、遺構検出面を精査して遺構検出を行った。第1遺構面は、近世および近代遺構の調査を行い、続けて第2遺構面では安土桃山時代から江戸時代前期を中心とする遺構面、第3遺構面は室町時代を中心とする遺構面、第4遺構面は平安時代、第5遺構面は古墳時代の調査を順次行なった。この間、それぞれの遺構面の検出時、完掘時には、京都市文化財保護課の検査を受けた。

遺構検出と並行して、遺構配置図を作成し、遺構の配置や重複する遺構の先後関係などの把握に努めた。遺構の記録作業は、土層断面図などを手実測で行い、必要に応じてトータルステーションを用いて遺構平面測量を行い図化した。また各遺構の情報（種類、位置、成果等）および作業状況を記述した台帳を作成した。なお遺構の位置関係と遺物の取り上げのために調査区に合わせて東西方向に西からAからN、南北方向に1から7までの5mグリッドを設定した。

遺構土層断面図と遺物実測図は、デジタルトレースを行い、現場計測図面と合わせて編集を行なった。編集に伴って、各遺構を検討し、遺構の性格を判断していった。

出土した遺物は、洗浄、注記、接合ののちにランク分けを行い、実測対象遺物を抽出した。報告書掲載遺物は、掲載順にコンテナに収納し、非掲載遺物は、遺構番号順にコンテナに収納した。



第3図 調査区配置図（縮尺 1/1000）

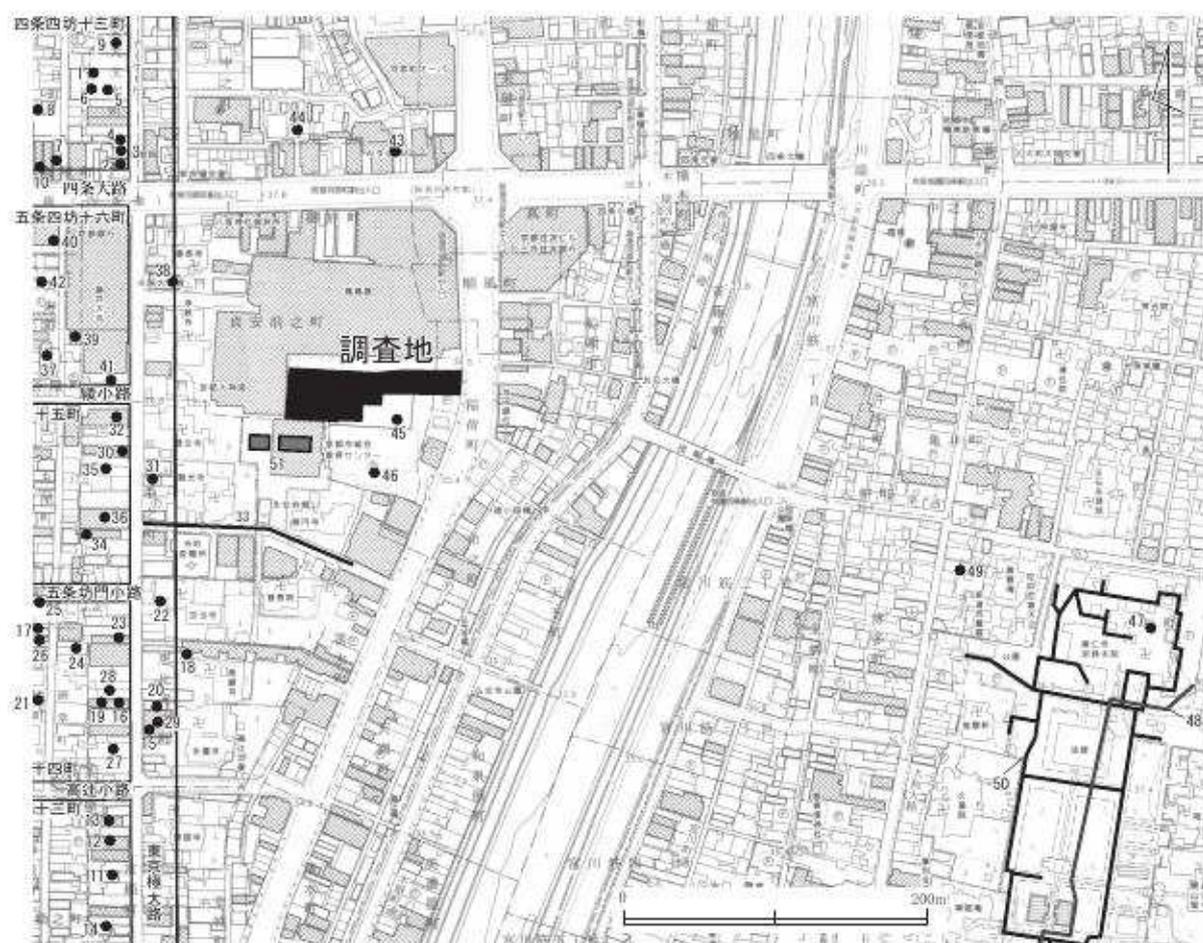
第2章 位置と環境

調査地は平安京の洛外に位置し、豊臣秀吉によって形成された寺町にあたる。なかでも本能寺の変で自害した織田信忠を弔った大雲院の跡地であり、調査区は大雲院の塔頭跡地である。

調査地は平安時代以前の史料はなく、平安時代中期になると藤原良相が一族の子息を養うために設けた崇親院があったとの記録が残る。ただ崇親院は、藤原良相の六条の邸宅を改装したとされるため、洛外に設けたとは考えにくく、洛外の地には崇親院が管理する耕作地が広がっていたと考えられている。

中世に至り、この地には「余部屋敷」が存在していた。いわゆる河原者の集落で、竹藪に囲われた集落が洛中洛外図でも鴨川のほとりに表現されている。集落のなかでは皮をなめした作業風景や、染色作業をおこなっている風景が描かれている。鴨川に入って布をさらしている作業風景もみられるため、このあたりの室町時代の様子を物語っている。また、『天狗草紙絵巻』（鎌倉時代）によると肉を食べるために鴨川のほとりへやってくる件が記されている。

安土桃山時代に至り、秀吉による京都の都市改造の一環として寺町が形成されることとなった。「余部屋敷」は移転させられ、二条御所跡にあった大雲院がこの地へ移ってきた。天正二十年ごろと推定される。大雲院は本堂の他に17の塔頭をもつ浄土宗寺院で、寺領は六千坪を誇り、現



第4図 周辺調査位置図 (縮尺 1/5,000)

代まで継続した。大雲院は貞安上人によって創建された勅願寺院である。寺院の名称である大雲院は、織田信忠の法号で、本能寺の変で自害した織田信忠を弔うために建てられている。貞安上人は、信長が法華宗と敵対したときに行った「安土宗論」の浄土宗側の代表で、宗論に勝利した貞安上人は以後信長、秀吉の庇護を受けることとなり、徳川家康にも同様であったようである。そのため、大名や権力者とのつながりが強い寺院であった。

天明の大火（1788年）では全焼したとされ、後すべての寺院が再建された。幕末の動乱時は類焼を避けることができ、明治に入って最初の市議会が大雲院本堂で行われている。昭和48年に本堂は東山区祇園に移転し、今回の調査地にあった3つの塔頭と墓地だけが残った。これらの塔頭も昭和59年に京都市内各所へ移転した。移転後は立体駐車場に利用された。

第2表 周辺調査地一覧

番号	遺跡名	調査	概要	文献
1	平安京左京 四条四坊十三町	試掘	調査区東側の表土下0.8～1.4mにて平安時代後期～江戸時代にかけての路面5面検出。推定東京橋大路に位置する。	「京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和57年度」京都市文化観光局
2	平安京左京 四条四坊十三町	立会	GL-1.32m以下、包含層4、平安後期1、時期不明3、-1.44mにて平安後期の土坑1。	「京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度」京都市文化観光局
3	平安京左京 四条四坊十三町	立会	GL-1.6m以下、包含層4、古墳1、平安前期1、江戸2。	「京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度」京都市文化観光局
4	平安京左京 四条四坊十三町	立会	GL-2.0mにて平安の土坑。	「京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度」京都市文化観光局
5	平安京左京 四条四坊十三町	試掘	GL-1.3mで平安時代末から鎌倉時代の南北溝・柱穴・土坑状遺構を認める。南北溝は、推定東京橋大路西側溝の可能性あり。	「京都市内遺跡試掘調査概報 平成7年度」京都市文化市民局
6	平安京左京 四条四坊十三町	立会	№1：地表下0.55m以下、路面3、空町の整地層、平安後期・鎌倉の包含層。№2：-1.72mで弥生の包含層。-1.84m以下、暗灰黄色砂泥の無遺物層。	「京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度」京都市文化市民局
7	平安京左京 四条四坊十三町	立会	№1：-0.65m以下、四条大路路面6、-1.5mで流れ堆積。№2：-1.77mで平安末期～鎌倉の格込（土間器、瓦器、白磁）。-2.57m以下、暗灰黄色砂礫の地山。№3：-1.48mで空町の包含層。-1.64m以下、黄褐色砂泥・粗砂礫の地山。	「京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度」京都市文化市民局
8	平安京左京 四条四坊十三町	立会	-1.4m、江戸の包含層（瓦）。	「京都市内遺跡立会調査概報 平成12年度」京都市文化市民局
9	平安京左京 四条四坊十三町	立会	-1.64m以下、暗灰黄色粘土の地山。	「京都市内遺跡立会調査概報 平成13年度」京都市文化市民局
10	平安京左京 四条四坊十三町	立会	№1：-1.0m、空町末期の包含層（土師器皿、肥前系陶器）。№2：-1.35m、江戸中期の包含層。	「京都市内遺跡立会調査概報 平成13年度」京都市文化市民局
11	平安京左京 五条四坊十三町	立会	GL-0.3m以下、江戸の包含層5。	「京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度」京都市文化観光局
12	平安京左京 五条四坊十三町	立会	0.5m以下、泥感堆積。	「京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度」京都市文化市民局
13	平安京左京 五条四坊十三町	立会	0.38m、江戸後期の包含層。-1.06m、江戸中期の包含層。	「京都市内遺跡立会調査概報 平成13年度」京都市文化市民局
14	平安京左京 五条四坊十三町	立会	-1.05m、江戸後期の包含層。	「京都市内遺跡立会調査概報 平成16年度」京都市文化市民局
15	平安京左京 五条四坊十四町	立会	表土下1.35～1.75mにて平安後期、鎌倉前期、時期不明の3層の包含層。	「京都市内遺跡試掘、立会調査概報 昭和56年度」京都市文化観光局
16	平安京左京 五条四坊十四町	試掘	表土下1.0～1.5mにて平安末期～江戸の包含層。土坑4。	「京都市内遺跡試掘、立会調査概報 昭和56年度」京都市文化観光局
17	平安京左京 五条四坊十四町	立会	GL-0.2m以下、江戸前期～後期の包含層。	「京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度」京都市文化観光局
18	平安京左京 五条四坊十四町	試掘	GL-1.35mにて平安後期の包含層。	「京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度」京都市文化観光局
19	平安京左京 五条四坊十四町	立会	GL-1.4m以下平安後期の流れ堆積。	「京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度」京都市文化観光局
20	平安京左京 五条四坊十四町	立会	GL-1.35m以下、路面2、推定東京橋大路、平安後期の土坑2。	「京都市内遺跡立会調査概報 平成3年度」京都市文化観光局
21	平安京左京 五条四坊十四町	立会	0.99mで江戸の包含層。	「京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度」京都市文化市民局
22	平安京左京 五条四坊十四町	立会	№2：-1.1m以下、整地層3、-1.25mで平安後期の土坑6。№3：-0.15m以下、平安後期～鎌倉の包含層（土師器、須恵器、灰陶器、青磁）。	「京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度」京都市文化市民局
23	平安京左京 五条四坊十四町	立会	0.13m、近世の整地層。	「京都市内遺跡立会調査概報 平成11年度」京都市文化市民局
24	平安京左京 五条四坊十四町	立会	-1.0m、江戸初期の包含層（土師器皿、横溝産）。	「京都市内遺跡立会調査概報 平成14年度」京都市文化市民局

番号	遺跡名	調査	概要	文献
25	平安京左京 五条四坊十四町	立会	-1.45m、時期不明の包含層（土師器、灰釉陶器碗、土器）。-1.9m以下、褐色砂礫の地山。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成18年度』京都市文化市民局
26	平安京左京 五条四坊十四町	立会	No.1：-1.34m、鎌倉中～後期の包含層（土師器皿）。-1.74mで黄褐色砂礫の地山を切って鎌倉前～中期の土器層（土師器皿、須恵器鉢、瓦器鍋、輸入白磁皿）。No.2：-1.4m、江戸末期の整地層（型物土人形）。-1.77m以下、灰黄褐色砂礫の地山。No.3：-1.1m、時期不明の包含層（土師器皿、無釉陶器鉢）。-1.7m以下、黄褐色砂礫の地山。No.4：-0.2m、江戸末期の横土整地層。No.5：-1.4m、江戸末期の瓦葺。-1.9m以下、黄褐色砂礫の地山。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成18年度』京都市文化市民局
27	平安京左京 五条四坊十四町	立会	No.1：-0.65m、時期不明の包含層（土師器）、No.2：-0.65m・-1.2m、時期不明の包含層2。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成19年度』京都市文化市民局
28	平安京左京 五条四坊十四町	立会	No.1：-1.35m、堅く締まる褐色泥砂の整地層。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成22年度』京都市文化観光局
29	平安京左京 五条四坊十四町	立会	2.0m以下、暗褐色砂礫の地山。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成23年度』京都市文化市民局
30	平安京左京 五条四坊十五町	試掘	表土下1.0～2.55mにて平安中期～江戸の包含層。	『京都市内遺跡試掘、立会調査概報 昭和56年度』京都市文化観光局
31	平安京左京 五条四坊十五町	立会	掘削深まで江戸の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度』京都市文化観光局
32	平安京左京 五条四坊十五町	立会	GL-1.3mにて時期不明の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』京都市文化観光局
33	平安京左京 五条四坊十五町	立会	地表下0.1m以下、路面、空町の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成5年度』京都市文化観光局
34	平安京左京 五条四坊十五町	立会	地表下2.06mで平安末期～鎌倉の包含層。-2.14m以下、褐色相砂礫の無遺物層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』京都市文化市民局
35	平安京左京 五条四坊十五町	立会	-1.29mで包含層（土師器・瓦器）。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成9年度』京都市文化市民局
36	平安京左京 五条四坊十五町	立会	0.8m、褐色砂礫の泥濘状堆積。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成18年度』京都市文化市民局
37	平安京左京 五条四坊十六町	立会	GL-1.35m以下、鎌倉・時期不明の包含層各1。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局
38	平安京左京 五条四坊十六町	立会	地表下0.53mにて時期不明の路面、平安後期・江戸の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成4年度』京都市文化観光局
39	平安京左京 五条四坊十六町	立会	地表下1.32m以下、時期不明の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成4年度』京都市文化観光局
40	平安京左京 五条四坊十六町	立会	0.68m以下、江戸の包含層2。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度』京都市文化市民局
41	平安京左京 五条四坊十六町	立会	2.1mで暗オリーブ色砂礫の地山を切って空町の土坑（土師器皿、焼締陶器壺、石製品破）。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成21年度』京都市文化市民局
42	平安京左京 五条四坊十六町	立会	-0.32m・-0.52m、近世以降の包含層2。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成24年度』京都市文化市民局
43	寺町旧城	立会	No.5：-1.35m以下、褐色砂礫の地山。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成19年度』京都市文化市民局
44	四条道場跡・寺町旧城	立会	中世の埋土4基、平安時代後期の包含層などを検出。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成21年度』京都市文化市民局
45	寺町旧城・御土居跡	試掘	御土居内側にも存在するとされる溝、近世～現代土坑群、中世の土坑、柱穴、溝を検出。	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成23年度』京都市文化市民局
46	寺町旧城・御土居跡	立会	No.1：2.0m以下、褐色細砂の地山。No.2：-1.1m、暗灰黄色粗砂の泥濘状堆積。-2.6m以下、褐色砂礫の地山。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成25年度』京都市文化市民局
47	建仁寺境内	立会	-1.3m、江戸後期の落込（土師器皿、染付）。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成16年度』京都市文化市民局
48	建仁寺境内	立会	-0.2m、時期不明の包含層（瓦、磚）。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成18年度』京都市文化市民局
49	建仁寺境内	立会	No.1：-1.1m、時期不明の包含層（土師器）、-1.2m・-1.5m、空町の包含層（土師器皿、焼締陶器信楽壺、平瓦）2、No.2：-0.65m、時期不明の包含層（青白磁、焼締陶器信楽壺）、-1.5m、空町の包含層（土師器皿）、No.3：-1.1m、時期不明の包含層（土師器）、No.4：-1.0m、時期不明の包含層（土師器）、No.5：-1.3m・-1.42m・-1.67m・-1.9m、空町の包含層（土師器皿、焼締陶器信楽壺）4、No.6：-1.95m・-2.15m、空町の包含層（土師器皿）2、No.7：-1.1m、空町の包含層（焼締陶器備前壺）、No.9：-1.1m、近世の包含層（青磁）、-1.9m、時期不明の包含層（土師器）、No.10：-1.3m、空町の包含層（土師器皿）、-1.7m、空町の包含層（土師器皿、道具瓦、青磁）、No.11：-0.75m、空町の包含層（土師器皿、平瓦）。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成19年度』京都市文化市民局
50	建仁寺境内	立会	No.1：-0.16m～-0.65m、時期不明の路面及び整地層。No.2：-0.17m～-0.65m、近世以降の路面及び整地層。No.3：-0.28m～-0.32m、時期不明の路面及び整地層。No.8：-0.35m、中世の包含層（土師器、瓦器羽釜）。No.16：-0.25m、近世の落込。No.20：-0.22m、中世の包含層（丸・平瓦）。No.23：-0.51m、空町の土坑（土師器皿）。0.73m、時期不明の包含層（土師器）。No.36：-0.46m、近世の包含層。0.56m、上部に平坦面を持つ石。No.48：-0.56m、江戸の落込（土師器皿、輸入青磁碗、丸・平瓦）。No.49：-0.29m・-0.45m・-0.65m、時期不明の包含層（巴文軒丸瓦・平瓦）3。No.62：-0.5m、平安の包含層（輸入青磁碗）。No.63：-0.46m、中世の包含層（鉢）、-0.9m、時期不明の包含層（土師器皿）。No.64：-0.7m、時期不明の包含層（土師器皿、丸瓦）、-0.78m、上部に平坦面を持つ石2。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成25年度』京都市文化市民局
51	平安京跡後地	発掘	平安～江戸時代の遺構を検出。特に桃山～江戸時代の遺構が多く、井戸・溝・石室・土坑・柱穴などを検出。同時代の土師器・回春陶磁器・輸入磁器類等が多量に出土。	『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所

第3章 遺構

第1節 基本層序 (第5図)

調査地は鴨川の右岸に位置し、河川氾濫による沖積地および自然堤防の形成による影響を強く受けた土地である。基盤層は砂層で、粗砂や中砂が互層に堆積している。現地表面から3m程度の掘削をおこなったが、湧水層は確認できなかった。井戸の作り替えも行われており、地下水位の変動が頻繁にあったものと考えられる。

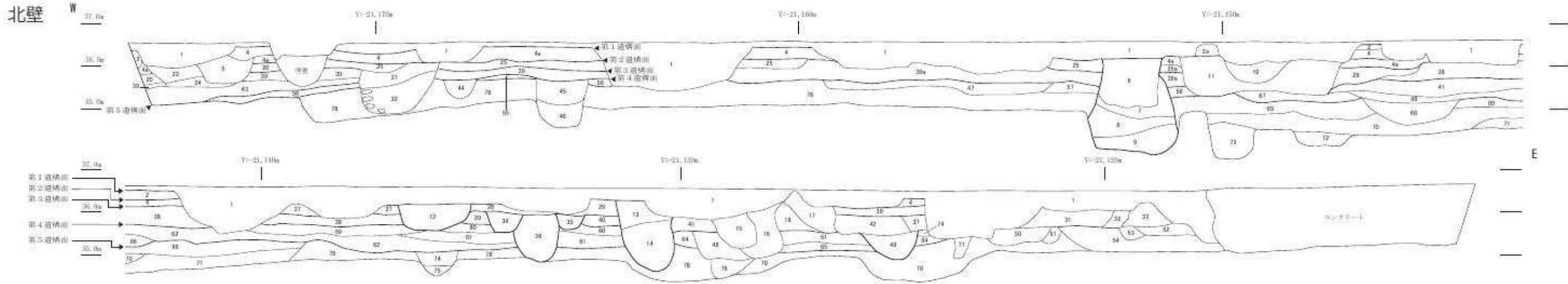
表土は立体駐車場が存在していたために地盤改良されており、地中基礎の痕跡が多く残されていた。そのため第1遺構面の遺構はほぼ破壊されていた。第1遺構面は黄褐色泥砂で整地されており、現地表面から20～30cmの深さを測る。調査地の西から東へゆるやかに傾斜する地形で、比高は50cmを測る。第2遺構面は褐色泥砂で整地された面で、第1遺構面の整地土である黄褐色泥砂を除去した面で15～30cmの厚みがある。第1遺構面と同じく東への傾斜が認められる。第3遺構面は黒褐色泥砂による整地土で、第2遺構面の整地土である褐色泥砂は20cm程度の厚みがある。第4遺構面は褐灰色泥砂層で、一部で薄緑色のいわゆるウグイス整地土がみられる。第3遺構面の整地土である、黒褐色泥砂は45～60cmの厚みがあり、人頭大の円礫などを含む。第4遺構面の整地土は5～20cmの厚みがあり、基盤層の橙色砂層となる。砂層上でシルト質の広がり一部で確認でき、落ち込みが存在したと考えられる。

第1遺構面は、大雲院が天明の大火(天明八・1788年)で焼失して再建された後、移転するまでの時代の遺構面である。第2遺構面は、天正二十年ごろに寺町が形成された際の整地土と考えられ、初期大雲院の伽藍が存在していた遺構面である。第3遺構面は室町時代の遺物を含む遺構が検出されるため、大雲院建設前の集落が営まれていた時期の遺構面である。第4遺構面からは、平安時代後期(11世紀後半)の遺物が出土し、第4遺構面の整地土より下層では明確な遺構を確認できなかったため、この調査地の土地利用が始まったのは平安時代後期(11世紀後半以降)といえる。

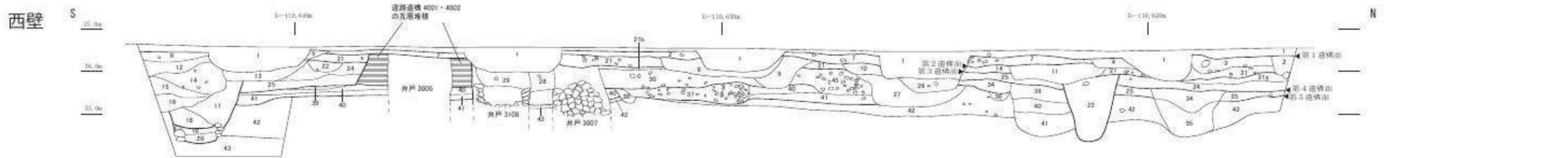
また、第4遺構面で検出した道路遺構は堤防状に盛土したもので、第2遺構面の検出面の高さまで残存していた。調査地の東側を流れる鴨川の氾濫も幾度となくあったと想定され、堤防状の盛土が調査地の南北を分けているために北側では砂礫が多くみられることに対して南側では堆積土に含まれる砂礫が少ない。



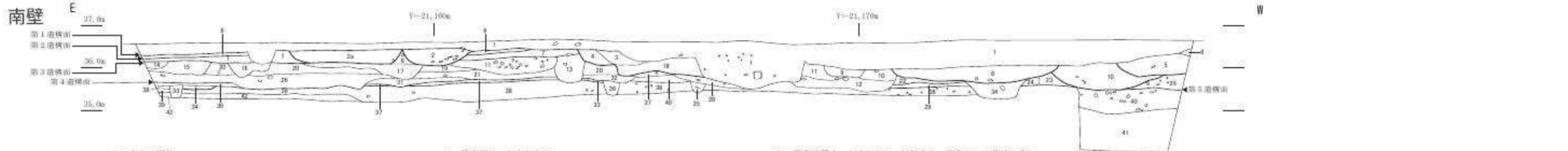
第5図 基本層序 (縮尺 1/40)



- 1. 表土・覆土
- 2. 褐色泥砂 しまりあり
- 2a. 灰色泥砂 しまりあり 粘性あり
- 3. 褐色泥砂 しまりあり (西壁3層)
- 4. 暗灰色泥砂 しまりあり 炭化物・焼土粒含む
- 4a. 灰色泥砂 しまりあり
- 5. 褐色泥砂 雑多量を含む 締り・粘性弱い
- 6. 黄褐色泥砂 締り・粘性有り【土坑2152】
- 7. 褐色泥砂 しまりあり【土坑2152】
- 8. 褐色泥砂 しまりあり【土坑2152】
- 9. 褐色泥砂 しまりあり【土坑2152】
- 10. 灰褐色泥砂 しまりあり 粘性あり
- 11. 灰褐色泥砂 雑多量を含む
- 12. 黄褐色泥砂 雑多量を含む 焼土粒含む【土坑2178】
- 13. にぶい黄褐色泥砂 しまりあり【土坑2170】
- 14. にぶい黄褐色泥砂 雑多量を含む【土坑2170】
- 15. 灰褐色泥砂 雑多量を含む
- 16. 褐色泥砂 しまりやや弱い 焼土粒僅かに含む
- 17. 黄褐色泥砂 しまりややあり
- 18. 褐色泥砂 しまりあり
- 19. 褐色泥砂 しまりややあり 焼土粒含む
- 20. にぶい褐色泥砂 締り強い
- 21. 明黄褐色泥砂 しまりあり 粘性あり
- 22. 褐色泥砂
- 23. 黄褐色泥砂 しまりあり 粘性あり 焼土粒含む
- 24. 灰褐色泥砂 しまりやや弱い
- 25. 暗灰色泥砂 しまりあり 粘性あり 焼土粒含む
- 25a. 褐色泥砂 しまりやや弱い
- 26. 褐色泥砂 雑多量を含む しまりあり
- 27. 褐色泥砂 雑多量を含む しまりあり 粘性あり
- 28. にぶい褐色泥砂 しまり強い
- 29. 褐色泥砂 しまりややあり 焼土粒含む
- 30. 黄褐色泥砂
- 31. 褐色泥砂 雑多量を含む 締り・粘性弱い
- 32. 黄褐色泥砂 しまりあり 焼土粒僅かに含む
- 33. 黒褐色泥砂 しまりややあり 炭化物・焼土粒含む
- 34. 灰褐色泥砂 しまりあり【土坑2189】
- 35. 黒褐色泥砂 しまりあり 焼土粒含む【土坑2194】
- 36. 褐色泥砂【土坑3246】
- 37. 灰褐色泥砂
- 38. 褐色泥砂 焼土粒僅かに含む しまり・粘性あり
- 39. 褐色泥砂 しまりややあり
- 40. 黒褐色泥砂 焼土粒含む
- 41. 黒褐色泥砂
- 42. 黄褐色泥砂 雑多量を含む
- 43. 黄褐色泥砂
- 44. 褐色泥砂 しまりややあり
- 45. 褐色泥砂 焼土粒僅かに含む
- 46. 黒褐色泥砂 粘性ややあり 雑多量
- 47. 黄褐色泥砂 しまりややあり
- 48. 灰褐色泥砂
- 49. 灰色泥砂 しまりややあり【土坑3207】
- 50. 黄褐色泥砂 しまりあり 粘性あり 焼土粒僅かに含む
- 51. 黄褐色泥砂
- 52. 黄褐色泥砂
- 53. 黄褐色泥砂
- 54. 灰黄褐色泥砂
- 55. 黒褐色泥砂 焼土ブロック含む
- 56. 黄褐色泥砂
- 57. 灰褐色泥砂
- 58. 褐色泥砂 粘性あり
- 59. 褐色泥砂 しまりややあり
- 60. 黒褐色泥砂 しまりややあり
- 61. 黒褐色泥砂
- 62. 褐色泥砂
- 63. 褐色泥砂 しまりやや弱い 粘性あり
- 64. 褐色泥砂
- 65. 褐色泥砂
- 66. 褐色泥砂 しまりあり 粘性あり
- 67. 黄褐色泥砂 しまりややあり 黄褐色粘土ブロック含む
- 68. 灰色泥砂 粘性ややあり
- 69. 黄褐色泥砂 しまりややあり
- 70. 灰白色粘質土 しまり強い 粘性強い
- 71. 灰色泥砂
- 72. 黄褐色泥砂
- 73. 灰色泥砂 しまりややあり
- 74. 褐色泥砂
- 75. 灰白色粘質土
- 76. 褐色泥砂
- 77. 褐色泥砂
- 78. 黄褐色泥砂

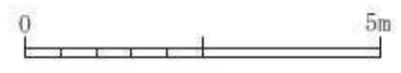


- 1. 表土・覆土
- 2. 褐色泥砂 しまりあり (北壁3層)
- 3. 灰黄褐色泥砂 しまりあり 粘性あり
- 4. 褐色泥砂 しまりあり
- 5. 灰黄褐色泥砂 焼土粒 少量含む
- 6. 褐色泥砂 焼土粒含む
- 7. 灰黄褐色泥砂
- 8. 灰褐色泥砂 しまりあり 焼土粒少量含む
- 9. 灰褐色泥砂 炭化物・焼土粒含む
- 10. 褐色泥砂 焼土粒やや多く含む
- 11. 褐色泥砂 焼土粒やや多く含む
- 12. 灰黄褐色泥砂
- 13. 灰黄褐色泥砂 しまりややあり
- 14. 灰黄褐色泥砂
- 15. 褐色泥砂
- 16. 灰褐色泥砂 しまりやや弱い 粘性やや弱い
- 17. 黒褐色泥砂 焼土粒含む【土坑3109】
- 18. 黒色泥砂 しまりややあり【土坑3109】
- 19. 黒褐色泥砂【井戸3110】
- 20. 黒色泥砂 しまりあり 粘性あり【井戸3110】
- 21. 褐色泥砂
- 21a. 黒褐色泥砂 しまりややあり
- 22. 黒褐色泥砂 しまりややあり
- 23. 褐色泥砂 しまりあり 雑多量 炭化物ごく少量含む【土坑2123】
- 24. 褐色泥砂 しまりあり
- 25. 灰褐色泥砂
- 26. 黒褐色泥砂 炭化物含む
- 27. 褐色泥砂 しまりややあり
- 28. 灰黄褐色泥砂 しまりやや弱い
- 29. 灰黄褐色泥砂
- 30. 灰黄褐色泥砂 しまりややあり 雑多量混じる
- 31. 褐色泥砂 しまりあり 粘性ややあり 炭化物含む
- 32. 褐色泥砂 しまりあり 粘性あり
- 33. 褐色泥砂 しまりあり 粘性あり 炭化物含む
- 34. 褐色泥砂 しまりあり 粘性あり
- 35. 褐色泥砂
- 36. 黒色泥砂
- 37. 褐色泥砂 雑多量を含む
- 38. 褐色泥砂 しまりあり
- 39. 黒色泥砂
- 40. 褐色泥砂 整地層
- 41. 褐色泥砂 しまりあり 粘性あり 炭化物含む
- 42. 黄褐色泥砂 (地山)
- 43. 黄褐色泥砂 (地山)



- 1. 表土・覆土
- 2. 灰黄褐色泥砂 焼土多く含む【土坑1006】
- 2a. 褐色泥砂 焼土含む【土坑1014】
- 3. 灰黄褐色泥砂 しまりあり 炭化物・焼土粒・雑多量【土坑2008】
- 4. 灰黄褐色泥砂 しまりあり 炭化物含む【土坑2008】
- 5. 黒褐色泥砂 しまりあり 炭化物・焼土粒含む【土坑2009】
- 6. 褐色泥砂 しまりあり 炭化物含む
- 7. 褐色泥砂 しまりあり
- 8. 褐色泥砂 しまりややあり 炭化物やや多く含む 焼土粒含む【土坑2007】
- 9. 灰褐色泥砂 粘性あり 炭化物・焼土粒含む
- 10. 黒褐色泥砂 しまりあり 粘性あり【土坑3109】
- 11. 褐色泥砂 しまりあり
- 12. 黒褐色泥砂 炭化物・焼土粒含む
- 13. 褐色泥砂 しまりあり
- 14. 灰褐色泥砂 しまりややあり 焼土・炭化物・黄褐色土ブロック含む
- 15. 褐色泥砂 しまりややあり 粘性あり 炭化物含む
- 16. 黒褐色泥砂 しまりあり 炭化物・焼土粒含む
- 17. 褐色泥砂 炭化物・焼土粒含む
- 18. 褐色泥砂 炭化物・焼土粒含む【土坑2006】
- 19. 褐色泥砂 しまりあり 粘性あり 焼土粒含む
- 20. 褐色泥砂 しまりあり
- 21. 黒褐色泥砂 炭化物・焼土粒含む
- 22. 黒色粘質土 しまりあり 粘性あり 褐色シルト帯状に含む
- 23. 褐色泥砂
- 24. 灰黄褐色泥砂 しまりあり
- 25. 褐色泥砂 しまりあり
- 26. 黒褐色泥砂 しまりややあり 炭化物・焼土粒含む
- 27. 褐色泥砂 粘性あり 炭化物・焼土粒含む
- 28. 褐色泥砂 粘性ややあり
- 29. 黄褐色泥砂 整地層
- 30. 黒褐色泥砂 しまりあり 粘性あり 炭層混じる
- 31. 灰褐色泥砂 しまりあり 粘性あり 炭化物・焼土粒含む
- 32. 褐色泥砂 粘性ややあり
- 33. 黒褐色泥砂
- 34. 黒褐色泥砂 炭化物含む【土坑2007】
- 35. 褐色泥砂 しまりあり 炭化物・焼土粒僅かに含む
- 36. 灰色泥砂
- 37. 黄褐色泥砂 整地層
- 38. 黄褐色泥砂
- 39. 粗砂 しまりあり 粘性あり (地山)
- 40. 砂層
- 41. 褐色粗砂 (地山)

第6図 北・西・南壁断面図 (縮尺1/100)

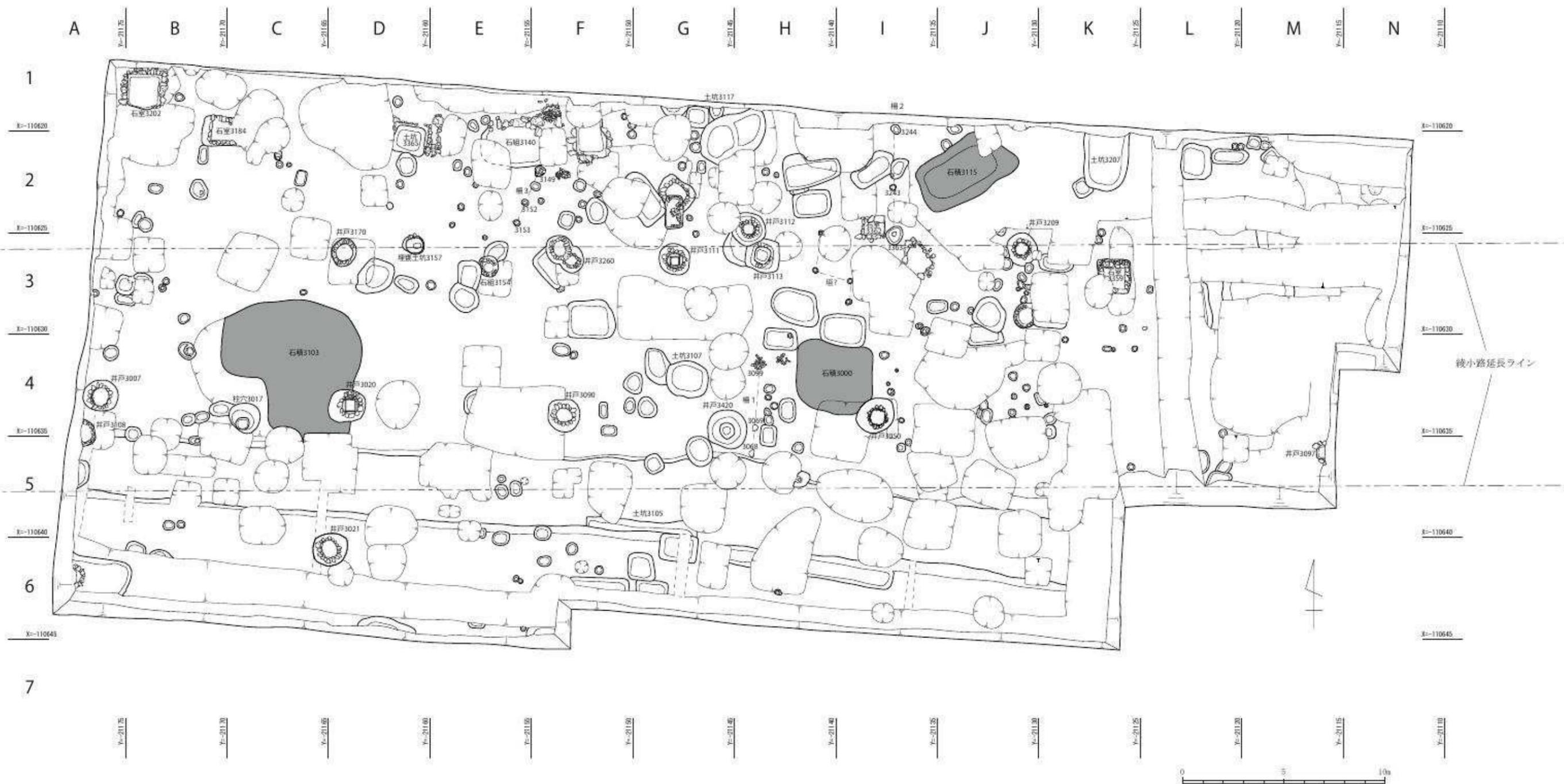




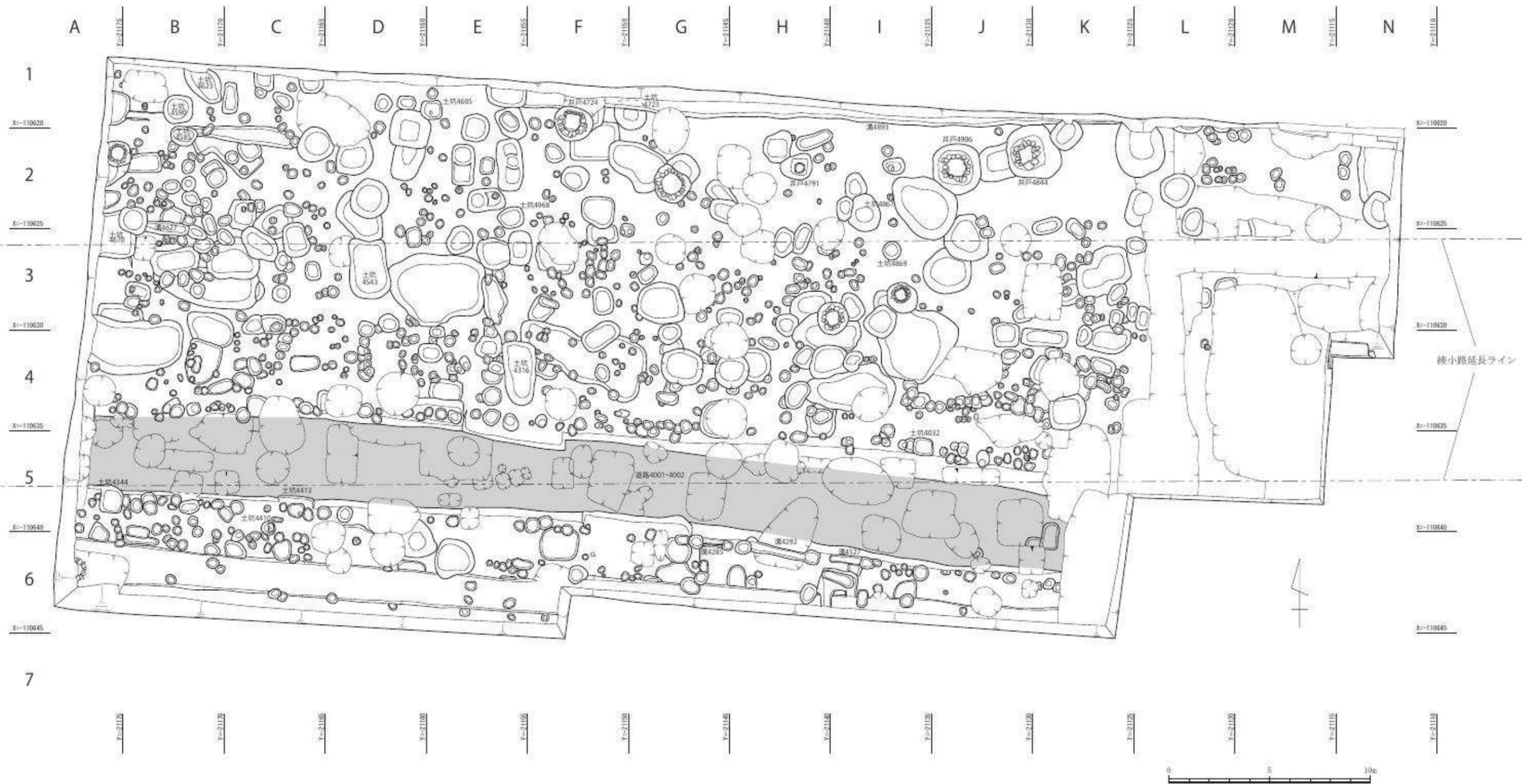
第7図 第1遺構面全体図 (縮尺 1/200)



第8図 第2遺構面全体図(縮尺1/200)



第9図 第3遺構面全体図 (縮尺 1/200)



第10図 第4遺構面全体図 (縮尺 1/200)

第2節 遺構の概要

発掘調査では、平安時代の道路遺構から近代の石組などの遺構計1601基を確認した。検出した遺構は、建物跡、溝、井戸、土坑、ピットなど多岐にわたる。

第1遺構面では、天明の大火以降の建物跡、それに伴う水路、複数の石組、井戸などを検出した。

第2遺構面では、安土桃山時代の～江戸時代初期の井戸、土坑などを確認した。石組や墓石を廃棄した土坑など、大雲院との関わりの深い遺構を検出した。

第3遺構面では、主に室町時代の柵跡3基、井戸、土坑などを確認した。柵跡は礎石、根石が残る柱跡が多く、3基とも南北方向に軸をもつ。井戸の多くは石組で、水溜は方形に板材を組んだものが多い。

第4遺構面では、平安時代後期の道路遺構や区画溝を確認した。道路遺構は版築構造で固くしまっており、平安京の綾小路を洛外へ延長するように東西に延びる。路面は周囲の面に比べて高く、道路裾脇に柱穴が連続して並ぶ。2本の区画溝の間隔（第84図参照）は約15mで、ほぼ同じ傾きで東西方向に延びる。

以下に、主要な遺構についての概要を記す。

第3表 遺構概要表

時代	遺構	備考
江戸時代後期以降 (第1遺構面相当)	土坑、石組遺構、井戸、溝、建物跡	
安土桃山時代～江戸時代 (第2遺構面相当)	廃棄土坑1010・1034、土坑、石組遺構1040、井戸	備前壺に収めた一括出土銭埋設土坑、大量の墓石を投棄した土坑
室町時代 (第3遺構面相当)	土坑、石組遺構、石積遺構、井戸、ピット	
平安時代後期 (第4遺構面相当)	道路4001・4002、区画溝、井戸、ピット	綾小路を洛外に延長する道路
平安時代後期以前 (第5遺構面相当)	落込み	

第3節 第1遺構面の遺構（江戸時代：天明期～現代）

第1遺構面は、天明八（1788）年の天明の大火によって全焼した大雲院の再建された建物跡が確認できる面である。その後本堂の改築、移転を繰り返し昭和58年まで塔頭が残されていた。

天明期からの建物遺構として判断できたものは、建物1の一つだけである。また、明確な用途は不明であるが、排水施設とみられる遺構は石組や漆喰構造であるが、床面が素掘り状態のままであることが共通である。これらの遺構は最終的に現代まで利用されていたと考えられる。

建物1（水路1015を伴う建物）（第7図）

K4・L4グリッドで検出した建物跡で、推定幅8.40m以上である。幅13cm、深さ20cmの水路1015があり、50cm幅の角柱状の石材を連ねて壁面に設置している。また、建物東側建材として、幅26cm、長さ36cmの角石を並べており、3個が残存していた。これらに囲まれる範囲の床面は固くしまっており、土間となっていたと想定される。

石組1（第7図 図版一）

M4グリッドで検出した石組で、幅1.60m、長さ2.35m、深さ1.06mを測る平面長方形に組み上げたもので、建物1の東側に隣接している。拳大の角柱状の石を積み上げて作り上げたもので、床は石組みとなっていない。建物1に付随する排水施設と考えられ、西側の壁面は建物の重みで緩やかに孕んでいた。

排水施設（第7図）

K6グリッドで検出した、壁面を漆喰で固めた排水施設である。0.93m×0.96m、深さ0.35mを測り、平面は隅丸方形である。床面は素掘りのままで地山の砂層にまで達している。

この場所は明治以降は南昌院跡にあたり、下水などを吸い込ませて地下に浸透させる排水孔である¹⁾。

水路1044（第7図 図版一）

M4グリッドからK3グリッドで検出した石組と瓦敷きで構成された水路である。幅30cm、深さ45cmを測り、両側に人頭大から長さ70cmを測る石材を設置している。床面には平瓦を連続で敷き詰めている。底面は北西から南東にかけて傾斜しているが平瓦の上面では高さが上下して一定ではない。水路の先には石組1があり、排水に利用したものと考えられる。なお、水路1044からは土管は出土していないが、周辺から破片が出土しており、ある時期土管などを石組に埋めて使用した可能性もある。

第4節 第2遺構面の遺構（安土桃山時代～江戸時代）

第2遺構面は、豊臣秀吉による寺町移転（天正十八・1980年）によって形成された大雲院の整地（天正二十年ごろ）から、天明の大火（1788）までの時代の遺構である。つまり初期大雲院時代の遺構にあたる。大火後、再建される際の再整地前に火災によって生じた廃棄物の処理のために作られた廃棄土坑を含む。

土坑1010（第8・11図 図版二）

K4・K5グリッドで検出した、平面がやや変則的な長楕円形の大型の土坑で、幅3.12m、

長さ7.06 m、深さ1.8 mを測る。第1遺構面の水路1015が重複して土坑1010を横断しているため、第1遺構面の整地段階に埋没した遺構である。土坑からはぎっしりと詰められた状態で、844基を数える石塔や墓石、石灯籠など石造品が出土している。天明の大火によって焼失した大雲院の建物を建て替



第11図 土坑1010 石造品出土状況

る際に、墓地にあった無縁塔化した墓石を整理し、処分した土坑であると考えられる。紀年銘のあるものをみると明応八年銘の五輪塔を上限とし、享保五年銘の墓石を下限とすることから、天明の大火後の整理坑と考えるのに年代的にも符合するものである。埋土は黄褐色泥砂が堆積していた。

土坑1010から出土した土器は、18世紀後半(京都XIII期)である。

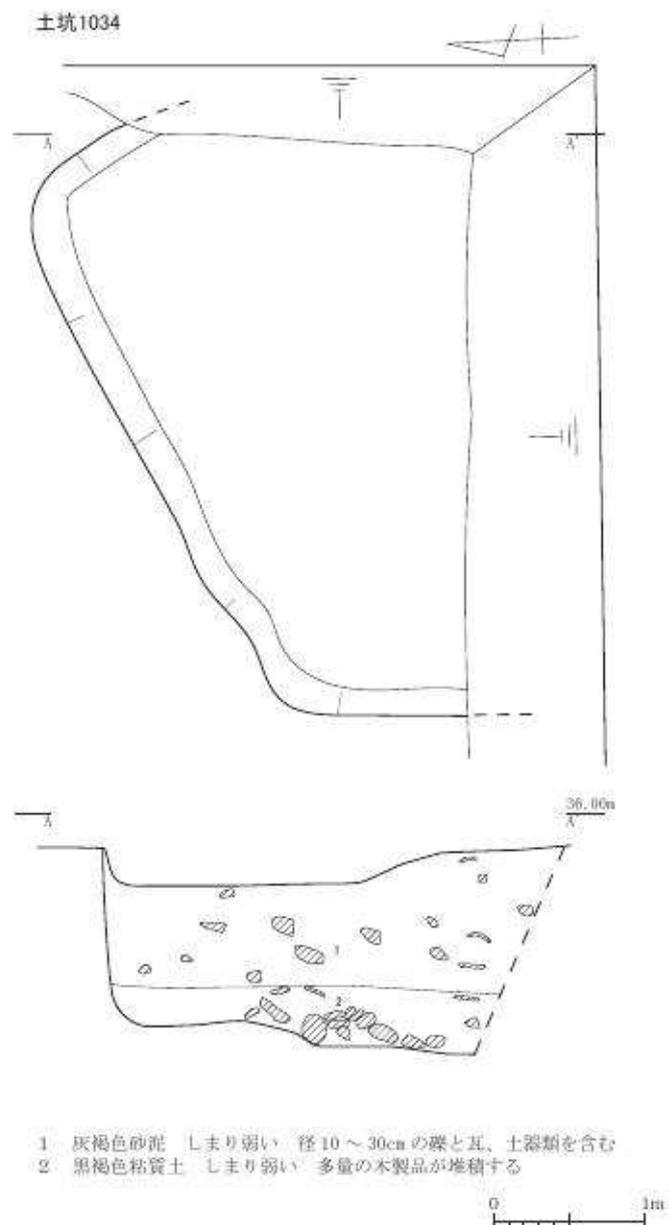
土坑1034 (第12図)

L5・M5グリッドで検出した土坑で、検出幅4.50 m、検出長2.89 m、深さ1.75 mを測る大型の土坑である。

土坑の周壁は、比較的残りの良い東壁面で観察すると、生活面から垂直に掘られ、坑底に近づくにつれ僅かなノリをもたせ、再び水平な坑底を形成している。

層位は大きく2層に分かれる。上層は、灰褐色砂泥層で土師器皿・陶磁器が多く出土した。下層は、坑底から約40 cm程度堆積する黒褐色粘質土で柿経や位牌を含む木製品が出土している。

坑内に長期間の溜水の形跡はなく、



第12図 第2遺構面遺構図1 土坑1034 (縮尺1/50)

土砂の流入も認められない。おそらく、開坑して長い時間を置くことなく閉坑されたものである。

土坑からは、コンテナ4箱の遺物が出土した。大量の土師器皿と共に瓦、陶磁器が出土している。坑底にあたる付近では、位牌や柿経など木製品がまとまって投棄された状態で出土した。出土した木製品は、位牌34点、柿経39束で、その他に櫛や仏具の部材と考えられるものも出土した。位牌の紀年銘には、寛永から18世紀中ごろの宝暦までが認められる。このことから、土坑1010と同じく、天明の大火後に建物を建て替えたりする際、おそらくは、天明八年以降の早い時期に、本堂なり天井などに存した諸資料を整理し、土坑内に投納して、間もなく埋め戻したものと考えられる。

上層から出土した遺物は、18世紀後半（京都XⅢ期）で下層で出土した紀年銘資料とはやや年代が異なる。また、位牌等の木製品は、土坑の東側に集中して出土していることから下層と上層で2時期の遺構が存在した可能性も考えられる。

石組 1040（第13図 図版三・四）

M3・M4グリッドで検出した石組遺構で、掘方は幅5.00m、長さ7.28mの平面長方形で、深さ1.75mを測る。平坦な床面に幅0.30～0.63m、高さ0.26～0.48mを測る石材を使用して幅1.85m、長さ4.90mの長方形に石を組み上げており、1～3段が残存していた。そして石組北側の短辺を長辺とするように区画を仕切る石組を並べている。小区画の中には人頭大の平坦な石を1段敷き並べている。石組はすべて裏込めを伴っている。

埋土は小区画部分、大区画部分、裏込め部分で異なっており、南側の石組に囲まれた部分は灰色粘土が堆積していた。北側の小区画は黒色泥砂が有機物とともに混入していた。裏込め部分は灰褐色泥砂と小礫が入り混じっていた。

なお、南東部分の石組が欠如している部分は従来存在していたものとする。また石組1040は焼土や焼失した廃材がほとんど出土していないため、火災で焼失したものではなく、取り壊されて部材が抜き取られた跡であると考えられる。

石組1040から出土した遺物は、18世紀後半（京都XⅢ期）である。

井戸 2001（第14図）

B5グリッドで検出した井戸である。2.07m×1.75m、深さ2.03mを測る。深さ1.89mまで円形に組んだ石組があり、直径は90cmを測る。上層は焼け瓦が大量出土しており、天明の大火で焼失した建物の廃材を投棄したものと考えられる。下層は灰黄褐色砂泥が堆積していた。

土坑2001から出土した遺物は、16世紀後半～17世紀前半（京都X期新～XI期中）である。

土坑 2006（第8図）

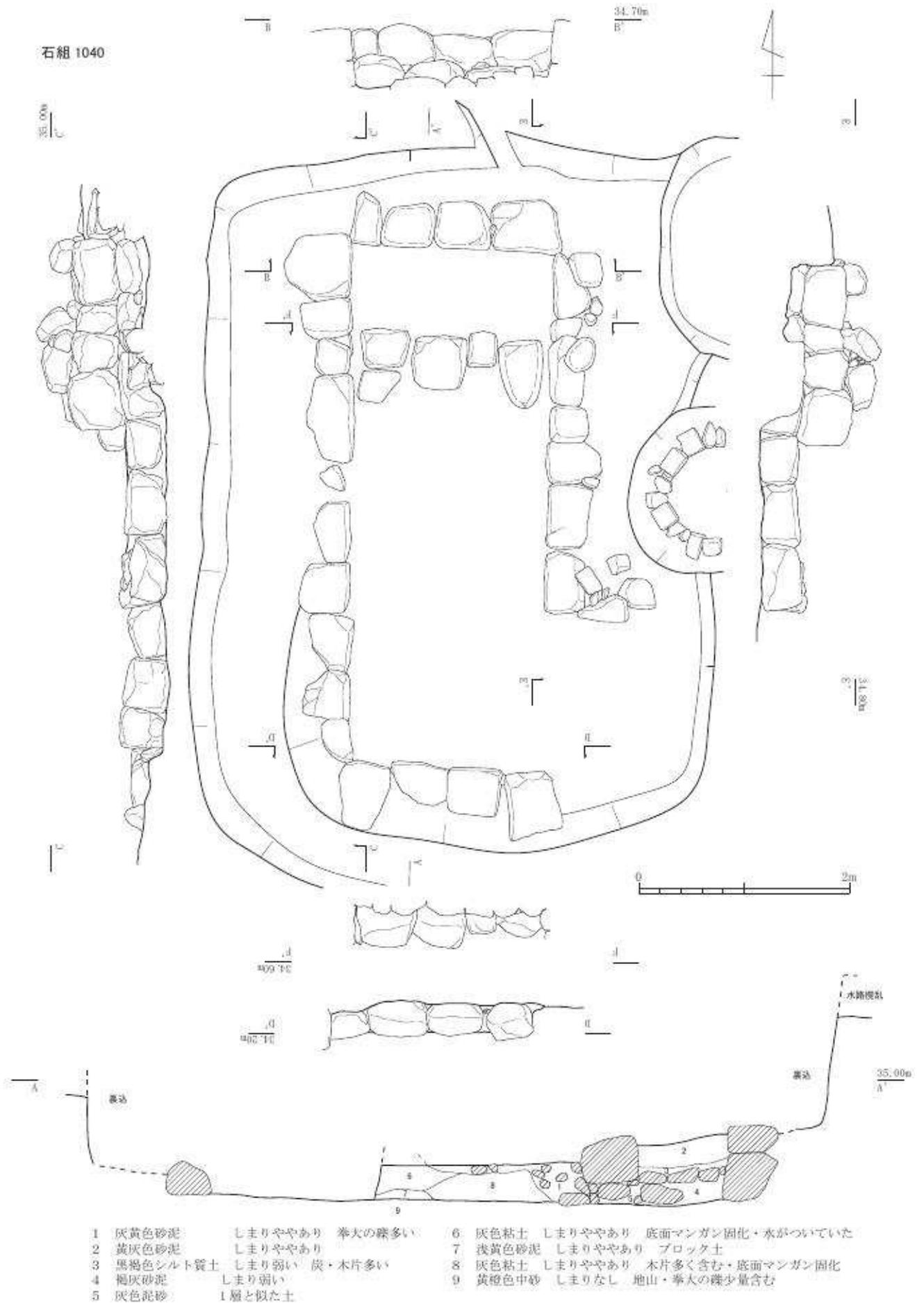
B6グリッドで検出した土坑である。0.92m×(0.65m)、深さ0.31mを測る。埋土は黒褐色泥砂が堆積していた。

土坑2006から出土した遺物は、16世紀後半～17世紀前半（京都X期新～XI期中）である。

土坑 2009（2004）（第14図）

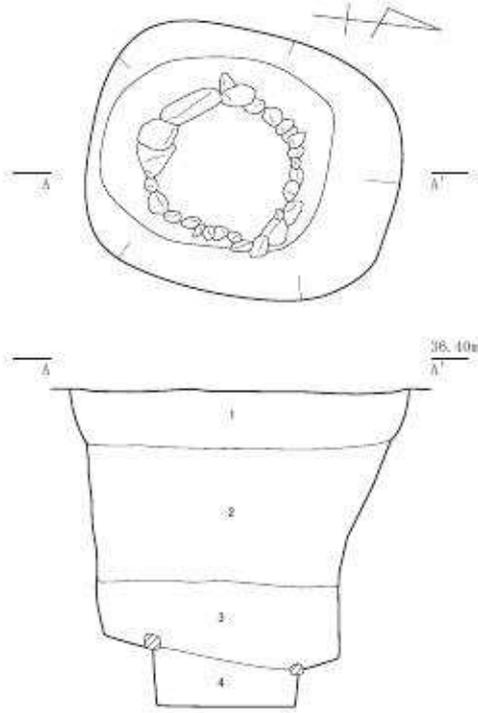
A6グリッドで検出した土坑である。(2.00m)×(0.91m)、深さ1.21mを測る。埋土は黒褐色泥砂が堆積していた。

石組 1040



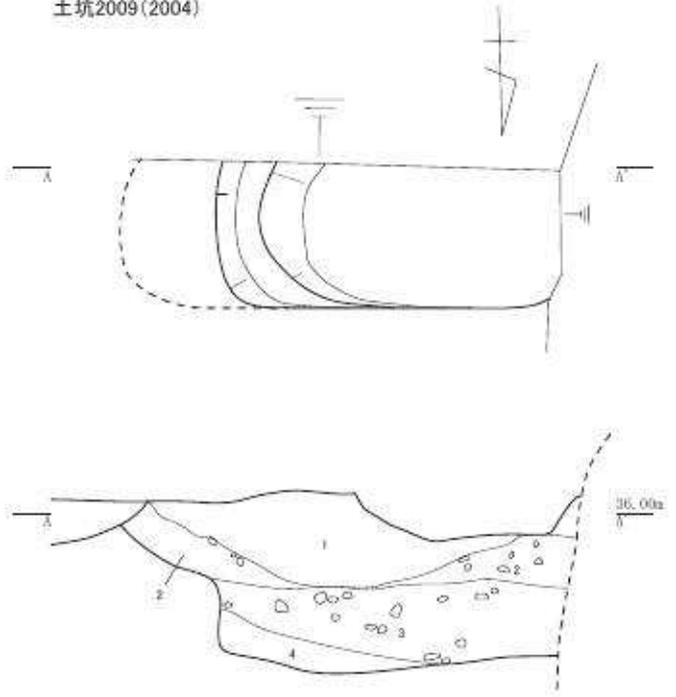
第13図 第2遺構面遺構図2 石組 1040 (縮尺 1/50)

井戸 2001



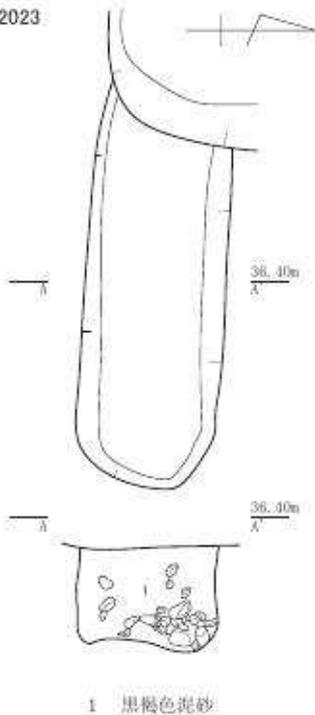
- 1 焼瓦層 椀瓦片の層
- 2 黒色泥砂 しまり弱い 焼土ブロック多く含む
- 3 拳大の川原石を多く含む砂礫層
- 4 灰黄褐色砂泥 土器若干含む

土坑2009(2004)



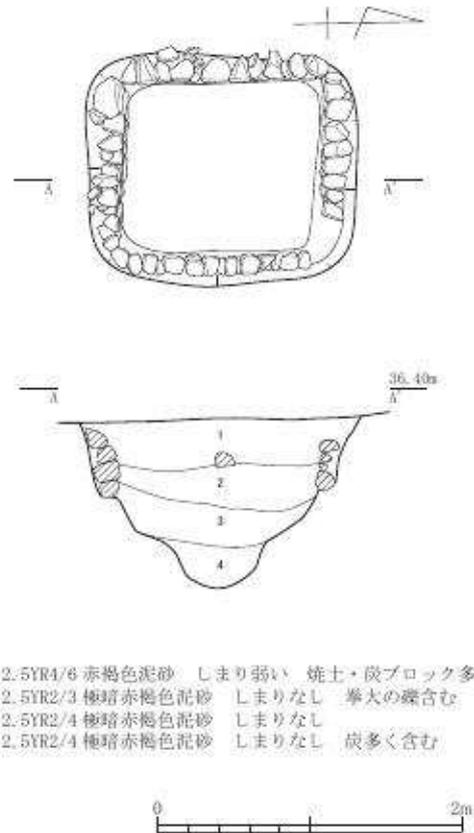
- 1 黒褐色泥砂
- 2 灰黄褐色泥砂
- 3 にぶい褐色泥砂 礫多い
- 4 黒褐色泥砂

土坑 2023



- 1 黒褐色泥砂

土坑2101



- 1 2.5YR4/6 赤褐色泥砂 しまり弱い 焼土・炭ブロック多く含む
- 2 2.5YR2/3 極暗赤褐色泥砂 しまりなし 拳大の礫含む
- 3 2.5YR2/4 極暗赤褐色泥砂 しまりなし
- 4 2.5YR2/4 極暗赤褐色泥砂 しまりなし 炭多く含む



第14図 第2遺構面遺構図3 井戸2001、土坑2009・2023・2101 (縮尺1/50)

土坑 2009 から出土した遺物は、16 世紀後半～17 世紀前半（京都 X 期新～XI 期新）である。

土坑 2023（第 14 図）

B 5 グリッドで検出した土坑である。幅 0.94 m、検出長 2.72 m を測る平面長方形の土坑である。深さは 0.71 m を測り、壁面は垂直に切り立っており、床面は平坦である。西側は井戸 2001 に壊されている。埋土は黒褐色泥砂が堆積していた。

土坑 2023 から出土した遺物は、16 世紀前半（京都 IX 期中～X 期古）である。土坑 2023 は第 2 遺構面として検出しているが、第 3 遺構面に相当する遺構と考えられる。

井戸 2050（第 8 図）

H 5 グリッドで検出した石組井戸である。掘方は 1.97 m × 1.85 m、深さ 1.04 m を測る楕円形で、円形に石組された井戸枠は直径 0.91 m を測る。埋土は黒褐色砂泥が堆積していた。

井戸 2050 から出土した遺物は、16 世紀前半～17 世紀前半（京都 X 期～XI 期）である。

土坑 2084・2085（第 8 図）

K 6 グリッドで検出した大型土坑である。検出幅 2.76 m、検出長 4.18 m、深さ 0.80 m を測り、調査区東側に延びる。土坑 1010 同様、石塔や墓石などを埋めているが、土師器の皿が大量に出土している。紀年銘のある石塔・墓石は、文永五年銘の五輪塔を上限とし、元禄十一年銘の墓石を下限とする。このことから、土坑 1010 と同じ性格をもつ整理坑であろうと考えられる。埋土は黄褐色泥砂が堆積していた。

土坑 2084・2085 から出土した土器は、18 世紀後半（京都 X III 期）である。

土坑 2101（第 14 図 図版六）

B 3 グリッドで検出した土坑である。1.80 m × 1.42 m の平面隅丸方形で、深さ 0.84 m まで掘り込んだ段階で拳大の礫を 3～4 段壁面に積み上げている。中央部分のみさらに深さ 1.14 m まで挿鉢状に掘り込まれている。埋土は極暗赤褐色泥砂に焼土が若干含まれて堆積していた。

土坑 2101 から出土した遺物は、16 世紀前半～17 世紀代（京都 X 期～XII 期）である。

土坑 2119（第 16 図）

D 2 グリッドで検出した土坑である。1.44 m × 1.04 m、深さ 36 cm の平面隅丸方形で、深さ 26 cm まで掘り込んで拳大の礫を 1～2 段東側壁面に積み上げている。埋土は褐灰色砂泥が堆積していた。

土坑 2119 から出土した遺物は、16 世紀後半（京都 X 期中～新）である。

井戸 2130（第 16 図）

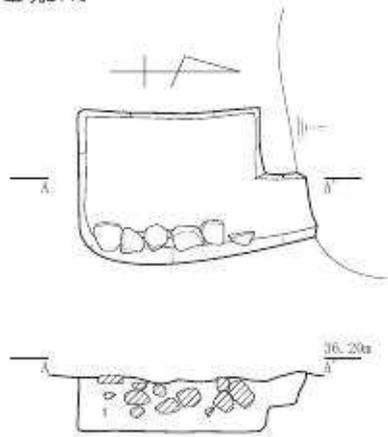
G 2 グリッドで検出した石組井戸である。掘方は 1.63 m × 1.50 m を測る楕円形で、深さ 1.13 m を測る。深さ 1.03 m まで円形に組んだ石組があり、直径 0.94 m を測る。埋土は黒褐色砂泥が堆積していた。

井戸 2130 から出土した遺物は、15 世紀中ごろ（京都 VII 期新～IX 期中）である。



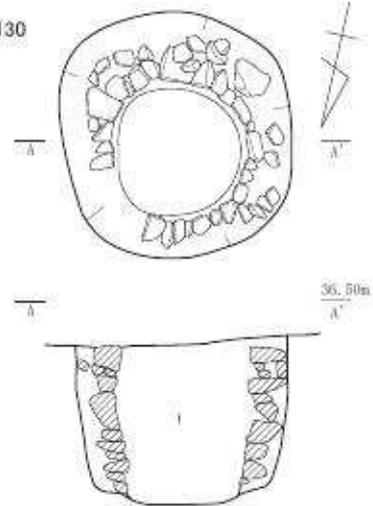
第 15 図 井戸 2135

土坑2119

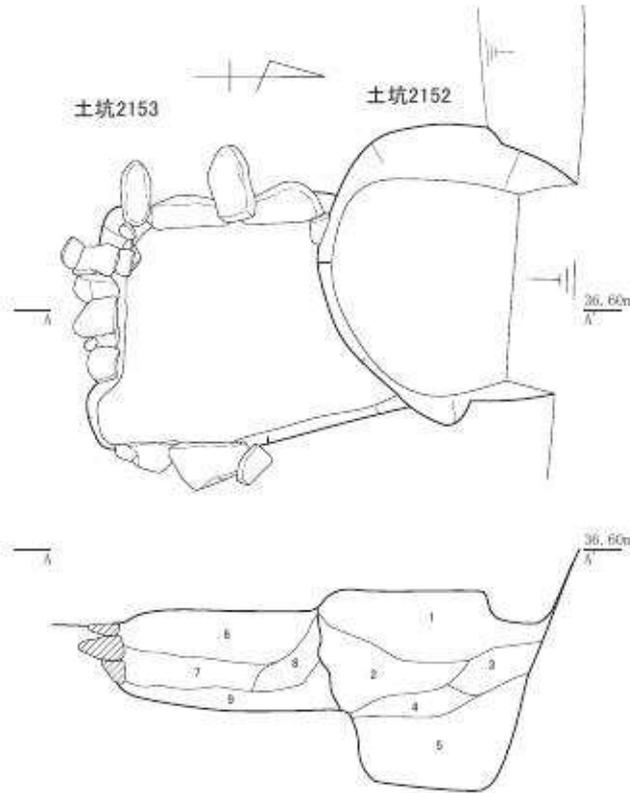


- 1 7.5YR5/1 褐色砂泥 しまりあり 粘性あり
径20cm前後の礫多量、炭化物少量含む

井戸 2130



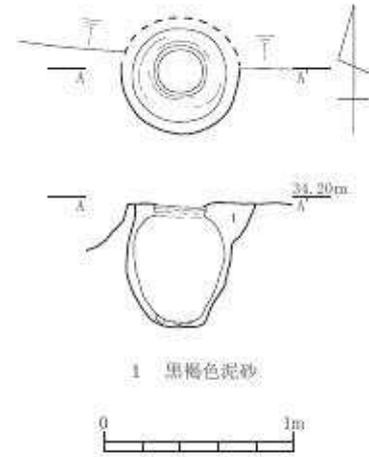
- 1 黒褐色砂泥



- 1 7.5YR5/4 に近い褐色砂泥 しまりあり 粘性弱い
径5cm前後の礫、炭化物粒子少量含む
2 7.5YR5/2 灰褐色砂層 しまり弱い 炭化物少量含む 暗褐色砂帯状に入る
3 7.5YR4/1 褐色砂泥 しまり弱い 粘性あり 炭化物少量、黄褐色粘土ブロック含む
4 7.5YR4/2 灰褐色砂泥 しまり弱い 粘性弱い 炭化物少量含む
5 7.5YR4/2 灰褐色砂泥 しまりやや強い 粘性あり
6 7.5YR4/6 褐色砂泥 しまりあり 粘性弱い 径20cmの礫少量、炭化物少量、焼土粒子含む
7 7.5YR4/2 灰褐色砂泥 しまり弱い 粘性弱い 径5cmの礫少量、炭化物少量、焼土少量含む
8 7.5YR4/2 灰褐色砂泥 しまり弱い 粘性弱い 径5cmの礫少量、焼土・炭化物多量含む
9 7.5YR4/1 褐色砂泥 しまり弱い 粘性あり 炭化物少量含む



埋蔵土坑2201



- 1 黒褐色泥砂

第16図 第2遺構面遺構図4 井戸2130、土坑2119・2153(縮尺1/50)、埋蔵土坑2201(縮尺1/40)

井戸 2135 (第 8・15 図)

M4 グリッドで検出した石組井戸である。掘方は 1.63 m×1.50 m を測る楕円形で、円形に石組された井戸枠は直径 90 cm を測る。石組の一部には石塔や墓石が使用されており、そのうち 1 点には「越後屋」の文字が刻まれている。埋土は黒褐色砂泥が堆積していた。

井戸 2135 から出土した遺物は、18 世紀後半（京都 X III 期）である。

土坑 2152 (第 16 図)

F1 グリッドで検出した土坑である。1.91 m×(1.33 m) の楕円形で、北側は調査区外に延長する。深さは 1.36 m を測る。埋土は灰褐色砂泥が堆積していた。

土坑 2152 から出土した遺物は 16 世紀後半（京都 X 期中～XI 期古）である。

土坑 2153 (第 16 図)

F2 グリッドで検出した土坑である。(2.11 m)×1.71 m、深さ 66 cm の平面隅丸方形で、深さ 48 cm まで掘り込んで拳大から人頭大の礫を 3～4 段を壁面に積み上げている。北側は土坑 2152 と重複し、土坑 2152 によって壊されている。埋土は灰褐色砂泥が堆積していた。

土坑 2153 から出土した遺物は、16 世紀後半（京都 X 期中～XI 期古）である。

埋壺土坑 2201 (第 16 図 図版五・六)

B1 グリッドで検出した土坑に備前の壺が埋められたものである。掘方は 76cm×(45cm) の平面楕円形で、深さ 66cm を測り、備前の壺が埋められていた。土坑の大きさや形は埋められた壺の形を一回り大きくした形で、壺を埋めるために掘られたことがわかる。第 2 遺構面を形成する整地層から掘り込まれている。壺は正位置に埋められており、中には緞銭の状態の銭貨が大量に詰めこまれていた。蓋は残存していなかったが、口の部分に落ち込んだ土が垂直に落ち込んでおり、壺の肩の部分にいくにつれ空隙があったため元々は蓋があったと考えられる。蓋は木製であったが。埋土は黒褐色泥砂が堆積していた。

埋壺土坑 2201 の掘方から出土した遺物は細片で時期不明であるが、銭貨の時期および備前の壺の年代から、京都 X 期（15 世紀後半から 16 世紀前半）と考えられる。検出した整地層との年代差があるが、ここでは伝世した遺物と考えている。

第 5 節 第 3 遺構面の遺構（室町時代）

第 3 遺構面は大雲院以前の時代の遺構である。絵図などの資料によると「余部屋敷」が存在した時代の遺構である。

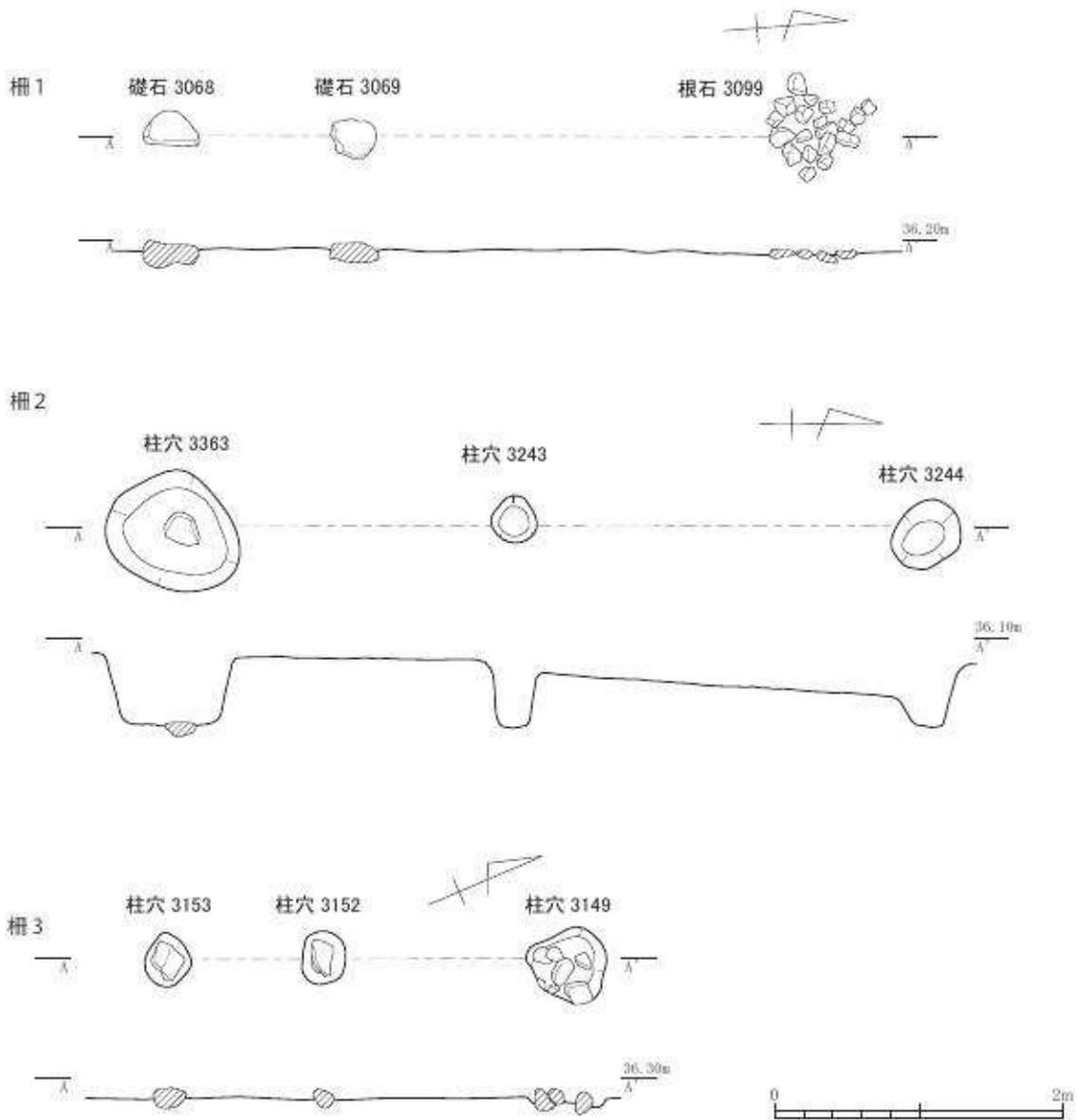
柵 1 (第 17 図)

H4 グリッドで検出した 2 間以上の柵もしくは塀、垣跡である。構成する柱は掘方を持たず、礎石 (3068・3069) と根石 (3099) で構成される。柵の軸方向は N 5° E を測る。

根石 (3099) の掘方から出土した遺物は、15 世紀中ごろ（京都 VII 期新～IX 期中）である。

柵 2 (第 17 図)

I1・2 グリッドで検出した 2 間以上の柵もしくは塀、垣跡である。構成する柱穴 (3363) の底面には礎石あるいは根石を伴う。柵の軸方向は N 0.5° E を測る。



第17図 第3遺構面遺構図1 柵1・2・3 (縮尺1/50)

柱穴 3244 の掘方から出土した遺物は、16 世紀中ごろ（京都X期中～新）である。

柵 3 (第17図)

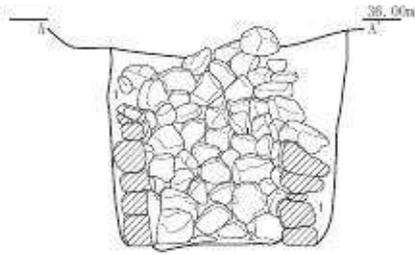
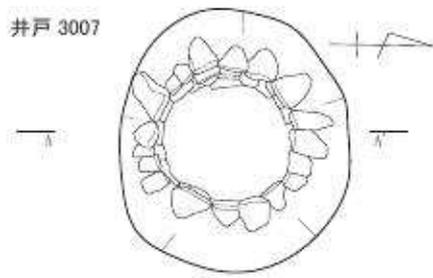
E 2・E 3 グリッドで検出した 2 間以上の柵もしくは塀、垣跡である。構成する柱穴 (3149・3153・3152) には床面に礎石を伴う。柵の軸方向は N 23° E を測る。

柵 3 を構成する柱穴 3153 から出土した遺物は、13 世紀後半～14 世紀前半（京都VII期古～新）である。

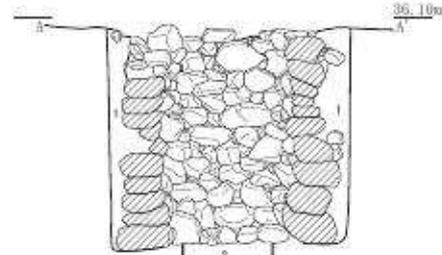
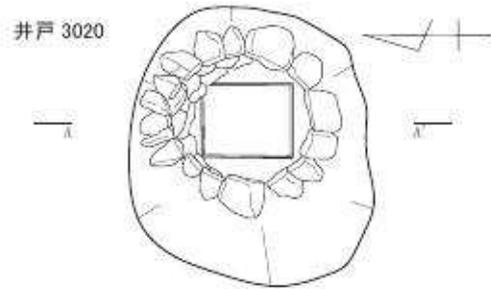
井戸 3007 (第18図 図版九)

A 4 グリッドで検出した井戸である。掘方は 1.75 m × 1.51 m を測る楕円形で、円形に石組された井戸枠は直径 81 cm を測る。深さは 1.47 m である。水溜の部材の痕跡は確認できなかった。埋土は黒褐色砂泥が堆積していた。

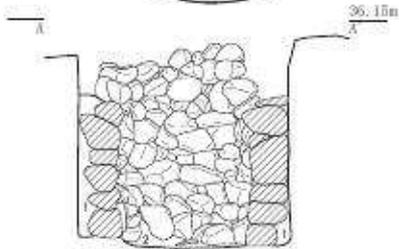
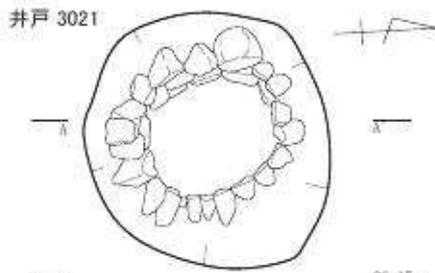
井戸 3007 から出土した遺物は、15 世紀後半（京都IX期古～中）である。



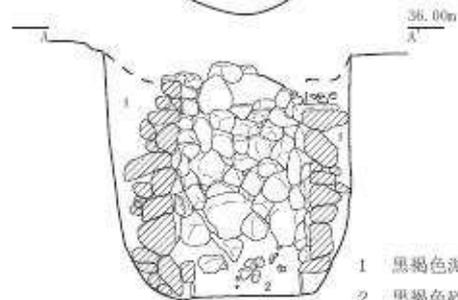
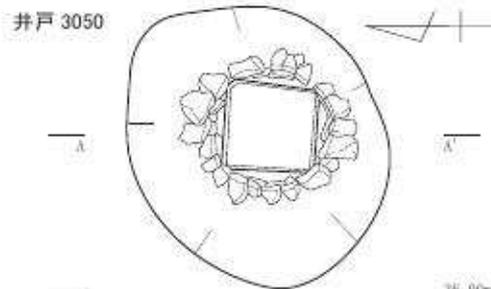
- 1 黒褐色泥砂
- 2 黒褐色砂泥



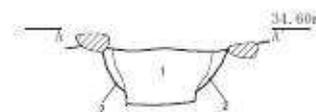
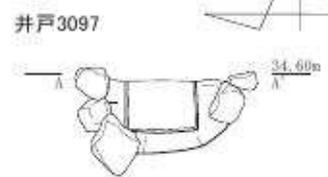
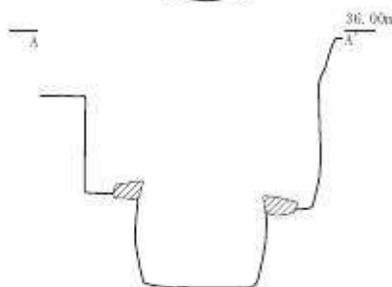
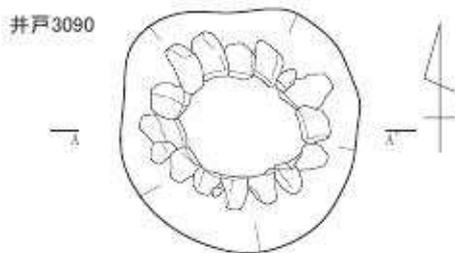
- 1 黒褐色泥砂 しまりややあり
- 2 黒褐色砂泥 しまり弱い



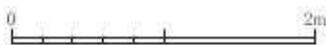
- 1 黒褐色泥砂
- 2 黒褐色砂泥



- 1 黒褐色泥砂
- 2 黒褐色砂泥



- 1 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 しまりなし 径5~10cmの礫、炭化物少量含む
- 2 10YR5/1 褐灰色砂礫 径1~2cmの礫を含む



第18図 第3遺構面遺構図2 井戸3007・3020・3021・3050・3090・3097 (縮尺1/50)

柱穴 3017 (第9図)

C 4 グリッドで検出した柱穴及び抜き取り穴である。柱穴は 0.65 m × 0.52 m、抜き取り穴は 1.52 m × 1.50 m を測る楕円形で、深さ 0.80 m を測る。埋土は赤褐色泥砂が堆積していた。

柱穴 3017 から出土した遺物は、13 世紀後半（京都VI期新～VII期古）である。

井戸 3020 (第18図 図版九)

D 4 グリッドで検出した井戸である。掘方は 1.85 m × 1.58 m を測る楕円形で、円形に石組された井戸枠は直径 0.86 m を測る。深さ 1.43 m まで円形に組んだ石組があり、水溜部分を 1 辺 0.60 m の正方形に深さ 0.20 m を掘り抜き、壁面は板材で補強してあったと考えられる。埋土は黒褐色砂泥が堆積していた。

井戸 3020 から出土した遺物は、15 世紀～16 世紀（京都IX期～X期）である。

井戸 3021 (第18図)

D 6 グリッドで検出した井戸である。掘方は 1.81 m × 1.59 m、深さ 1.40 m を測る楕円形で、円形に石組された井戸枠は直径 0.78 m を測る。埋土は黒褐色砂泥が堆積していた。

井戸 3021 から出土した遺物は、15 世紀後半（京都IX期古～新）である。

井戸 3050 (第18図 図版九)

I 4 グリッドで検出した井戸である。掘方は 1.89 m × 1.73 m を測る楕円形で、円形に石組された井戸枠は直径 0.67 m を測る。深さ 1.40 m まで円形に組んだ石組があり、水溜部分を 1 辺 0.61 m の正方形に深さ 0.21 m を掘り抜き、壁面は板材で補強してあったと考えられる。埋土は黒褐色砂泥が堆積していた。

井戸 3050 から出土した遺物は、16 世紀後半（京都X期中～新）である。

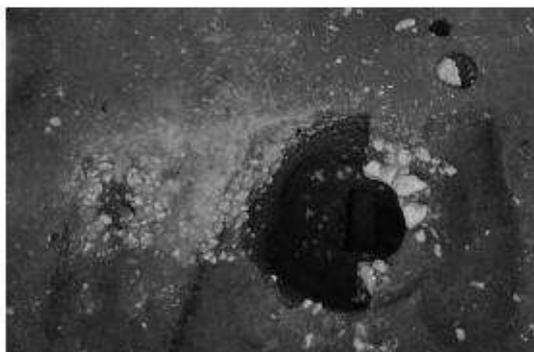
井戸 3090 (第18図)

F 4 グリッドで検出した井戸である。掘方は 1.66 m × 1.60 m を測る楕円形で、円形に石組された井戸枠は直径 0.83 m を測る。深さ 1.13 m まで円形に組んだ石組があり、水溜部分を深さ 0.51 m 掘り込んでいる。埋土は黒褐色砂泥が堆積していた。

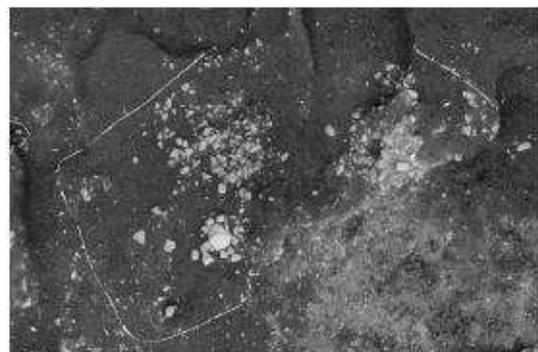
井戸 3090 から出土した遺物は、13 世紀後半～14 世紀前半（京都VII期古～新）である。

井戸 3097 (第18図 図版十)

M 5 グリッドで検出した土坑である。掘方は上層の遺構によって壊されており不明である。水溜部分のみ残存しており、一辺 48 cm の方形の掘方で壁面に木枠の一部がわずかに残存する。埋



第19図 石積 3000



第20図 石積 3115

土は灰黄褐色粘質土が堆積していた。

井戸 3097 から出土した遺物は、15 世紀後半（京都IX期古～新）である。

石積 3103（第9図 図版八）

C 3～D 4 グリッドで検出した拳大から人頭大の礫を集積した遺構である。7.04 m×6.96 m の範囲に広がっており、積み上げられた礫は最大高さ 0.40 m を測る。また、H・I 4 グリッドで検出した石積 3000、I・J 2 グリッドの石積 3115 も同様の遺構であると考えられる。

石積 3103 から出土した遺物は、14 世紀後半～15 世紀前半（京都VIII期古～新）である。

土坑 3105（第21図）

F・G 5 グリッドで検出した土坑である。平面 5.45 m×(1.18 m) を測り、南側が削平されているが方形とみられる。深さは 0.48 m を測る。埋土は黒褐色泥砂が堆積していた。

土坑 3105 から出土した遺物は、13 世紀前半（京都VI期新）である。土坑 3105 は第3遺構面として検出しているが、第4遺構面に相当する遺構と考えられる。

井戸 3107（第9図）

G 4 グリッドで検出した素掘りの井戸である。2.05 m×1.84 m の楕円形で、深さは 1.80 m を測る。埋土は灰黄褐色砂泥が堆積していた。

土坑 3107 から出土した遺物は、11～12 世紀代と 16 世紀代（京都X期）である。

井戸 3108（第24図）

A 4・5 グリッドで検出した井戸である。掘方は 1.40 m×(0.73 m) の楕円形で、深さは 1.12 m 以上である。円形に石組された井戸枠は直径 0.87 m を測る。深さ 50 cm 以下で石組がみられる。埋土は灰黄褐色泥砂が堆積していた。

井戸 3108 から遺物は出土しなかった。

井戸 3111（第21図）

G 3 グリッドで検出した井戸である。掘方は 1.60 m×1.55 m の楕円形で、深さは 2.00 m である。円形に石組された井戸枠は直径 0.75 m を測る。深さ 0.70 m 以下で石組がみられる。水溜部分を 1 辺 0.55 m の正方形に掘り抜き、壁面は板材で補強されていた。埋土は灰黄褐色砂質土が堆積していた。

井戸 3111 から出土した遺物は 16 世紀後半（京都X期新～XI期古）である。

井戸 3112（第21図）

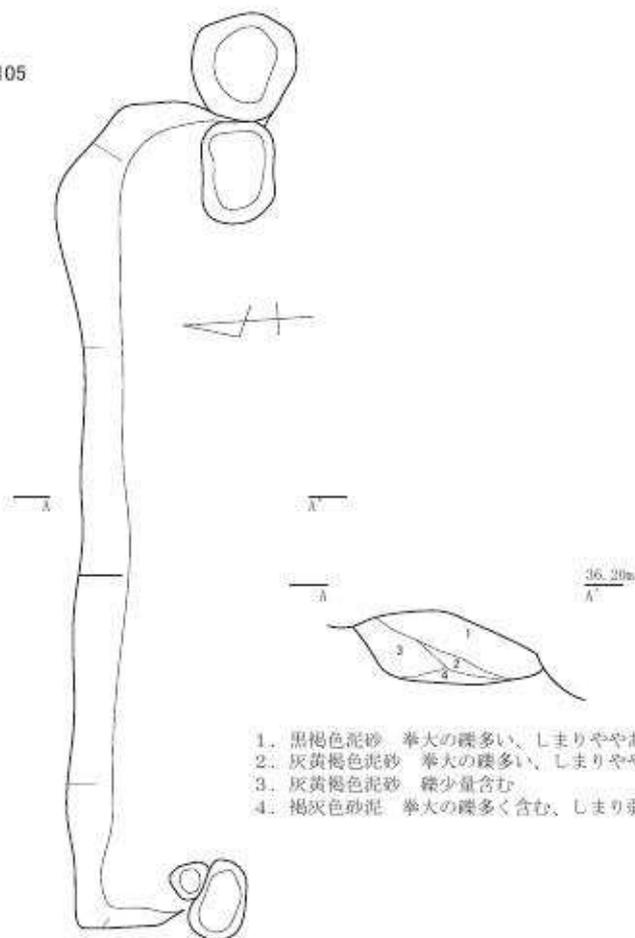
H 2・3 グリッドで検出した井戸である。掘方は (1.68 m) × 1.65 m の楕円形で、深さは 1.93 m である。円形に石組された井戸枠は直径 0.57 m を測る。深さ 1.02 m 以下で石組がみられる。埋土は褐色泥砂が堆積していた。

井戸 3112 から出土した遺物は、16 世紀代（京都IX期新～X期新）である。

井戸 3113（第21図）

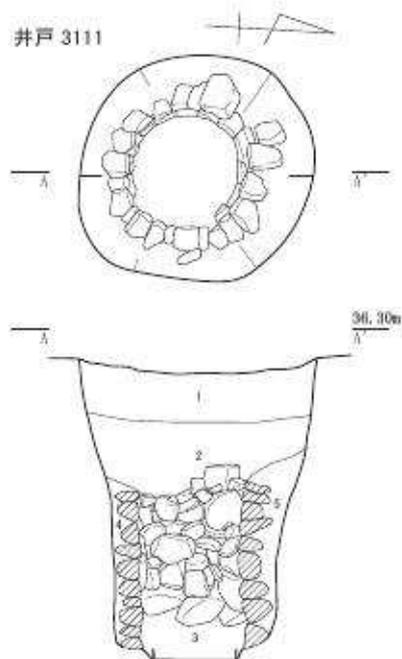
H 3 グリッドで検出した井戸である。掘方は 1 辺 1.68 m の略方形で、深さは 1.84 m を測る。水溜部分を直径 0.75 m 程の円形に深さ 33cm 彫り抜いており、石組がその周囲にわずかに残る。埋土は褐灰色泥砂が堆積していた。

土坑 3105



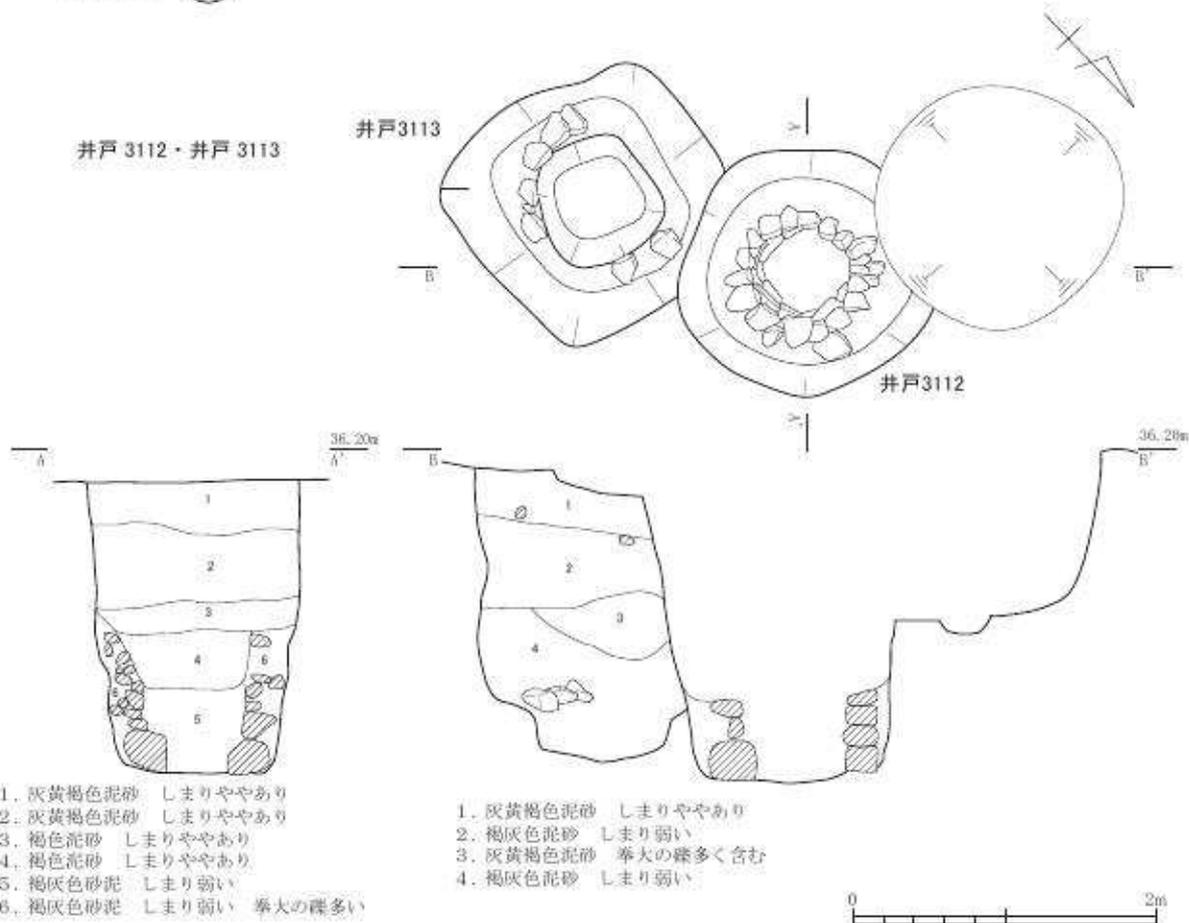
1. 黒褐色泥砂 拳大の礫多い、しまりややあり
2. 灰黄褐色泥砂 拳大の礫多い、しまりややあり
3. 灰黄褐色泥砂 礫少量含む
4. 褐灰色砂泥 拳大の礫多く含む、しまり弱い

井戸 3111



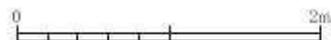
1. 灰褐色泥砂 しまりややあり
2. 灰黄褐色泥砂 しまり弱い
3. 灰黄褐色砂質土 しまり弱い
4. 灰黄褐色泥砂 しまりややあり・拳大の礫多い
5. 灰黄褐色砂質土 しまり弱い・拳大の礫多い

井戸 3112・井戸 3113



1. 灰黄褐色泥砂 しまりややあり
2. 灰黄褐色泥砂 しまりややあり
3. 褐色泥砂 しまりややあり
4. 褐色泥砂 しまりややあり
5. 褐灰色砂泥 しまり弱い
6. 褐灰色砂泥 しまり弱い 拳大の礫多い

1. 灰黄褐色泥砂 しまりややあり
2. 褐灰色泥砂 しまり弱い
3. 灰黄褐色泥砂 拳大の礫多く含む
4. 褐灰色泥砂 しまり弱い



第 21 図 第 3 遺構面遺構図 3 土坑 3105、井戸 3111・3112・3113 (縮尺 1/50)

井戸 3113 から遺物は出土しなかったが、井戸 3112 に切られることから 16 世紀前半以前の遺構である。

土坑 3117 (第 9 図)

G 1 グリッドで検出した土坑である。掘方は (0.68 m) × 0.60 m の楕円形で、北側は調査区外に延長する。深さは 0.48 m を測る。埋土は灰黄褐色泥砂が堆積していた。

土坑 3117 から出土した遺物は、16 世紀代 (京都 IX 期新～X 期新) である。

石組 3140・3365 (第 23 図 図版七)

石組 3140 は E 1・F 1 グリッドで検出した土坑と石列である。1.70 m × 1.48 m の平面隅丸方形で、深さ 39 cm まで掘り込んで人頭大から長さ 0.70 m におよぶ礫を 1～3 段を壁面に積み上げている。北側には裏込めと考えられる小礫が含まれている。石の面は南側を向いており、石積みによって段差を形成していると考えられる。土坑 3140 の西側、D 1 グリッドで検出した土坑 3365 を伴う石列も同様な段差であったと考えられる。土坑 3365 に伴う南北に 1.56 m 続く 2 石の列はそれぞれ東西に面をもっていることから、長細い突出部とみてとれる。北側が大きく上層遺構によって壊されているため、段差上段よりも北側の状況は不明である。

土坑 3140 および土坑 3365 から出土した遺物は、15 世紀代 (京都 VIII 期新～IX 期新) である。

石組 3154 (第 24 図)

E 3 グリッドで検出した土坑である。1.16 m × 0.91 m の平面円形で、深さ 0.23 m まで掘り込んで拳大の礫を 1～2 段を壁面に積み上げている。埋土は黒色泥砂が堆積していた。

石組 3154 から出土した遺物は、14 世紀後半 (京都 VII 期新～VIII 期中) である。

埋甕土坑 3157 (第 22 図 図版八)

D 3 グリッドで検出した土坑で、掘方は 1.07 m × 0.92 m の平面楕円形で、深さ 0.54 m を測る。東播系須恵器甕を立てるように埋置していた。検出面で、器壁外面に接するように北側に礫が並ぶのは、大甕を安定させるために支えに置いた可能性がある。検出時には上半部は完全に欠失しており、甕内の埋土からも大甕の口縁部や肩部などの破片は出土していない。

掘方は大甕を据えるためのもので、大甕をやや大きくした形で掘られている。底部などにわずかに見られる掘方の埋土は、しまりの弱い灰黄褐色泥砂である。また、大甕内の埋土はしまりの強い灰黄褐色泥砂で、12～13 世紀中ごろの須恵器、土師器、瓦器の小片が少量出土している。

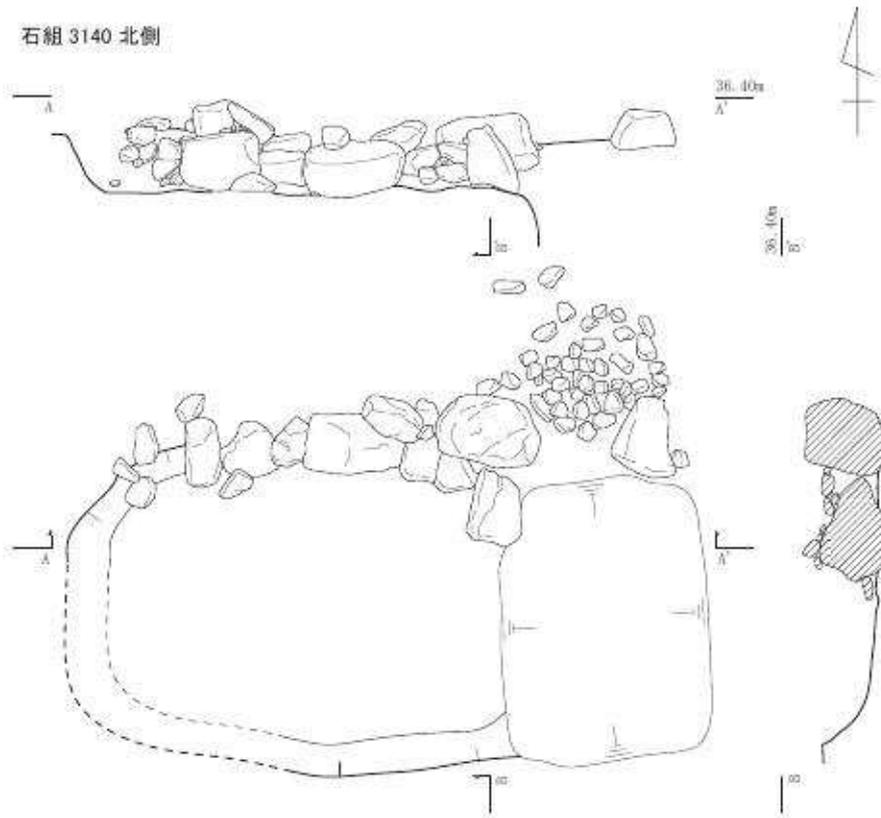
同様な東播系須恵器大甕を埋置した遺構は、左京八条三坊二町出土の埋甕 7 が本例と同じような出土状態である。ここでは貯蔵に用いられた大甕が転用されて墓に利用されたと見ているが、埋甕土坑 3157 では左京八条三坊二町の埋甕 7 にみられるような底部の穿孔や、銭の伴出はなかった。

埋甕土坑 3157 の大甕は 12 世紀中ごろ (京都 V 期中～新) で

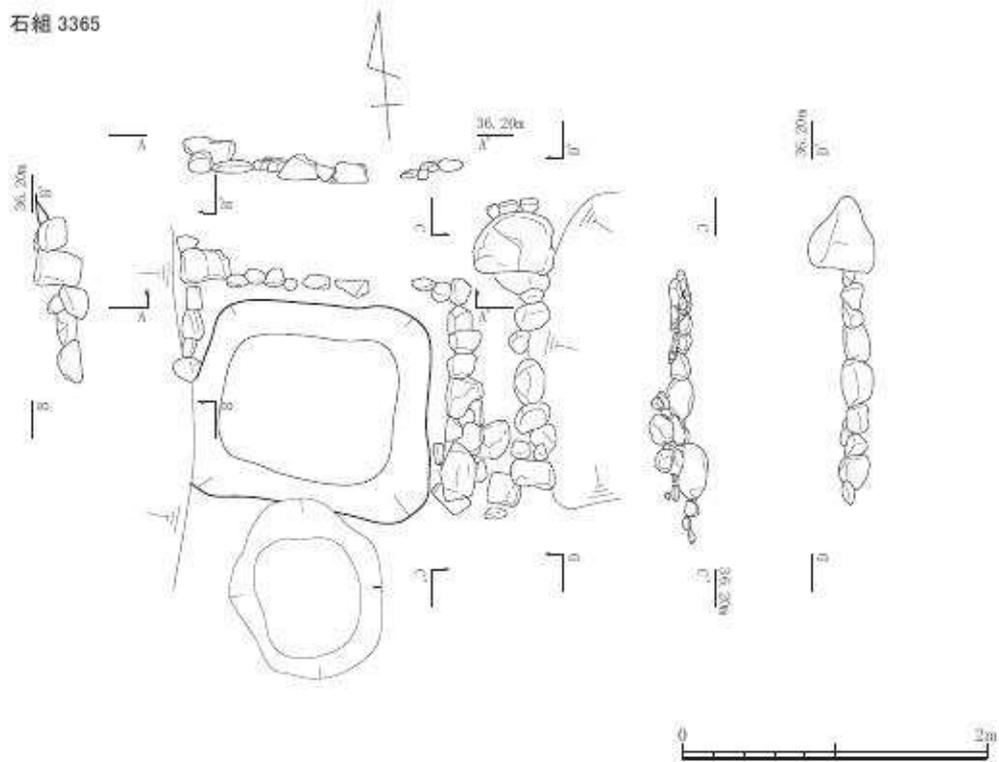


第 22 図 第 3 遺構面遺構図 4
埋甕土坑 3157 (縮尺 1/40)

石組 3140 北側

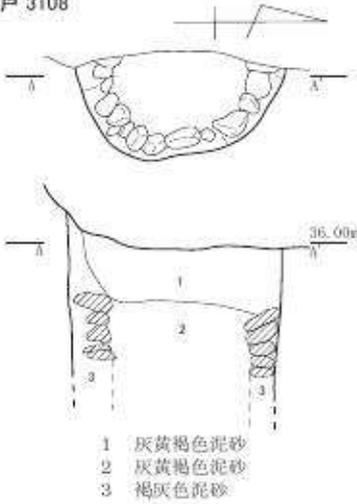


石組 3365

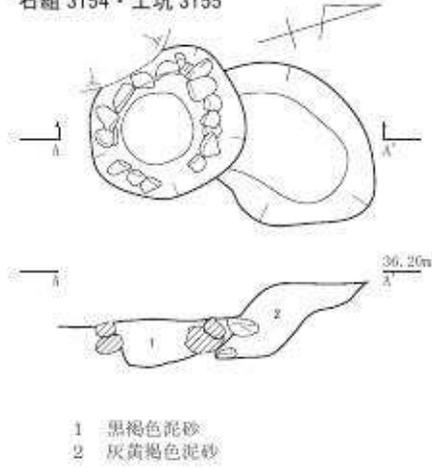


第23図 第3遺構面遺構図5 石組 3140・3365 (縮尺1/50)

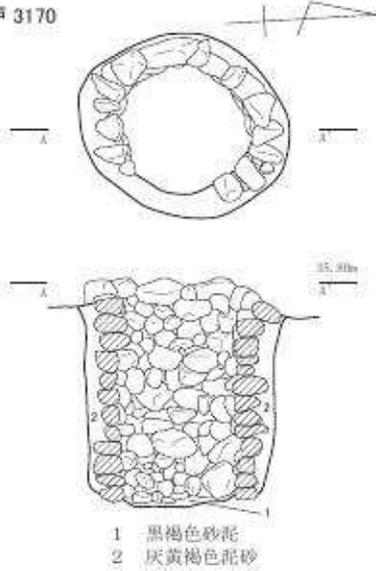
井戸 3108



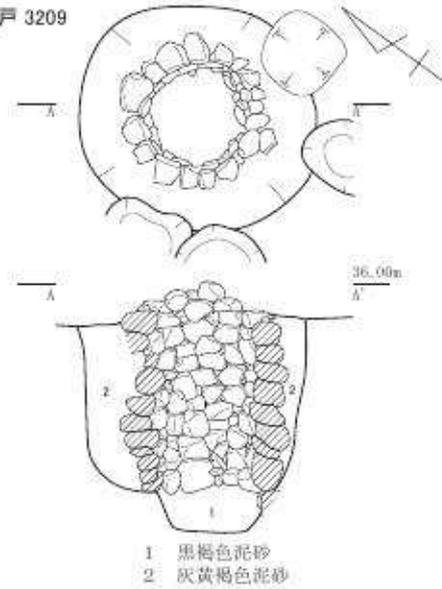
石組 3154・土坑 3155



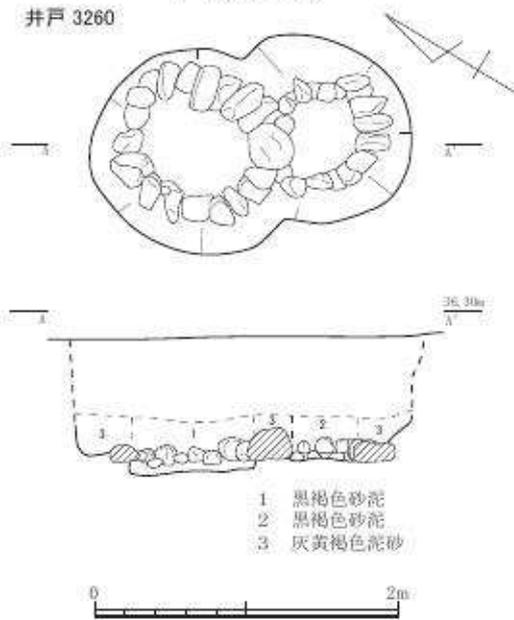
井戸 3170



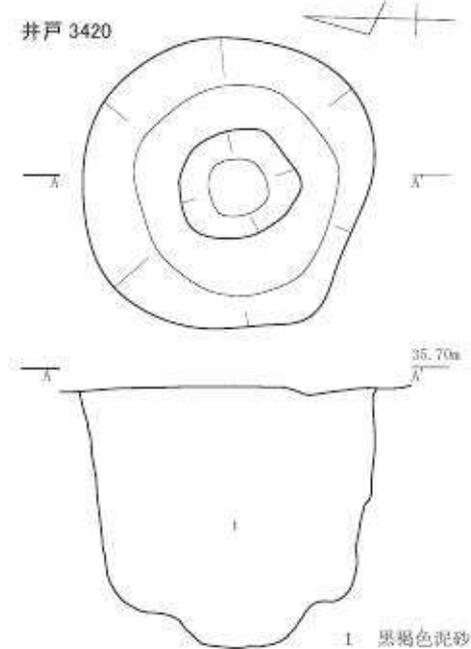
井戸 3209



井戸 3260

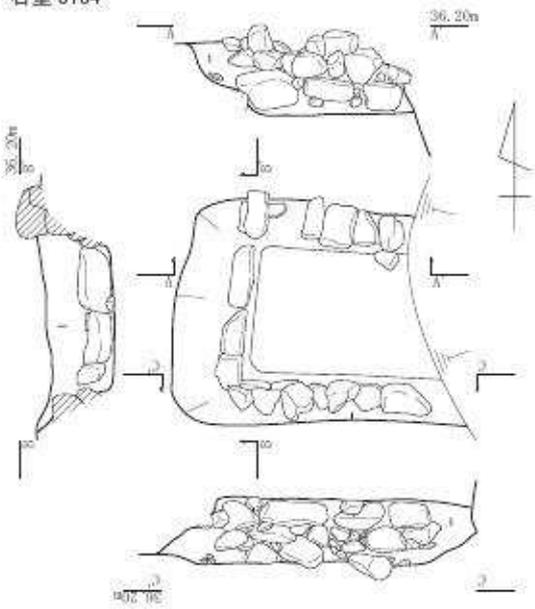


井戸 3420



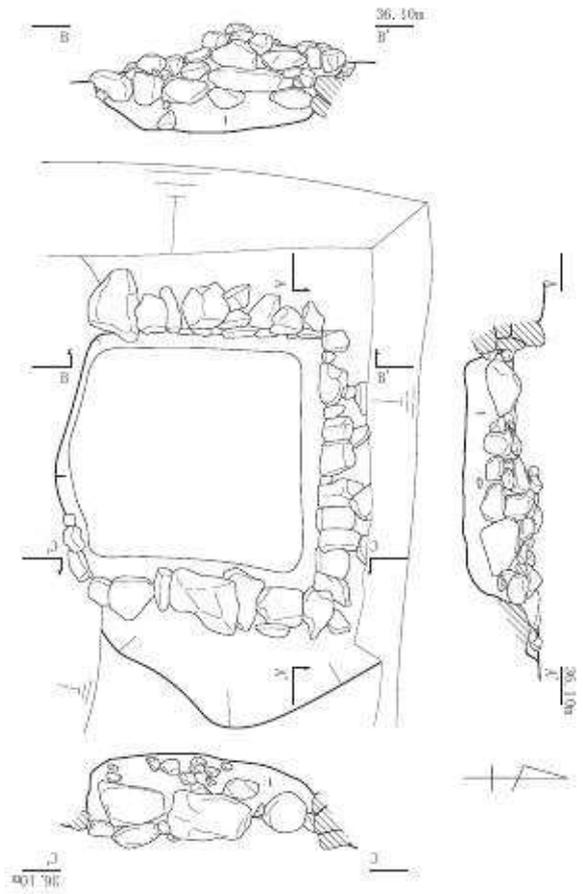
第 24 図 第 3 遺構面遺構図 6 井戸 3108・3170・3209・3260・3420、石組 3154、土坑 3155 (縮尺 1/50)

石室 3184



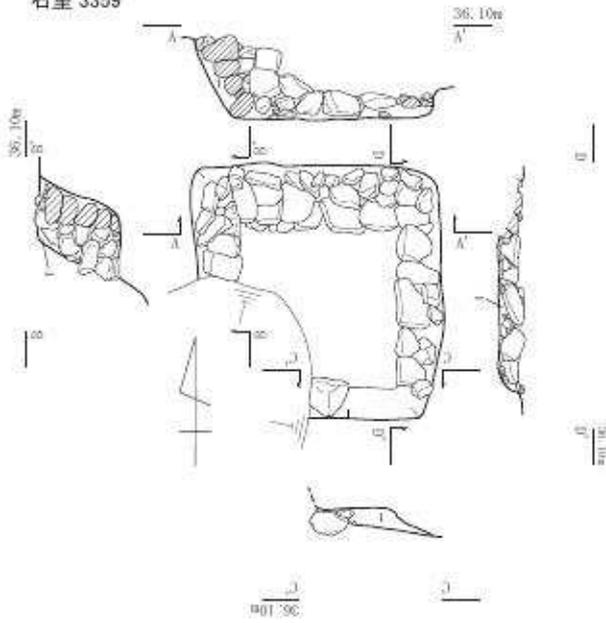
1. 灰黄褐色泥砂

石室 3202



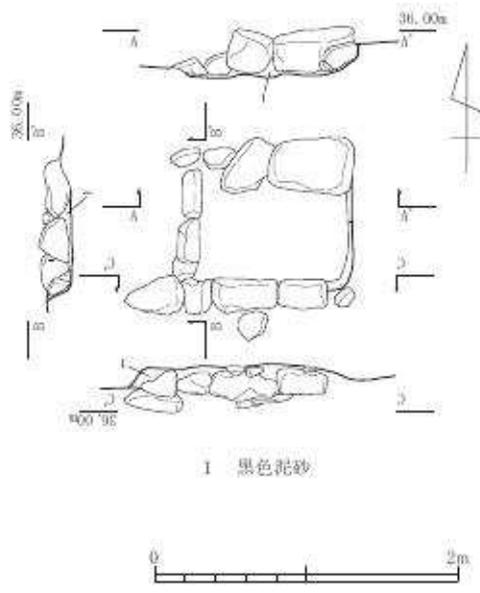
1. 灰黄褐色砂泥

石室 3359



1. 黑色泥砂

石室 3362



1. 黑色泥砂

第 25 图 第 3 遺構面遺構圖 7 石室 3184 · 3202 · 3359 · 3362 (縮尺 1/50)

あり、第3遺構面で検出しているが第4遺構面の遺構と考えられる。

井戸 3170 (第24図)

D3グリッドで検出した井戸である。掘方は1.43 m×1.21 mの平面楕円形で、深さは1.33 mである。円形に石組された井戸枠は直径0.87 mを測る。埋土は黒褐色砂泥が堆積していた。

井戸3170から出土した遺物は、16世紀代(京都X期古～新)である。

石室 3184 (第25図)

C2グリッドで検出した石室である。(1.90 m)×1.53 mの平面隅丸方形で、深さ0.43 mまで掘り込んで拳大の礫を1～3段を壁面に積み上げている。東側は攪乱によって壊されている。埋土は灰黄褐色泥砂が堆積していた。

石室3184から出土した遺物は、16世紀代(京都X期古～新)である。

石室 3202 (第25図)

B1グリッドで検出した石室である。(3.16 m)×(2.07) mの平面隅丸方形で、深さ0.38 mまで掘り込んで拳大から人頭大の礫を5～6段を壁面に積み上げている。南側は攪乱によって壊されている。埋土は灰黄褐色泥砂が堆積していた。

石室3202から出土した遺物は、14世紀後半～15世紀前半(京都VIII期古～新)である。

土坑 3207 (第9図)

K2グリッドで検出した土坑である。掘方は(2.80 m)×2.18 mの長楕円形で、北側は調査区外に延長する。深さは0.32 mを測る。埋土は灰黄褐色泥砂が堆積していた。

土坑3207から出土した遺物は、16世紀後半(京都X期中～XI期古)である。

井戸 3209 (第24図)

J3グリッドで検出した井戸である。掘方は1.63 m×1.51 mを測る楕円形で、円形に石組された井戸枠は直径0.58 mを測る。深さ1.35 mまで円形に組んだ石組があり、水溜部分を深さ0.23 m掘り込んでいる。埋土は黒褐色砂泥が堆積していた。

井戸3209から出土した遺物は、15世紀前半(京都VIII期中～新)である。

井戸 3260 (第24図)

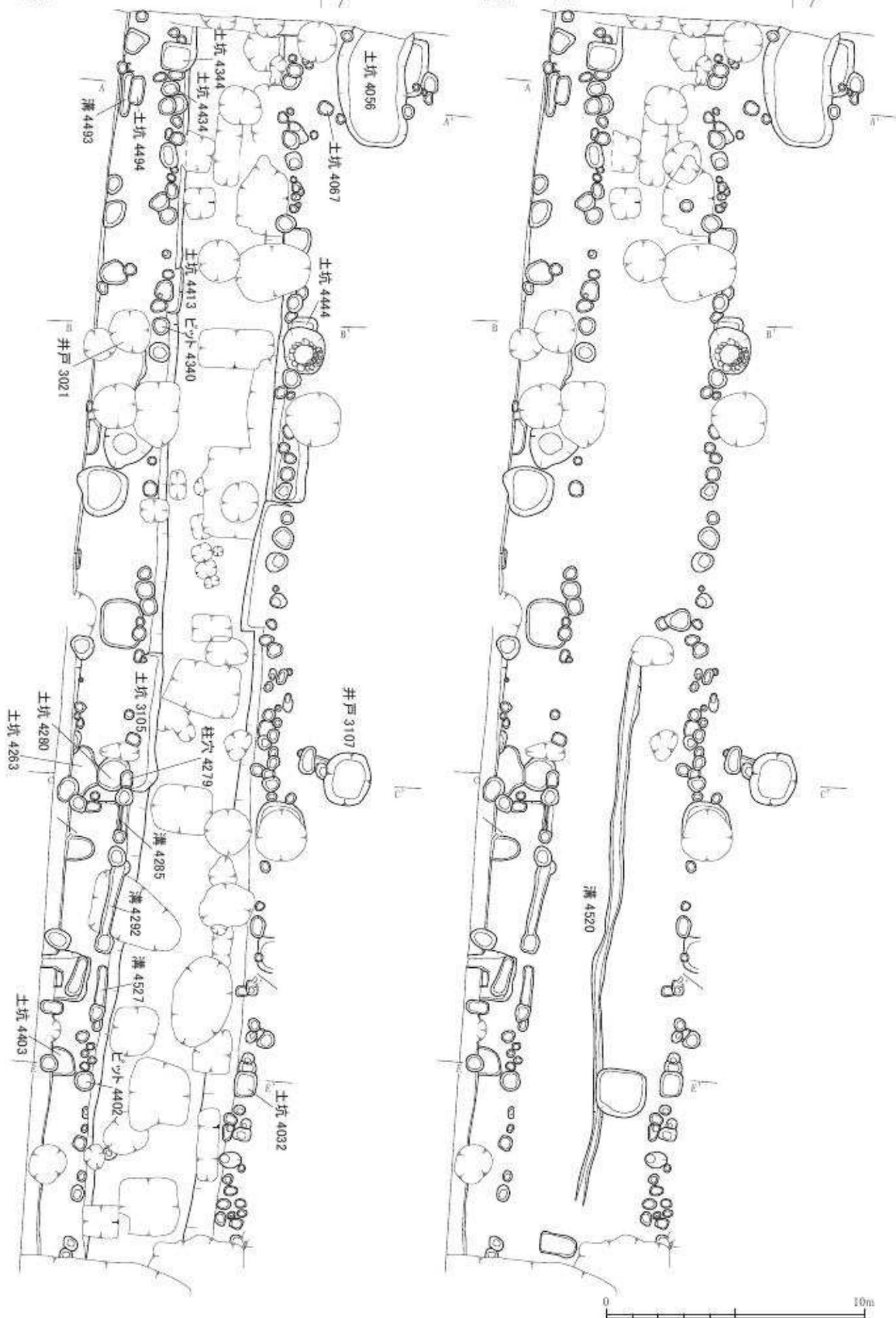
F3グリッドで検出した井戸である。北西側の井戸が南東側の井戸を壊し、作り直されている。掘方は北西側が直径1.41 m程、南東側は1.33 m程の楕円形である。円形に石組された井戸枠は北西側が直径75 cm、南東側が直径50 cmを測る。深さは北西側が90 cm、南西側が82 cmである。石組は底部付近の1～2段分のみが残存し、北西側は水溜部分を8 cm掘り込んでいる。埋土は黒褐色砂泥が堆積していた。

井戸3260から遺物は出土しなかった。

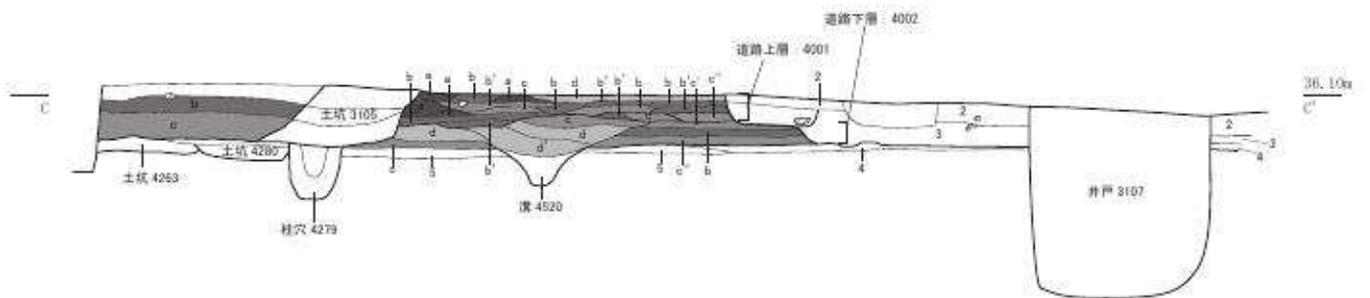
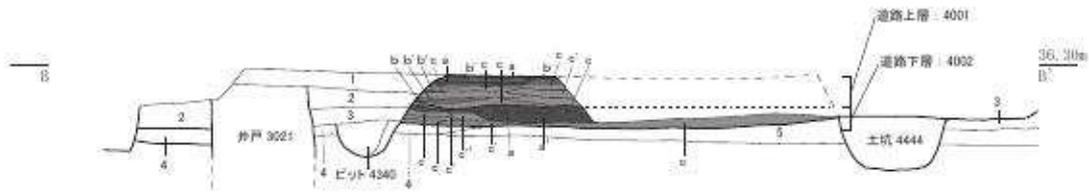
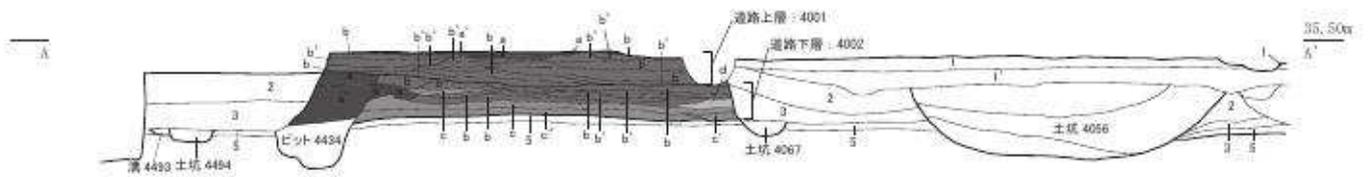
石室 3359 (第25図)

K3グリッドで検出した土坑である。1.69 m×1.61 mの平面円形で、深さ0.55 mまで掘り込んで拳大の礫を1～3段を壁面に積み上げている。南西側を攪乱によって壊されている。埋土は黒色泥砂が堆積していた。

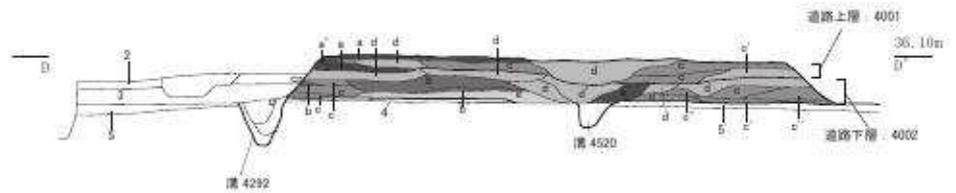
石室3359から出土した遺物は、17世紀前半(京都XI期中～新)である。石室3359は第3遺



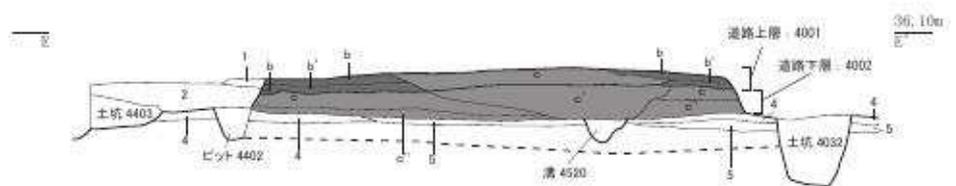
第26図 第4遺構面遺構図1 道路4001平面図(縮尺1/200)



- 1 暗褐色泥砂
- 2 灰黄褐色砂泥
- 3 灰黄褐色砂泥
- 4 灰白色砂泥(整地)
- 5 シルト



- 黒褐色泥砂
 - a: しまりあり
 - a': しまりなし
- 黄褐色泥砂
 - b: しまりあり
 - b': しまりなし
- 灰黄褐色泥砂
 - c: しまりやや弱い 粗砂~小礫多く含む
 - c': しまり弱い 小礫多く含む
 - c'': しまり弱い
- 灰黄色泥砂
 - d: しまりあり
 - d': しまりなし
- 黄灰色泥砂
 - e: しまり弱い



第27図 第4遺構面遺構図2 道路4001断面図(縮尺1/80)

構面として検出したが、第2遺構面の残欠と考えられる。

石室 3362 (第25図)

I 2グリッドで検出した土坑である。1.15 m×1.12 mの平面方形で、深さ0.23 mまで掘り込んで人頭大の礫を1～2段を壁面に積み上げている。埋土は黒色泥砂が堆積していた。

石室 3362 から出土した遺物は、15世紀後半～16世紀前半(京都IX期中～X期古)である。

井戸 3420 (第24図)

G 4～H 5グリッドで検出した井戸である。2.05×2.00 mの楕円形で、深さ1.73 mを測る。井戸枠は確認できなかった。深さ1.50 mまで掘り込み、さらに中央の水溜部分を23 cm掘り込んでいる。埋土は黒褐色泥砂が堆積していた。

井戸 3420 から出土した遺物は、16世紀代(京都X期古～新)である。

第6節 第4遺構面の遺構(平安時代後期～鎌倉時代)

第4遺構面は、調査地が本格的に土地利用され始めた時代の遺構である。洛中の綾小路を延長するように洛外へとつづく道路や区画溝を検出した。

道路 4001・4002 (第26・27図 図版十一～十五)

調査区南側を東西に貫通するように検出した道路遺構である。台形に土を盛り上げた構造で、道路に沿って延長する側溝を伴わず、代わりに柱穴列が道路脇に連続して並ぶ。道路は下端幅で5.5 m～6.2 m、上端幅で4.2～5.0 mを測る。道路高は最大で0.62 m、最小で0.30 mを測る。西側から東側にかけて地面が傾斜するのにあわせて道路高は低くなり、最大標高で36.40 m、最小標高で35.75 mを測る。道路延長は約60 mなので、およそ1%東側へ傾斜して洛外へ伸びる道路である。道路は西側から平安京の区割りに沿った方向であるが、G 5グリッド付近でわずかに方向を変え、南東方向に伸びる。西側の方向はS 44° E、東側はN 42° Eを測る。

道路は版築構造となっており、0.01 mから0.04 mの厚さで互層堆積に積み上げて固くしまっている。中砂や泥砂で挟んだ状態で観察できるものも多いが、堆積順の規則性は見て取れない。またG 5グリッドより東側の堆積は西側と大きく異なり、拳大の礫が多く含まれる層が増え版築構造が部分的にしかみられない。また上層がこぶし大の礫を多く含む層で堆積が厚い状況が観察でき、下層は互層堆積がみられる箇所も確認できたため、平面的に判断できる限りにおいて面的に掘削し、時代差などが判断できるかを検証した(道路上層:4001、道路下層:4002)が、遺物や堆積順の形態では明確な時代差を見いだせなかった。G 5グリッドより東側は攪乱によって多くが壊されているため不明確であるが、西側と比較すると粗い造りとなっている。堆積が変化する変換点部分(G 5グリッド)には現代の攪乱によって壊されているため不明であるが、時代を追って作り変えられたものではなく構築方法の差と考えられる。

また、道路端を部分的に補修したと考えられる箇所が認められる。土坑 4344 (A 5グリッド)や土坑 4413 (C 5グリッド)、土坑 3105 (F 5・G 5グリッド)があげられる。これらは道路遺構よりも内側に食い込むように掘り込まれた土坑で、道路面よりも硬度が低い、周辺の遺構埋土よりもやや硬くしまっている。また、道路脇に連続する柱穴もやや硬くしまった埋土によって

半分埋没した状態であったため、道路側面が一度作り変えられたのではないかと考えられる。

道路の版築土をすべて除去すると平安時代の整地層が現れる。この整地層は地形全体の南東方向に低くなっていることに加え、道路中心が分水嶺となり、南北にゆるやかに傾斜している。整地層上面では溝 4520 を検出し、東側の道路の方向がやや南東に折れると共通した方向となっていることから、道路造営時から道路をまげてつくりあげておくことを意識していたことがわかる。

柱穴列は北側で 77 基、南側で 55 基検出した。平面形が方形の柱穴や円形の柱穴が不規則にならんでおり、柱穴の規模は 0.22 m～0.55 m である。大きさの規則も認められない。また柱穴底に礎石などの構造は見られなかった。柱痕跡も明確なものはない。

また、溝 4285 (G 6 グリッド)、溝 4292 (H 5 グリッド)、溝 4527 (I 6 グリッド) など幅 0.28 m～0.40 m を測り、長さが 1.0 m～2.6 m と短い溝を検出した。道路側溝としては機能しているとは考えづらく、柱穴と重複するものでもないことから、これらの位置では溝掘りをするだけで用を足していたと考えられる。

道路 4001・4002 から出土した遺物は、12 世紀代(京都 V 期古～VI 期古)である。土坑 4344 (A 5 グリッド) や土坑 4413 (C 5 グリッド)、土坑 3105 (F 5・G 5 グリッド) から出土した遺物は、13 世紀前半(京都 VI 期新)である。柱穴列から出土した遺物は、12 世紀代(京都 V 期古～新)である。

土坑 4032 (第 28 図)

I 5 グリッドで検出した土坑である。1.01 m×0.88 m の平面方形で、深さ 0.70 m を測る。埋土は黒褐色砂泥が堆積していた。

土坑 4032 から出土した遺物は、13 世紀後半(京都 VI 期中～VII 期古)である。

土坑 4316 (第 10 図)

E 4 グリッドで検出した土坑である。3.23 m×1.62 m の長方形で、深さ 0.60 m を測る。埋土は黒色砂泥が堆積していた。

土坑 4316 から出土した遺物は、12 世紀後半(京都 VI 期古)である。

土坑 4410 (第 10 図)

C 5 グリッドで検出した埋甕土坑である。楕円形は 0.71 m×0.69 m の楕円形で、深さ 0.20 m を測る。信楽産と考えられる甕の底部を埋置していた。埋土は褐色泥砂が堆積していた。

土坑 4410 から出土した遺物は、15 世紀後半(京都 IX 期新～X 期古)である。土坑 4410 は第 4 遺構面で検出しているが、第 3 遺構面の残欠と考えられる。

溝 4520 (第 26 図 図版十五)

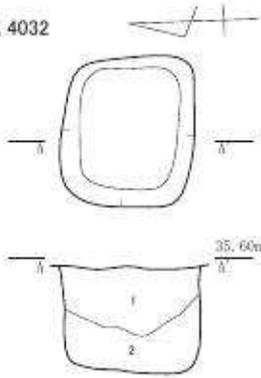
G 5～K 5 グリッドで検出した区画溝である。幅 0.52 m×検出長 5.43 m、深さ 0.25 m の断面半円形の溝である。埋土は黒色シルト質土が堆積していた。

溝 4520 から出土した遺物は、11 世紀後半(京都 IV 期新)である。

土坑 4543 (第 10 図)

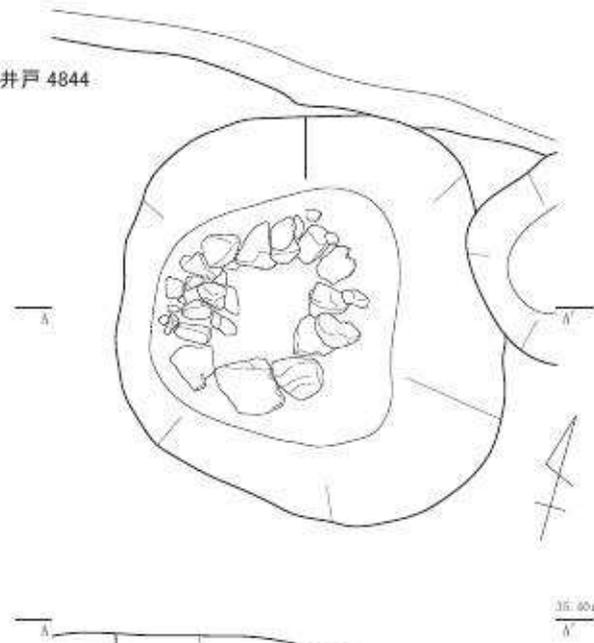
D 3 グリッドで検出した土坑である。2.98 m×2.02 m の長方形で、深さは 1.50 m を測る。埋土は灰黄橙色泥砂が堆積していた。

土坑 4032

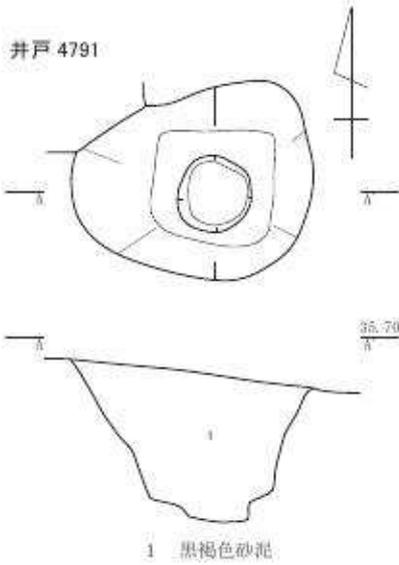


- 1 5YR3/2 暗赤褐色砂泥
3cm 大の礫、炭化物粒子、王過食砂泥含む しまり弱い
- 2 5YR3/1 黒褐色砂泥
3~5cm 大の礫少量、炭多量含む しまり弱い

井戸 4844

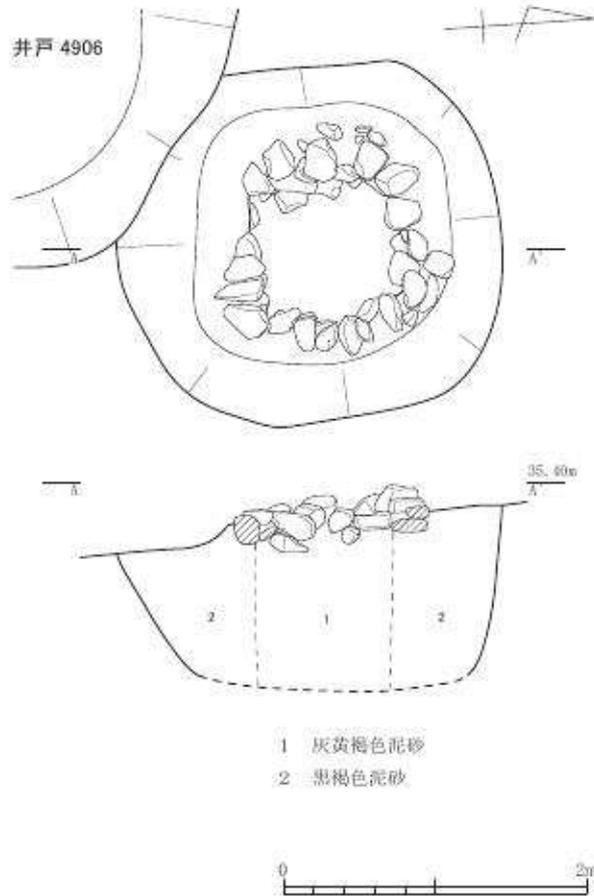


井戸 4791



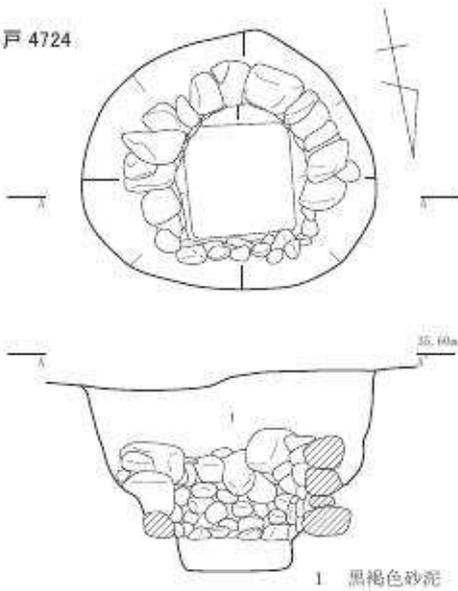
1 黒褐色砂泥

井戸 4906



- 1 灰黄褐色泥砂
- 2 黒褐色泥砂

井戸 4724



1 黒褐色砂泥

第 28 図 第 4 遺構面遺構図 3 土坑 4032、井戸 4791・4724・4844・4906 (縮尺: 1/50)

土坑 4543 から出土した遺物は、16 世紀前半（京都IX期新～X期古）である。土坑 4543 は第4遺構面で検出した遺構であるが、第3遺構面の残欠と考えられる。

土坑 4585（第10図）

B 2 グリッドで検出した土坑である。1.32 m × 0.96 m の楕円形で、深さは 0.50 m を測る。埋土は黒褐色泥砂が堆積していた。

土坑 4585 から出土した遺物は、12 世紀後半（京都V期中～VI期古）である。

土坑 4590（第10図）

B 1 グリッドで検出した土坑である。1.46 m × 1.41 m の楕円形で、深さは 1.20 m を測る。埋土は黒褐色泥砂が堆積していた。

土坑 4590 から出土した遺物は、12 世紀後半（京都V期新～VI期古）である。

土坑 4605（第10図）

E 1 グリッドで検出した土坑である。1.07 m × 0.96 m の隅丸方形で、深さは 0.30 m を測る。埋土は黒褐色泥砂が堆積していた。

土坑 4605 から出土した遺物は、12 世紀前半（京都V期古～中）である。

土坑 4623（第10図）

B 1 グリッドで検出した土坑である。(1.68 m) × 1.48 m の楕円形で、北側は調査区外に延長する。深さは 0.43 m を測る。埋土は灰黄褐色泥砂が堆積していた。

土坑 4623 から出土した遺物は、12 世紀半ば（京都V期中～VI期古）である。

溝 4627（第10図）

B 2 グリッドで検出した溝である。幅 0.65 m × 検出長 2.35 m、深さは 0.13 m を測る。埋土は黒褐色泥砂が堆積していた。

溝 4627 から出土した遺物は、12 世紀半ば（京都V期中～VI期古）である。

土坑 4670（第10図）

B 2・3 グリッドで検出した土坑である。2.37 m × (1.71 m) の方形で、西側は調査区外に延長する。深さは 0.50 m を測る。埋土は黒褐色泥砂が堆積していた。

土坑 4670 から出土した遺物は、12 世紀前半（京都V期古～中）である。

土坑 4723（第10図）

F・G 1 グリッドで検出した土坑である。1.60 m × (0.96 m) の楕円形で、北側は溝 4893 に切られる。深さは 0.37 m を測る。埋土は黒褐色泥砂が堆積していた。

土坑 4723 から出土した遺物は、12 世紀半ば（京都V期中～新）である。

井戸 4724（第28図）

F 1 グリッドで検出した井戸である。掘方は 1.91 m × 1.78 m、深さ 1.31 m を測る楕円形で、円形に石組された井戸枠は直径 0.80 m を測る。埋土は黒褐色砂泥が堆積していた。

井戸 4724 から出土した遺物は、12 世紀前半（京都V期古～新）である。

井戸 4791（第28図）

H 2 グリッドで検出した井戸である。掘方は 1.62 m × 1.33 m を測る楕円形である。埋土は黒

褐色砂泥が堆積していた。

井戸 4791 から出土した遺物は、12 世紀後半（京都 V 期新～VI 期古）である。

溝 4893（第 10 図 図版十五）

F 1～K 1 グリッドで検出した区画溝である。検出幅 0.77 m×検出長 29.3 m、深さ 0.34 m の断面半円形の溝である。埋土は黒色シルト質土が堆積していた。

溝 4893 から出土した遺物は、12 世紀前半（京都 V 期古～新）である。

井戸 4844（第 28 図）

K 2 グリッドで検出した井戸である。掘方は 2.86 m×2.58 m、深さ 1.15 m を測る楕円形で、方形に石組された井戸枠は 0.65 m×0.58 m を測る。埋土は黒褐色砂泥が堆積していた。

井戸 4844 から出土した遺物は、12 世紀後半（京都 V 期新～VI 期古）である。

土坑 4867（第 10 図）

I 2 グリッドで検出した土坑である。1.85 m×（1.60 m）の楕円形で、深さは 1.06 m を測る。埋土は黒褐色泥砂が堆積していた。

土坑 4867 から出土した遺物は、12 世紀半ば（京都 V 期中～新）である。

土坑 4869（第 10 図）

I 3 グリッドで検出した土坑である。0.90 m×0.89 m の円形で、深さは 0.70 m を測る。埋土は暗褐色砂礫土が堆積していた。

土坑 4869 から出土した遺物は、12 世紀半ば（京都 V 期中～新）である。

井戸 4906（第 28 図）

J 2 グリッドで検出した井戸である。掘方は 2.52 m×2.38 m、深さ 1.24 m を測る楕円形で、円形に石組された井戸枠は直径 0.84 m を測る。埋土は黒褐色砂泥が堆積していた。

井戸 4906 から出土した遺物は、12 世紀前半（京都 V 期古～新）である。

土坑 4968（第 10 図）

E 2 グリッドで検出した土坑である。1.28 m×1.03 m の楕円形で、深さは 0.59 m を測る。埋土は黒褐色泥砂が堆積していた。

土坑 4968 から出土した遺物は、12 世紀後半（京都 V 期中～VI 期古）である。

第 7 節 第 5 遺構面の遺構（平安時代後期以前）

第 5 遺構面は平安時代後期の整地層を除去して現れる橙色中砂層の地山面である。検出した遺構はなく、浅い落ち込みを 2 か所確認した。

整地層から平安時代後期の遺物と古墳時代後期の土器片が少量出土した。

註

- 1) 南昌院（京都市伏見区）での聞き取り調査によると、当時下水が整備されるまでの間に雨水や生活排水を地下に浸透させて排水するために方形の穴が庭の隅に設置されていたようである。ここでは「スイクチ」と呼んでいるが「スイコミ（吸込）」ともいう。調査では漆喰以外にも石組でも似たような施設があり、同様な使用目的ではなかったかと考えられる。

第4章 遺物

第1節 遺物の概要

今回の調査で出土した遺物は、コンテナ数で245箱である。なお、整理段階でランク分けを行った結果、353箱となった。遺物の種類は土師器、須恵器、陶磁器、焼締陶器、瓦質土器、石製品など平安時代から江戸時代までの遺物が出土した。

以下、時期別・遺構別に概要を述べる。掲載遺物の詳細については、第14表の出土遺物観察表に記載した。

第4表 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
江戸時代～現代	土師器、陶磁器、土製品、木製品	27	—	6	21
桃山時代～江戸時代	土師器、陶磁器、土製品、石製品、木製品	58	土師器22点、陶磁器27点、焼締陶器2点、土製品4点、石製品127点、木製品52点	20	38
室町時代	土師器、陶磁器、白色土器、瓦器、瓦質土器、石製品、瓦、銭	61	土師器23点、陶磁器24点、焼締陶器7点、白色土器1点、瓦器1点、瓦質土器4点、石製品3点、瓦2点、銭1655点	17	44
平安時代後期～鎌倉時代	土師器、須恵器、陶磁器、白色土器、山茶碗、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦器、瓦質土器、石製品、瓦	59	土師器86点、須恵器7点、陶磁器33点、白色土器5点、山茶碗7点、灰釉陶器14点、緑釉陶器1点、瓦器10点、瓦質土器6点、石製品2点、瓦4点	26	33
合計		353箱	2129点(148箱)	69箱	136箱

第2節 第2遺構面の遺物（桃山時代～江戸時代）

土坑1010（第29図1～4 図版十七・三十四5）

1・2は土師器の皿である。1は中央に穿孔がある。細い竹の先などに刺す簡易輾燭立ての受け皿である。3は施釉陶器の播鉢である。4は磁器の鉢である。高台内が蛇の目状になる。5は石造物で、地藏の頭部である（図版三十四）。砂岩を丸彫りしており、首下面に直径1.5cm、深さ1.7cmの柄穴を穿つ。

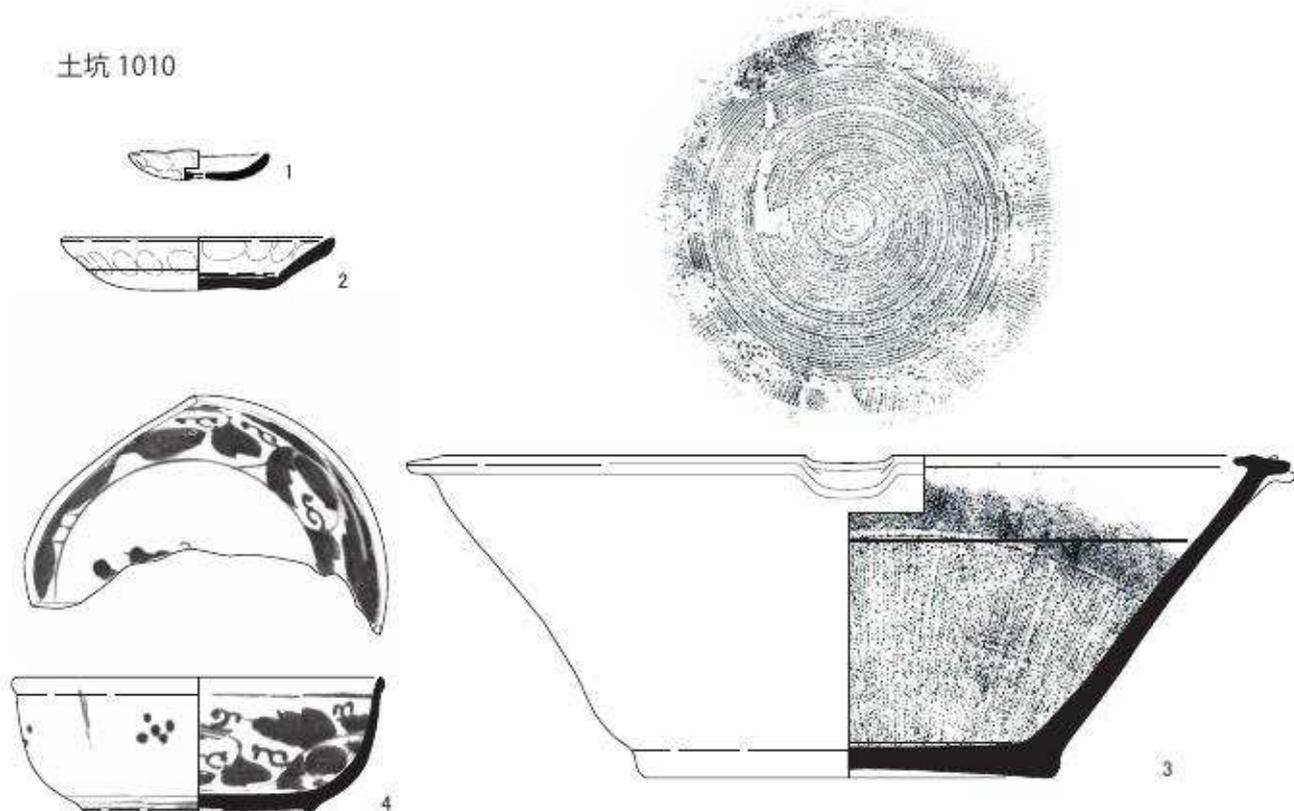
18世紀後半（京都XⅢ期）と考えられる。

土坑1034（第29図6～12 図版十七）

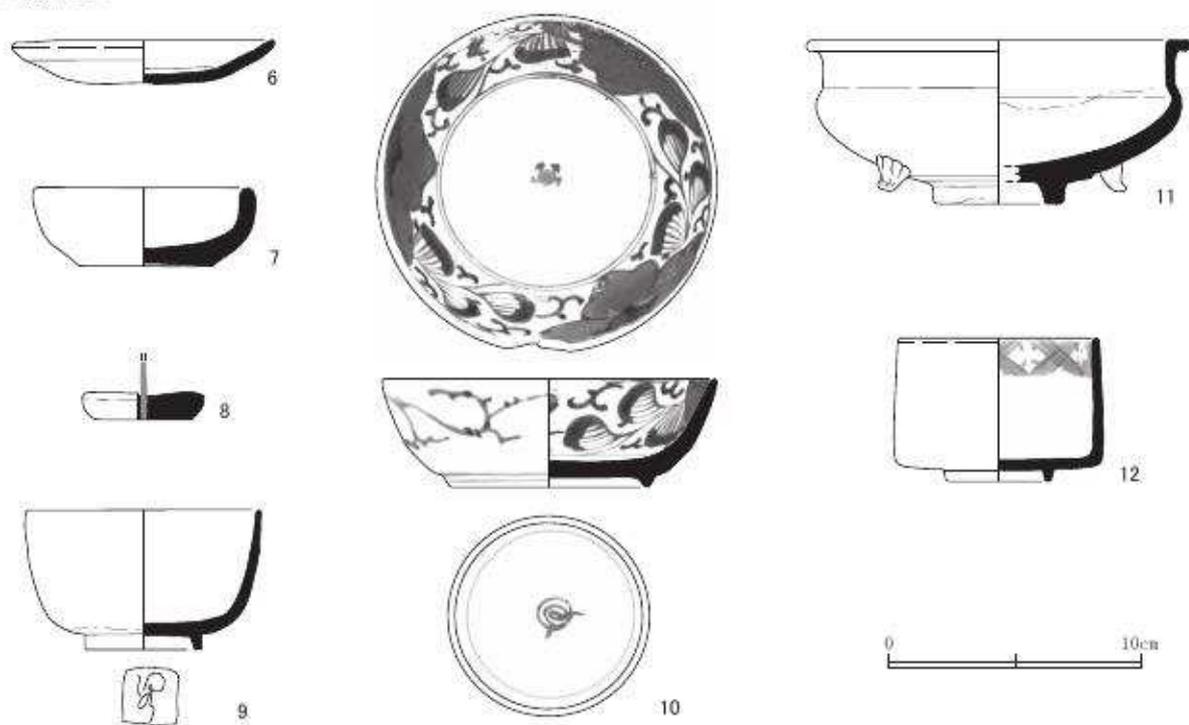
6・7は土師器の皿である。7はロクロ成形の深めの皿である。8は土製品の燭台である。中心に鉄芯を入れ、現状では折れ曲がっている。9は施釉陶器の碗である。京焼系か。10は染付磁器の皿である。見込にコンニャク印判の五弁花がある。11は国産青磁の香炉である。三脚である。12は国産青磁染付の筒形碗である。見込にコンニャク印判の五弁花がある。

18世紀後半（京都XⅢ期）と考えられる。

土坑 1010



土坑 1034



第 29 図 出土遺物実測図 1 土坑 1010・1034 (縮尺 1/3)

石組 1040 (第 30 図 13～20 図版十七・二十五)

13～15 は土師器の皿である。見込に圈線が巡る。16 は土師器でロクロ成形の深めの皿である。17 は焼塩壺の蓋である。内面に布目痕が残る。18 は焼塩壺の身である。外面に「泉口(州)麻生」の刻印。19 は施釉陶器の鬚盥である。20 は染付陶器の筒形碗である。見込にコンニャク印判の五弁花がある。

18 世紀後半(京都XⅢ期)と考えられる。

井戸 2001 (第 31 図 21～24 図版十八・二十五)

21 は土師器の皿である。22・23 は施釉陶器である。22 は皿である。重ね焼きの痕跡が残る。23 は広口壺である。24 は輸入色絵磁器の皿である。表面が銀化している。

16 世紀後半～17 世紀前半(京都X期新～XI期中)と考えられる。

土坑 2006 (第 31 図 25～28 図版二十五)

25 は土師器の皿である。26・27 は輸入染付磁器の皿である。26 は漳州窯、27 は景德鎮産と考えられる。28 は染付磁器の碗である。初期伊万里で、外面に「天下一」の銘を描く。

16 世紀後半～17 世紀前半(京都X期新～XI期中)と考えられる。

土坑 2009 (2004) (第 32 図 29～35 図版十八・二十五)

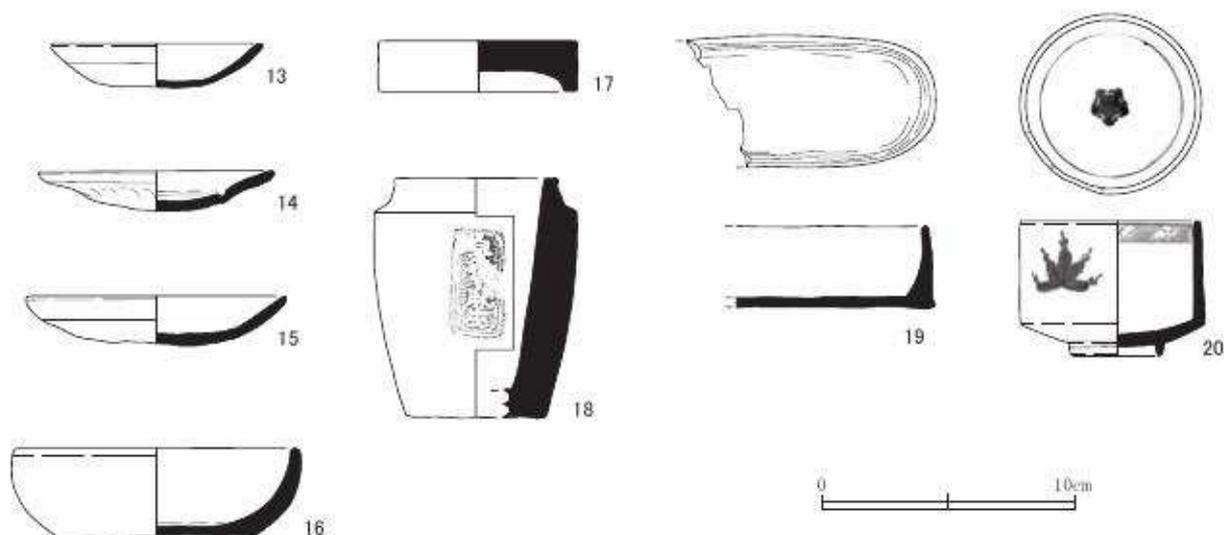
29・30 は土師器の皿である。31 は施釉陶器の碗である。32～34 は輸入染付磁器である。32・33 は皿である。景德鎮産と考えられる。34 は碗である。35 は染付磁器の碗で初期伊万里と考えられる。

16 世紀後半～17 世紀前半(京都X期新～XI期新)と考えられる。

土坑 2023 (第 33 図 36～39 図版十八・二十五)

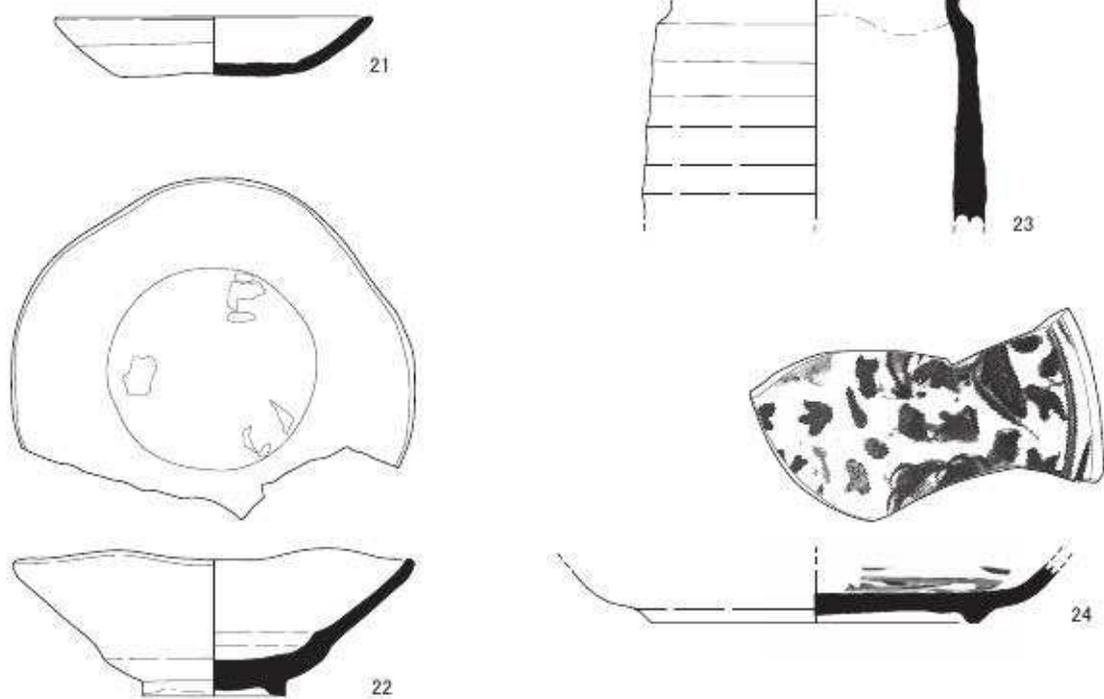
36・37 は土師器皿である。38 は施釉陶器の鉢である。内面に卸し目がある。39 は白磁の皿である。外面に墨が付着している。

石組 1040

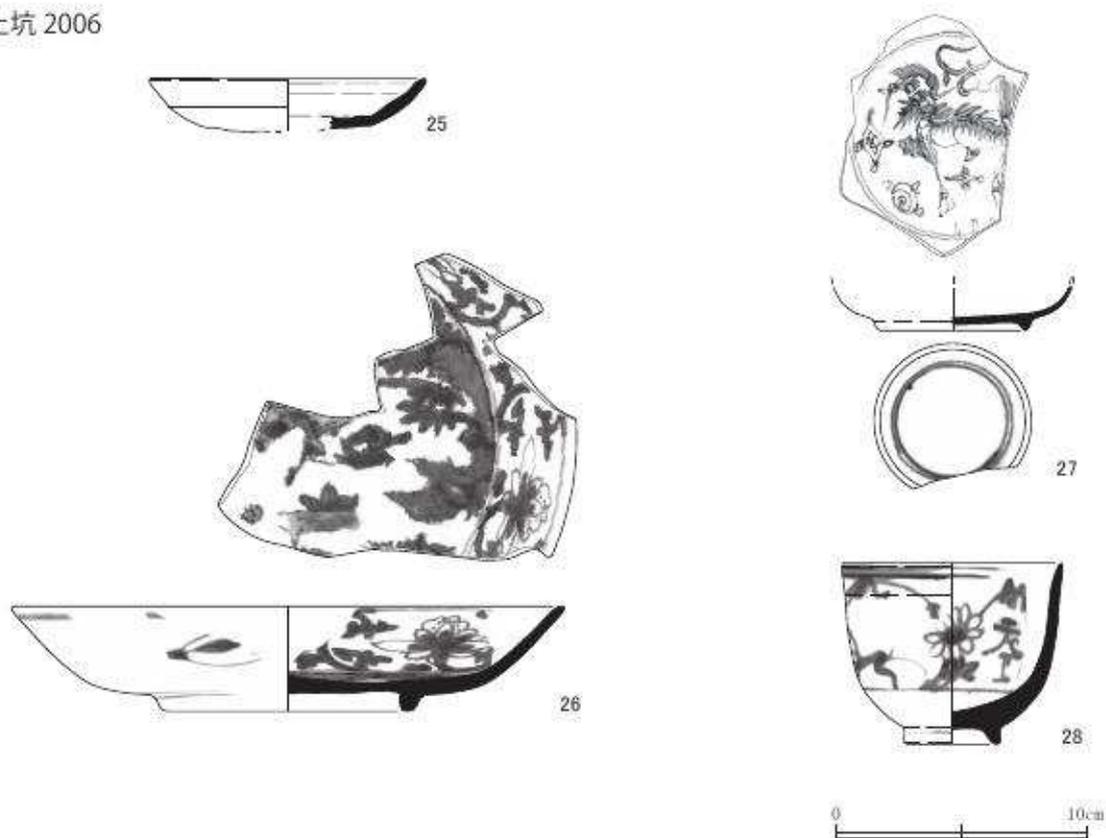


第 30 図 出土遺物実測図 2 石組 1040 (縮尺 1/3)

土坑 2001

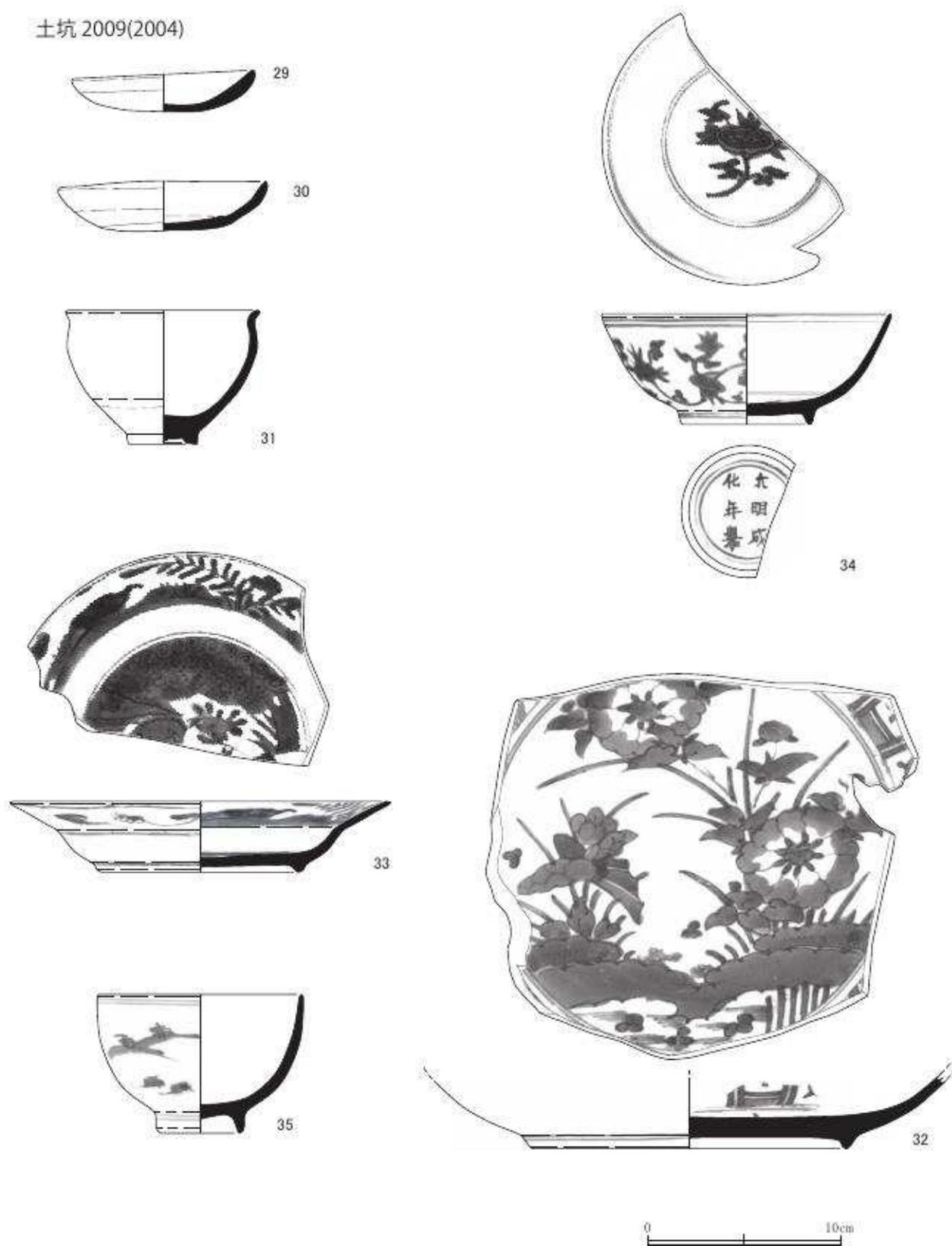


土坑 2006



第 31 图 出土遺物実測図 3 土坑 2001・2006 (縮尺 1/3)

土坑 2009(2004)



第32图 出土遗物实测图4 土坑 2009 (缩尺 1/3)

16世紀前半（京都IX期中～X期古）と考えられる。第2遺構面として検出しているが第3遺構面に相当する遺物が出土している。

土坑 2085（第33図 40～45 図版十八）

40・41は土師器である。40は皿で、41はロクロ成形の深めの皿である。42は施釉陶器の碗である。全体に被熱している。43は施釉陶器の香炉（火入れ）である。44は染付磁器の碗である。外面にコンニャク印判で楓文様を施す。45は磁器の筒型碗である。外側面に沈線を彫り、中央に鉄軸をめぐらす。

18世紀後半（京都XIII期）と考えられる。

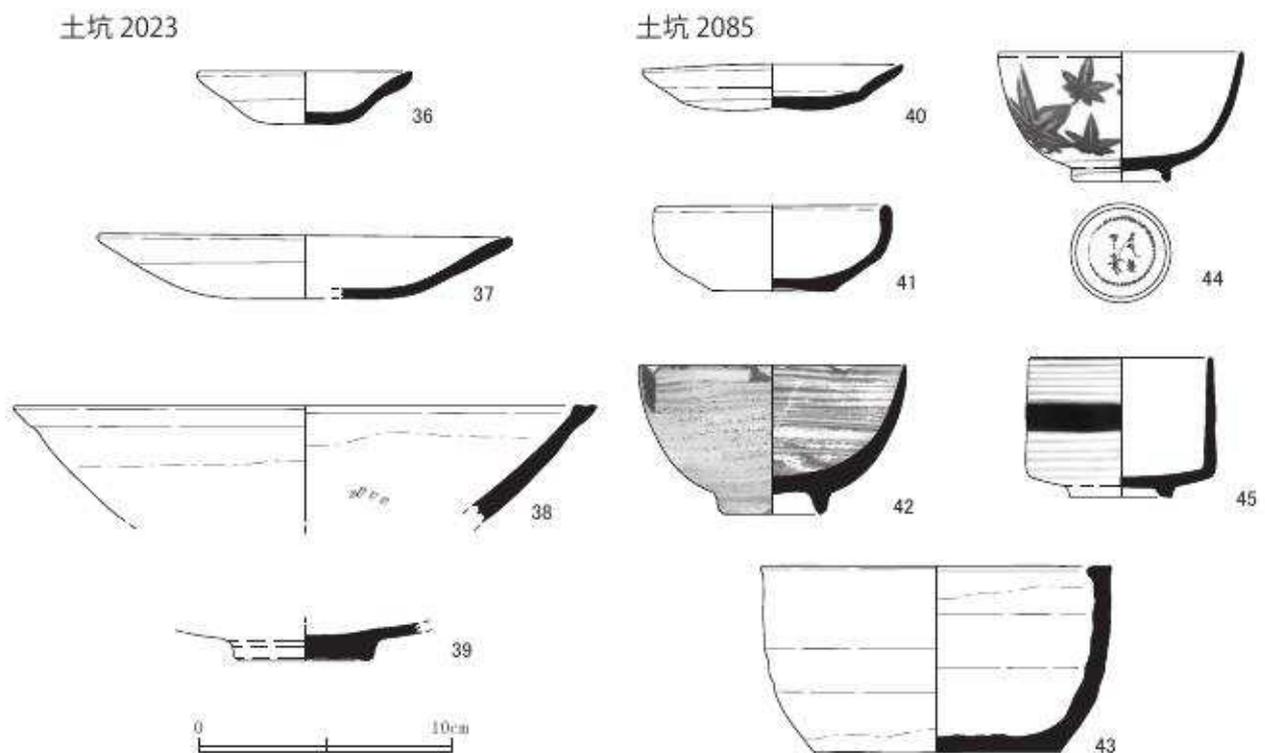
土坑 2101（第34図 46～50 図版十八・二十六）

46・47は土師器の皿である。内面に墨書がある。46は「再拜 □□ 敬白 / 謹請 再拜 祓申 清申 / 祓申 清申」とある。47は「天文□丙申八月 / 謹請 □□ 祓申 / 清申 敬白」とある。46・47とも外面には微細な金箔片と思われるものがわずかに付着する。また47は天文の年号と干支の組み合わせより、天文五（1536）年と考えられる。文言および金箔の付着から考えて、地鎮めに用いられた土公供の可能性もある。46・47の形態は16世紀半ば（京都X期古～新）のものと考えられ、紀年銘との齟齬はない。48は焼塩壺の身である。刻印は認められない。17世紀代の上層からの混入と考えられる。49は施釉陶器の皿である。古瀬戸と考えられる。50は焼締陶器の播鉢である。丹波産と考えられる。

土坑 2101 から出土した遺物は、16世紀前半～17世紀代（京都X期～XIII期）である。

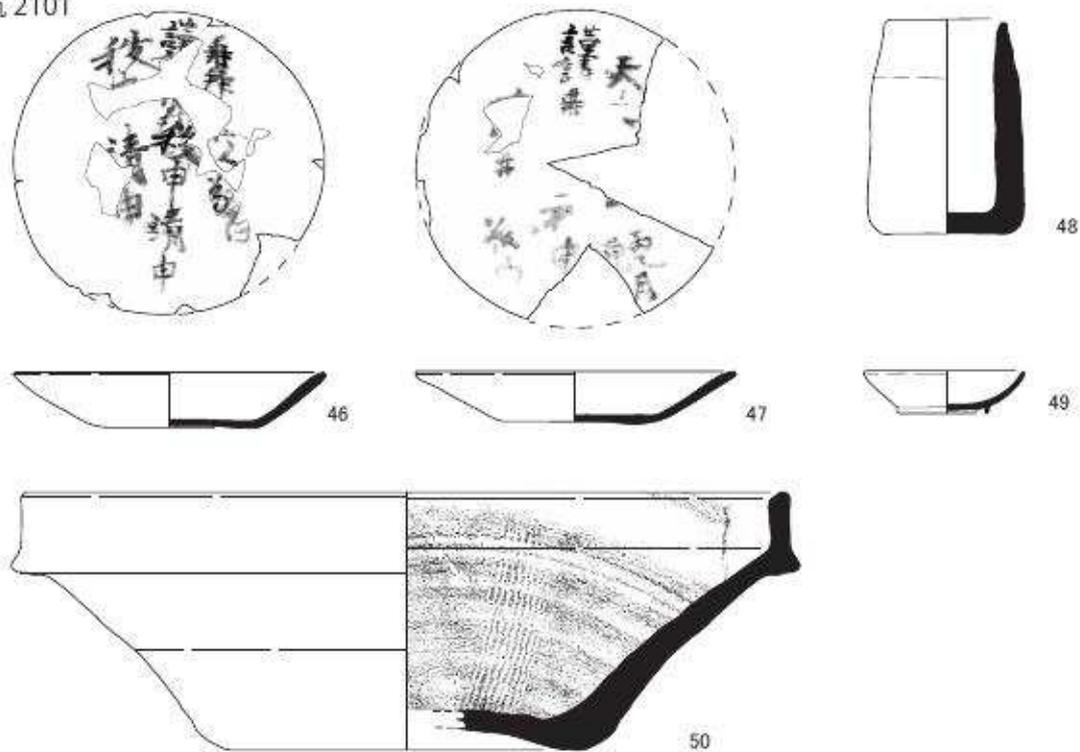
土坑 2119（第34図 51～54 図版二十六）

51・52は土師器の皿である。53は施釉陶器の天目茶碗である。54は青磁の碗である。見込み

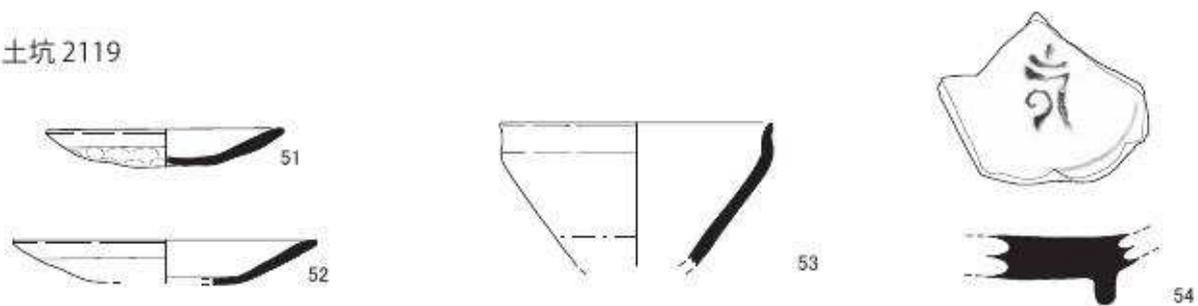


第33図 出土遺物実測図5 土坑 2023・2085（縮尺 1/3）

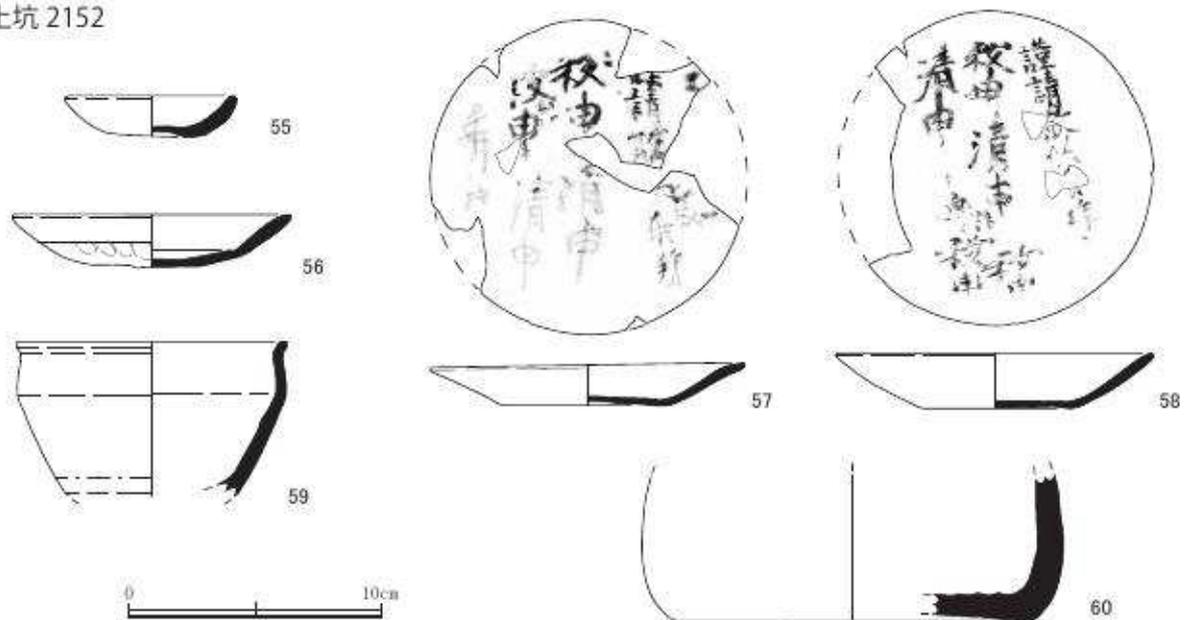
土坑 2101



土坑 2119



土坑 2152



0 10cm

第 34 图 出土遺物実測図 6 土坑 2101・2119・2152 (縮尺 1/3)

に梵字風の文様を入れる。

16世紀後半（京都X期中～新）と考えられる。

土坑 2152（第34図 55～60 図版十八・二十六）

55～58は土師器の皿である。57・58は内面に墨書がある。57は「謹請散供 再拝 / 祓申 清申 / 祓申 清申 / 再拝」とある。58は「謹請散供 再拝 / 祓申 清申 祓申 / 清申 再拝 祓申」とある。59は施釉陶器の天目茶碗である。60は焼締陶器の壺である。

16世紀後半（京都X期中～XI期古）と考えられる。

埋壘土坑 2201（第35図 61 図版二十四）

61は備前の壺に約8万枚の銭がまとめて収められたものである。壺は口径28.0cm、胴径53.2cm、高さ65.2cmを測る。内容物については第7節で詳述する。

埋壘土坑 2201 から出土した遺物は15世紀代と考えられる。

第3節 第3遺構面の遺物（室町時代）

柱穴 3017（第36図 62～68 図版十八・二十六）

62～64は土師器の皿である。65は白色土器の高杯である。66は楕葉型の瓦器碗である。内面に漆が面的に付着している。67・68は瓦質土器である。67は鍋、68は羽釜である。

13世紀後半（京都VI期新～VII期古）と考えられる。

井戸 3020（第36図 69～71 図版二十六・二十七）

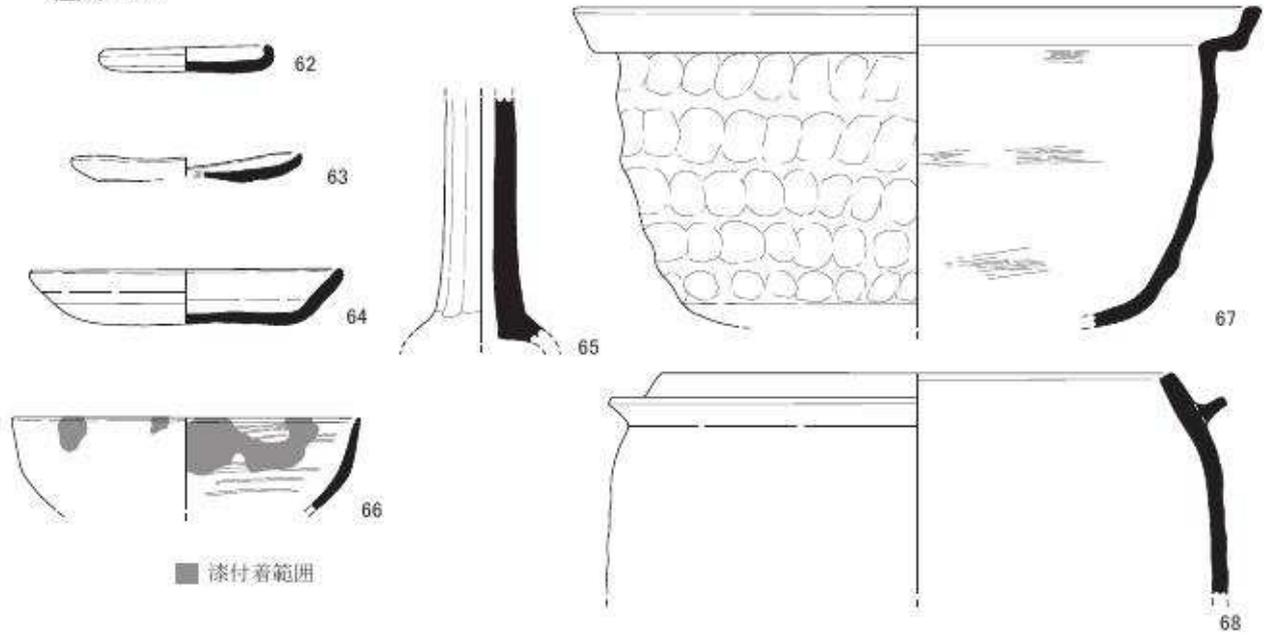
69は土師器の羽釜である。器壁が薄い。70は灰釉陶器の碗である。10世紀の混入品である。71は青磁の皿である。輪花皿でわずかに陰刻がある。

15世紀～16世紀（京都IX期～X期）と考えられる。

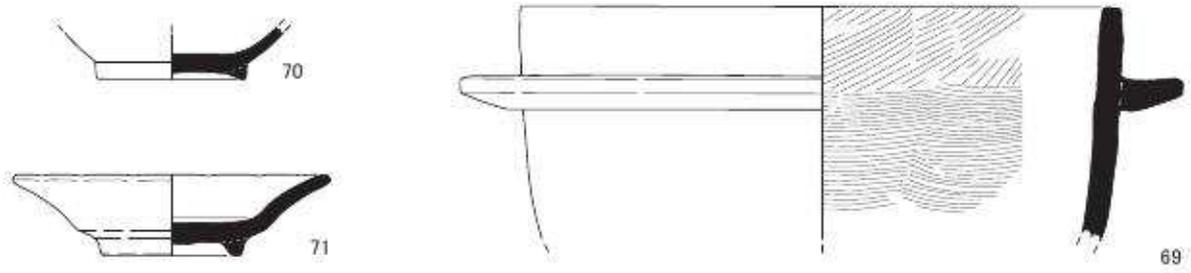


第35図 出土遺物実測図7 埋壘土坑 2201（縮尺1/8）

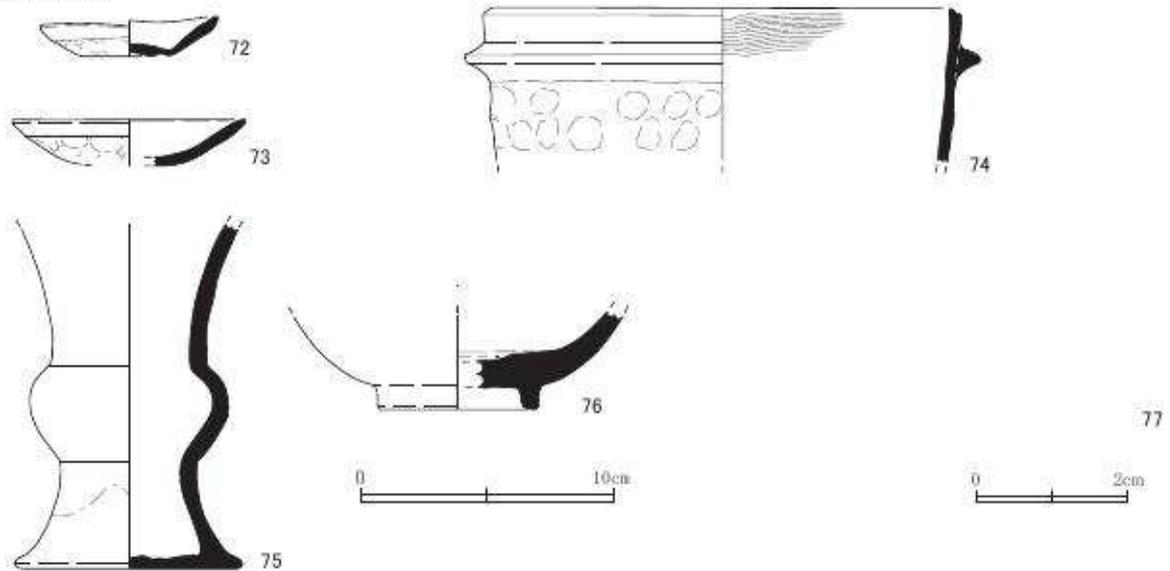
柱穴 3017



井戸 3020



井戸 3097



第 36 図 出土遺物実測図 8 土坑 3017・3020、井戸 3097 (縮尺 1/3、77 は縮尺 1/1)

井戸 3097 (第 36 図 72 ~ 77 図版十八・二十七・三十四)

72・73 は土師器の皿である。74 は瓦質土器の羽釜である。75 は古瀬戸の花瓶である。全体に薄緑色の釉を施す。76 は青磁の碗である。77 は古銭で、永楽通寶である。

15 世紀後半 (京都 IX 期古 ~ 新) と考えられる。

石積 3103 (第 37 図 78 ~ 84 図版十八・二十七)

78・79 は土師器の皿である。80 は土師器の碗で、高台に「一」の墨書がある。81 は瓦質土器の鍋である。82 は白磁の碗である。83 は常滑の甕である。84 は瓦である。軒平瓦で、瓦当は剣頭文である。瓦頭に布目がわずかに残る。13 世紀の混入品と考えられる。

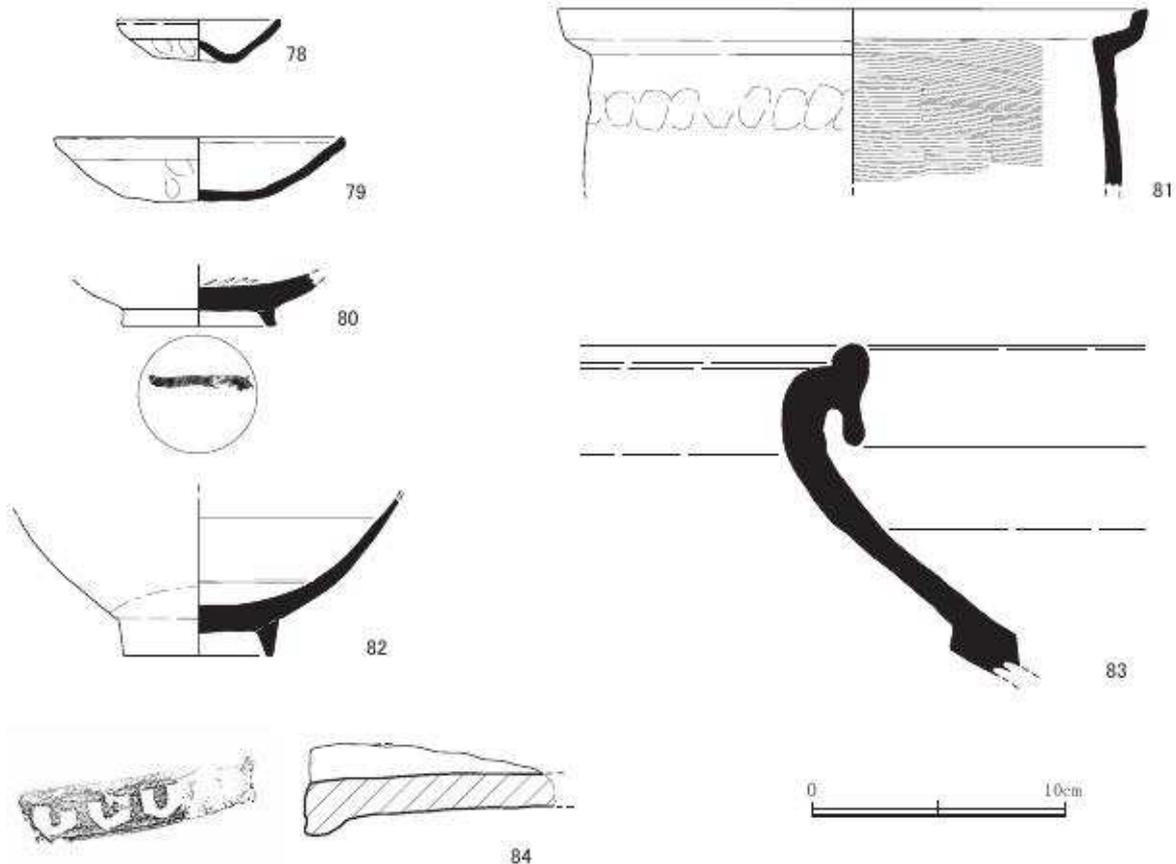
14 世紀後半 ~ 15 世紀前半 (京都 VIII 期古 ~ 新) と考えられる。

土坑 3105 (第 38 図 85 ~ 100 図版十九・二十七・二十八)

85 ~ 91 は土師器の皿である。92 は土師器の脚台であるが、器形は不明である。93 は土師器の羽釜である。94 は須恵器の捏ね鉢である。95 は須恵器の甕である。94・95 共に東播系である。96 は瓦器の小碗である。97 は和泉型の瓦器碗である。98 は瓦質土器の鍋である。99 は常滑の捏ね鉢である。100 は白磁の碗である。

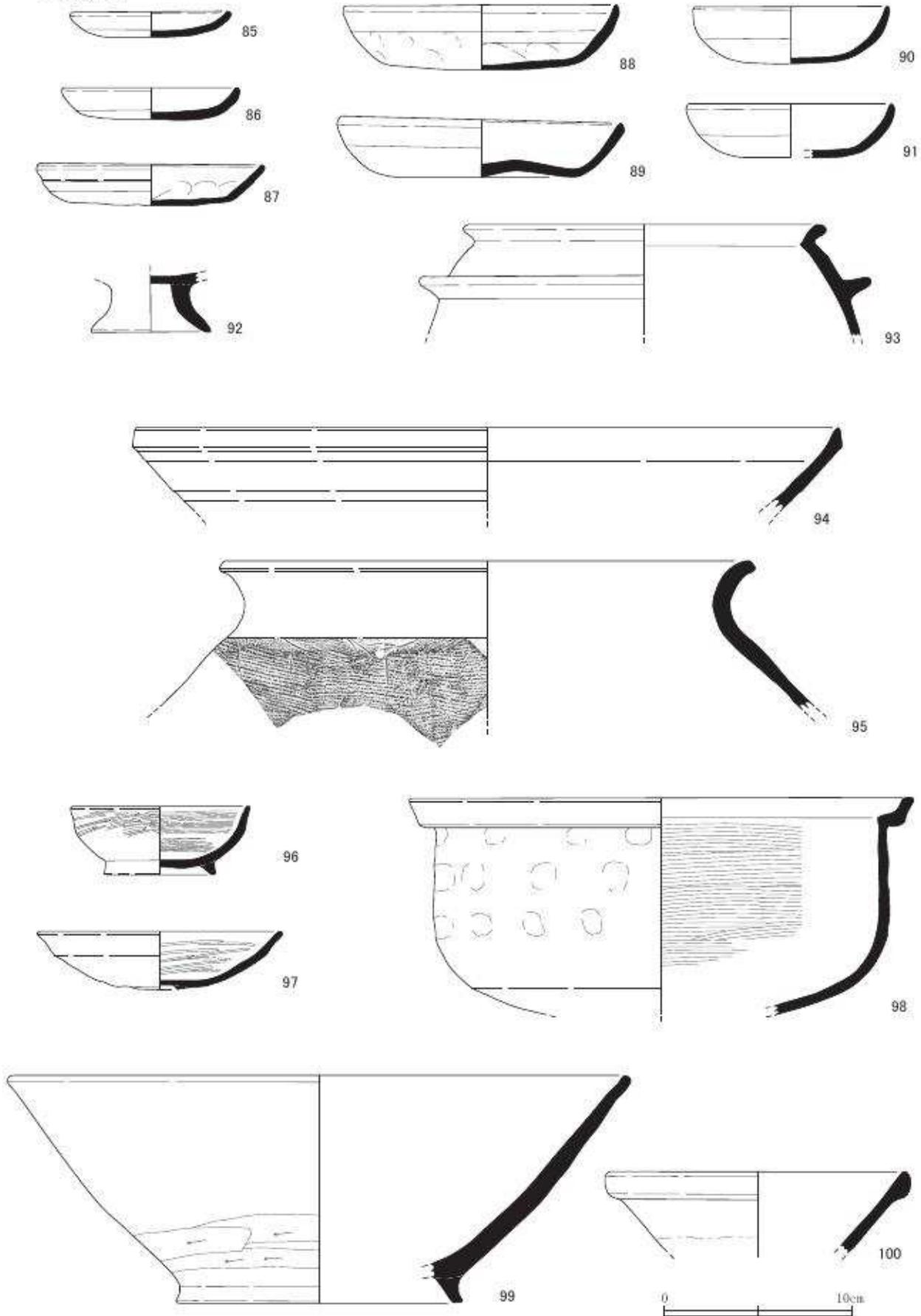
13 世紀前半 (京都 VI 期新) と考えられる。

石積 3103



第 37 図 出土遺物実測図 9 土坑 3103 (縮尺 1/3)

土坑 3105



第 38 図 出土遺物実測図 10 土坑 3105 (縮尺 1/3)

土坑 3107 (第 39 図 101・102 図版二十八)

101 は灰釉系陶器の碗で南部系の山茶碗である。内面に赤色顔料が付着している。102 は軒丸瓦でアーク(大日如来)の梵字を施す。梵字瓦は六勝寺のひとつ、法勝寺の創建瓦とされている。

土坑 3107 からは 11～12 世紀代と 16 世紀代(京都 X 期)の遺物が出土している。

埋壘土坑 3157 (第 39 図 103 図版十九)

103 は須恵器の大甕である。体部外面に樹枝文の叩きを施す。東播系で、三木市久留美窯跡群の柳谷 10 号窯に類例がある。

12 世紀中ごろ(京都 V 期中～新)のものである。

井戸 3111 (第 40 図 104～108 図版十九・二十)

104～106 は土師器の皿である。107 は信楽の播鉢である。内面に煤が付着している。108 は白磁の碗である。

16 世紀後半(京都 X 期新～XI 期古)である。

井戸 3112 (第 40 図 109～116 図版二十・二十八・二十九)

109 は土師器の皿である。110 は白色土器の蓋である。平安時代後期のもので混入品である。111 は須恵器の鉢か碗と思われる。平底で、底部に静止糸切り痕を残す。平安時代中期のもので混入品である。112～113 は施釉陶器である。112 は志野の端反りの皿で灰白色釉を施す。113 は瀬戸美濃の天目茶碗である。114 は軟質の陶器で器形は不明。内外面共に鬼板(酸化鉄)を施す。115 は焼締陶器の鉢である。116 は青磁の碗である。見込に花文を施す。

16 世紀代(京都 IX 期新～X 期新)である。

土坑 3117 (第 41 図 117～122 図版二十・二十九)

117・118 は土師器の皿である。119～121 は施釉陶器である。119 は天目茶碗である。120 は古瀬戸で、口縁部のみ施釉する。121 は蓋である。122 は青磁の皿である。底部内外面蛇の目状に釉掻きとりを施す。

16 世紀代(京都 IX 期新～X 期新)である。

井戸 3170 (第 41 図 123～126 図版二十・二十九)

123 は土師器の鍋である。外面全体に煤が付着する。124 は瀬戸の褐釉皿である。125・126 は焼締陶器の播鉢である。ともに 6 状一単位の播り目を施す。

16 世紀代(京都 X 期古～新)である。

土坑 3207 (第 41 図 127～130 図版二十・二十九)

127 は信楽の耳付花生である。わざと均整をくずした形状で、前面と背面を部分的に平坦に切り取っている。128・129 は青磁である。128 は皿である。外面に連弁文を施す。129 は碗である。130 は軒丸瓦で、複弁八葉蓮華文を施す。平安時代後期のもので、混入である。

16 世紀後半(京都 X 期中～XI 期古)である。

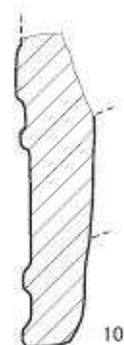
包含層 3 (第 3 遺構面整地土) (第 42 図 131～140 図版二十・二十九・三十四)

131 は土師器の耳皿である。132・133 は灰釉陶器である。132 は折縁皿で、内面には赤色顔料が付着している。10 世紀末～11 世紀初頭のものである。133 はミニチュアの碗の高台接合部に

土坑 3107

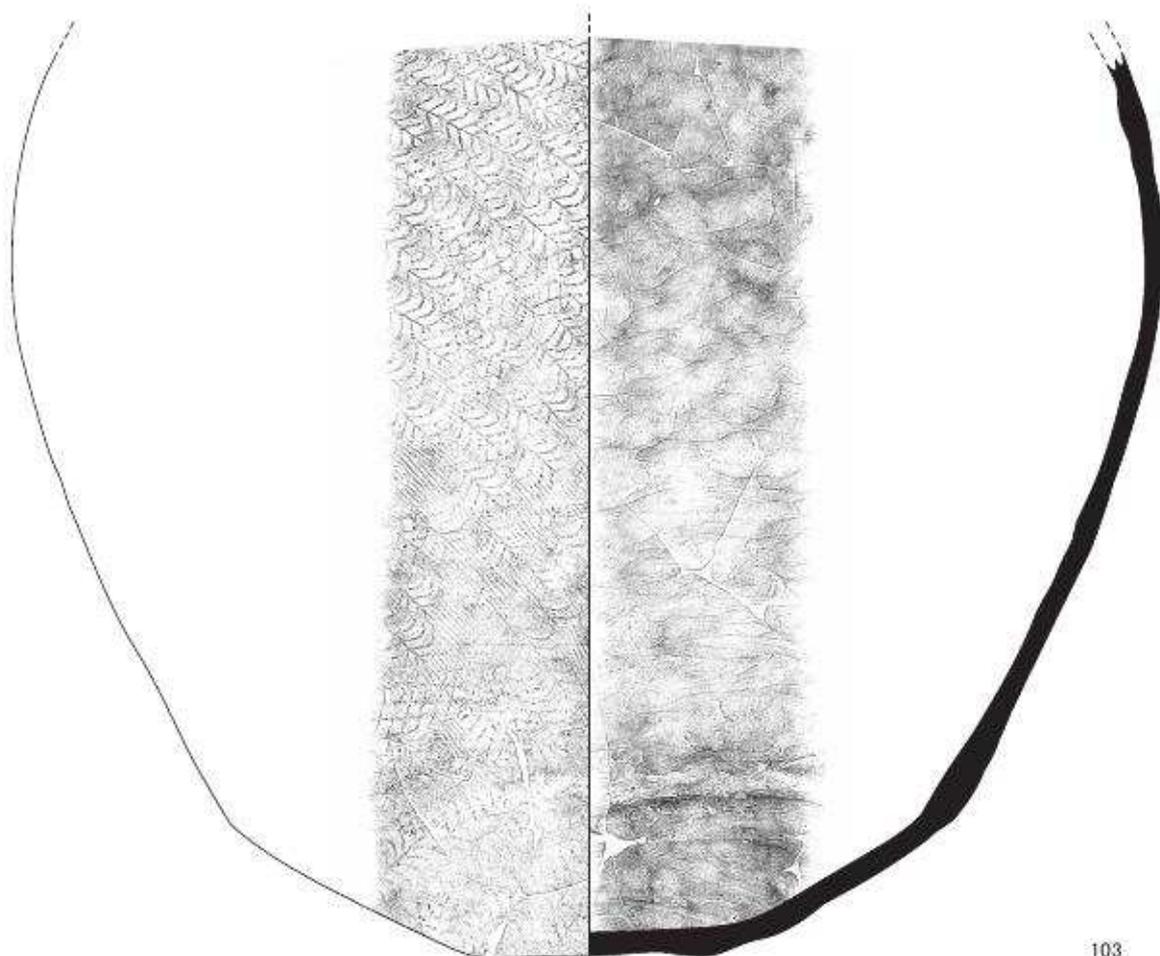


■ 赤色顔料付着範囲



0 10cm

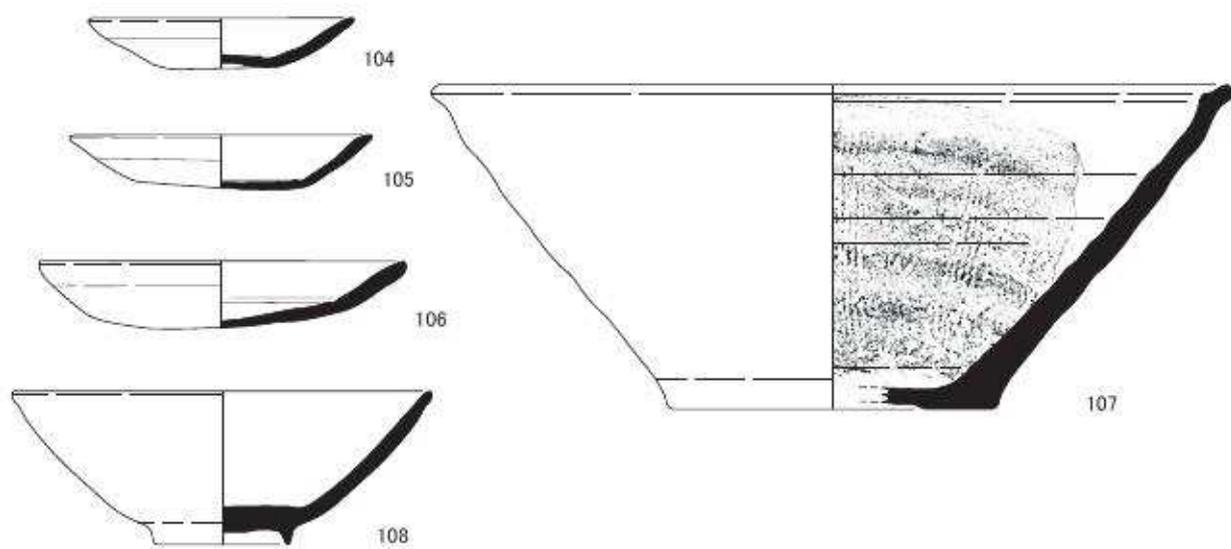
埋甕 3157



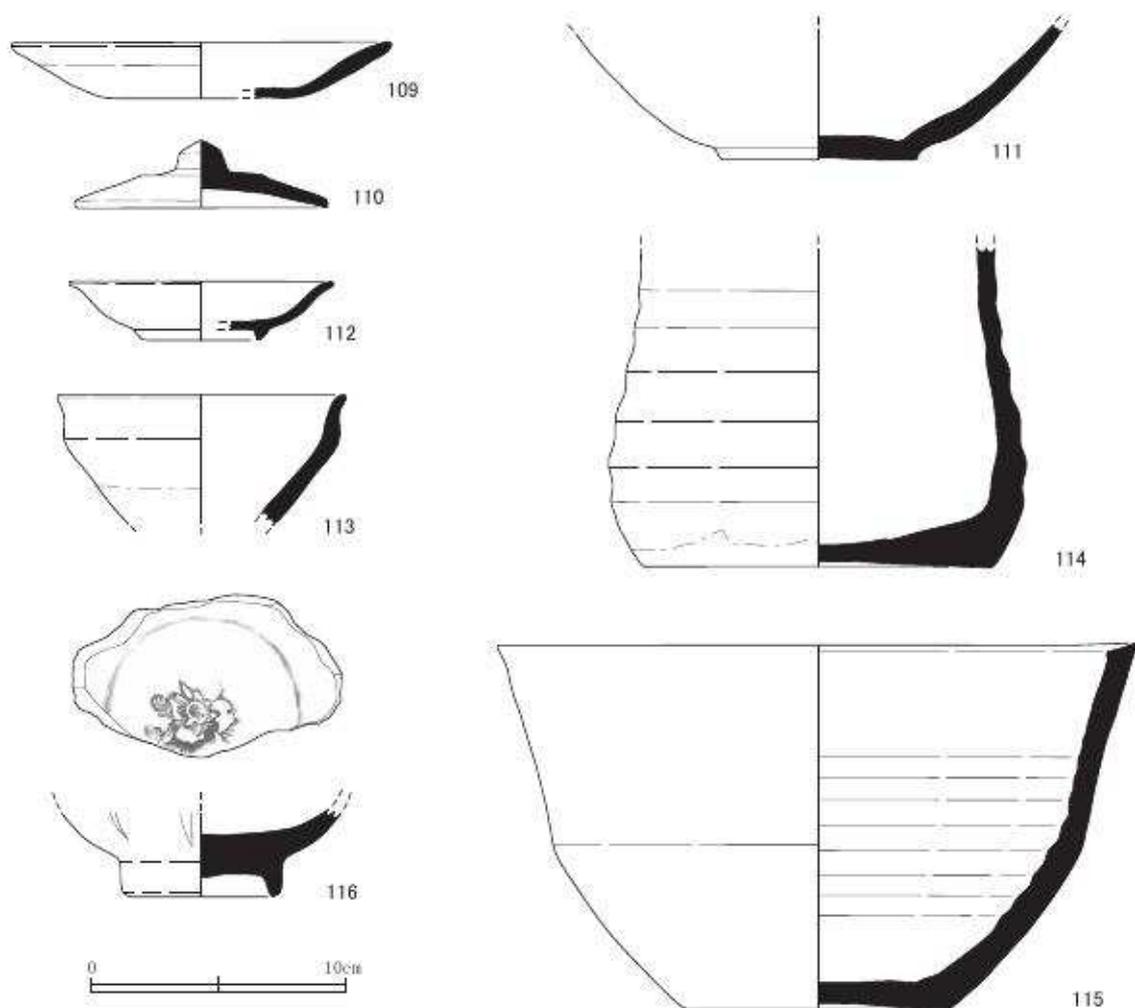
0 20cm

第 39 図 出土遺物実測図 11 石積 3107、埋甕土坑 3157 (縮尺 1/3、102 は 1/6)

井戸 3111

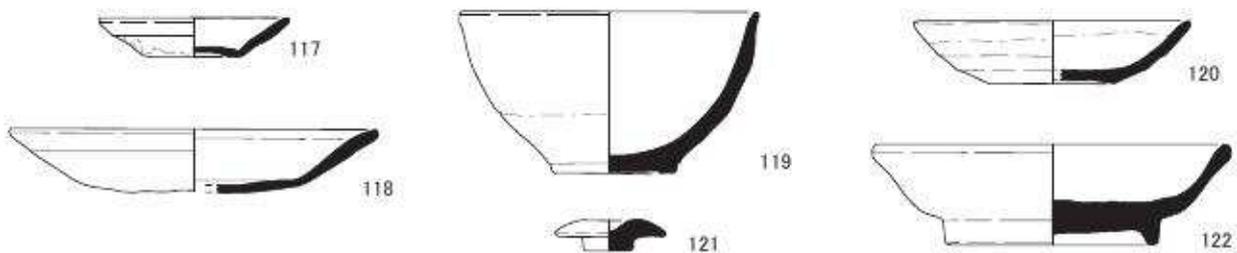


井戸 3112

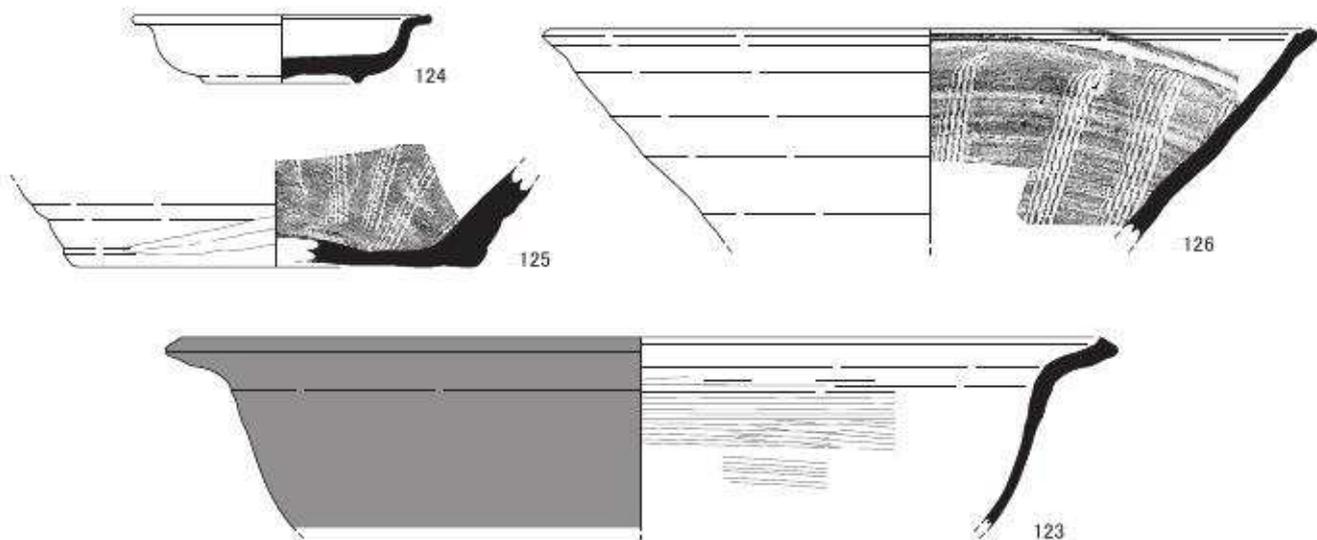


第40図 出土遺物実測図12 土坑3111・3112 (縮尺1/3)

土坑 3117

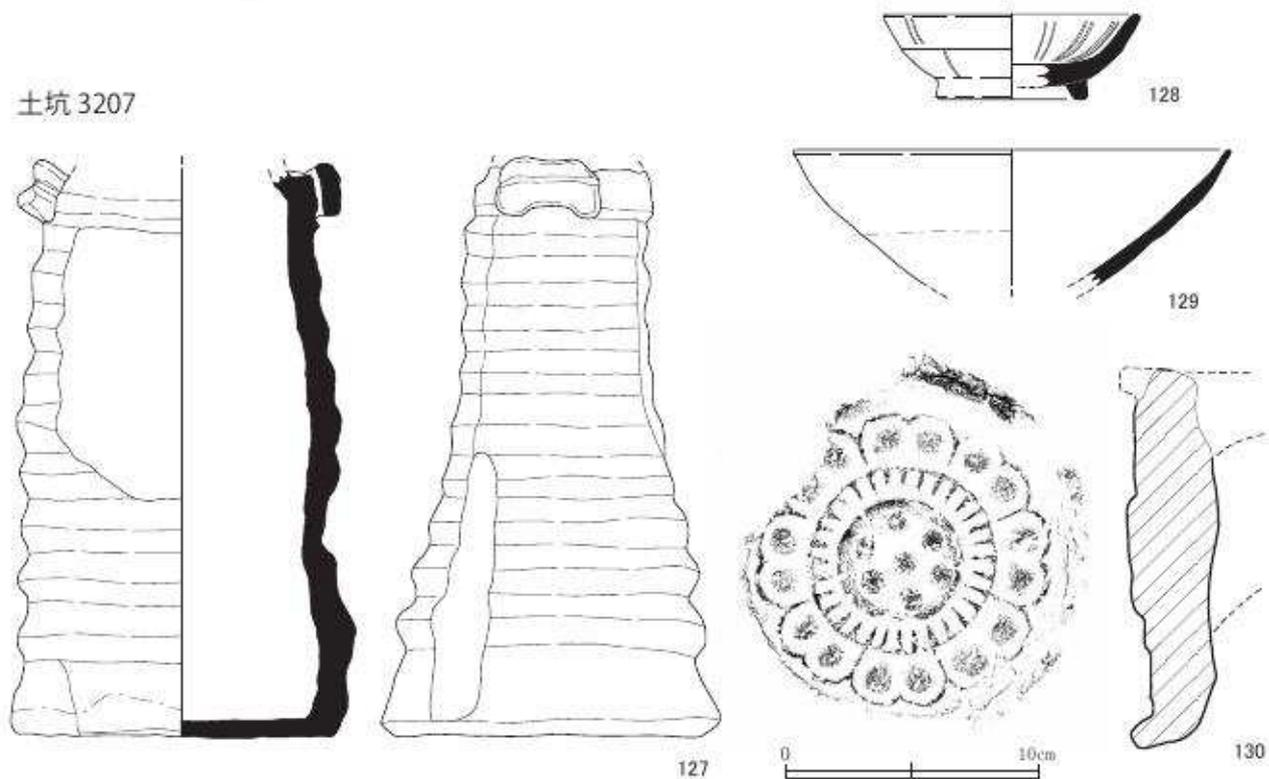


井戸 3170



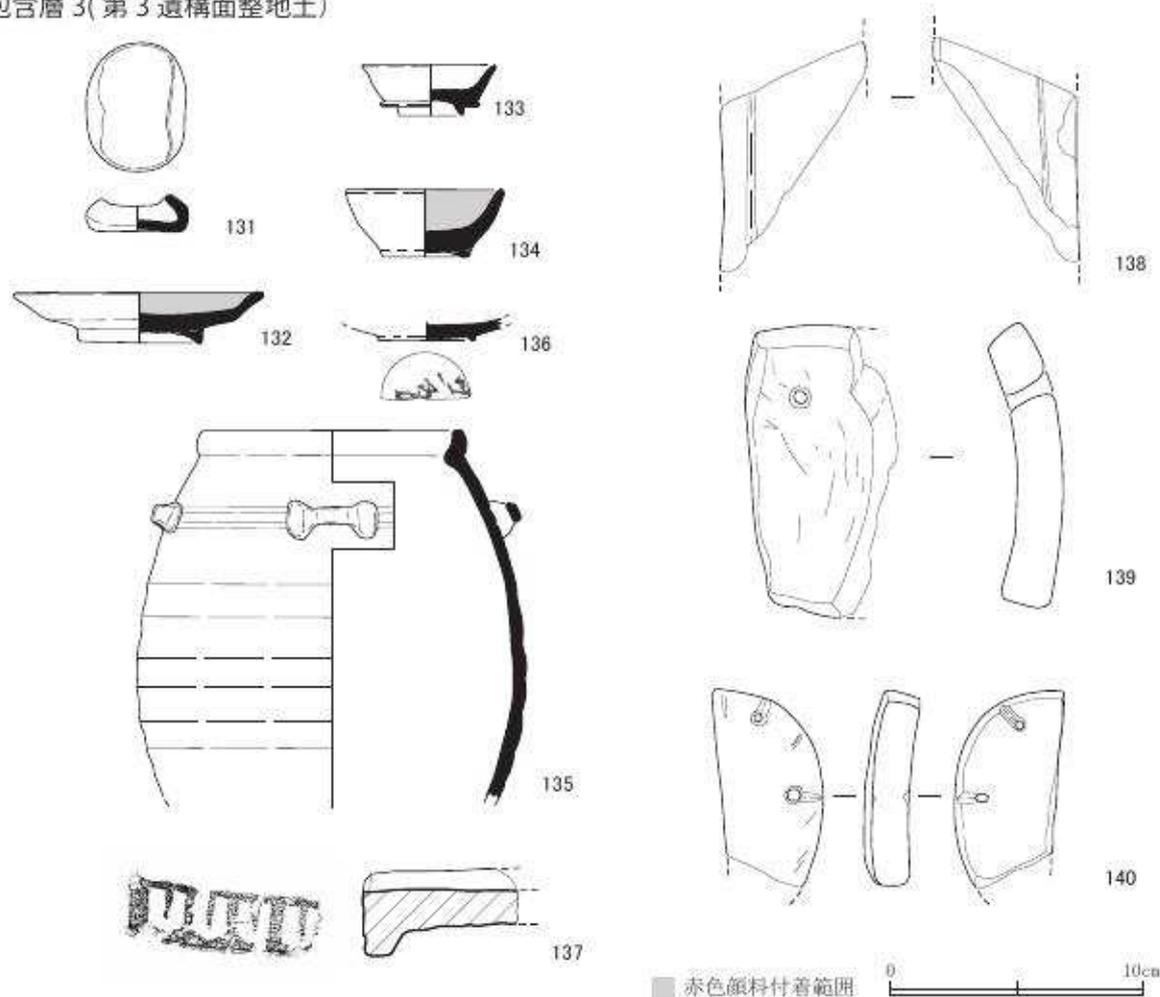
■ 煤付着範囲

土坑 3207



第 41 図 出土遺物実測図 13 土坑 3117・3207 (縮尺 1/3)

包含層 3(第3遺構面整地土)



第42図 出土遺物実測図14 包含層3 (縮尺1/3)

円盤状に突起が巡る形状である。134は山茶碗の入子である。内面に自然釉がかかっており、赤色顔料がわずかにみられる。135は輸入の褐釉陶器で、胴長の四耳壺であり、耳の付近に鉄彩が流しげけされている。13世紀前半のものである。136は白磁の皿である。高台内側に墨書が認められるが、判読はできなかった。137は軒平瓦である。瓦当には剣頭文が施される。138～140は石製品である。138は、原石を切り取ったものを加工しようとした硯か砥石の未成品と思われる。139・140は温石と考えられる。滑石製で、石鍋を転用したものであろう。縁に円孔を穿つが、140では外縁にむけて両面に溝を設ける。紐かけと考えられる。

包含層3から出土した遺物は、12世紀前半から16世紀後半(京都V期中～X期新)である。

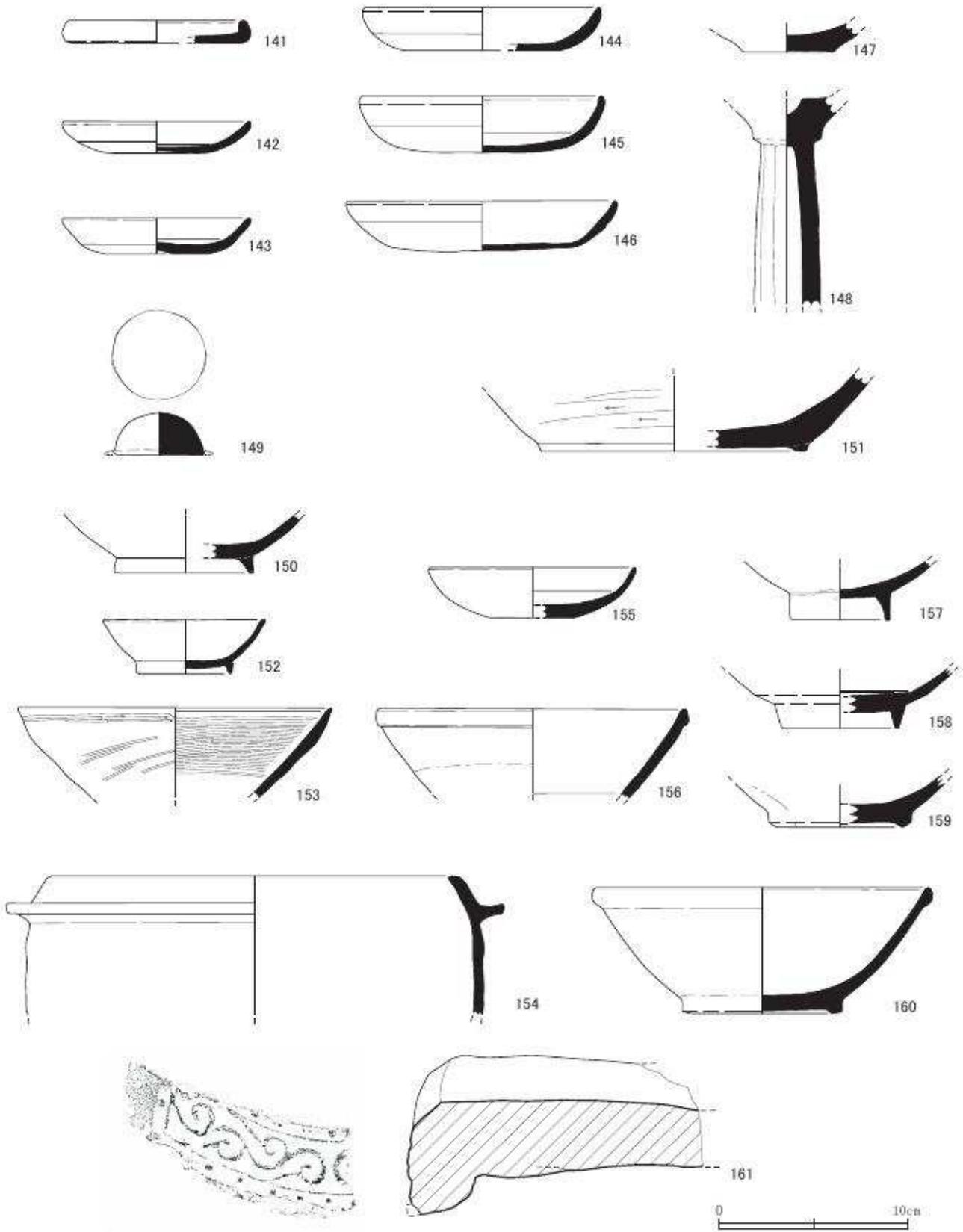
第4節 第4遺構面の遺物(平安時代後期～鎌倉時代)

道路4001(道路遺構上層)(第43図141～161 図版二十・三十)

141～146は土師器の皿である。147・148は白色土器である。147は碗で、148は高杯である。149は緑釉陶器の円塔である。白河街区の六勝寺からの流入品である。150は灰釉陶器の碗である。10世紀中ごろのもので、混入品である。151は山茶碗の捏ね鉢である。152は山茶碗の皿である。153は瓦器の碗である。154は瓦質土器の羽釜である。155～160は白磁である。155が皿、156～160は碗である。159の高台には墨書があるが、判読できない。161は均整唐草文軒平瓦である。

道路4001から出土した遺物は、11世紀以前のものも含まれるが、12世紀後半(京都V期新～

道路 4001(道路遺構上層)



第 43 図 出土遺物実測図 15 道路 4001 (縮尺 1/3)

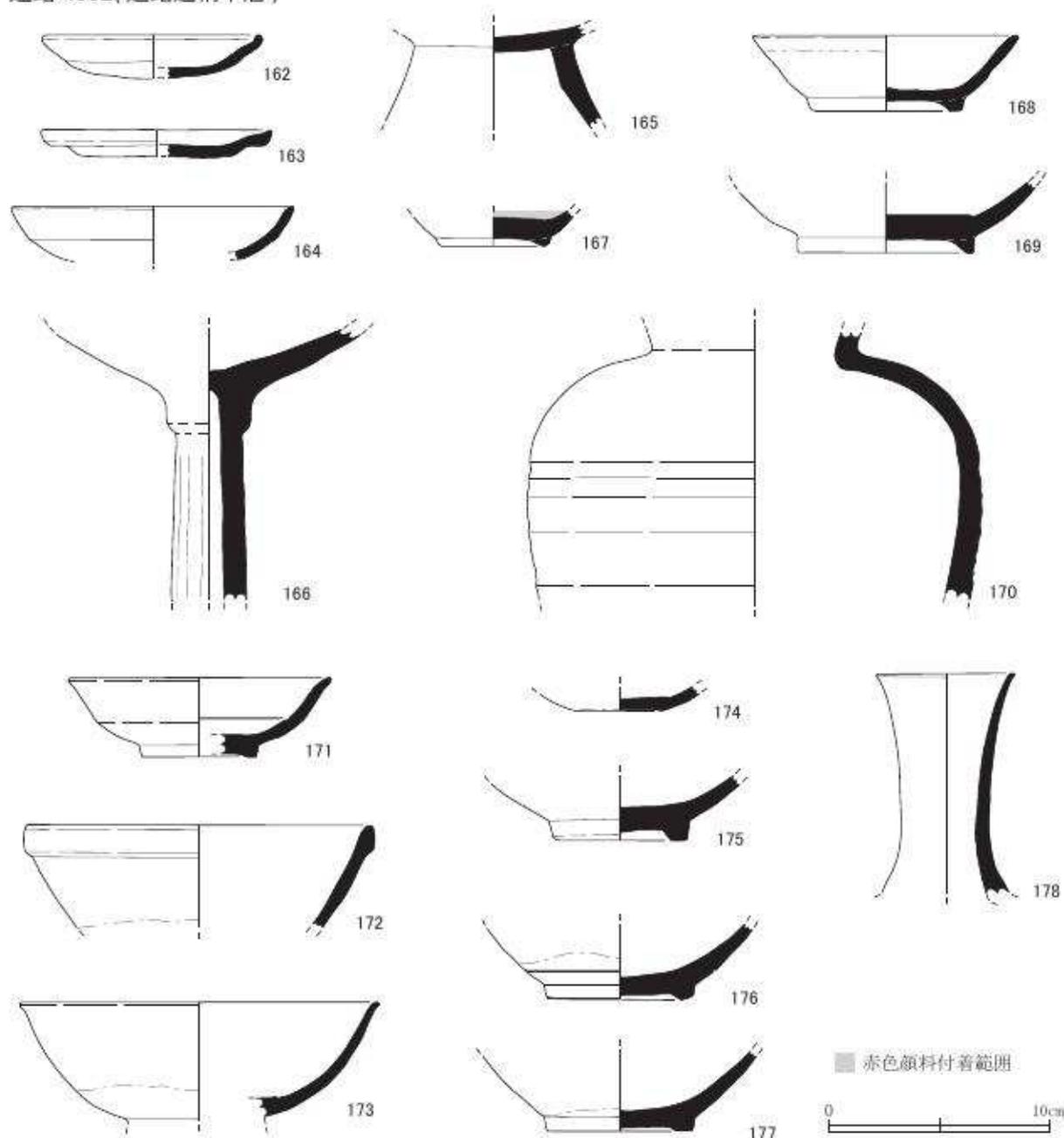
VI期古)である。

道路 4002 (道路遺構下層) (第 44 図 162 ~ 178 図版二十・三十・三十一)

162 ~ 164 は土師器の皿である。165 は土師器の台付皿の脚台部分かと思われる。166 は白色土器の高杯である。167 は山茶碗の皿である。内面には赤色顔料が付着しており、重ね焼き痕も残る。168 ~ 170 は灰釉陶器である。168 は皿である。口縁部外面に釉をつけ掛けし、内面は自然釉がかかる。169 は碗である。170 は壺である。灰釉陶器は 10 ~ 11 世紀のもので混入品である。171 ~ 177 は白磁である。171 ~ 173・175 ~ 177 は碗である。174 は皿である。基筈底である。178 は青白磁の瓶である。

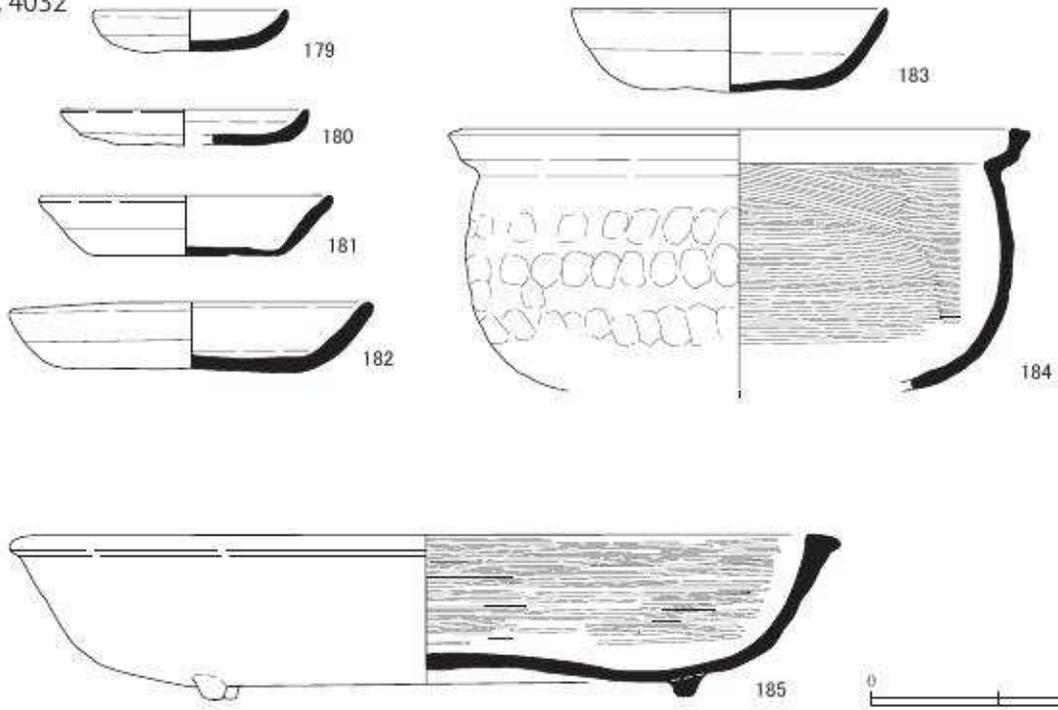
道路 4002 から出土した遺物は、12 世紀前半 (京都 V 期古 ~ 中) である。

道路 4002 (道路遺構下層)

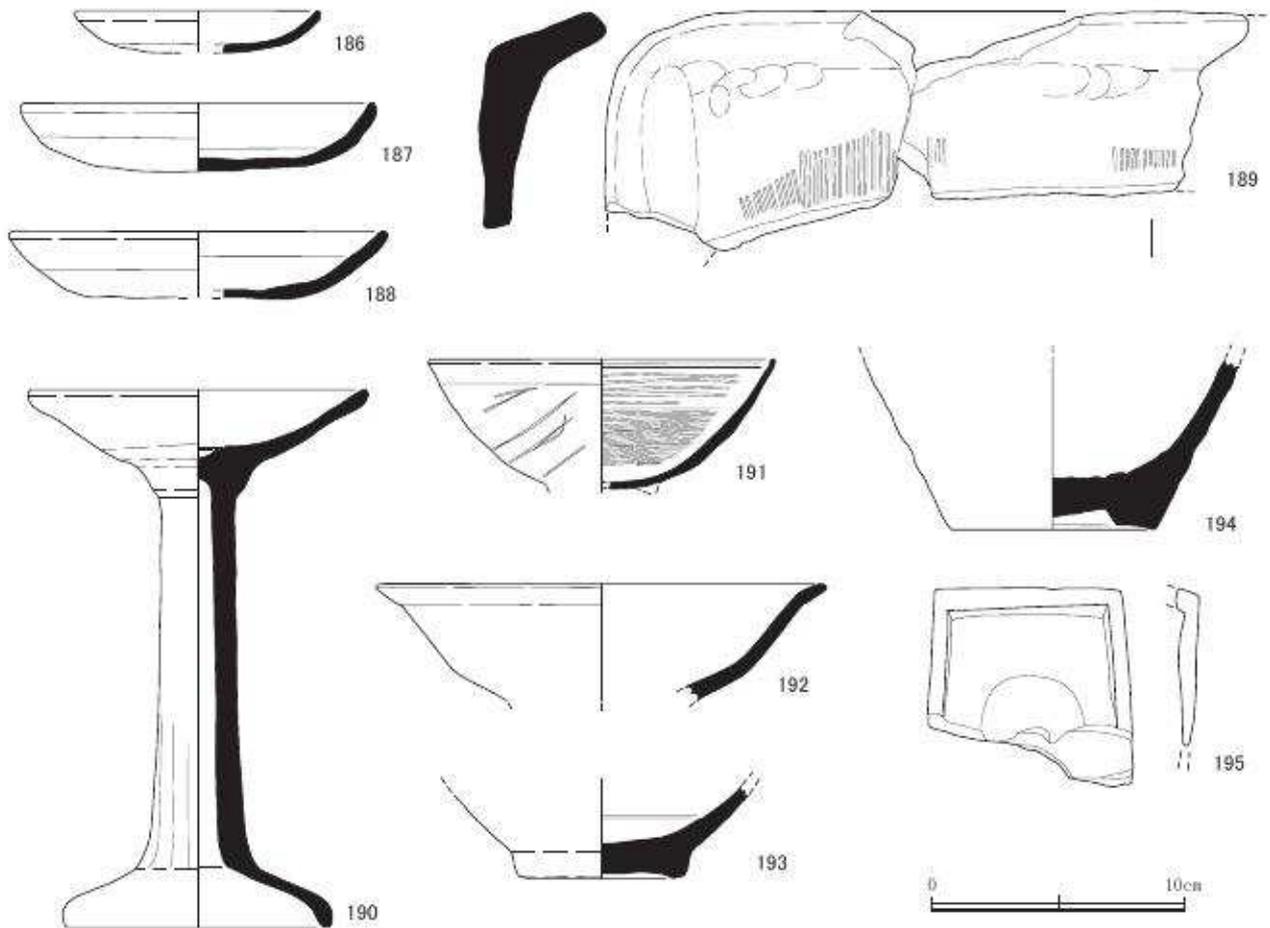


第 44 図 出土遺物実測図 16 道路 4002、土坑 4032 (縮尺 1/3)

土坑 4032



土坑 4316



第45图 出土遺物実測図 17 土坑 4101・4316 (縮尺 1/3、182 は 1/6)

土坑 4032 (第 45 図 179 ~ 185 図版二十・二十一・三十一)

179 ~ 183 は土師器の皿である。184 は瓦質土器の鍋である。185 は瓦質土器の大盤である。内外面や口縁端部に粗い磨き調整を施す。底部には粗い斜格子状の暗文風磨きを施す。脚付きで三脚と想定できる。

土坑 4032 から出土した遺物は、13 世紀後半 (京都VI期中~VII期古) である。

土坑 4316 (第 45 図 186 ~ 195 図版二十一・三十一・三十四)

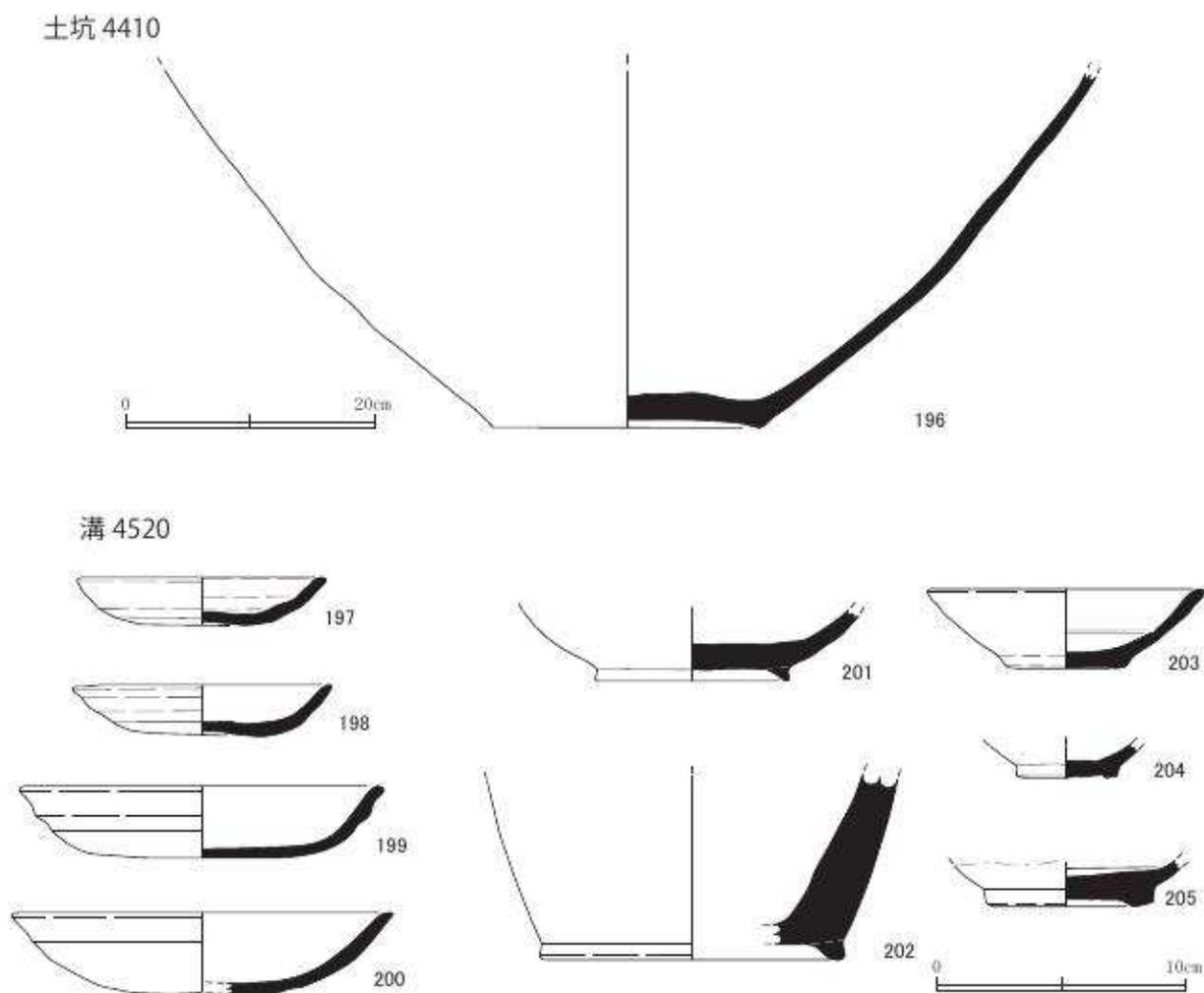
186 ~ 188 は土師器の皿である。189 は土師器の移動式かまどである。廂部は粘土を貼り付けて大きく前面に張り出す。190 は白色土器の高杯である。191 は瓦器の碗である。192 ~ 194 は白磁である。192・193 は碗、194 は壺である。195 は石製の硯である。中央に深くすり減った使用痕が残る。

土坑 4316 から出土した遺物は、12 世紀後半 (京都VI期古) である。

土坑 4410 (第 46 図 196 図版二十一)

196 は焼締陶器の甕である。産地不明、あるいは信楽か。

土坑 4410 から出土した遺物は、15 世紀後半 (京都IX期新~X期古) である。土坑 4410 は第



第 46 図 出土遺物実測図 18 土坑 4410・4520 (縮尺 1/3、193 は 1/6)

4遺構面で検出した遺構であるが、第3遺構面に相当する遺物が出土している。

溝 4520 (第46図 197～205 図版二十一・三十一・三十二)

197～200は土師器の皿である。201・202は灰釉陶器である。201は碗、202は壺である。10世紀後半のもので、混入品である。203～205は白磁である。203は皿、204・205は碗である。

溝4520から出土した遺物は、11世紀後半(京都IV期新)である。

土坑 4543 (第47図 206～213 図版二十一・二十二・三十二)

206～209は土師器の皿である。210は古瀬戸の花瓶である。211・212は青磁の碗である。212は見込に双魚文を描く。213は白磁の皿である。高台内に赤色顔料で文様を描く。

土坑4543から出土した遺物は、16世紀前半(京都IX期新～X期古)である。土坑4543は第4遺構面で検出した遺構であるが、第3遺構面に相当する遺物が出土している。

土坑 4585 (第47図 214～218 図版二十二・三十二)

214～216は土師器の皿である。217は灰釉陶器の壺である。底部は平底である。218は白磁の碗である。

土坑4585から出土した遺物は、12世紀後半(京都V期中～VI期古)である。

土坑 4590 (第47図 219～238 図版二十二・三十二)

219～235は土師器の皿である。230～235はロクロ土師器で底部外面に回転糸切り痕が残る。236は土師器の耳皿である。237は灰釉陶器の皿である。内面に赤色顔料が付着する。238は瓦器の皿である。内面に鋸歯状の暗文磨きを施す。

12世紀後半(京都V期新～VI期古)である。

土坑 4605 (第48図 239～249 図版二十二・二十三・三十二・三十三)

239～245は土師器の皿である。246は土師器の大鉢である。外面に輪積み痕が明瞭に残る。底部の脚は3カ所と推定される。247は須恵器の甕で、体部外面に格子タタキを施す。248・249は白磁である。248は皿、249は碗である。

土坑4605から出土した遺物は、12世紀前半(京都V期古～中)である。

土坑 4623 (第49図 250～253 図版三十三)

250・251は土師器の皿で、251は高い高台が付く。252は瓦質土器の小壺である。253は青磁の碗である。

土坑4623から出土した遺物は、12世紀半ば(京都V期中～VI期古)である。

溝 4627 (第49図 254～259 図版二十三・三十三)

254～258は土師器の皿である。258はロクロ土師器で、底部に回転糸切り痕を残す。259は瓦器の碗で、見込にジグザグ状の暗文を施す。

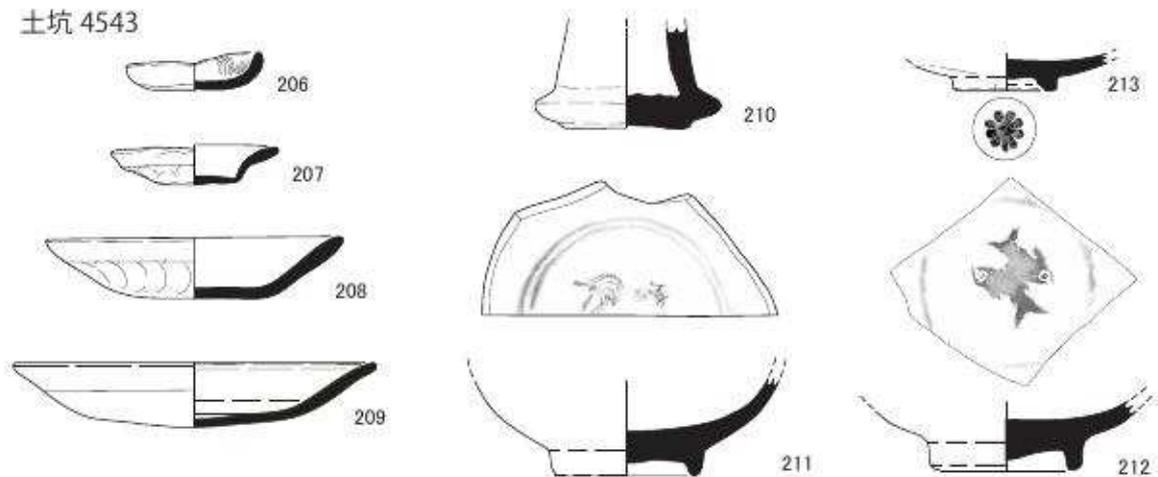
溝4627から出土した遺物は、12世紀半ば(京都V期中～VI期古)である。

土坑 4670 (第49図 260～266 図版二十三・三十三)

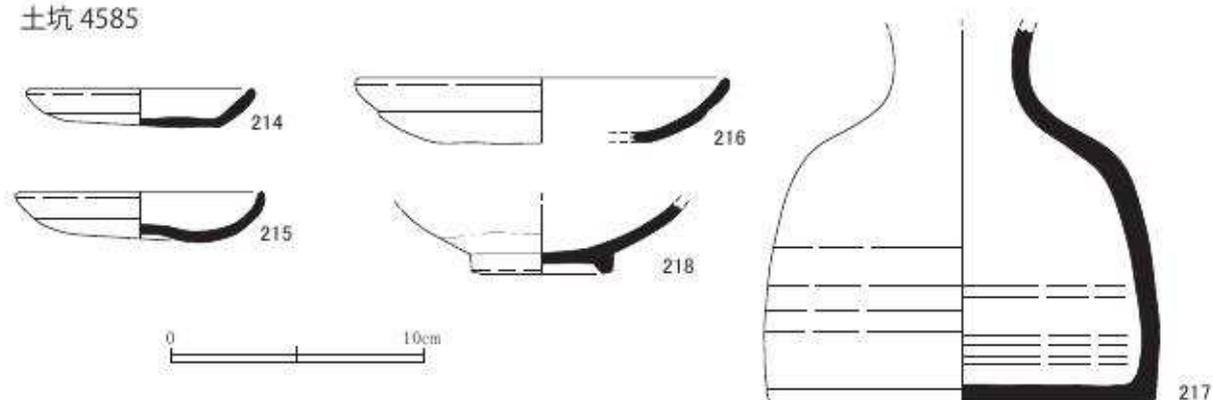
260～263は土師器の皿である。261はコースター型で底部外周がナデによりくぼむ。264は瓦器の碗である。265は瓦質土器の鉢である。266は玉縁をもつ白磁碗の底部である。

土坑4670から出土した遺物は、12世紀前半(京都V期古～中)である。

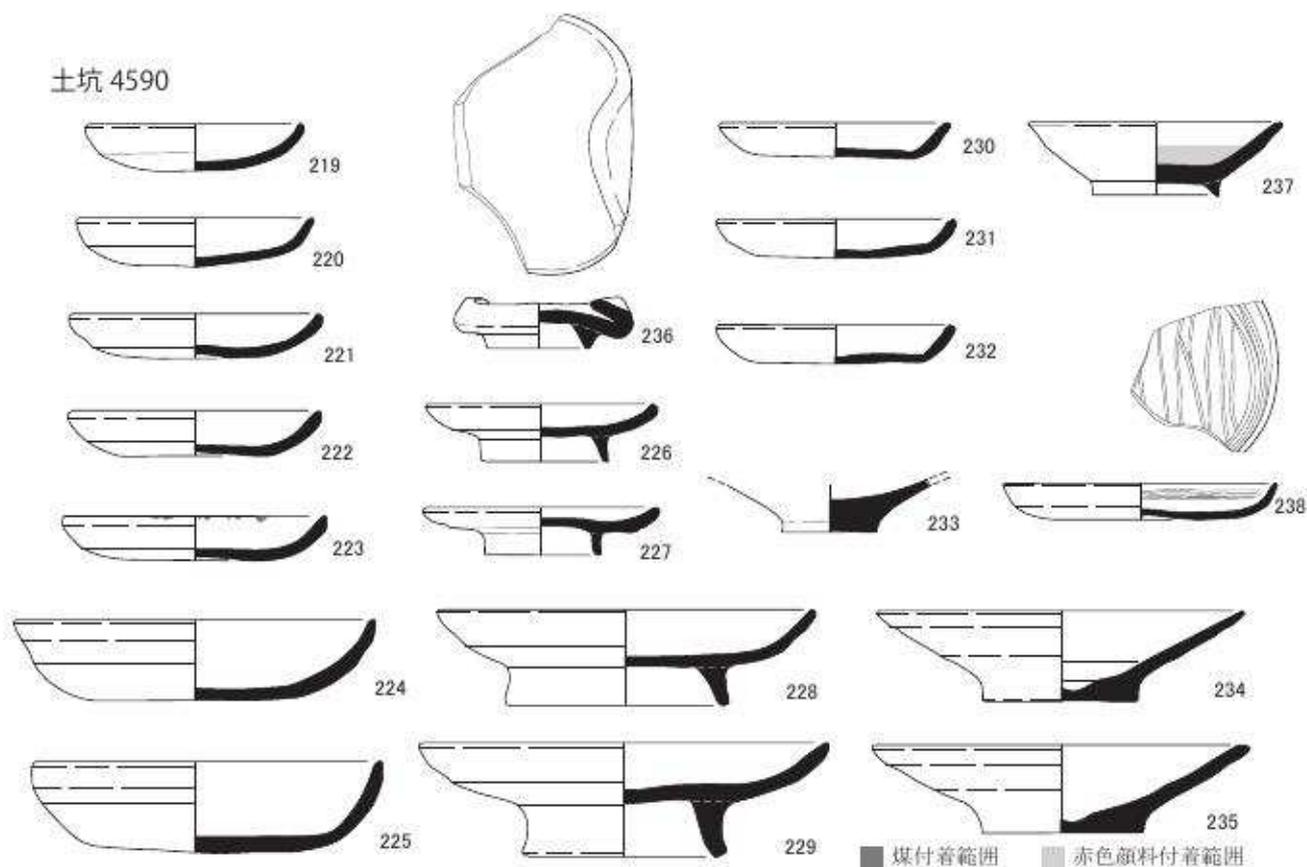
土坑 4543



土坑 4585



土坑 4590



第 47 図 出土遺物実測図 19 土坑 4543・4585・4590 (縮尺 1/3)

土坑 4723 (第 49 図 267 ~ 271 図版二十三・三十三)

267 は土師器の皿である。268 は常滑の捏ね鉢である。269 も常滑と思われる大鉢である。270 は青磁の碗である。271 は白磁の碗である。

土坑 4723 から出土した遺物は、12 世紀半ば (京都 V 期中 ~ 新) である。

土坑 4791 (第 50 図 272 ~ 280 図版二十三・二十四・三十三・三十四)

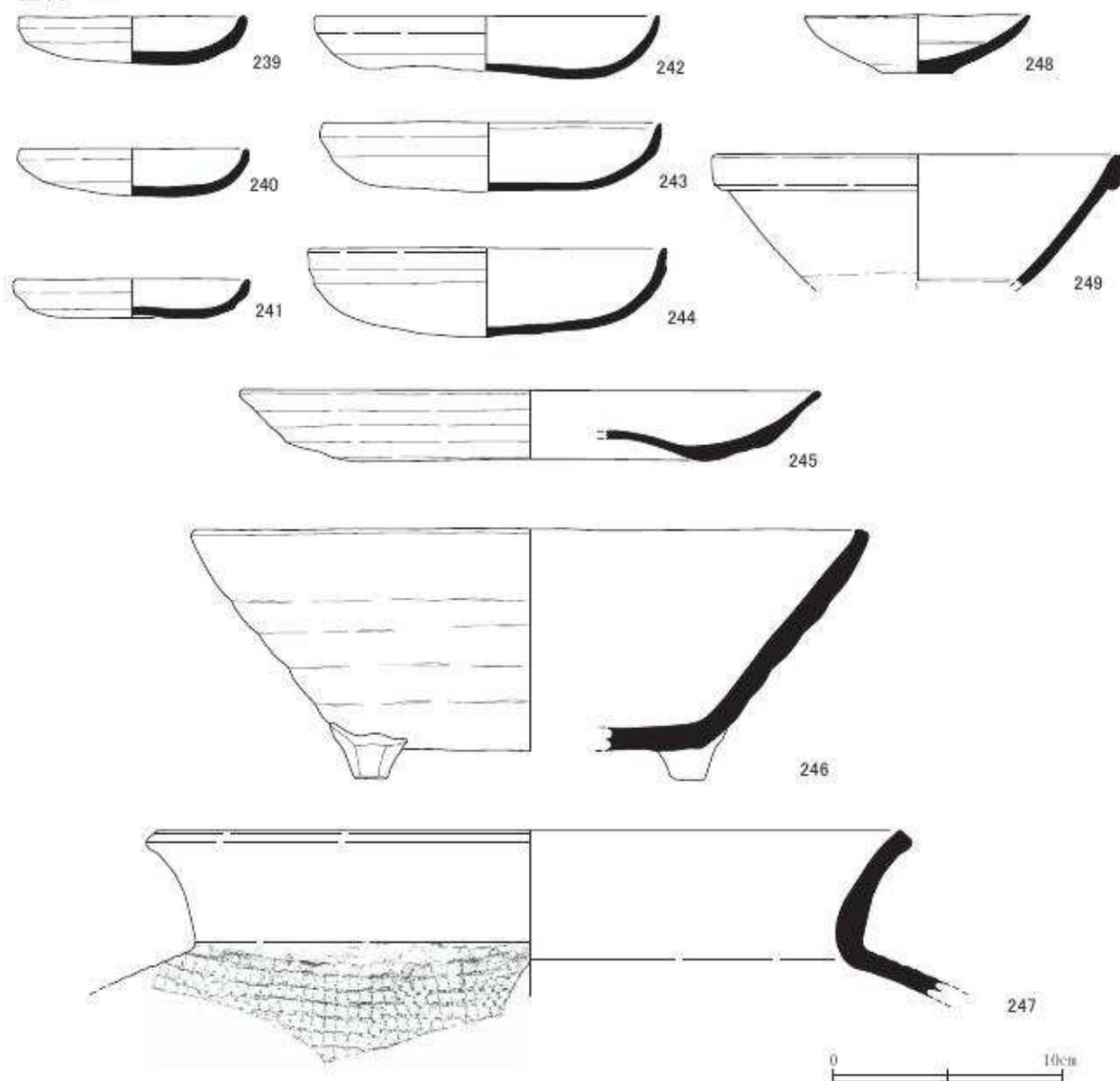
272 ~ 275 は土師器の皿である。276 は須恵器の壺である。277 ~ 279 は瓦器である。277 は皿、278・279 は碗である。277 の内面には鋸歯状に磨きを施す。280 は白磁の碗である。

土坑 4791 から出土した遺物は、12 世紀後半 (京都 V 期新 ~ VI 期古) である。

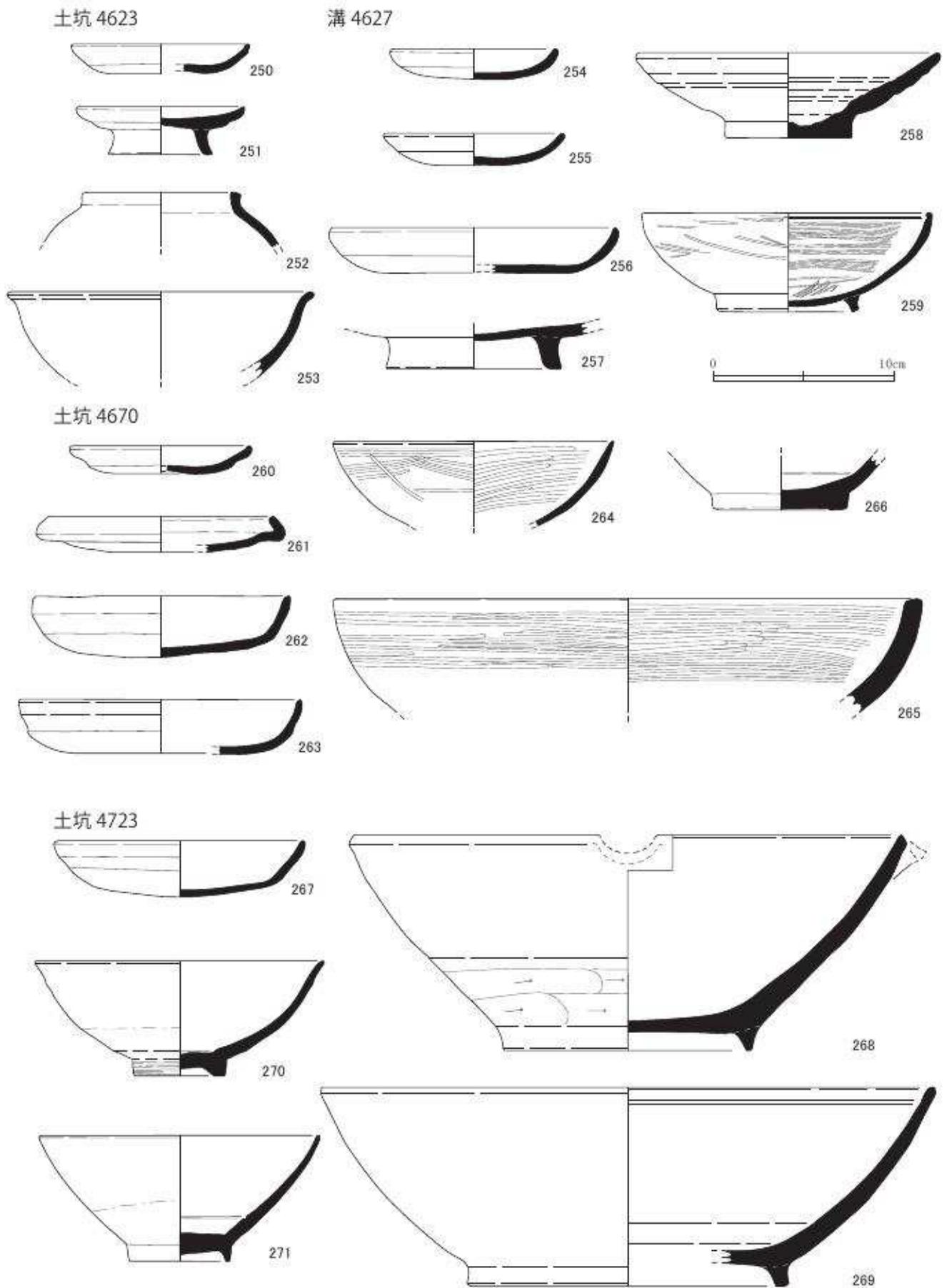
土坑 4844 (第 51 図 281 図版二十三)

281 は灰釉陶器の大鉢である。内面にわずかに赤色顔料と微細な金箔または金泥が付着してい

土坑 4605



第 48 図 出土遺物実測図 20 土坑 4605 (縮尺 1/3)



第 49 図 出土遺物実測図 21 土坑 4623・4627・4670・4723 (縮尺 1/3)

る。

土坑 4844 から出土した遺物は、12 世紀後半（京都 V 期新～VI 期古）である。

土坑 4867（第 51 図 282～285 図版二十三・三十四）

282～284 は土師器の皿である。285 は山茶碗の皿である。

土坑 4867 から出土した遺物は、12 世紀半ば（京都 V 期中～新）である。

土坑 4869（第 51 図 286～292 図版二十四・三十四）

286～289 は土師器の皿である。290 は須恵器の捏ね鉢である。東播系である。291 は白磁の碗である。292 は瓦である。軒平瓦で、瓦当は均整唐草文である。

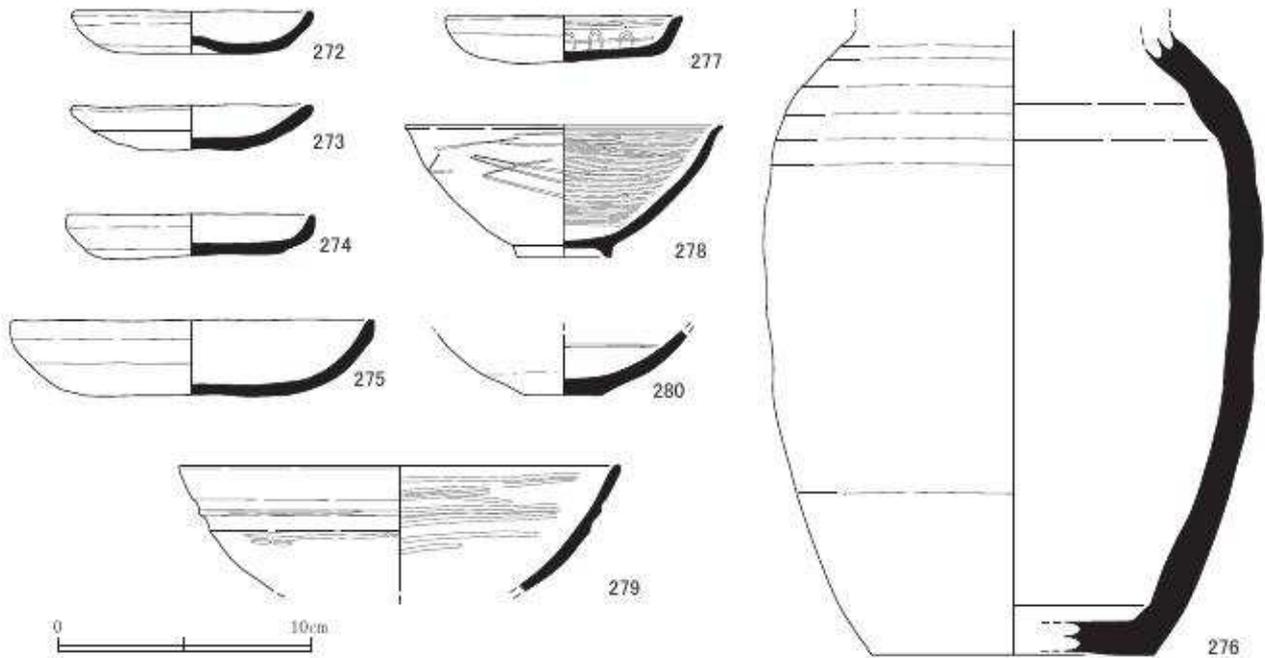
土坑 4869 から出土した遺物は、12 世紀半ば（京都 V 期中～新）である。

土坑 4968（第 51 図 293～297 図版二十四・三十四）

293・294 は土師器の皿である。295 は青磁の碗である。296 は白磁の碗である。297 は温石である。滑石製で、小さな円孔を穿つ。

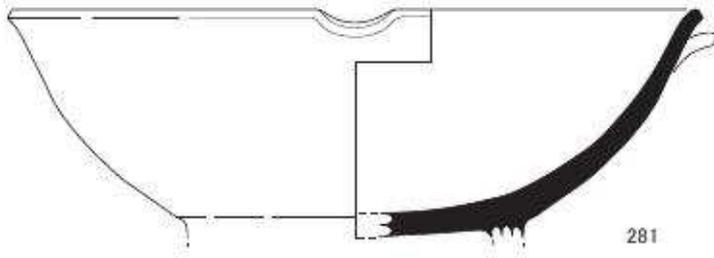
土坑 4968 から出土した遺物は、12 世紀後半（京都 V 期中～VI 期古）である。

土坑 4791

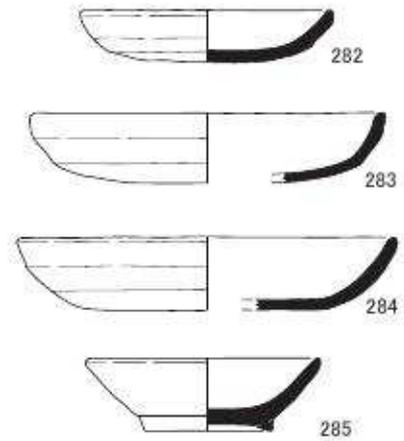


第 50 図 出土遺物実測図 22 土坑 4791（縮尺 1/3）

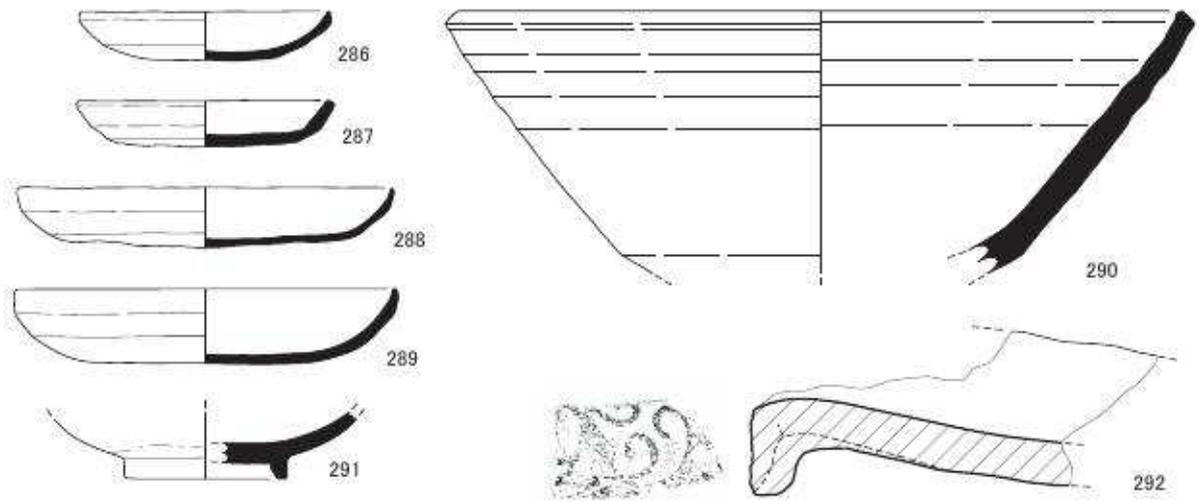
土坑 4844



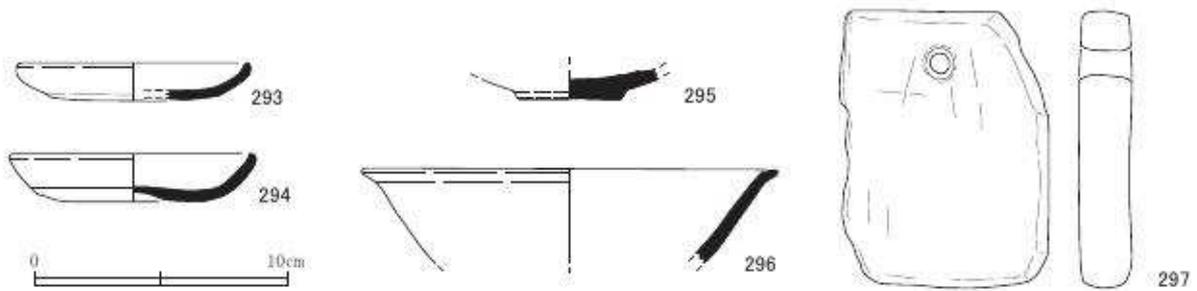
土坑 4867



土坑 4869



土坑 4968



第 51 图 出土遺物実測図 23 土坑 4844・4867・4869・4968 (縮尺 1/3)

第5節 木製品

土坑 1034 の最下層から大量の木製品が出土した。土坑 1034 は天明の大火（1788 年）によって焼失した大雲院の廃材を投棄するための廃棄土坑で、大雲院の墓域北西部に位置する（第7図）。

出土した木製品は、位牌（W 1～W 16、W 26～W 34）、部材（W 35～W 41）装飾品（W 42）、柿経（1-1～10-105）等である。

位牌 位牌は組み合わせ式のため笠部、札板部など各部位がバラバラに出土した。すべて黒漆に金泥で飾られたものである。位牌の紀年銘を読み解くと寛文二（1662 年）から安永九（1780 年）に没した方の位牌で、年代のわかるものが 16 基中 12 基あった。すべて、表に戒名、裏に年号を陰刻しているが、厚みのある位牌には側面に年号を陰刻するものもある。連名で刻まれたものは夫婦と考えられ、後で亡くなった方の時に改めて作成した可能性があるため、位牌の制作年代は新しい年号によるものと考えられる。

位牌はすべて塗位牌で、木札型をした札位牌である。札板の上になにもつかない無鋒形と札板の上に笠部を設けるものの 2 種類が存在する。

① 無鋒タイプ（W 13）

札板の上部を隅丸に収めており、撥型のようにゆるやかに基部がすぼまる。上部の割りこみは雲形のように装飾的である。差し込み式の突起は欠損している。全体に黒漆をかけ、金泥で位牌の縁と印刻部を装飾している。背面にも黒漆を施しているが金泥の陰刻が不明確である。

② 笠タイプ（W 1～W 12、W 14～W 16）

札板は長方形で、割りこみも外形に合わせて長方形に窪ませている。差し込み式のため札板の上下に扁平な突起をもつ。黒漆をかけて割りこみの縁と戒名などの印刻部を金泥で装飾するもの（W 1～W 5、W 7～W 12、W 14～W 16）と、金泥もしくは金箔の地に黒漆で戒名などの陰刻部を装飾するもの（W 6）がある。また、札板の大きさも分類でき、大型（W 12）、中型（W 1～W 7、W 9、W 11、W 15～W 16）、小型（W 8、W 10）に分けられる。また札板が厚いタイプも存在し、中型と同じ大きさで厚みがある（W 14）。

笠部は、様々な装飾が施されており、雲形（W 26）や笠形（W 27～W 29）がある。その他、二の板部（W 30）は受花と上花が合体した形状で、板札の直下に組み合わせられる部位である。返花（W 31～W 33）や框（かまち）も出土しているが同一個体にはならない。

その他部材 雲形の装飾品（W 35、W 36）や棒状製品（W 37～W 39）、側面に刻みを施した L 字型木製品（W 40）は具体的な用途は不明であるが、仏壇もしくは仏具の部品であると考えられる。板状製品（W 17～W 24）は繰り出し位牌の札板の可能性もあるが、「念仏講」と墨書したもの（W 17）もあるため、位牌だけではなく木札もあると考えられる。櫛（W 42）は残存幅 6.7 cm で黒漆塗りに蒔絵を施している。

出土した位牌は江戸時代の特徴を示したもの（札板が幅広になっている）であり、紀年銘からみても符号していると考えられる。土坑の性格とも一致し、位牌の年代の上限は 1780 年で、天明の大火（1788 年）以前の位牌しか存在していない。

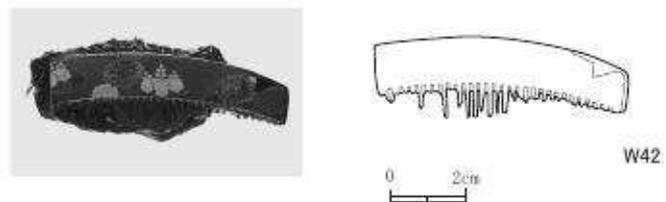
柿（こけら）経 紙のように薄く削った木札（柿）に、経文を書き記した木製品である。腐食して

いるため本来の点数は不明だが、東の残片が39点出土した。東は数枚の断片から、最多で141枚の札が重なる。札には糸の断片が付着していたが、束を括った痕跡は残っていない。札の形状は幅3.3cmで、最長の残存長は28cmである。上部は欠損するが、三角形に尖らせた圭頭型であると推定される(図版六十五~九十三)。出土した柿経は二種類あり、浄土教の經典のひとつである「仏説阿彌陀經」を墨書きしたものと南無阿彌陀仏の六字名号のみを繰り返し書き連ねたものである。「仏説阿彌陀經」を墨書きしたものは、欠損部分が多いが、裏面に漢数字で番号が付してある順にならべることができる(図版六十五~七十一)。ただし、一枚ごとに書かれる文字数や文節に規則性は認められず、当時の經典のどこで区切って数字を付してあるのかは不明である。

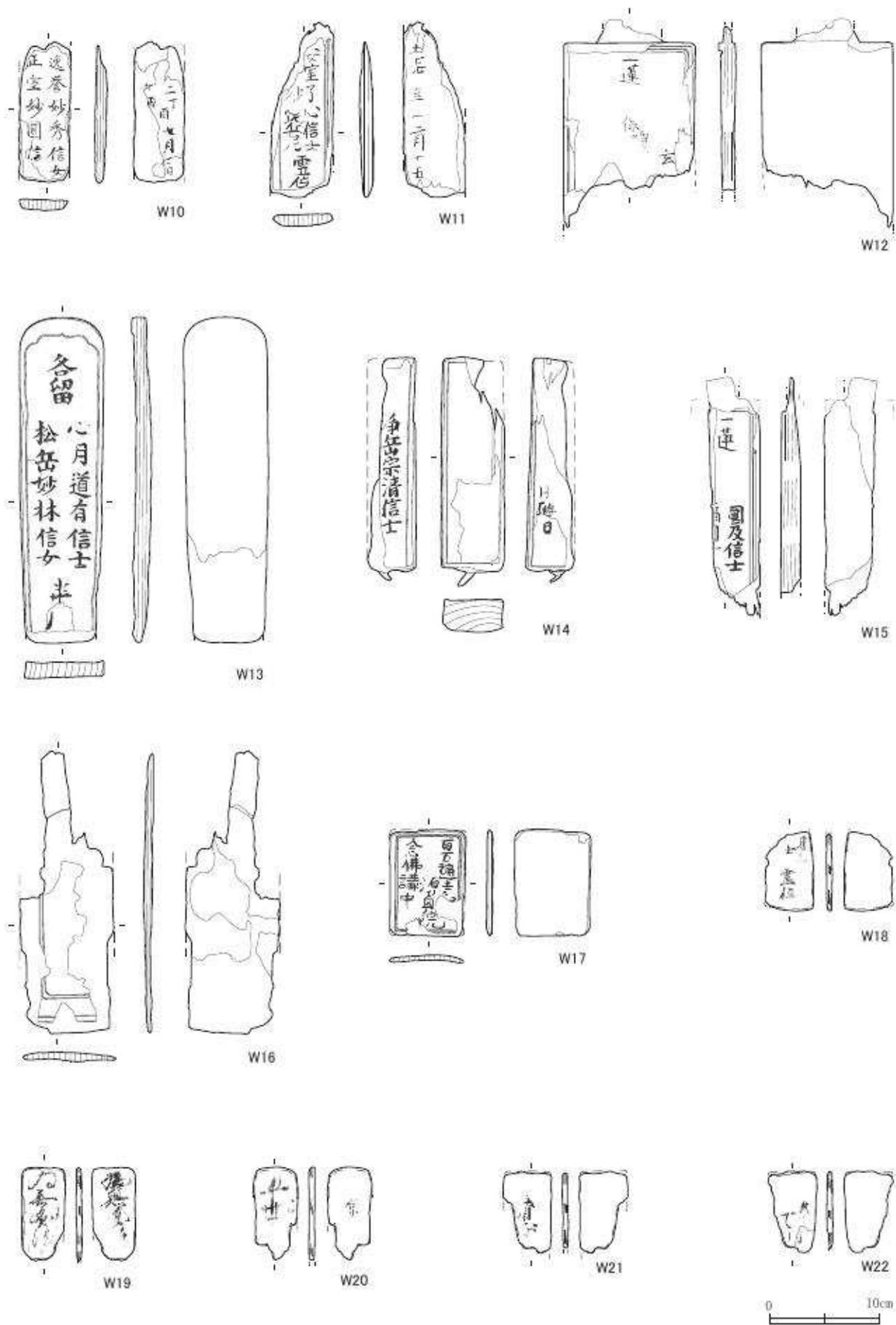
仏説阿彌陀經は浄土教の「浄土三部經」のひとつで、ほかに「仏説無量壽經」と「仏説觀無量壽經」がある。「仏説阿彌陀經」は釈迦が弟子(舍利佛ら)に対して阿彌陀のいる極樂浄土の素晴らしさを語りかける内容である。

もう一方の六字名号(南無阿彌陀仏)のみを繰り返し墨書きしているものは、札一枚に南無阿彌陀仏を片面あたり三行三列で九回繰り返し墨書きしている。札の片面または両面に書かれてあり、朱書きされたものもある。書かれている文字は札ごとで書き方や崩し方が異なり、漢字表記と漢字仮名混じり表記を含むことから、複数の人によって書かれた可能性がある。

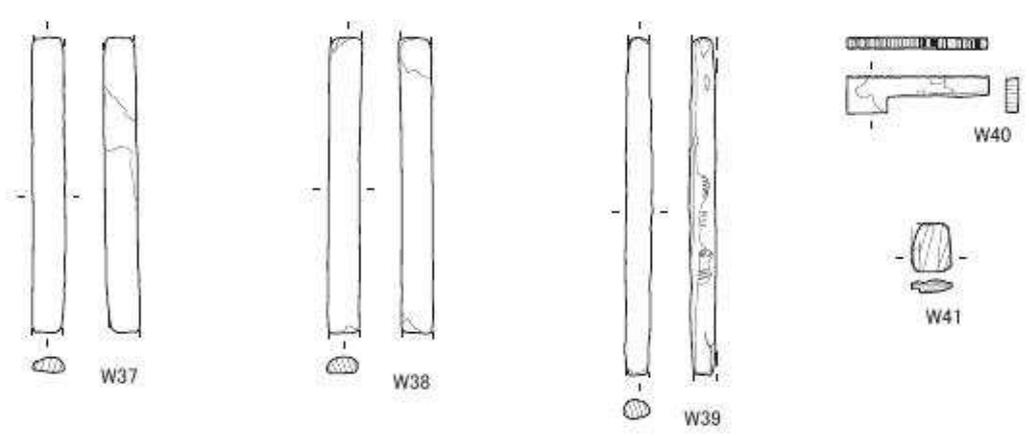
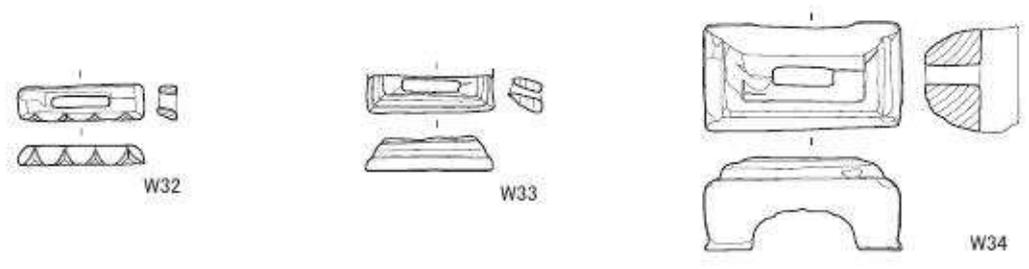
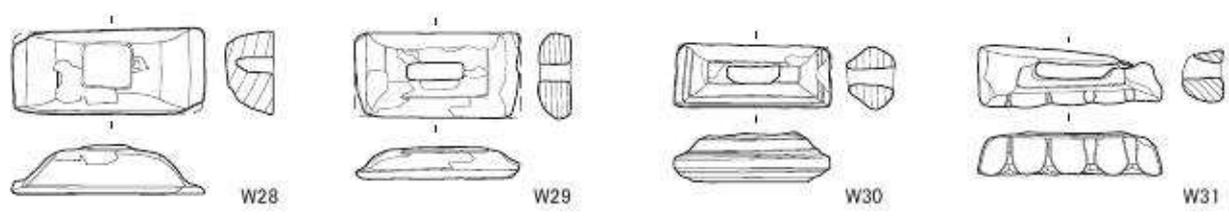
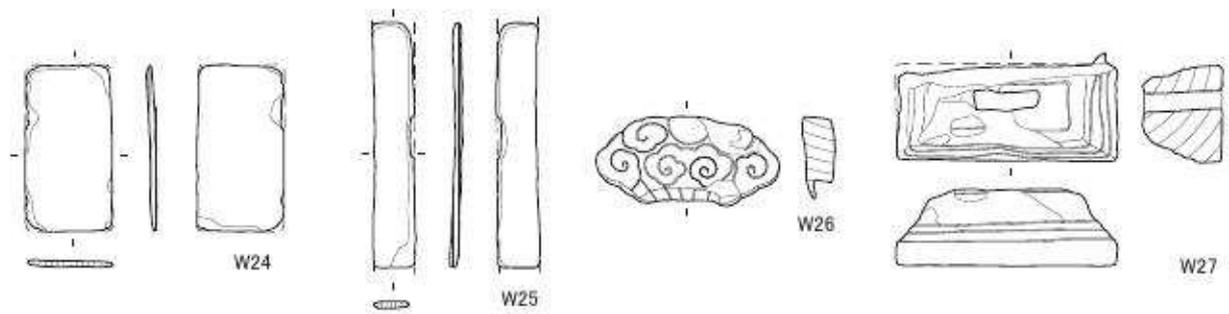
柿経の制作年代は、同一遺構からの共伴遺物や浄土宗寺院の存在を参考にすると18世紀ごろに作成され、火事によって生じた廃材とともに廃棄されたと推測される。



第52図 出土木製品 縮写真・実測図(縮尺1/2)



第54図 出土木製品実測図2 (縮尺1/5)



第55图 出土木製品実測図3 (縮尺 1/5)

番号	W25	W26	W27	W28	W29	W30	W31	W32	W33	W34	W35	W36
遺構	土坑 1034											
形状	板	位牌頭	位牌頭	位牌頭	位牌頭	位牌受花	位牌上花	位牌返花	位牌上花	位牌框	裝飾	裝飾
塗り	金箔・黒漆			金箔・黒漆	雲形	雲形						
残											30%	30%
高さ	159	133	52	32	20	32	24	12	40	64	34	31
幅	20	54	125	128	112	100	120	84	84	132	192	202
奥行			65	56	56	40	40	24	24	72		
種子												
ホゾ												
文 字												
西暦												

番号	W37	W38	W39	W40	W41	W42
遺構	土坑 1034					
形状	棒	棒	棒	L型木片	木片	櫛
塗り	金箔・黒漆	金箔・黒漆	金箔・黒漆			黒漆・青絵
残						
高さ	196	196	227	95	32	22
幅	25	25	20	25	24	67
奥行						
種子						
ホゾ						
文 字						
西暦						

第6節 石塔・墓標

土坑 1010 を中心に大雲院が造営された時代の遺構から、大量に出土した石塔・墓標や石造品は合計 768 点に及ぶ。内訳は第 6 表のとおりである。組合せ式の五輪塔は、地輪以外にも、空・風輪が一体になったもの（96 点）、火輪（24 点）、水輪（62 点）が出土しており、表の点数からは除外している。数量からみて、組合せが一致しない。

出土した石塔・墓標には、戒名や紀年銘が刻まれているものが多い。年代のわかる資料は 260 点あり、明応八年（1499）の五輪塔地輪がぎりぎり 15 世紀代のものであるが、それ以外は安土桃山時代の天正七年～慶長年間（1579～1615）から、江戸時代の安永年間（1772～1781）までのものである。そのうち、天正～慶長までのものと、その他江戸時代の特徴的な墓標 126 点を掲載した。それ以外の江戸時代の墓標については、銘文と法量を表にまとめた（第 10 表）。

石塔・墓標の出土した遺構について述べると、土坑 1010 は、天明八年（1788）の大火によって生じた廃材を投棄する目的で掘られたものと推定され、出土した石塔・墓標はその際に、無縁塔を処分したものと考えられる。そのため、土坑 1010 から一括出土した墓石群は、当該地における大雲院の成立がわかることと、埋められた下限がある程度推測できることなどから、16 世紀後半から 18 世紀後半までの、同一寺院の墓地での石塔・墓標の変遷を知る格好の資料ともいえる。

1. 石塔・墓標の分類

出土した石塔・墓石の種類は、宝篋印塔、五輪塔、一石五輪塔、舟形光背形墓標、板碑形墓標、位牌形墓標、無縫塔に分類できる。それぞれの特徴は、以下のとおりである。

宝篋印塔 総高三尺ほどの小形塔の塔身部分である。四面に、月輪内に金剛界四仏の種子ウーン、アク、キリーク、タラークを彫っている。高さに対する幅の側面比率は 1.00 である。梵字の彫り、石材が花崗岩であることなどからみて、16 世紀のものであろうか。

五輪塔 組合せ式のもので、底部の形状が水平に整えられていることから、台座上に置かれたか、さらに下部に反花付基壇をもっていたと考えられる。石材は、花崗岩と閃緑岩からなる。S2 のみ、明応八年（1499）銘で、大雲院成立以前のもので、石材も花崗岩である。在銘の閃緑岩製品では、正面に東方八心門アの種子を刻む。また、花崗岩製と閃緑岩製の地輪では、上面の形状が異なる。花崗岩製では、端から中心部に向けて低く緩やかに盛り上がり、その緩やかな曲面が、水輪底部の浅いくぼみとかみ合わさる。しかし、閃緑岩製では、上面の中央部のみを、饅頭形に低く突出させている。そのため、水輪底部のくぼみとかみ合わさる柄の役割をしている。残欠から復原される総高は、おそらく最大でも四尺以下で、三尺代の小形塔であろう。在銘品中最も新しいものは、閃緑岩製で元和四年（1618）である。

第 6 表 石塔・墓標種類別点数

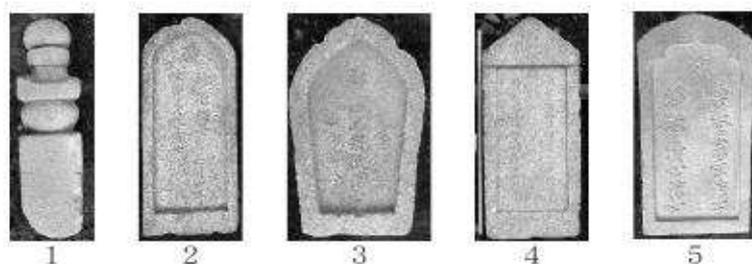
種類	点数
宝篋印塔	1 点
五輪塔（地輪）	218 点
一石五輪塔	261 点
舟形光背型墓標	131 点
板碑型墓標	32 点
笠塔婆型墓標	7 点
位牌型墓標	63 点
無縫塔型墓標	3 点
その他	52 点

一石五輪塔 正面の各部に、東方発心門キヤ、カ、ラ、バ、アの梵字が刻まれている。規模は、総高40cm前後のもの、60cm前後のものがある。梵字も含め、規模の一定した、規格品として製作されていたものである。石材は在銘品に花崗岩製のものがなく、閃緑岩製と砂岩製のものに限られているのは、小さな文字もしっかりと彫ることのできる、石材の特性によるものであろう。底部の形状は、凹凸があるもの（Ⅰ類）、水平に整えられているもの（Ⅱ類）に大別できる。さらにⅠ類は原石肌を残すもの（Ⅰa類）、成形によって原石肌を残さないもの（Ⅰb類）に分けられる。その内、水平に整えられているものは、反花付基壇を伴っていた可能性が高い。それ以外のもは、直接地面に地輪の下部を埋めて建てられていた埋め込み式のものである。出土した在銘品中、最も古いものは閃緑岩製で天正七年（1579）、新しいものは閃緑岩製で延宝四年（1676）である。

舟形光背型墓標 仏像の光背を模した、近世の墓標である。正面に輪郭をめぐらせ、その中に種子、戒名、紀年銘などを刻んでいる。規模は50cm前後で、側面が直線的なものと、上部に最大幅がくる中膨らみしたものと二つの形態がある。底部には柄のあるものとないものがある。柄のあるものは、反花付基壇と組合わさるタイプである。側面から見ると舟形の先端が大きく前傾しているものと、平坦なものがあり、前者が古相を示している。また、正面の輪郭内も、輪郭近くは深く彫るが、中央部の彫りは浅く、横断面で見ると縁から中心部にかけて緩やかな膨らみをもつものと、一律に平坦に彫るものがあり、前者が古相を示している。また、墓標として正面観を重視するため、背面は粗叩きによる成形のみである。出土した在銘品中、最も古いものは閃緑岩製の永禄九年（1565）のもので、石造美術の時期区分でいう室町時代後期（1541～1615）には出現している。

板碑型墓標 先端を山形に切り、額部をもつものを総称した。額部には、切り込みの退化した浅い一線を1～数本入れるものと、一線を入れないものが見られる。身部の正面には輪郭をめぐらせ、その中に銘文を刻む。出土した板碑形墓標の大きさは、50cm前後と80cm前後の規模のものが多い。在銘品中、最も古いものは花崗岩製で天正六年（1599）のもので、舟形光背形墓標同様である。

位牌型墓標 身部が角柱状で、四側面をもつ。牌身は、頂部を丸く作り完結するもの（位牌形）と、さらに別石造りの屋根と柄で組合わせたもの（屋根付位牌形）とがある。正面に輪郭をめぐらせ、その中に戒名などの銘文を刻むが、側面も正面同様平滑に仕上げるため、その部分に銘文の刻まれているものもある。底部は台座上に、やはり柄で組合わされている。江戸時代の寛永期から登



第56図 墓標の分類

1. 一石五輪塔 2. 舟形光背型 3. 舟形光背型 4. 板碑型 5. 位牌型墓標

場し、江戸時代を通じての墓標となっている。

無縫塔 単制のもので、塔身の卵形部分が3点出土している。禅宗の伝播と共に渡来した新形式の塔で、はじめは禅家の墓塔として採用されたものである。その後、各宗の歴住墓塔として広まる。室町時代末期以後、単制の造立が盛んになるといわれており、本例ともよく合致する。

2. 石塔・墓標の変遷

石塔の種類を時代順に概観する（第7表）と、中世から供養塔として造立されていた五輪塔や一石五輪塔が、16世紀は主流であった。しかし16世紀後半から末になると、舟形光背形墓標や板碑形墓標が見られるようになり、五輪塔や一石五輪塔と混在するようになる。中世以来続いていた五輪塔や一石五輪塔は、17世紀中ごろを境に衰退し、末には姿を消す。一方、新しい形式として登場した舟形光背形墓標や板碑形墓標も、17世紀中ごろから後半にかけての時期をピークとし、五輪塔や一石五輪塔同様に末には姿を消す。そしてそれに代わるように、17世紀はじめの寛永期に登場した位牌形墓標が、それ以降の墓標として普遍的となっている。

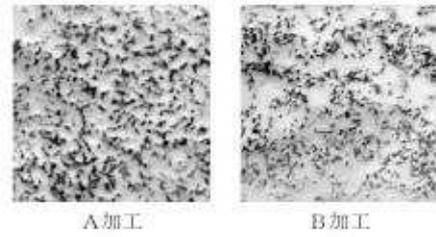
第7表 時代順の墓標数の変遷（10年単位）

西 暦	和 暦	宝篋印塔	五輪塔	一石五輪塔	舟形光背		板碑形	位牌形		無縫塔	総計
					舟形光背	舟形		位牌形	屋根付位牌		
1560 - 1569	永禄3 - 永禄12				1						1
1570 - 1579	元龟元 - 天正7			1							1
1580 - 1589	天正8 - 天正17		1	2							3
1590 - 1599	天正18 - 慶長4		10	12			2				24
1600 - 1609	慶長5 - 慶長14		7	15	4		2				28
1610 - 1619	慶長15 - 元和5		5	13	4		2				24
1620 - 1629	元和6 - 寛永6			14	12	1	4	1			32
1630 - 1639	寛永7 - 寛永16		2	3	14	1	2	3		1	26
1640 - 1649	寛永17 - 慶安2		1	9	14	1	3	1			29
1650 - 1659	慶安3 - 万治2			2	9			7	1		19
1660 - 1669	万治3 - 寛文9				21	1	3	6	4		35
1670 - 1679	寛文10 - 延宝7		2	1	11		3	5	1		23
1680 - 1689	延宝8 - 元禄2				1	1		5			7
1690 - 1699	元禄3 - 元禄12							3			3
1720 - 1729	享保5 - 享保14							2			2
1770 - 1779	明和7 - 安永8							2			2
無紀年		1	6	14	33	5	16	50	5	2	132
総計		1	34	86	124	10	37	85	11	3	391

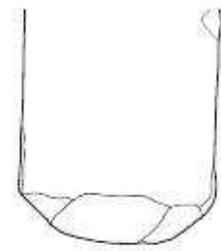
第8表 石材加工比較

番号	石材	正面	右	左	背面	底部形状
五輪塔						
S2	花崗岩	A	A	A	A	平
S3	閃緑岩	A	A	A	A	やや凹
S4	閃緑岩	A	A	A	A	凹
S5	閃緑岩	A	A	A	B	やや凹
S6	閃緑岩	A	B	B	B	凹
S7	閃緑岩	A	A	A	A	やや凹
S8	閃緑岩	A	B	B	B	やや凹
S9	閃緑岩	A	A	A	B	平
S10	閃緑岩	A	A	A	A	凹
S11	閃緑岩	A	A	A	B	やや凹
S12	閃緑岩	A	B	B	B	凹
S13	閃緑岩	A	A	A	B	凹
S14	閃緑岩	A	A	A	A	凹
S15	閃緑岩	A	B	B	A	凹
S16	閃緑岩	A	A	A	欠損	凹
S17	閃緑岩	A	A	A	A	やや凹
S18	閃緑岩	A	A	A	A	凹
S19	閃緑岩	A	A	A	B	平
S20	閃緑岩	A	B	B	B	やや凹
S21	閃緑岩	A	A	A	B	凹
S22	閃緑岩	A	A	A	B	平
S23	閃緑岩	A	A	A	A	凹
S24	閃緑岩	A	A	A	A	凹
S25	花崗岩	A	A	A	A	凹
一石五輪塔						
S26	閃緑岩	A	A	A	B	I a
S27	閃緑岩	A	A	A	B	I a
S28	砂岩	A	A	A	B	I a
S29	閃緑岩	A	A	A	A	I a
S30	閃緑岩	A	A	A	A	II
S31	閃緑岩	A	A	A	A	I b
S32	砂岩	A	A	A	A	I b
S33	閃緑岩	A	A	A	B	I a
S34	閃緑岩	A	A	A	A	I a
S35	閃緑岩	A	A	A	B	I a
S36	閃緑岩	A	A	A	A	I a
S37	閃緑岩	A	A	A	A	I a
S38	閃緑岩	A	A	A	A	I a
S39	閃緑岩	A	A	A	A	I a
S40	閃緑岩	A	A	A	A	I a
S41	閃緑岩	A	A	A	A	I a
S42	砂岩	A	A	A	A	I a
S43	閃緑岩	A	A	A	A	II
S44	閃緑岩	A	B	B	B	II
S45	閃緑岩	A	A	A	B	I a
S46	砂岩	A	B	B	B	I a
S47	砂岩	A	A	A	B	II
S48	閃緑岩	A	A	A	B	I a
S49	砂岩	A	A	A	B	I b
S50	砂岩	A	A	A	B	II
S51	砂岩	A	A	A	A	I b
S52	砂岩	A	A	A	B	II
S53	砂岩	A	A	A	A	I b
S54	閃緑岩	A	A	A	B	I a
S55	砂岩	A	A	A	B	I b
S56	砂岩	A	A	A	B	I a
S57	砂岩	A	A	A	B粗	I b
S58	砂岩	A	A	A	B粗	I b
S59	砂岩	A	A	A	A	I a
S60	閃緑岩	A	A	A	B	I a
S61	閃緑岩	A	A	A	B	欠損
S62	閃緑岩	A	A	A	B	I a
S63	閃緑岩	A	A	A	B	I a
S64	砂岩	A	A	A	B	I a
S65	砂岩	A	A	A	B	I a
S66	閃緑岩	A	A	A	B	II
S67	砂岩	A	A	A	B粗	I b
S68	閃緑岩	A	A	A	B	I a

番号	石材	正面	右	左	背面	底部形状
S69	閃緑岩	A	A	A	B	Ⅱ
S70	閃緑岩	A	A	A	B	I a
S71	閃緑岩	A	A	A	B	欠損
S72	閃緑岩	A	A	A	B	Ⅱ
S73	閃緑岩	A	A	A	A	Ⅱ
S74	閃緑岩	A	A	A	B	Ⅱ
S75	閃緑岩	A	A	A	B	I a
S76	閃緑岩	A	A	A	B粗	I a
S77	閃緑岩	A	A	A	B	I b
S78	砂岩	A	A	A	B粗	Ⅱ
S79	閃緑岩	A	A	A	B	I b
S80	砂岩	A	A	A	B	Ⅱ
S81	砂岩	A	A	A	B	Ⅱ
S82	砂岩	A	A	A	B	I b
S83	砂岩	A	A	A	B	I a
S84	砂岩	A	A	A	B	I a
S85	閃緑岩	A	A	A	B	I a
S86	閃緑岩	A	A	A	B	I a
S87	閃緑岩	A	A	A	B	I a
S88	砂岩	A	B	B	A	欠損
S89	砂岩	A	A	A	B	I b
S90	砂岩	A	B	B	B	I a
S91	閃緑岩	A	A	A	B	Ⅱ
S92	閃緑岩	A	A	A	B	Ⅱ
S93	閃緑岩	A	A	A	B	Ⅱ
S94	閃緑岩	A	A	A	B	I a
S95	砂岩	A	A	A	B	Ⅱ
S96	閃緑岩	A	A	A	A	I a
S97	閃緑岩	A	A	A	A	Ⅱ
S98	砂岩	A	A	A	B	Ⅱ
S99	閃緑岩	A	A	A	B	I a



第57図 五輪塔・一石五輪塔仕上げ加工凡例



I a類



I b類



Ⅱ類

第58図 一石五輪塔底部形状凡例

3. 石 材

石塔・墓標に使用されていた石材は、大きく3種類に分類できる。花崗岩、閃緑岩、砂岩である。

花崗岩は、慶長以前の材銘石塔ではわずかである。造岩鉱物の粒子は粗く、色調は白色である。

閃緑岩は、慶長以前では五輪塔、一石五輪塔などの大部分を占める。これまでの石造美術研究では、砂岩とされていたものであるが、詳細に観察すると、組成中の長さ3mmほどの小さな針状になった角閃石が認められるので、容易に識別できる。

砂岩は、閃緑石と比較すると、輝きがなく、色調も閃緑岩が黒みがかった深緑色であるのに対し、深緑色から褐灰色である。

これら石材産地の同定は難しいところであるが、実測図を掲載した16～17世紀の石塔・墓標は、花崗岩は北白川、閃緑岩は鞍馬の中ノ谷か旧花背峠付近、砂岩も特定はできないが、京都市内かそう遠くない所のものを使用している可能性が高い。

4. 五輪塔・一石五輪塔の加工技術

五輪塔 地輪の四面は仕上げ加工を施しており、成形後の表面をノミ先で打欠いて平滑に仕上げる小叩き仕上げをしている。仕上げは必ずしも四面同質ではなく、銘文を彫った正面に対し、側面、背面はやや仕上げの粗いものがある。

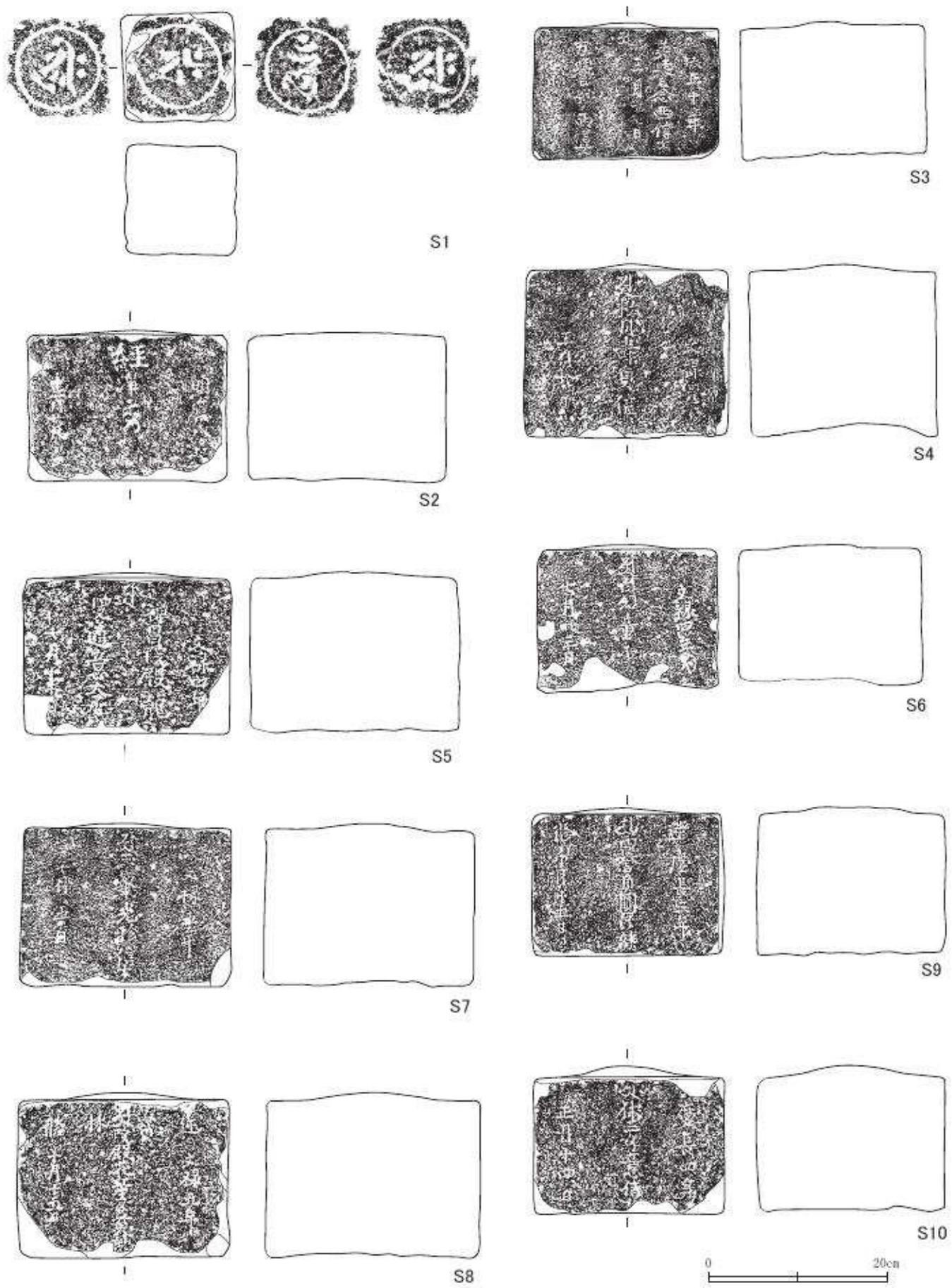
上面は、花崗岩製のものは、水輪と組合せるため、端から中心部に向けて低く緩やかに盛り上がっている。その緩やかな曲面は、仕上げに大きな違いは見られない。ところが、地輪上面中央部のみを饅頭形に低く突出させる閃緑岩製のものでは、顕著な仕上げの違いが見られる。柄の役割をして、水輪とかみ合わさって見えない饅頭形の突出部は、成形でみられるノミ先による粗叩きのままである。一方、組合せ後も露出している地輪上面の周縁部は、側面同様にていねいに小叩き調整をして仕上げている。

底面は、周縁をノミハツリによって水平に整えているため、線状の細いノミ痕が観察される。それより内側は、中央に向かって斜めに粗い線状に残るノミ痕や、成形用のノミの刃先を立てて打ち込んでめぐり取っており、ハツリのみで仕上げ加工は行っていない。

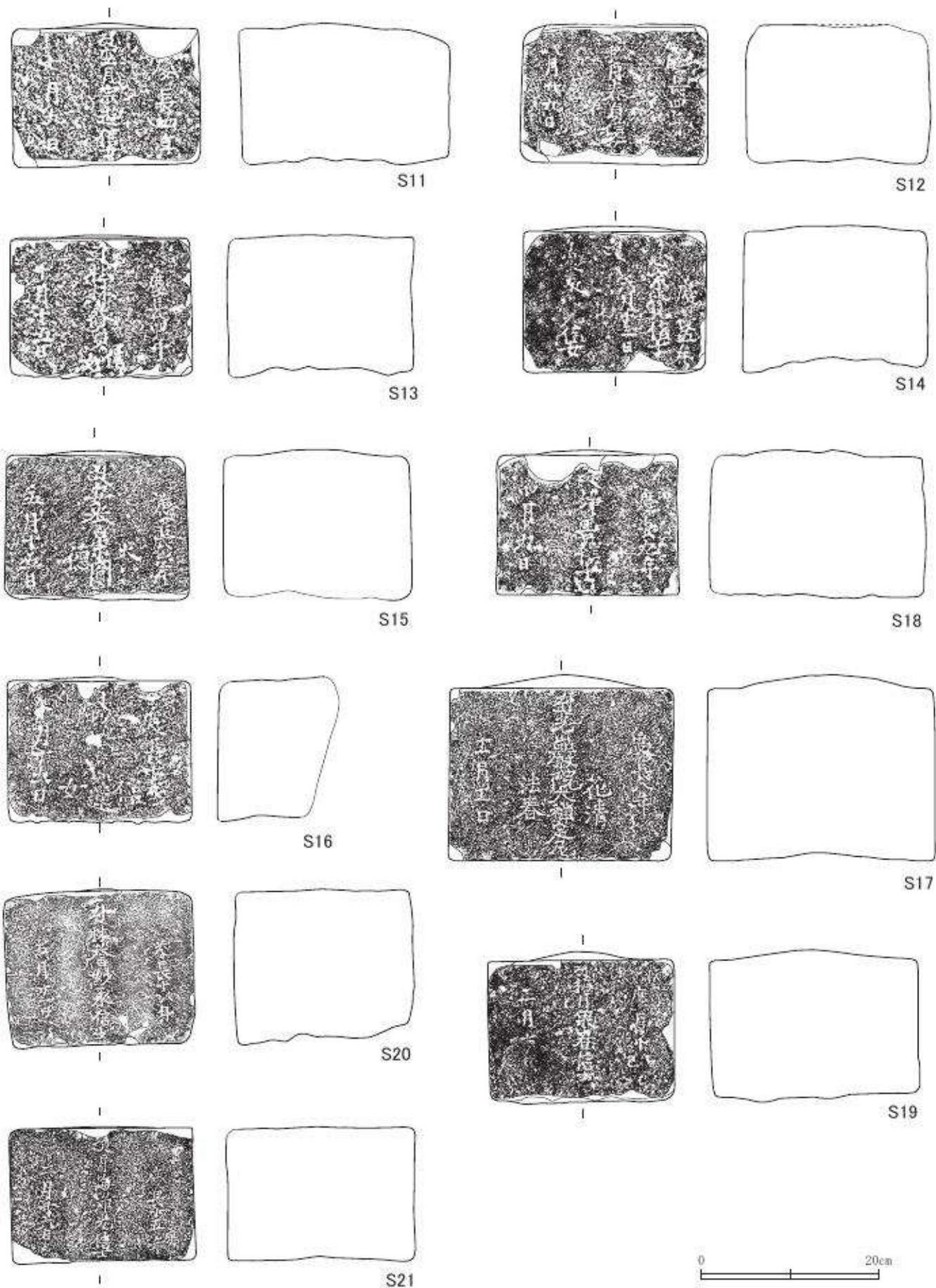
一石五輪塔 一石五輪塔の加工も、基本的には五輪塔と変わらない。とりわけ正面に銘文の彫られた地輪と比較すると、正面に対し、側面はやや仕上げが落ち、背面は相対的に仕上げが粗いものが多く、中には成形時のハツリ痕を残すものもある。またわずかではあるが、側面に原石を割ったとき打ち割り面が比較的平滑になったものを、ほとんど仕上げ調整を施さずそのまま使用していると思われるものもある（S 33、S 44）。

底部は、すでに見たように、原石の緩やかな曲面を残すもの（Ia類）、成形加工のままのもの（Ib類）、水平に整えられているもの（II類）に大別できる。Ia類の底面に残る曲面は、川原石に見られる角の取れた玉石状の原石肌である。埋められる部分であるため、加工を省略するためわざと残したものである。Ib類およびIa類でも見られる、地輪下部の打割り痕は、成形のためノミを当てて剥ぎ取ったものもあるが、ノミ痕が残っていないものも多く、ゲンノウによるハツリであろう。それに対してII類は、底面周縁をノミハツリによって水平に作り、それより中央に向かっては、粗く成形用のノミの刃先を立てて打ち込んで、わずかにえぐっている。

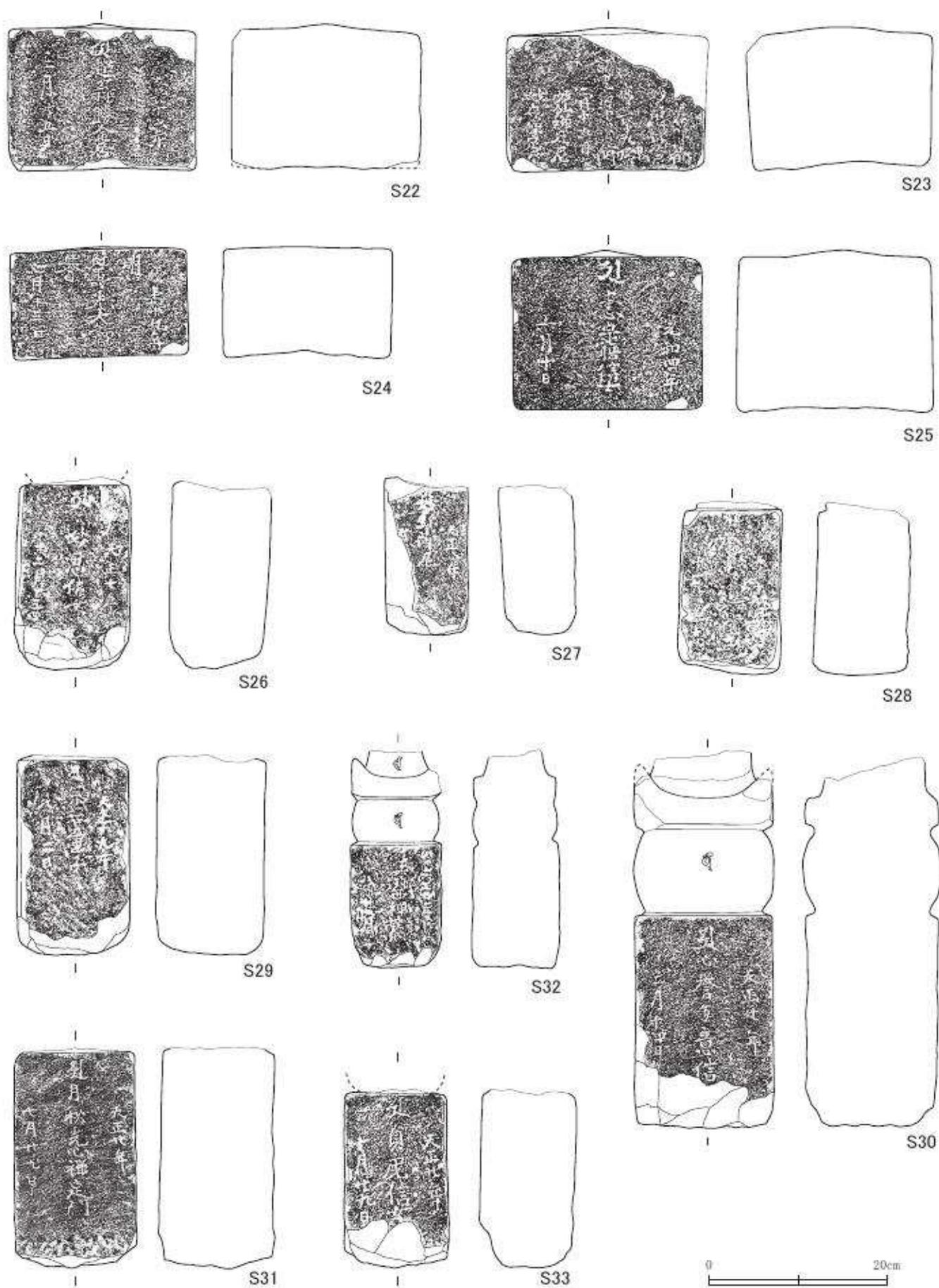
以上見てきた五輪塔の地輪、一石五輪塔には、川原石の原石肌を残すものも多い。さらに、仕上げ調整を受けた各面にも、意識して観察しないと見落とすような、加工によるものではない浅い窪みが多く認められる。これなどは、表面の凹凸の著しい川原石の、小叩きによる仕上げ調整のおよばなかった部分である。こうしたことから見て、使用された石材は大きなものではない。原石は谷川などで採取される、表面のすべすべした、製品より少し大きめの川原石を加工して製作していたと推定される。



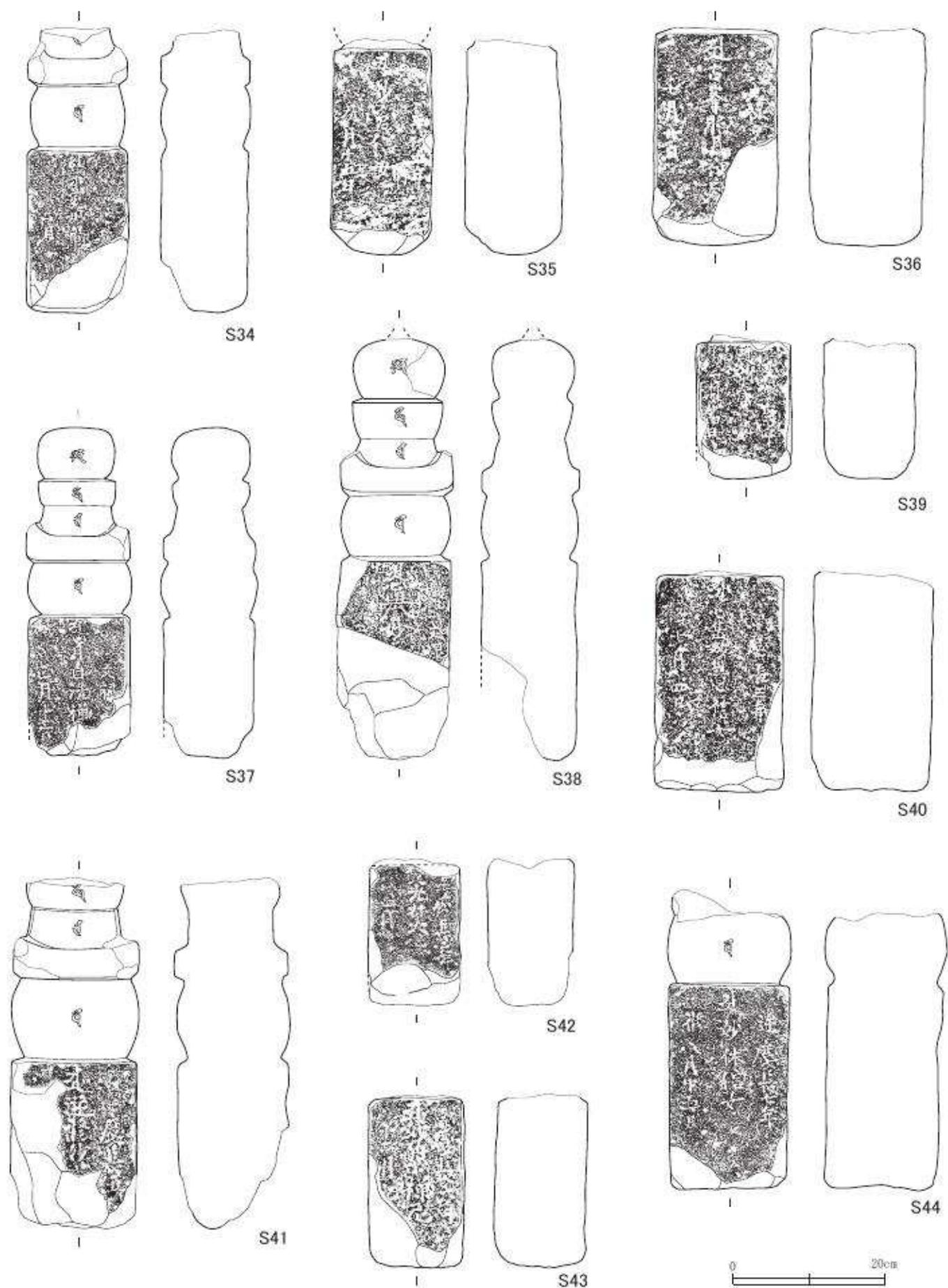
第59図 出土石塔・墓標実測図1 (縮尺 1/6)



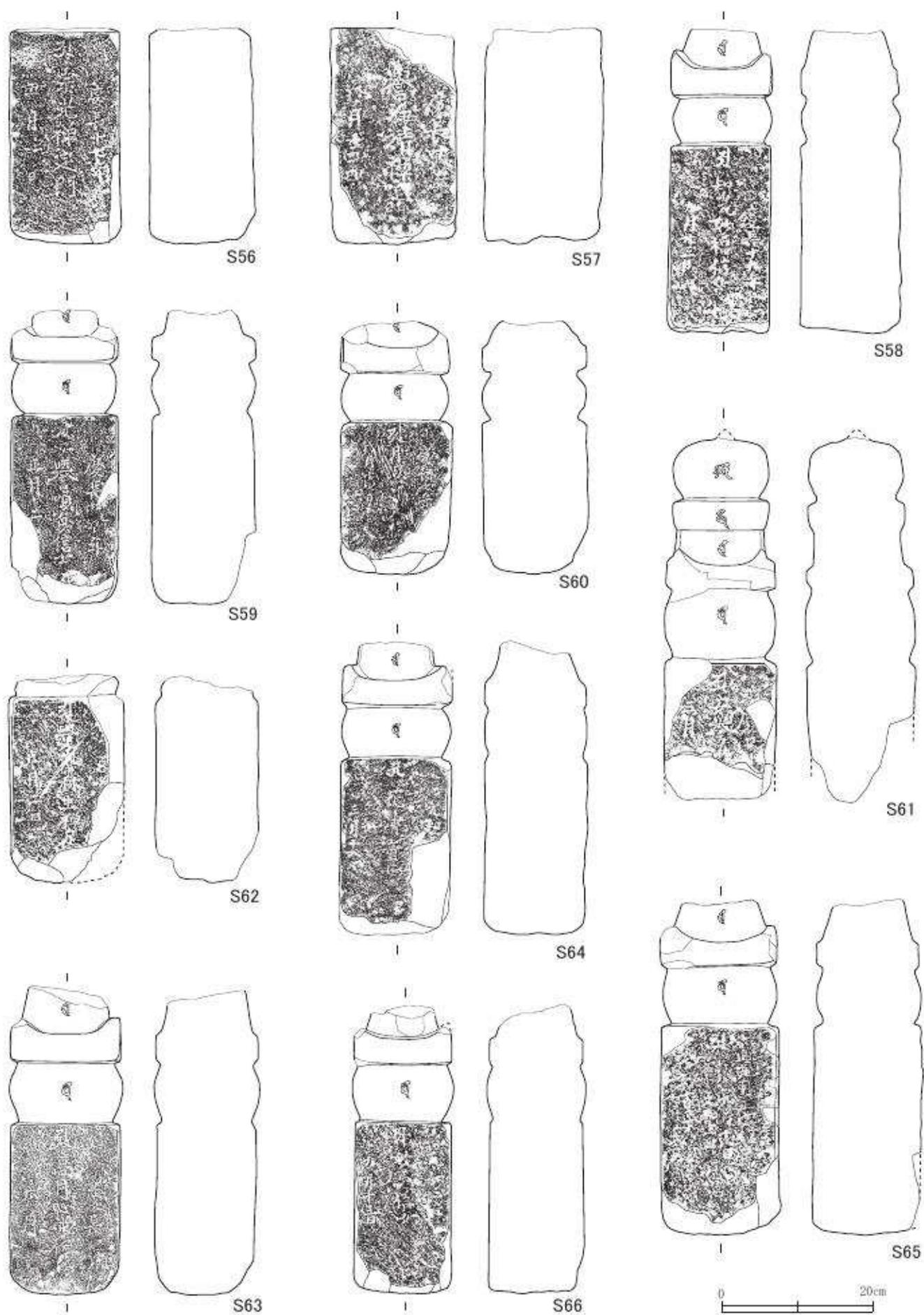
第60図 出土石塔・墓標実測図2 (縮尺 1/6)



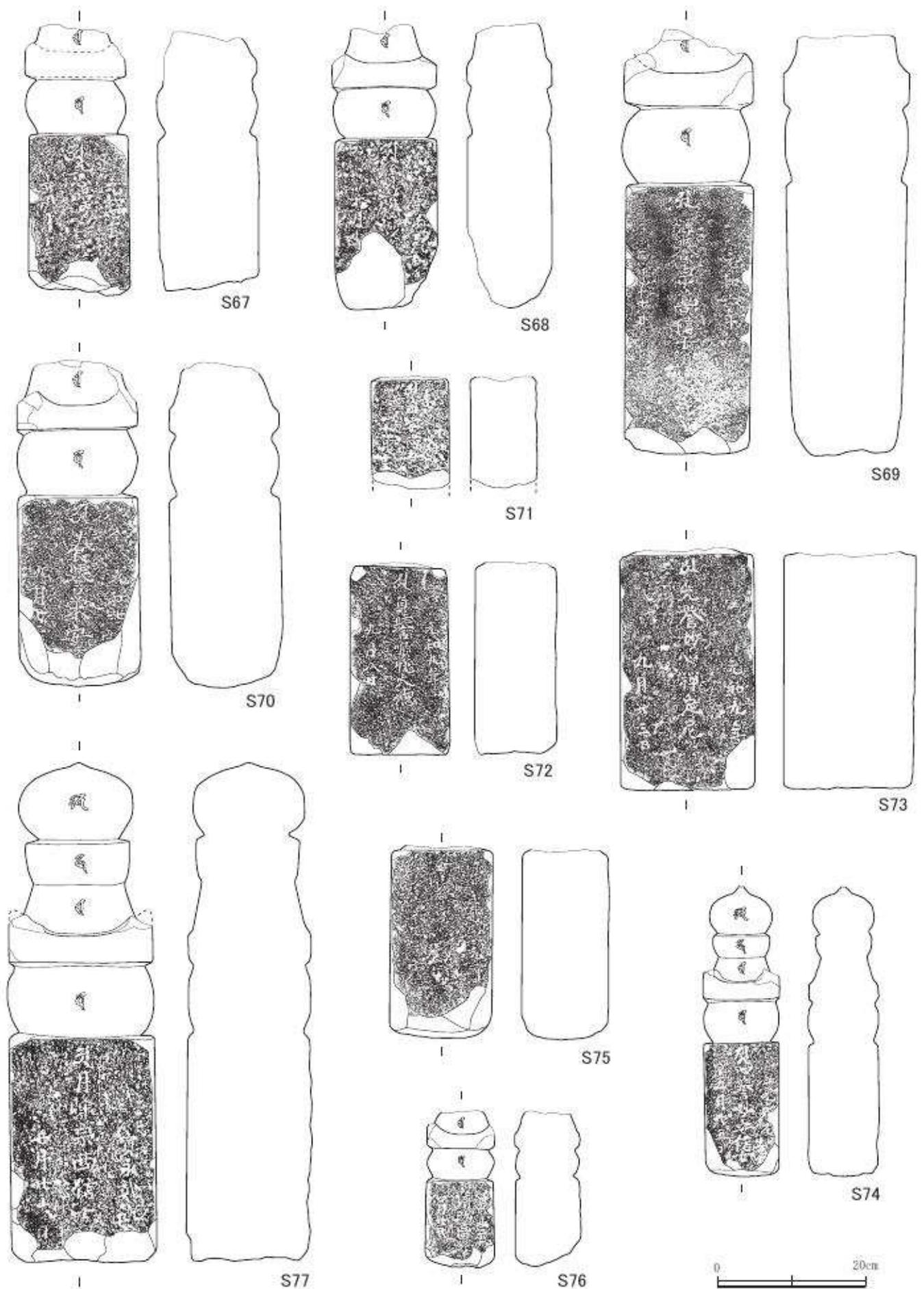
第 61 図 出土石塔・墓標実測図 3 (縮尺 1/6)



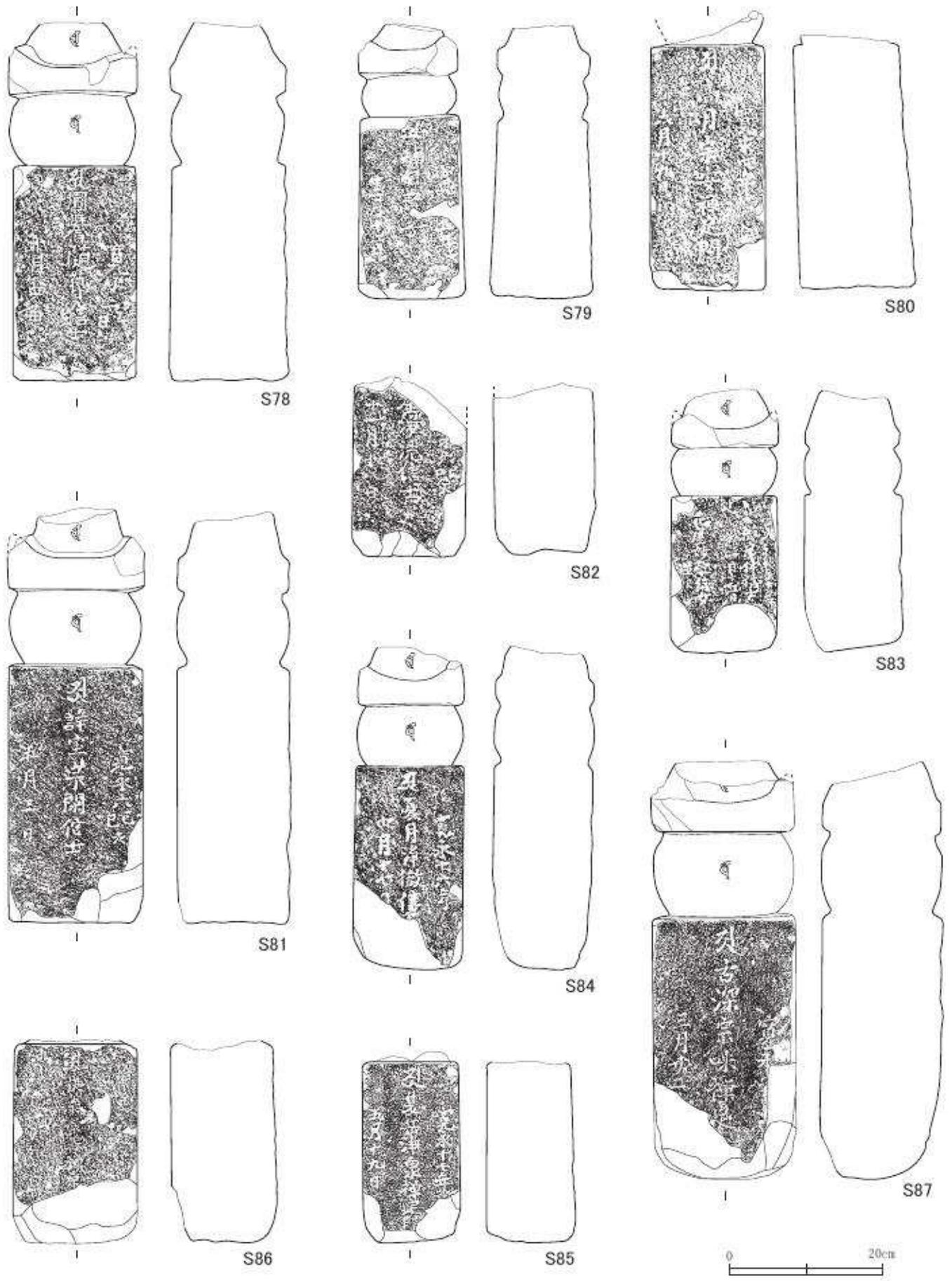
第62図 出土石塔・墓標実測図4 (縮尺1/6)



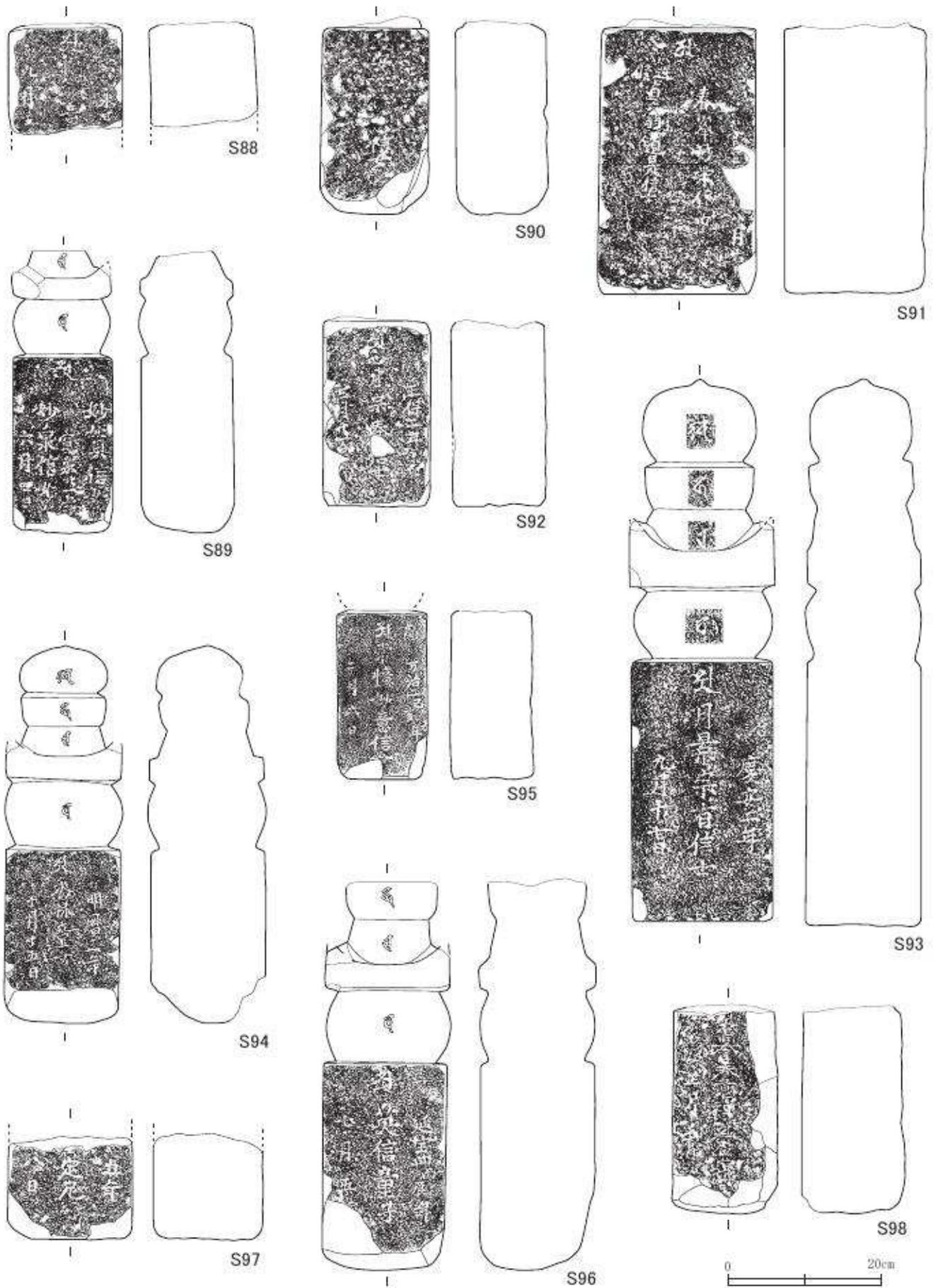
第64図 出土石塔・墓標実測図6 (縮尺1/6)



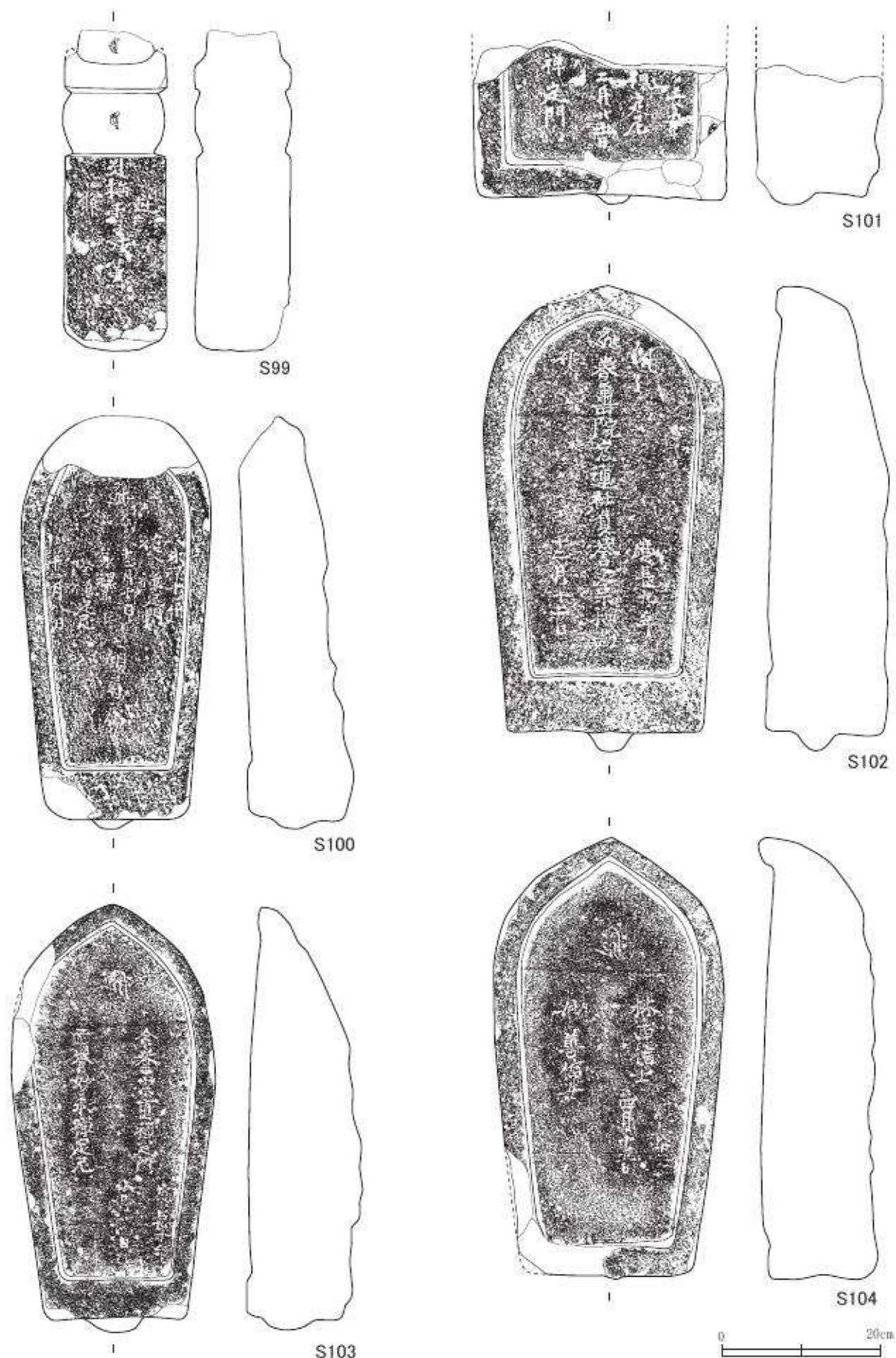
第65图 出土石塔・墓標実測図7 (縮尺1/6)



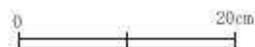
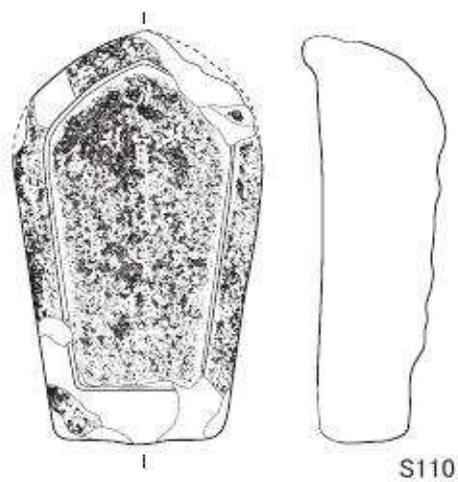
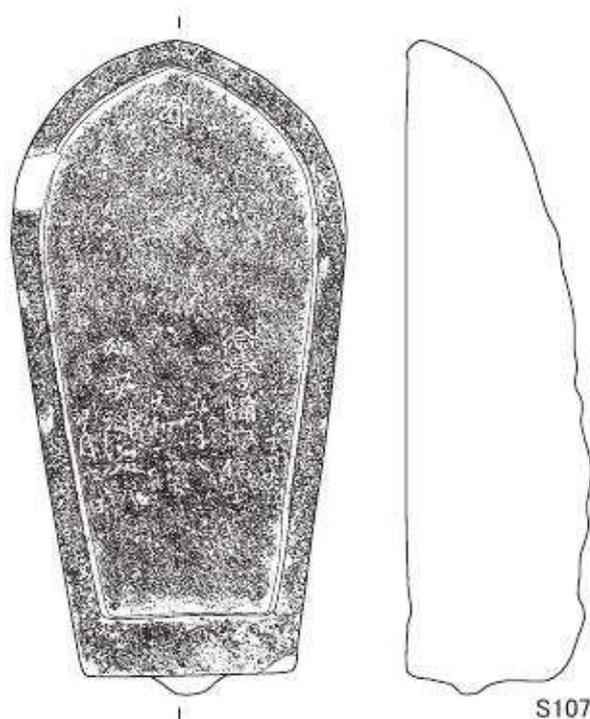
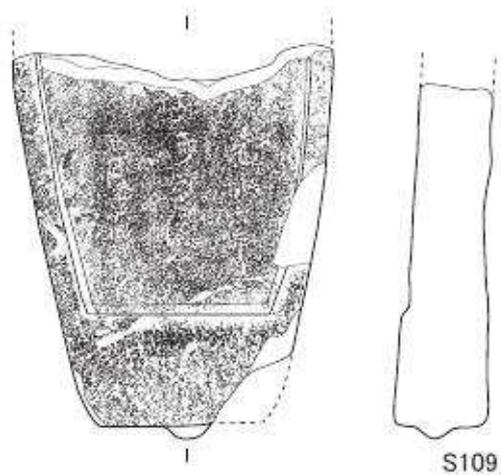
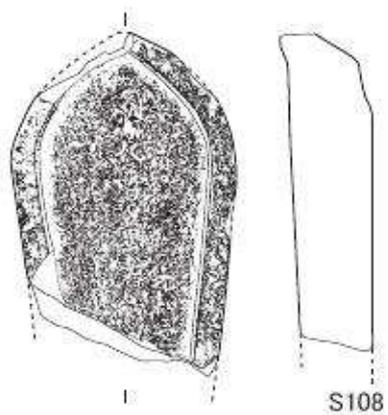
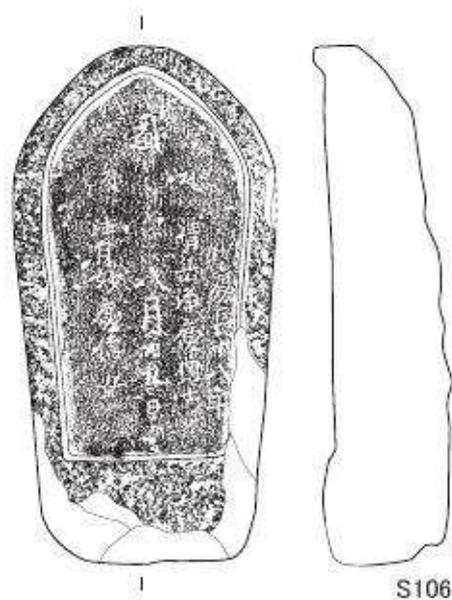
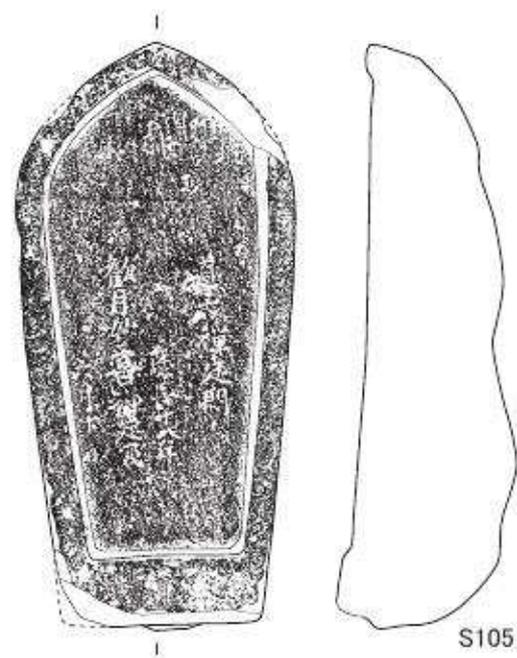
第66図 出土石塔・墓標実測図8 (縮尺1/6)



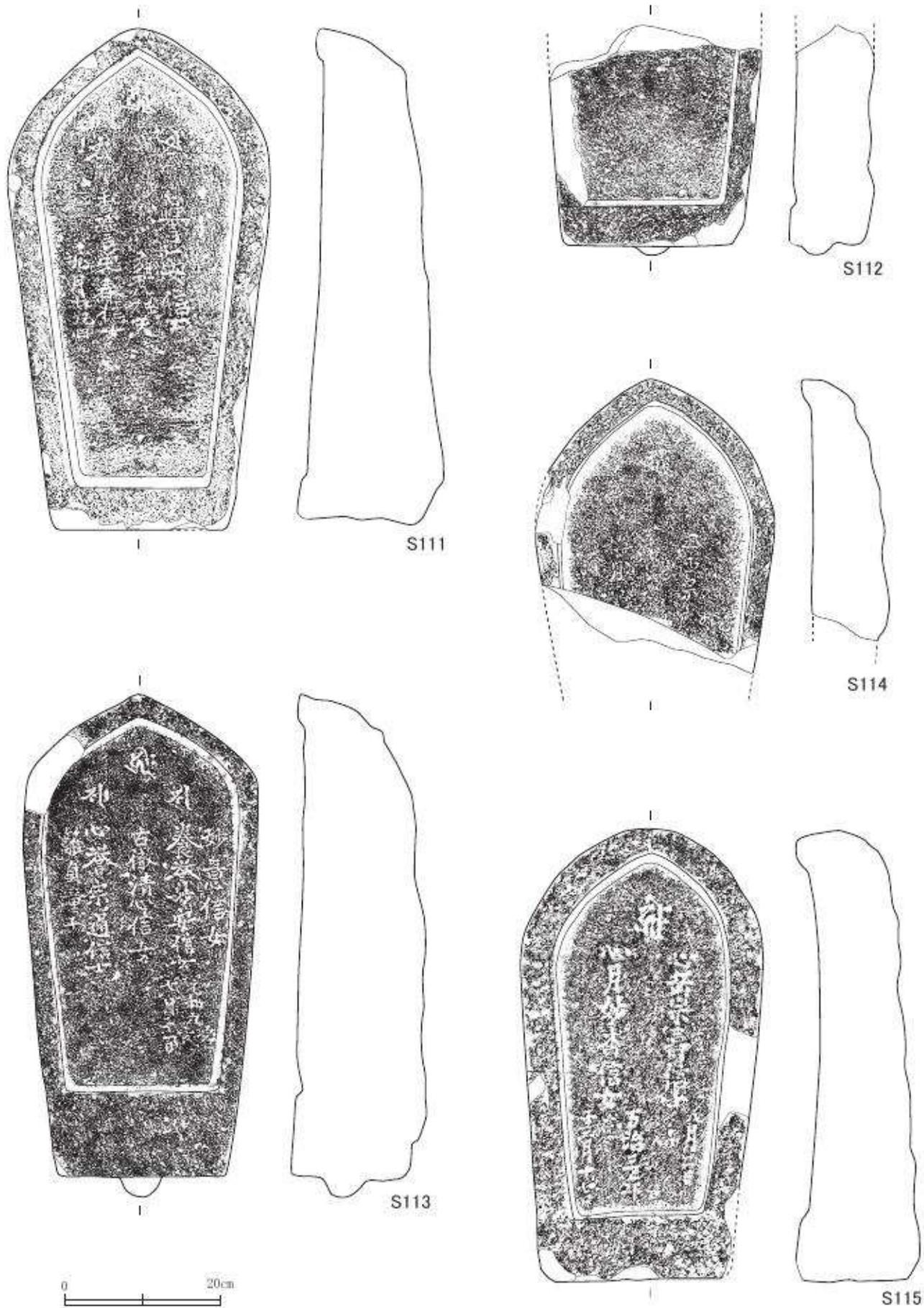
第 67 図 出土石塔・墓標実測図 9 (縮尺 1/6)



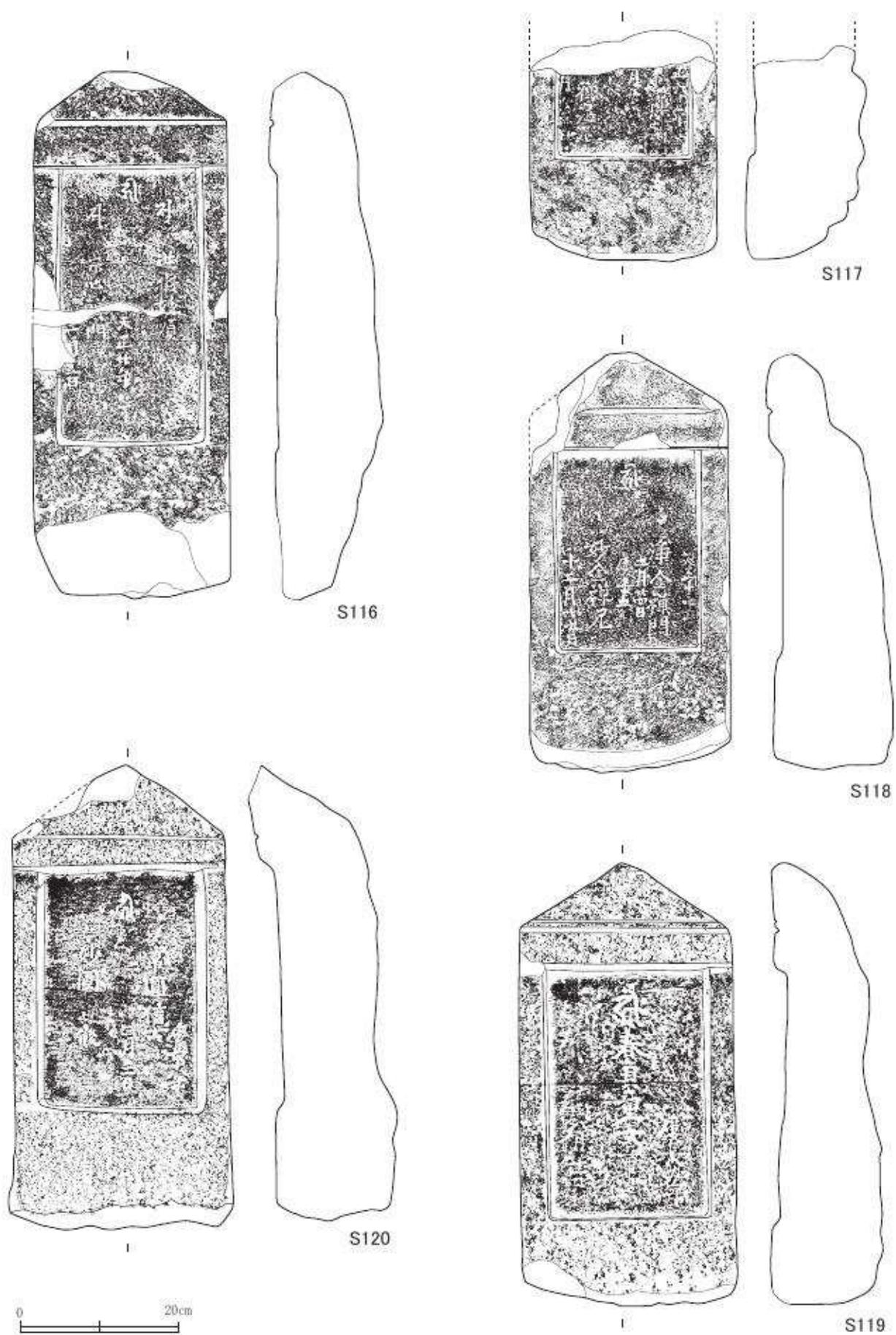
第68图 出土石塔·墓標実測图10 (縮尺1/6)



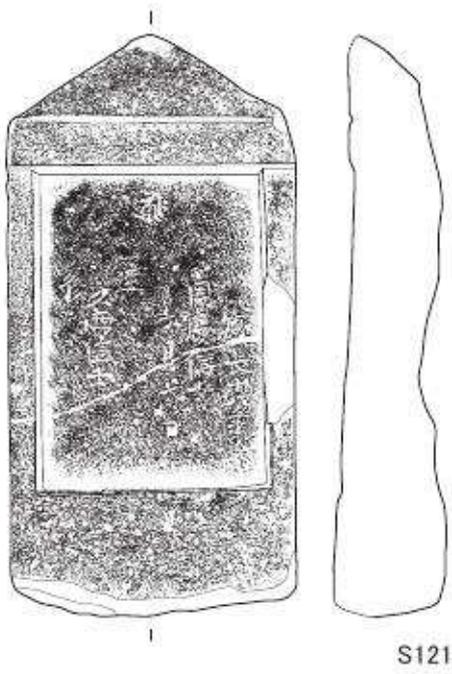
第69图 出土石塔·墓标实测图11 (缩尺1/6)



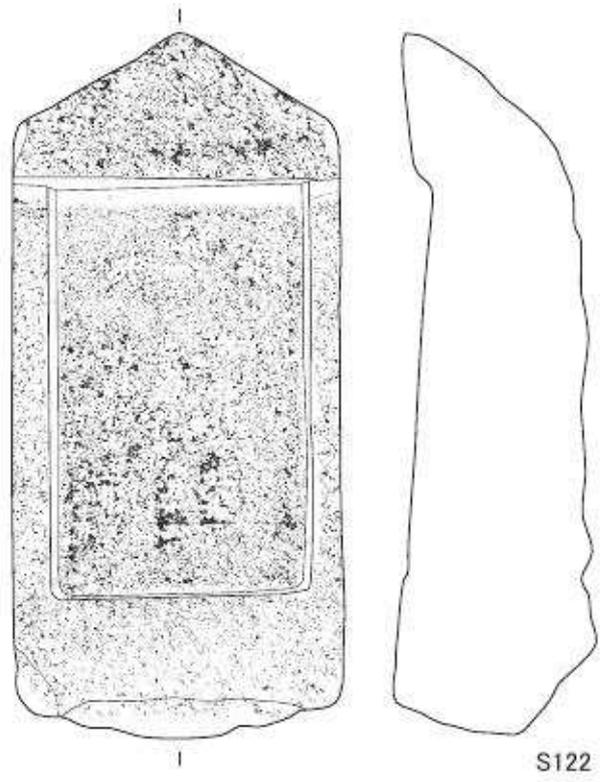
第70圖 出土石塔・墓標実測図12 (縮尺1/6)



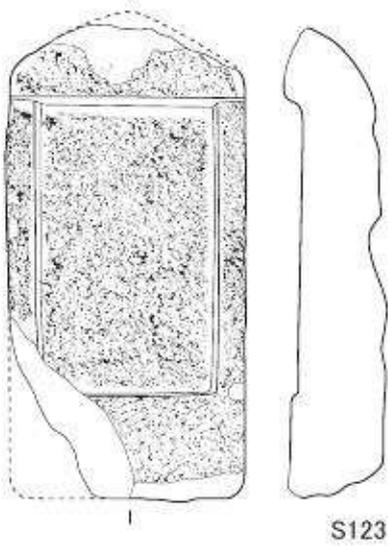
第71图 出土石塔·墓標実測図13 (縮尺1/6)



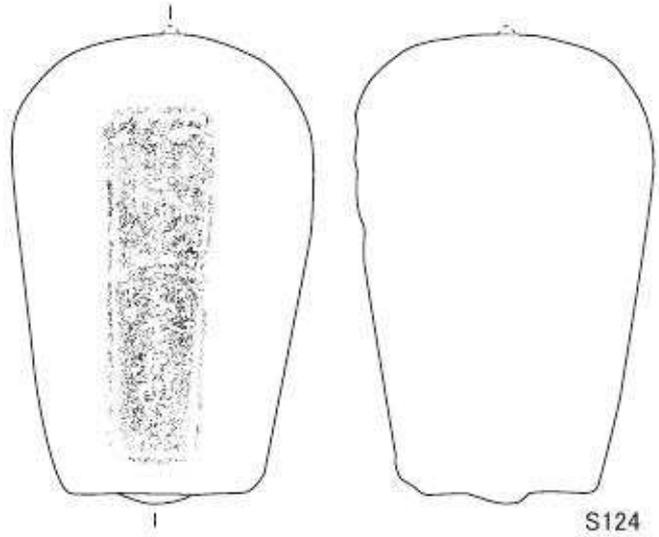
S121



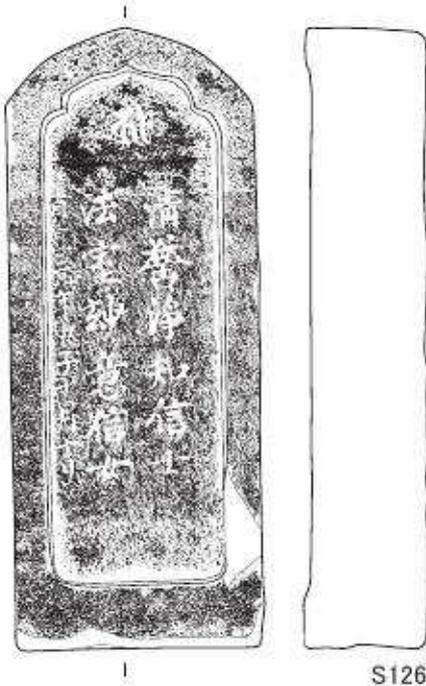
S122



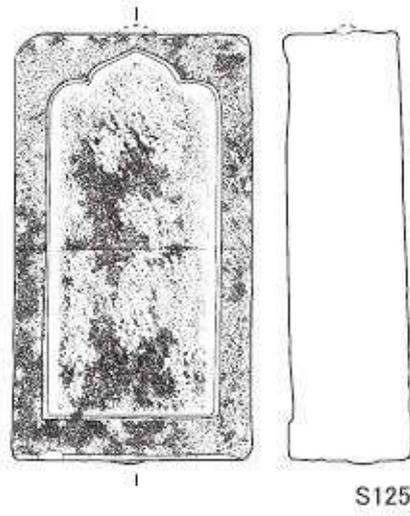
S123



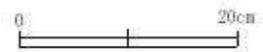
S124



S126



S125



第72図 出土石塔・墓標実測図14 (縮尺1/6)

第9表 石塔・墓標観察表（実測分）

番号	S1	S2	S3	S4	S5	S6	S7	S8	S9	S10	S11	S12	
遺構	土坑 2085	表土	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 2085	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	
形状	宝篋印塔	五輪塔	五輪塔	五輪塔	五輪塔	五輪塔	五輪塔	五輪塔	五輪塔	五輪塔	五輪塔	五輪塔	
状態	塔身	地輪	地輪	地輪	地輪	地輪	地輪	地輪	地輪	地輪	地輪	地輪	
種子	金剛界四仏	経 浄秀 明應八己未 十二月廿日	ア 英譽念西信士 三月十七日 方譽妙西信女	ア 松月壽貞信 三月廿日	ア 瑞昌院殿龍 聖道意大居士 七月十五日	ア 白幻童子 七月廿三日	ア 玉峯光珍信士 七月五日	ア 林實 院殿花岳了英大姉 十月十五日	ア 修 西宮貞圓代姉 卯月十五日	ア 逆 慶長三年 西宮貞圓代姉	ア 休 三了意信女 正月十四日	ア 慶長四年 空月宗遊信士 七月九日	ア 慶長四年 松月春貞信女 八月廿九日
文字													
全高	12.1	16.3	14.5	18.2	16.7	15.9	17.4	17.1	15.8	15.1	15.1	15.0	
幅	12.1	22.2	22.2	22.2	23.2	20.2	23.2	23.3	20.9	21.1	21.1	20.9	
奥行	12.1	22.2	20.6	20.9	22.9	20.1	23.2	23.0	20.8	20.9	21.1	19.9	
石材	花崗岩	花崗岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	
西暦		1499	1582	1595	1595	1595	1596	1596	1598	1599	1599	1599	
備考	月輪内に金剛界 四仏の種子				豊臣秀次			若政所か					

番号	S13	S14	S15	S16	S17	S18	S19	S20	S21	S22	S23	
遺構	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 2085	土坑 1010	土坑 1010	土坑 2085	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	
形状	五輪塔	五輪塔	五輪塔	五輪塔	五輪塔	五輪塔	五輪塔	五輪塔	五輪塔	五輪塔	五輪塔	
状態	地輪	地輪	地輪	地輪	地輪	地輪	地輪	地輪	地輪	地輪	地輪	
種子	ア 松林春貞信 十月十五日	ア 了心宗覺信士 六月十三日 泉水覺信女	ア 安普宗圓 五月十五日	ア 松譽貞蓮 十月十二日	ア 光嚴院大禪定尼 十一月十一日	ア 浄源信士 四月九日	ア 梅月宗春信士 正月七日	ア 林譽妙水信女 五月廿一日	ア 月輪 浄光信士 二月廿六日	ア 超翁勝金居 二月廿五日	ア 慶長十六年 二月廿五日	ア 妙宗禪定尼 二月十五日 妙守禪定尼 二月十五日
文字											國 妙守禪定尼 二月十五日 妙守禪定尼 二月十五日	
全高	15.7	15.8	15.6	15.7	19.5	15.7	15.6	17.1	14.8	15.7	14.9	
幅	20.2	20.6	20.7	20.5	25.3	20.3	21.1	21.2	20.7	21.0	21.8	
奥行	20.8	20.2	20.7	10.7	25.1	20.3	20.7	20.8	20.6	20.9	20.4	
石材	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	
西暦	1599	1600	1601	1602	1603	1604	1605	1609	1610	1611	1614	
備考											「真」 「翁」 「は異	

番号	S24	S25	S26	S27	S28	S29	S30	S31	S32	S33	S34	S35	
遺構	水路 1044	土坑 2085	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	井戸 2135	土坑 1034	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	
形状	五輪塔	五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	
状態	地輪	地輪	××××地	××××地	××××地	××××地	××火水地	××××地	××火水地	××××地	××火水地	××××地	
種子	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	
文字	ア 明 慶長十九年 四月十三日	ア 求心宗信女 元和四年 六月十日	ア 妙信女 天正七年 十二月十三日	ア 妙珍信女 天正八年 二月	ア 口口信女 天正十四年 十一月	ア 宗信女 天正十九年 八月二日	ア 心誓了信女 天正廿年 三月十四日	ア 月秋光心信女 天正廿年 七月廿九日	ア 天正廿年 八月十四日	ア 天正廿年 十月廿九日	ア 天正廿年 二月十日	ア 天正廿年 二月十日	ア 文禄五 妙宮信女 三月十五日
全高	12.1	17.4	20.8	15.9	17.8	20.8	41.4	23.2	23.3	19.2	31.6	23.7	
幅	19.8	21.1	12.1	9.3	11.6	12.3	15.4	13.5	10.1	11.1	11.2	11.1	
奥行	18.8	21.1	10.2	7.6	10.2	11.6	13.6	11.9	9.9	10.6	10.1	9.9	
石材	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	砂岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	砂岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	
西暦	1614	1618	1579	1580	1586	1591	1592	1592	1592	1592	1573?	1596	
備考	〔明〕〔馨〕が成 名の左右上部 〔壽〕旧字			〔孫〕は旧字								〔式〕は旧字	

番号	S36	S37	S38	S39	S40	S41	S42	S43	S44	S45	S46	S47
遺構	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	井戸 2135	井戸 2135	土坑 1010
形状	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔
状態	××××地	空風火水地	空風火水地	××××地	××××地	×風火水地	××××地	××××地	××火水地	××××地	××火水地	××××地
種子	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア
文字	ア 文禄元 吉原照月禪定 七月廿日	ア 心月自淨禪 文禄 正月十二日	ア 心誓妙 文禄 二月	ア 妙春信女 慶長二年 二月廿四日	ア 心信妙信女 慶長三年 七月四日	ア 逆修妙 慶長五年	ア 光林大徳 慶長二年 四月廿日	ア 妙楽信女 慶長六年 十二月九日	ア 逆慶長七年 妙休信女 八月十五日	ア 宗秋信女 慶長七年 九月廿日	ア 正岸妙貞信 慶長十年 五月廿七日	ア 慶長十年 八月十一日
全高	24.1	37.0	46.8	35.5	24.4	39.4	16.4	18.7	31.8	18.7	19.8	40.7
幅	13.2	11.1	12.4	10.3	14.4	13.4	10.2	10.6	13.6	11.1	12.3	13.4
奥行	12.2	9.6	10.3	9.4	12.6	12.4	9.2	9.6	11.7	9.9	10.8	12.9
石材	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	砂岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	砂岩	砂岩
西暦	1596	1592?	1592?	1597	1598	1600	1597	1601	1602	1602	1605	1605
備考												

番号	S48	S49	S50	S51	S52	S53	S54	S55	S56	S57	S58	S59
遺構	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	井戸 2135	土坑 2085	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 2085	土坑 1010
形状	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔
状態	××××地	空風火水地	××××地	××××地	×風火水地	××××地	××××地	××××地	××××地	××××地	××火水地	××火水地
種子	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア
文字	ア 慶長十一年 八月廿七日 宗汀禪定門	ア 慶長十一年 三月二十四日 幻光口知信土	ア 慶長十一年 十月廿五日 道連禪定門	ア 慶長十一年 八月十日 覚浄雲口入地	ア 慶長十二年 正月八日 貞松淨林信土 瑞雲妙正信女	ア 慶長十二年 六月廿六日 心徹淨蓮信土	ア 慶長十四年 七月 宝圓慶口 田口	ア 慶長十四年 七月廿八日 心誓周法信女	ア 慶長十七年 五月十日 宗光禪定門	ア 慶長十八年 八月廿四日 豊浄清禪定門	ア 慶長十九年 九月廿三日 知光妙福信女	ア 慶長廿二年 正月二日 安齋賴貞信土
全高	19.7	36.5	26.2	16.6	59.3	22.2	16.7	22.5	23.8	24.3	34.3	33.1
幅	13.7	13.5	15.3	11.8	17.5	11.2	10.8	13.2	12.1	14.1	11.1	11.7
奥行	11.9	11.8	14.7	12.1	16.9	10.3	9.3	12.7	11.0	13.3	10.7	10.2
石材	閃緑岩	砂岩	砂岩	砂岩	砂岩	砂岩	閃緑岩	砂岩	砂岩	砂岩	砂岩	砂岩
西暦	1605	1606	1606	1606	1607	1607	1609	1609	1612	1613	1614	1615
備考												

番号	S60	S61	S62	S63	S64	S65	S66	S67	S68	S69	S70
遺構	土坑 1010	土坑 1010	土坑 2085	土坑 2085	土坑 1010	土坑 1010	土坑 2085	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010
形状	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔
状態	××火水地	空風火水地	××××地	××火水地	××火水地	××火水地	××火水地	××火水地	××火水地	××火水地	××火水地
種子	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア
文字	ア 慶長廿年 六月十四日 月口口入地	ア 慶長廿年 三月 安登口口 口口	ア 慶長廿年 九月一日 豊楽林主禪定門	ア 慶長廿年 六月 高月心栄信田	ア 元和三年 三月十八日 花清童女口口	ア 元和三年 九月十八日 覺月正安信土 妙秋童女口口 七月十六日	ア 元和三年 九月十三日 妙浄信女口口	ア 元和四年 霜月十三日 意嘆口口口	ア 元和四年 六月廿日 覺應妙口口	ア 元和六年 正月十七日 源登宗善信土	ア 元和七年 九月廿二日 養登榮安口口
全高	27.7	40.1	22.5	34.6	32.7	37.1	31.3	29.8	31.9	49.9	36.5
幅	12.2	12.7	12.7	12.1	12.1	12.9	10.7	11.3	11.3	14.6	13.5
奥行	11.2	11.7	10.4	11.0	10.8	11.3	10.1	10.7	9.6	12.3	12.2
石材	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	砂岩	砂岩	閃緑岩	砂岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩
西暦	1615	1596?	1596?	1596?	1616	1617	1617	1618	1618	1620	1621
備考	成名削痕跡										

番号	S71	S72	S73	S74	S75	S76	S77	S78	S79	S80	S81	S82
遺構	土坑 1010	土坑 2085	土坑 1010	土坑 2085	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010
形状	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔
状態	××××地	××××地	××××地	空風火水地	××××地	××火水地	空風火水地	××火水地	××火水地	××××地	××火水地	××××地
種子	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア
文字	元和八年 主安信女 十一月十三日	元和九年 貞譽願院大徳 九月八日	元和九年 光譽妙心禪定尼 九月廿三日	寛永元年 心譽妙安信女 五月廿五日	寛永元年 口口口信 十一月五日	寛永二口 清曉童女 四月廿日	寛永貳口 月峰宗西信土 七月廿六日	寛永二口 圓譽隨口口信土 十月四日	寛永二年 智幻童子 十二月十二日	寛永四年 高月宗安禪定門 六月十九日	寛永六口天 詳宗宗関信土 五月三日	寛永六口天 金淨法信土 十一月十八日
全高	12.2	21.7	27.1	32.8	21.0	17.8	56.5	40.4	30.9	31.5	46.0	20.2
幅	9.0	11.4	15.2	8.4	11.6	7.6	11.3	14.1	11.2	12.8	15.1	12.7
奥行	7.1	9.3	14.7	7.9	9.5	7.6	13.8	13.1	10.2	12.3	12.2	10.3
石材	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	砂岩	閃緑岩	砂岩	砂岩	砂岩
西暦	1622	1623	1623	1624	1624	1625	1625	1625	1625	1627	1629	1629
備考						「魂」(コウ)	「貳」は旧字	刻字に黒漆使用 「口」(ヘチヨシヨ)		刻字に黒漆使用		

番号	S83	S84	S85	S86	S87	S88	S89	S90	S91	S92	S93	S94
遺構	土坑 1010	土坑 2085	土坑 2085	土坑 1010	土坑 1010	土坑 2085	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 2085
形状	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔
状態	××火水地	××火水地	××××地	××××地	××火水地	××××地	××火水地	××××地	××××地	××××地	空風火水地	空風火水地
種子	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア
文字	寛永十年 夏徳宗信信土 花房妙榮信女 四月十五日	寛永十六年 夏月浄徳信 七月十七日	寛永十七年 夏月浄泉禪定門 五月十九日	寛永十八年 球翁宗春禪定 八月一日	寛永口口 十真保宗味禪定 三月廿二日	寛永廿口 悦口口童 九月二日	寛永廿一年 妙實信女 妙譽信女 六月四日	寛永口口年 安譽口口信女 八月一日	寛永口口口 春華妙榮信女 真助道是信土 八月六日	寛永二年 正月宗春信土 正月廿一日	慶安二年 月宗宗有信土 九月十七日	明暦三年 香林童女 十月十五日
全高	29.5	35.7	29.3	22.6	46.3	11.4	30.7	20.8	29.6	20.4	60.8	41.5
幅	12.0	12.1	10.8	13.7	15.9	12.0	10.7	12.1	17.4	11.9	16.2	12.7
奥行	10.2	10.2	8.8	11.3	12.9	11.7	9.8	9.7	15.3	9.6	12.2	12.6
石材	砂岩	砂岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	砂岩	砂岩	砂岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩
西暦	1633	1639	1640	1641	1643	1643	1644	1624?	1624?	1645	1649	1657
備考	「夏」の異体字		「夏」の異体字		「味」(ミ・ビ) (口に米の字)							

番号	S95	S96	S97	S98	S99	S100	S101	S102	S103	S104	S105
遺構	土坑 2085	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	井戸 2135	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010
形状	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型
状態	××××地	×風火水地	××××地	××××地	××火水地	土欠	下半分		左上欠		
種子	ア	ア	ア	ア	ア	キリーク		阿弥陀三尊	キリーク	キリーク	キリーク
文字	ア 万治己年 二月六日 富徳妙意信女	ア 延宝五四四年 英信童子 七月五日	ア 五 八日 定尼	ア 心善春意定尼大姉 正月五日	ア 梅野妙薫 逆修	永禄十年 祐念定門 十二月十日 永禄九年 妙隆定尼 十一月八日	長五 定尼 二月廿五日 定門	阿弥陀三尊 慶長九年 養壽院发遣往貞答文宗和尚 十二月十一日	西普妙水澤定尼 慶長十年 八月廿四日	林四信士 妙善信女 四月十五日	道七澤定門 慶長十八年 六月廿日 妙喜定尼
全高	18.8	43.4	11.3	23.3	34.1	43.0	16.3	48.2	44.2	48.7	45.4
幅	10.1	13.4	13.7	12.0	10.8	19.9	16.6	25.8	21.4	25.2	22.0
奥行	8.8	12.4	11.8	10.6	10.2	10.3	13.9	14.6	10.2	12.1	11.2
石材	砂岩	閃緑岩	閃緑岩	砂岩	閃緑岩	閃緑岩	砂岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩
西暦	1659	1676	?	?	?	1566	1600	1604	1605	1607	1613
備考				「重」は異体字、 位号がクブリ		威名など上段、 六邊眷属等は下 段、「等」は異 体字		「及」は旧字			

番号	S106	S107	S108	S109	S110	S111	S112	S113	S114	S115
遺構	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010
形状	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型
状態	左下欠		上半分	下半分中割	上欠		下半分、 右下欠		上半分	
種子	阿弥陀三尊	キリーク	キリーク		阿弥陀三尊	阿弥陀三尊		阿弥陀三尊	キリーク	キリーク
文字	注月妙慶信女 慶長十八年 八月廿九日	清岳浄慶 八月廿九日	念譽 五月八日 元和二年 妙安定尼 卯月六日	花雪童女 元和四年 十一月	岳妙美信女 元和六年 正月廿一日	月 三月八日 妙清信女 元和六年 三月八日	心善一安信士 元和八年 四月 香譽春信女 九月十九日	妙意信女 義牙妙安信女 元和九年 七月十一日 古撒清心信女 心善宗通信女 藤貞童子	梅月妙 玉西宗慶 元和	心悟宗寿信士 万治三年 八月廿二日 心月妙香信女 子三月十七日
全高	41.2	50.9	16.1	30.3	32.2	55.4	21.6	53.6	32.2	49.8
幅	20.9	26.1	17.7	25.2	19.5	28.5	22.8	25.9	26.5	26.1
奥行	7.5	12.2	5.8	7.6	8.4	12.4	8.9	12.7	8.4	13.0
石材	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	花崗岩
西暦	1613	1616	1618	1620	1620	1622	1622	1623	1615?	1660
備考						「浦」は異体字		「藤」は旧字		「香」(ヨウ)

番号	S116	S117	S118	S119	S120	S121	S122	S123	S124	S125
遺構	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010
形状	板碑型	板碑型	板碑型	板碑型	板碑型	板碑型	板碑型	板碑型	無縫塔	位牌型
状態	上欠割一本線	下半分	左上欠		一本線			下左欠		
種子	阿弥陀三尊		キリーク	キリーク	キリーク	キリーク	阿弥陀三尊	キリーク		阿弥陀三尊
文 字	宗心 門 天正廿年 月 十五日	逆修妙順 □月廿五日 □長四年 □月廿六日 □惠禪定門 □正六年	天正十七年 淨金禪門 五月廿四日 慶長五年 妙金禪尼 十一月廿九日	慶長九年 春貞童女童女 閏八月十一日	富圓信士 三月三日 逆修	慶長十八年 周慶信女 六月六日 延久西信士	阿弥陀三尊 道香信士 妙香信女 宗浄信士 妙林信女 妙春童女 元和七年 十二月廿日	元和九年 月峯休西信士 正月十八日 妙法禪定尼 正月廿日	寛永八未天 義心 □□世文彦宗利大徳 正月廿日	明暦四年 二月八日 □□□□ □□□□
全高	55.4	22.6	44.1	47.2	49.8	45.3	54.3	38.3	34.1	33.7
幅	21.6	20.2	21.2	28.2	23.4	22.3	26.4	18.6	21.8	18.9
奥行	7.8	7.4	11.2	10.9	12.5	9.0	11.8	8.5	14.6	9.4
石材	閃緑岩	閃緑岩	花崗岩	花崗岩	閃緑岩	花崗岩	花崗岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩
西暦	1592	1599	1600	1604	1613	1613	1621	1623	1631	1658
備 考		「恵」の旧字		閏月 位号のダブリ。						戒名を意図的に削った痕跡

番号	S126
遺構	土坑 1010
形状	位牌型
状態	半月
種子	キリーク
文 字	清浄知信士 法宗妙意信女 貞孝元甲子十月十日
全高	49.0
幅	19.4
奥行	13.1
石材	閃緑岩
西暦	1684
備 考	「清」「意」は異体字「妙」

第10表 石塔・墓標観察表

番号	S127	S128	S129	S130	S131	S132	S133	S134	S135	S136	S137	S138
遺構	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	水路 1044
形状	五輪塔	五輪塔	五輪塔	五輪塔	五輪塔	五輪塔	五輪塔	五輪塔	五輪塔	五輪塔	五輪塔	一石五輪塔
状態	地輪	地輪	地輪	地輪	地輪	地輪	地輪	地輪	地輪	地輪	地輪	××××地
種子	ア	ア	ア				ア					ア
文字	西暦 四月 二月 妙伸 信女 逆修 寛永七 西暦 二月 二十 二日 信女 寛永八 西暦 十二月 二十四 日 信女 正保四 寛山隆 正保定 門 三月 十一日	心月 宗仁 信女 十二月 二十四 日	正保四 寛山隆 正保定 門 三月 十一日	□ □ 守居士 二月 十四日	□ □ 守居士 二月 十四日	□ □ 守居士 七月 廿七日	□ □ 守居士 七月 廿七日	清泡 童子 秋吟 童子 花岸 童子 園溪 童子	秀月 妙正 信女	□ □ 妙西 □ □ 香信 士 □ □ 十六 日		正 月 十 三 日 寛 永 十 一 年 真 信 女
全高	16.8	24.7	16.7	20.1	19.0	17.8	15.5	19.8	27.1	22.8	30.0	25.6
幅大	20.2	30.4	21.1	25.6	19.8	21.2	20.8	24.0	21.7	21.8	30.0	12.1
奥行	20.2	29.7	20.2	23.8	20.6	22.0	21.5	21.5	21.5	21.5	30.0	21.5
石	閃緑岩	花崗岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	花崗岩	閃緑岩	閃緑岩	花崗岩	閃緑岩	花崗岩	砂岩
備考				左、 逆修か				銘文 なし	銘文 なし		銘文 なし	
西暦	1630	1631	1647	1670								1634

番号	S139	S140	S141	S142	S143	S144	S145	S146	S147	S148	S149	S150
遺構	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	石組 1040	土坑 1010	土坑 1010
形状	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	角形光背型
状態	××××地	××火水地	×風火水地	××火水地	×××水地	××火水地	空風火水地	空風火水地	××××地	××火水地	×風火水地	上欠
種子		ア		ア	ア		ア	ア		ア	ア	阿弥陀三尊
文字		逆 二 三			理 覚 二		淨 四 三	□ 二		卯 西 月 二	春 □	果 方 慶 淨 眞 信 士 八 月 十 三 日 正 月 十 五 日 寛 永 十 一 年 五 月 八 日
全高	13.0	22.5	44.3	32.5	20.8	38.5	34.7	32.5	28.4	23.4	29.8	42.8
幅大	15.6	10.9	13.1	13.1	11.2	11.4	10.4	11.8	12.7	10.6	13.3	27.5
奥行	21.5	21.5	21.5	21.5	21.5	21.5	21.5	21.5	21.5	21.5	21.5	11.8
石	砂岩	砂岩	花崗岩	花崗岩	閃緑岩	砂岩	砂岩	閃緑岩	花崗岩	閃緑岩	砂岩	閃緑岩
備考	上部 欠損	地 輪 の 下 部 欠 損	銘 文 な し	銘 文 な し	地 輪 の 下 部 欠 損	表 面 削 ら れ て い る	下 部 欠 損	下 部 欠 損	銘 文 な し	下 部 欠 損	下 部 欠 損	底 部 に 檜
西暦												1624-1590

番号	S151	S152	S153	S154	S155	S156	S157	S158	S159	S160	S161
遺構	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010
形状	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型
状態	完存	完存	完存	完存	完存	上半分		ほぼ完存		先端欠	完存
種子	キリーク	キリーク	阿弥陀三尊	キリーク	キリーク	阿弥陀三尊	阿弥陀三尊	阿弥陀三尊	ア	阿弥陀三尊	キリーク
文字	西谷道順信士 寛永二年四月十二日 香妙春信女	横岳宗權信士 梅岑宗春信女 寛永二年七月廿六日	照譽林貞 寛永二年四月廿六日	利岳宗貞 寛永三年四月十二日	大月妙清信女 寛永六年四月十二日 房淨妻信士 寛永六年五月廿二日	且直信士 寛永九年六月四日 砂茶信女 寛永六年六月	六観 宗雲信士 寛永八年六月二日	學齋開貞 大徳冥位 寛永八年二月十七日	南無阿弥陀佛 夏淨泉信女 寛永九年四月十八日 淨妙禪定尼	春登清祐信士 宗徳禪定門 寛永九年十一月廿七日 貞珠信女 寛永九年九月廿四日	三界萬靈六親眷属等 寛永九年四月二日 公妙喜禪定尼 昌覺堂香信士
全高	40.2	50.0	51.5	50.2	41.0	48.0	53.0	51.4	90.6	52.8	61.0
幅大	21.0	27.7	22.6	25.7	22.0	21.0	29.2	26.6	31.0	24.5	32.8
奥行	9.8	10.8	10.5	10.3		15.3	9.2	8.5	13.0	8.2	13.2
石	閃緑岩	砂岩	閃緑岩	花崗岩	閃緑岩	花崗岩	砂岩	閃緑岩	花崗岩	砂岩	花崗岩
備考	底部に柄	右上少し欠損 底面に浅い柄	底部に柄	底部に柄	柄なし		底部に柄	底部に柄	「夏」の異体字 底部に柄	柄なし	「姿」は「太」に「山」 底部に柄
西暦	1625	1625	1626	1626	1629・1629	1629・1632	1631	1631	1632・1616	1632・1632	1632

番号	S162	S163	S164	S165	S166	S167	S168	S169	S170	S171	S172
遺構	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 2085	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010
形状	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型
状態	上欠	下半分	先端欠	先端欠	完存	上右欠	完存	下半分	下半分	下半分	完存
種子	キリーク		阿弥陀三尊	阿弥陀三尊	阿弥陀三尊	阿弥陀三尊	阿弥陀三尊				阿弥陀三尊
文字	西信士 寛永十一年十月七日 妙西信女	九信女 寛永十一年	光登浄正信士 寛永十一年三月廿二日 妙壽信女	養屋口安信士 寛永十一年十月廿八日 乙野口達林之 寛永十一年十月六日 花口妙蓮信女	口交禪定尼 三月十二日 口信士 妙安信女 寛永五年	花柄宗春禪定門 寛永十二年二月十七日	梅屋春貞童女 寛永十二年正月廿七日	信士 寛永十四年二月廿二日 信女	巖香清禪定尼 寛永十六年三月十三日	信女 寛永十六年七月十四日 豊位	光雲道意禪定門 寛永十八年十二月九日
全高	46.5	30.8	64.4	52.2	71.5	57.0	54.2	50.0	49.0	35.2	64.5
幅大	推27.5	28.0	29.8	27.1	38.4	27.0	26.0	37.5	38.8	26.5	34.0
奥行	12.5	14.5	18.0	8.7	17.0	15.0	11.4	20.5	14.0	12.0	10.0
石	花崗岩	花崗岩	花崗岩	砂岩	花崗岩	花崗岩	花崗岩	花崗岩	花崗岩	花崗岩	花崗岩
備考	底部に柄	底部に柄 開花蓮陽刻	底部に柄	年号と干支に一年の まちがいが	底部に柄	底部に柄	底部に柄	底部に柄	底部に柄	右側に銘文なし 底部に柄	底部に柄
西暦	1633	1634	1634	1634	1634・1628	1635	1635	1637	1639	1639	1641

番号	S194	S195	S196	S197	S198	S199	S200	S201	S202
遺構	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010
形状	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型
状態	上半分	完存		頂部欠	完存		ほぼ完存	完存	下半欠
種子	キリーク	阿彌陀三尊	阿彌陀三尊	阿彌陀三尊	キリーク	キリーク	阿彌陀三尊	阿彌陀三尊	キリーク
文字		陽山華榮大姉 冥位 西 正月廿日 丁 明暦三年	了庵光寿信女 妙智童女 眞答門 明月光殊信女 龍月妙口信口	清玄信士 万治三年 春哲童子 明暦四年 正月廿四日	光雪童女 万治三年 十二月九日	花月白英童女 万治六年 花景栄幻童女 三月十一日 光林真映童女 三月十三日 権春童子 三月廿三日 善心童子 正月三日 西 五月七日	夏月童女 元和九年四月廿日 露幻童子 元和九年十月十日 口 幻童女 寛文元年七月	往安壽生信女 万治二年 五月五日	妙壽萬正口口 八月
全高	19.5	56.5	57.0	38.0	62.2	66.5	56.5	33.7	35.0
幅大	19.5	32.8	40.8	24.5	28.3	33.0	28.2	20.5	36.2
奥行	7.5	12.8	12.3	9.7	14.8	15.0	13.8	8.5	14.0
石	閃緑岩	花崗岩	花崗岩	閃緑岩	花崗岩	閃緑岩	花崗岩	花崗岩	花崗岩
備考	「承」は異体字	納なし	納なし 「承」と「施」は 異体字	底部に納	底部に納	頂部欠損	納なし	納なし	
西暦		1657	1660・1654	1660・1558	1660	1661・1657	1661・1623	1661	

番号	S203	S204	S205	S206	S207	S208	S209	S210	S211	S212	
遺構	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	表土	土坑 1010	
形状	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	
状態	上欠		右下欠	完存	完存	完存		上半分	上欠	完存	
種子	キリーク	キリーク	キリーク	キリーク	阿彌陀三尊	キリーク	無			キリーク	
文字	幻桂童子 寛文二年 妙泉信女 八月廿二日 浄泉信士 寛文二年 四月十八日	照山宗徹信士 寛文二年 四月十八日	露華童子 万治三年 春童子 卯七ノ十七 辰口ノ口	真幻童子 寛文四年 七月九日	妙久信女 寛文五年 四月廿一日	智光慧源童子 寛文五年 七月三日	御屋休悦信士 寛文四年 四月十三日	本覺屋宗休信士 寛文五年 四月十三日	南無阿弥陀佛 寛文五年 八月十九日 法岳浄御音信士 西方法界六道四生 性月壽法信女	妙春信女 十一月五日	関 寛文五年 二月十五日
全高	43.5	37.5	27.5	28.6	63.6	55.0	56.7	34.5	29.6	47.2	
幅大	24.3	25.0	18.4	17.4	32.3	30.0	29.5	29.3	18.9		
奥行	12.0	41.2	18.3	8.4	13.6	17.0	10.5	15.6	7.7	16.6	
石	閃緑岩	花崗岩	花崗岩	花崗岩	花崗岩	花崗岩	花崗岩	花崗岩	砂岩	花崗岩	
備考	下部若干くぼむ 底部に納	底部に納	年月は「ノ」 納なし	納なし	底部に納	底部に納	底部に納	底部に納	納なし	底部に納	
西暦	1662・1661	1662	1664・1663	1664	1665・1664	1665	1665	1665	1665	1666	

番号	S234	S235	S236	S237	S238	S239	S240	S241	S242	S243
遺構	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010
形状	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型
状態	上次	完存	下半分	上半分	上半分	先端欠	198と一体	上半分	土左欠	頂部
種子	キリーク	キリーク		キリーク	キャ・カ・ラ・バ・ア	阿弥陀三尊		阿弥陀三尊	キリーク	阿弥陀三尊
文字	妙道宗 心元禪定尼 十月四日 修逆	六観 宗見四月 法誓妙水 妙心十二日 道念十一日 妙心九日 清往正月 妙宗十八日	南無阿弥陀仏 春	南無阿弥陀仏 春	三尊 空山道成 香祭 道覚 念風火水地 梵字5字一列	宗茂禪定尼 託生	佛 宗永禪定尼 妙永童女	明 國 空 宗永禪定尼 妙永童女	春 松 萬 宗永禪定尼 妙永童女	夏 松 覺 宗永禪定尼 妙永童女
全高	44.7	42.0	35.2	36.2	21.5	推51.4	49.8	43.0	49.8	67.5
幅大	23.5	22.7	33.3	26.5	21.5	28.4	27.8	34.0	30.3	31.8
奥行	7.0	10.5	13.6	13.7	8.7	12.0	10.2	17.5	9.0	15.9
石	砂岩	閃緑岩	花崗岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	花崗岩	花崗岩	花崗岩
備考	底部に柄	底部に柄	底部に柄 開花蓮陰刻		キャ・カ・ラ・バ・ア 念風火水地 は梵字 梵字5字一列	底部を囲めて柄を出す	中央は南無阿弥陀佛か		底部扁平	夏は異体字 底部に柄
西暦										

番号	S244	S245	S246	S247	S248	S249	S250	S251	S252	S253	S254
遺構	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010
形状	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型	舟形光背型
状態	完存	先端	完存	上半分	上半分	ほぼ完存	上半分	上半分・上次	上半分	下半分	
種子	キリーク	キリーク	キリーク	阿弥陀三尊	阿弥陀三尊	無	阿弥陀三尊		阿弥陀三尊		阿弥陀三尊
文字	一感宗 鏡月妙門信女		傳香壽清信女 喜安宗悦信女 養徳徳源信女 光岳貞心信女	為雲妙道 見連		明正院信庵幸意居士 善了院謙安妙爾大姉	淨岳宗清信女 幻春童子 秀童子	西 國 妙	信士 信女 信女 信女	信士 信女 信女 信女	夏月宗内信士 生香西休大徳 池月妙蓮信女 林屋浄興信士 心夢宗安信士
全高	40.0	14.5	76.7	23.5	18.5	60.0	56.5	18.5	28.0	47.0	推73.2
幅	20.0	19.0	36.7	20.0	17.5	29.7	33.0	19.0	29.5	30.5	39.2
奥行	12.8	8.0	15.2	11.0	6.0	14.7	16.5	3.5	12.0		21.4
石材	花崗岩	花崗岩	旧花崗岩	閃緑岩	閃緑岩	花崗岩	花崗岩	閃緑岩	花崗岩	花崗岩	花崗岩
備考	柄なし		柄なし 「讀」 「瀧」 「博」は旧字			頂部欠損 「の」は異体文字 柄なし			右側の戒名は削られたか	底部に柄	開花蓮陰刻 底部に柄
西暦											

番号	S275	S276	S277	S278	S279	S280	S281	S282	S283	
遺構	土坑 1010	井戸 2135	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	
形状	板碑型	板碑型	板碑型	板碑型	板碑型	板碑型	板碑型	板碑型	板碑型	
状態		下半分	ほぼ完存	上部孤割	ほぼ完存	上左欠	下半	上半分	2本線, 右下欠	
種子	無		キリーク	キリーク	キリーク	南無			キリーク	
文字	【外枠左】 南無阿彌陀佛 念誓祐法信女 四月朔日 【外枠右】 道山禪定門 三月五日 寛永十五年	壽源信女 十月廿七日 寛文三年	松口貞信 三月十八日 寛永十八年 松口貞信 正月十日	清岳意瑞信士 七月十二日 寛文六年 明旭祐光信女 六月十六日 寛文二年 口貞祖信女 三月十八日 寛永八年	清登高関法子 四月廿五日 原誓妙室信女(小字)	區溪童子 十一月廿三日 寛文十庚戌	南無阿彌陀佛 延寶□□ 安徳□□ 信士	禪定門 禪定尼 十二月十日 清禪定尼 十二月六日 淨宗禪定門 年二月十九日	南無妙法 禪定門 禪定尼 十二月十日 清禪定尼 十二月六日 淨宗禪定門 年二月十九日	日 空傳 道範 三界萬壽 慶訓 道意 妙安 源登 宗心 淨信 西
全高	74.5	21.8	57.3	78.0	37.2	51.0	24.5	30.5	60.5	
幅大	29.0	18.4	24.7	26.0	22.2	27.0	29.5	31.0	28.0	
奥行	15.8	9.2	10.8		10.0	15.0	12.5	10.8	15.8	
石	花崗岩	砂岩	花崗岩	閃緑岩	閃緑岩	花崗岩	花崗岩	花崗岩	砂岩	
備考	底部切離し 底部の下に開花連陽刻	底部切離し	額にキリーク 底部に納	「法子」は誤字? 底部に柄	尖端欠 底部に柄	底部切離し、比較的平	底部に柄	法華宗の題目 額に一線	キリークの左右に「日」 「月」を配置 底部切離し	
西暦	1662・1638	1663	1666・1666	1670	1670					

番号	S284	S285	S286	S287	S288	S289	S290	S291	S292	S293	S294
遺構	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	掘乱
形状	板碑型	板碑型	板碑型	板碑型	板碑型	板碑型	板碑型	板碑型	板碑型	板碑型	板碑型
状態	上半分	ほぼ完存	上半分	上半分	上半分	上半分	ほぼ完存	上半分	先端左割	上半分	一本線
種子	キリーク	阿彌陀三尊	阿彌陀三尊	梵字		キリーク	阿彌陀三尊	無		阿彌陀三尊	阿彌陀三尊
文字	月 月 月	為志者 窓月庵林信女 逆修	三界 阿彌陀	キヤ・カ・ラ・バ・ア(梵字) 浄	秋光 月 月 月		浄妙宗林 春求正信 信士女 逆修	南無妙法蓮 華		三界	逆修 養安信士 松登妙貞信女
全高	24.0	63.7	25.5	28.0	22.0	16.0	43.3	30.0	15.0	34.0	46.0
幅大	25.0	24.5	18.5	22.5	20.1	19.1	22.6	24.8	11.5	30.0	19.9
奥行	7.5	18.0	9.4	11.8	11.1	9.4	8.0	12.5	12.0	18.0	11.5
石	砂岩	花崗岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	砂岩	花崗岩	閃緑岩	花崗岩	閃緑岩
備考		額右上欠 底部に柄	額に一線	額に一線 (空風火水地)	額に一線	額に一線	底部粗い切離し	額に一線	額部		底部切離し
西暦											

番号	S295	S296	S297	S298	S299	S300	S301	S302
遺構	井戸 2135	井戸 2135	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	井戸 2135	土坑 1010	土坑 1010
形状	板碑型	板碑型	無縫塔	無縫塔	板碑型	板碑型	板碑型	板碑型
状態	右上半分	左上半分		上半分	右下部	右中間	完存	右上欠
種子		阿弥陀三尊					キリーク	阿弥陀三尊
文字					寛永八年四月廿四日 信女	寛水八年 花	寛永十年八月五日 安善宗嗣居士 寛永四年 寛永四丁曆 慶長十二年四月十六日 宗信居士 寛永十年十月廿日 妙心居士 慶長六年六月二日 華貞宗三禪定内 照山宗寛信士 華譽寛心禪定尼 三寶壽貞信女 寛永八年八月九日 宗徳信士 光日慶雲信女 宗徳信士 光日慶雲信女 寛永四年五月七日 寛永四年五月七日 岸悦宗西信士 慶長十九年八月三日 玄覚信士 月嘉理西信士 為三界萬靈六親眷属等	寛永十一年戊辰 宗徳宗宅信士 遊 七月八日 宗徳宗有信女
全高	17.9	15.2	36.2	31.2	19.4	15.3	74.4	92.0
幅大	16.6	14.2	19.5	21.0	14.0	16.4	91.4	36.4
奥行	7.6	7.9	13.5		4.5	10.3	23.8	24.4
石	砂岩	砂岩	花崗岩	花崗岩	砂岩	花崗岩	花崗岩	花崗岩
備考	銘文なし	銘文なし 三尊の右欠け	銘文なし 底部に柄	銘文なし			屋根と一体 底部に2つ柄有	底部に柄
西暦					1629	1631	1633・1627	1634

番号	S303	S304	S305	S306	S307	S308	S309	S310
遺構	土坑 1010	土坑 1010	井戸 2135	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010
形状	位牌型	位牌型	位牌型	位牌型	位牌型	奇形光背型	位牌型	位牌型
状態	下半分	下半分	下半分	左上欠	完存			半月
種子				無	南無	阿弥陀三尊	阿弥陀三尊	南無
文字	寛永十四年 妙慧安信女 月十一日	慶安三年 庵宗林信士 月十日	慶安三年 法名正信 月十日	阿弥陀佛 承徳元年 八月十六日 寛永二年 三月廿五日	南無阿弥陀佛 光岳清心信女 承徳元年五月九日	慶安三年 心八 八月九日 承徳二年 六月十二日	明暦元年 覺正壽信女 十二月廿七日	万治元年 月友白信士 南無阿弥陀佛 妙月信女 十月十九日 心用妙西信女
全高	36.6	22.0	32.2	69.8	31.2	60.5	56.7	47.7
幅大	31.2	21.0	31.3	36.6	21.0	33.0	24.5	39.8
奥行	16.2	8.7	13.8	14.5	9.4	16.8	16.0	155
石	花崗岩	花崗岩	花崗岩	花崗岩	閃緑岩	花崗岩	花崗岩	花崗岩
備考	底部に柄	底部に柄	破片を接合 底部に柄	「承」は異体字 底部切離し	上部柄なし 底部に柄	「承」は異体字 底部に柄	牌身上下切離し 裏面に矢穴痕	底部に柄無く穴
西暦	1647	1650	1650・1637	1652・1625	1652	1653・1650	1655	1660

番号	S374	S375	S376	S377	S378	S379	S380	S381	S382	S383	S384
遺構	井戸 2135	井戸 2135	井戸 2135	井戸 2135	井戸 2135	井戸 2135	井戸 2135	表土	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010
形状	位牌型	位牌型	位牌型	位牌型	位牌型	位牌型	位牌型	位牌型	屋根付位牌型	屋根付位牌型	屋根付位牌型
状態	右上部分	右下部分	中間	右上部分	中間右側	左下部分	右下部分	右下部分	笠無、右上欠	完存	
種子	阿弥陀三尊								阿弥陀三尊	キリーク	阿弥陀三尊
文字			林 □ □ □	教阿玄 惠屋型 志春	小兵衛	子	子	照	南無阿弥陀佛 三界萬靈六親 眷屬平等利益 心月妙泉禪定尼 六月十八日 西入童子 一無童子	泰山万治三庚子 正月十五日 春山早夢童子	夏清童女 寛文五年 三月廿九日
全高	17.0	16.8	24.8	24.5	35.2	16.8	26.7	13.6	52.8	28.5	48.2
幅大	14.9	24.5	11.9	20.8	18.2	26.4	16.8	11.3	35.0	17.2	23.7
奥行	11.6	12.1	12.8	23.7	11.8	12.3	12.3	7.1	15.4	8.5	10.2
石	閃緑岩	砂岩	砂岩	砂岩	砂岩	砂岩	砂岩	砂岩	花崗岩	閃緑岩	花崗岩
備考						干支	干支		牌身上部に柄無 底部に柄	「上」は十か 牌身上下に柄	牌身上下に柄
西暦									1654	1660	1665

番号	S385	S386	S387	S388	S389	S390	S391	S392
遺構	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 1010	土坑 2085	土坑 1010	井戸 2135
形状	屋根付位牌型	屋根付位牌型	屋根付位牌型	屋根付位牌型	屋根付位牌型	屋根付位牌型	屋根付位牌型	屋根付位牌型
状態	笠無	ほぼ完存	ほぼ完存	ほぼ完存	笠無、上半分	笠無	ほぼ完存	左上半分
種子	阿弥陀三尊	キリーク	キリーク	阿弥陀三尊	無	無	阿弥陀三尊	キリーク
文字	寛文七丁未歳 夕月晴齋信女 八月晦日	月園淨意禪定尼 寛文九年 二月廿七日	【右側面】延宝三乙卯年十一月六日 立譽桐白信士 照月秋園信女	妙光位覺心信士 六月十九日 五月十二日	南無阿弥陀佛	院住是 四五世法蓮社 四世真蓮社 三世淨蓮社 二世淨蓮社 開基安蓮社 運譽文貞和尚 譽見貞和尚 宗譽見定和尚	月妙玄信女	
全高	82.0	43.0	53.8	37.5	48.8	76.2	51.5	16.2
幅	44.4	15.2	24.2	26.2	35.3	39.0	40.0	13.5
奥行		13.0	13.5	14.0	13.5	20.5	15.3	11.5
石材	花崗岩	花崗岩	花崗岩	花崗岩	花崗岩	花崗岩	花崗岩	閃緑岩
備考	牌身上に柄	左右上端に柄 牌身上下に柄	右下の角欠 底部に柄	右上の角欠 底部切離し		底部に柄	屋根と一体 左下欠	破片
西暦	1667	1669	1675					

第7節 一括出土銭

出土状況 第2遺構面B1グリッドで備前焼の壺を埋設した土坑を検出した。土坑は70cm×77cm、深さ72cmを測り、掘方は壺の大きさと形状に合わせて掘削している。壺の中には大量の銅銭が収められていた。壺は正位に据えられており、口は開放していた。壺の内部の堆積状況を観察すると、肩部付近にはまとまった土の堆積がなく、空隙ができていた。土層の観察から、口径の範囲の土はまとまって内部に落下しているため、もともとは木蓋のような有機物で蓋をしていたものが腐ったと推定される。

壺と内容物 遺物は備前焼の壺である。器高65.2cm、口径28.0cm、胴径53.2cm、底径26.0cmを測り、総重量は約290.9kg(銅銭として約274.9kg)である。頸部は直立し、口縁部は玉縁状に折り返される。肩部には「X印」の窯印が線刻されている。年代は15世紀代と考えられる。壺は完形で残存していたが、検出段階で複数のひび割れを確認していた。これは、検出高が現地表から30cmしか下がっていないこと



第73図 取り上げ作業風景

と、調査地は発掘調査直前まで立体駐車場として利用されていたため、車の往来が激しかったことによる土圧が原因と考えられる。また底部は内容物の自重により割れていた。現地より取り上げる際には、細心の注意を払って作業を行った。

取り上げ後に壺の表面を観察したところ、ちょうど断面ラインを通るひび割れを確認した。京都市埋蔵文化財保護課と協議し、半裁状態で内容物を観察できるように、ひび割れにそって壺の半分を割って外した。内容物を観察するとぎっしりとつまった緡銭が渦を巻いてきれいに収まっている状態が確認できた。保存状態は良好で、緡銭の紐も観察できた。収められた銭は壺の底部から57cmの高さまで詰められていた。底から4/5の肩部の下までは緡銭をらせん状に回しながら収められており、上部1/5に収められた緡銭は、平行に列を揃えて並べた状態で収められていた。一番上に置かれていたと考えられる銭は、緡銭が崩れて小さなまとまりで散乱している状態であった。

緡銭 緡銭の収め方が良好に残存している様子を観察できる資料のため、現状を維持しつつ中身の銭種を調べることとなった。そのため、緡銭が崩れて散乱した部分を主として、上から順に取り上げて銭種を調査・判別する資料とした。銭の数量は1537枚を目安とした。取り上げた銭は合計52種類・総数1654枚を数えた。そのうち3個体は緡銭の一単位をなしており、97枚で一単位百文とする緡銭であった。取り上げが終了した



第74図 一括出土銭(錆取り前)

後、収められた状態の銭の表面のさび取り作業を行った。緡銭の調査では全点にX線透過撮影を行って内部状態を確認したうえで、銭種、標示の鮮明度、法量、重量の他、表裏の重ね方を調べた(後述)。結果としては、銭種を選んで表裏を揃えて緡銭としている様相はとらえられなかった。銭種をみてもまとまりがなく、全体の平均と一致しているため、今回の一括出土銭では銭の選別という行為は認められない。

銭の数量推定 壺内に収納されている銭の数量は、銭の厚み・直径から換算して当初5万枚前後と推定していた。より正確な数値を得るため、保存処理が完了して壺を展示台へ設置した段階で重量を測定し、収納された銭の数量を推定した。

展示台を含めた遺物の総重量は368kgを測る。うち展示台(80.1kg)、壺(16.0kg:推定値)、薬剤(3.0kg:推定値)を差し引いた値が268.9kgである。ただしこれは銭種調査のため取り上げた上部の銭1654枚を含まない重量である。取り上げた上部の銭は、クリーニング前の合計重量が6.079kg(1枚平均3.68g)、クリーニング後の合計重量が5.454kg(1枚平均3.30g)であった。

上部の銭の重量にもとづいて全体の枚数を推定すると、クリーニング前の1枚平均3.68gとした最小値で7万4725枚、クリーニング後の1枚平均3.30gとした最大値で8万3139枚となった。また参考値として中世出土銭の1枚平均3.45gにもとづいた場合、7万8703枚となる。銭970枚(緡銭10単位)で1貫であることから、収納枚数は77貫(7万4690枚)から86貫(8万3420枚)の範囲に収まると考えられる。この数量は京都府下の出土例では最多となる。全国での出土例と比較すると、朝鮮通寶を最新銭として備前焼の甕に納められていた山口県興隆寺跡出土銭(294kg、推定8万9000枚)に近い類例である。

緡銭の取り上げ整理と保存処理 出土銭は壺を半裁して収納された緡銭を観察できる状態でクリーニングと保存処理を行い、上部を銭種調査のため取り上げ・整理した。取り上げる銭の数量は1537枚を基準とした。これは統計的に調査分析を行う上で、銭の全数量が5万枚以上のとき信頼係数95%・誤差±2.5%の条件を満たすサンプルサイズである。

$$n = N / \left(\frac{\varepsilon}{\mu(\alpha)} \right)^2 * \left(\frac{N-1}{\rho(1-\rho)} \right) + 1$$

n: サンプルサイズ (取り上げ枚数) N: 母集団の大きさ (銭の全枚数)
 ε: 誤差 (ここでは±2.5%) ρ: 母比率 0.5
 μ(α): 正規分布の値。信頼係数95%のとき1.96

まずエタノールとブラシ、刷毛等で表面にたまった土砂を洗浄し、ピンセットと竹串を使って銭のまとまりを取り上げた。取り上げ順に緡銭番号を付け、取り上げ位置および方向を記録した。銭はカッターナイフを使って一枚ごとに剥離し、元の並びを維持した状態で調査と保存処理を行った。

剥離した銭は重なっていたときの並びを維持した状態で、文字と内部状態を調査するためX線透過撮影を行った。その結果銭の地金が金属質として良好に残存しており、錆や泥の固着が表面のみにとどまることが確認できた。錆と泥の除去には、エチレンジアミン四酢酸三ナトリウム塩(EDTA・3Na)の5%水溶液を使用した。EDTA・3Naには金属イオン除去作用があり、pH8.0付

近の弱アルカリ性のため銭の地金への影響を抑えつつ、錆と泥を軟化し除去することができる。銭を EDTA・3Na 溶液に一定時間浸漬させ、純水で薬剤成分を洗浄したのち地金を傷つけないよう表面をクリーニングした。硬質な錆の除去には精密グラインダーを使用した。クリーニングした銭はエタノールで洗浄して脱水し、腐食の進行を抑えるため、ベンゾトリアゾール (BTA) のエタノール溶液を含浸させて安定化処理を行った。乾燥後、銭種調査と記録作業を行った。



第 75 図 錆取り作業

壺内の銭は緞銭の取り上げと分析用の緞紐を採取したのち、錆と泥をクリーニングした。底から高さ 15cm までは水の滞留の影響で、硬質な錆が厚く生成し、カルシウム・マグネシウムと考えられる白色の析出物が固着していた。不織布片に EDTA・3Na 水溶液を含ませたものを緞銭の表面に短時間湿布し、精密グラインダー、アートナイフ、竹串等を使って不要な錆を除去した。クリーニング後は BTA のエタノール溶液を洗浄に使用するとともに内部にも注入し、安定化処理とした。乾燥後、アクリル樹脂パラロイド NAD-10 を溶剤ナフサに溶かして BTA を添加した樹脂溶液を含浸した。壺内の銭は地金の保存状態が良好なまま、緞銭同士が錆で接着したことで収納時の形状が保持されていると推測できる。このため銭内部の強化ではなく、銭の表面と接着面を構造的に補強するため、柔軟性のあるアクリル樹脂パラロイド NAD-10 を使用した。段階的に濃度を上げながら樹脂溶液を噴霧・滴下し、乾燥固化させることを 2 度繰り返した。約 1 ヶ月送風乾燥したのち、表面仕上げを行った。

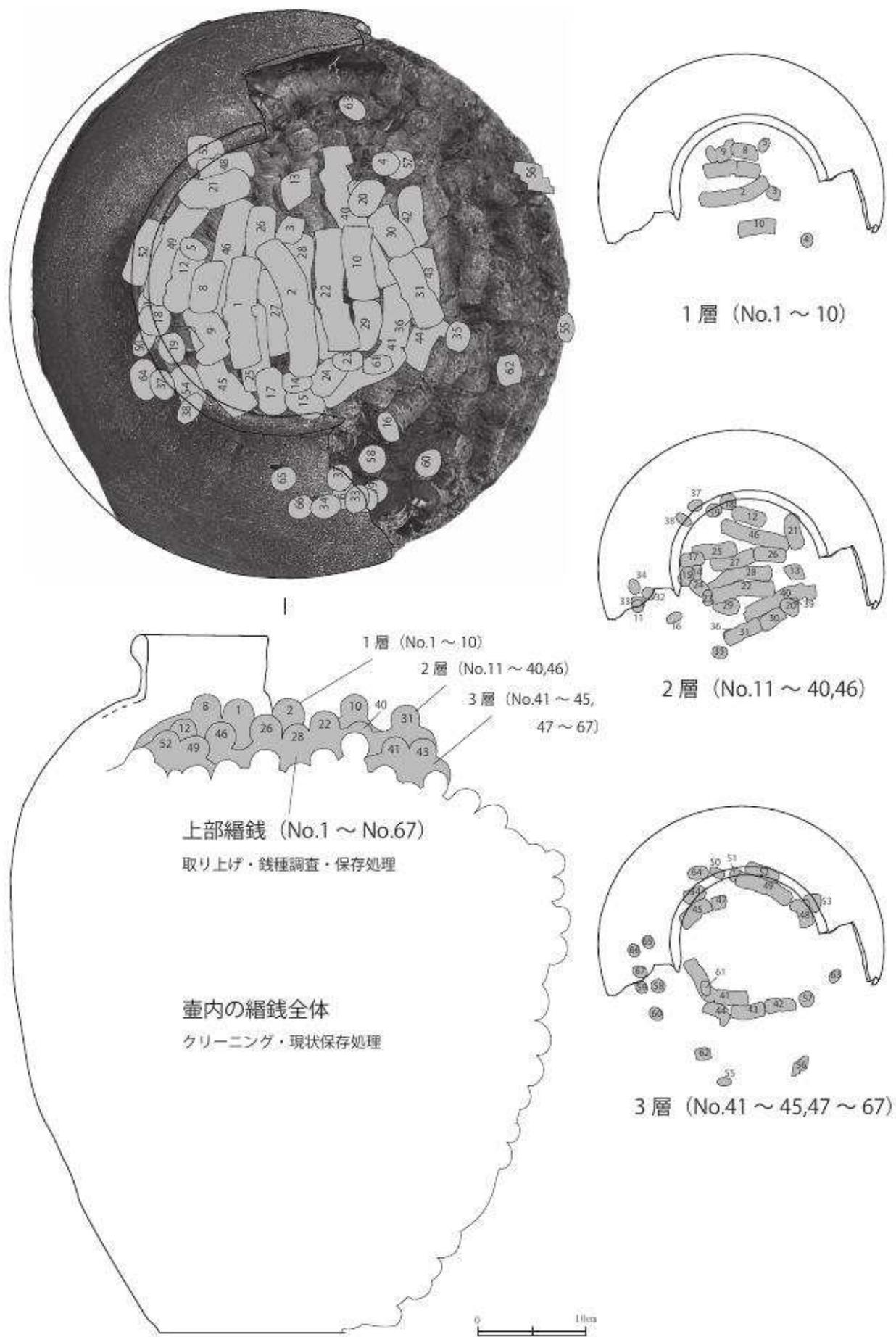


第 76 図 保存処理作業

また、採取した緞紐を電子顕微鏡で観察したところ、材質が皮革であるとの結果を得た。(第 5 章で詳述)

X 線透過撮影による調査 X 線透過撮影による出土銭の文字判別と構造調査を試みた。X 線透過撮影とは、X 線が物質を透過して検出面に正射投影されることを利用して、物質内部の構造や欠陥を調べる方法である。物質の密度や厚さを 2 次元的なグレースケール画像によって識別することができる。

金属貨幣は材料が金、鉛、銀、銅、鉄、アルミニウムの順で密度が高い。より重く密度が高く、より厚みのある貨幣ほど X 線を透過しにくい。同一素材で比較した場合、厚みの差のほか、密度の低い腐食部位と金属の残存が良好な部分を識別できる。このため錆などの付着物に覆われた下の文字・形状や、内部にできた空隙を観察することができる。



第77図 一括出土銭取り上げ図

今回の調査では、表面が錆に覆われた銭の文字を判別するとともに、鑄造時にできた鑄巣（空隙）の発生度合いを調査した。鑄巣は表面に表れれば美観を損ね、内部構造の強度も下がるため、鑄巣の少ない銭が良質で技術的に優れているとあって差し支えない。鑄巣の発生度合いを基準にして鑄造精度をA・B・Cの3段階で区分した（第78図）。

鑄造精度 A	鑄造精度 B	鑄造精度 C
鑄巣がまったく発生していない均質で良好なもの	鑄巣が少量・部分的に発生しているもの	多孔質の鑄巣が多量に発生し銭文の判読が不可能なもの
  No.25-97 永楽通寶	  No.41-59 皇宋通寶	  No.26-1 熙寧元寶

第78図 X線透過撮影による鑄造精度の区分

使用した装置はリガク製X線透過検査装置 RF-200EGM2 で、撮影条件は管

電圧 80kV・管電流 5mA・照射時間 30 秒である。富士フィルム製イメージングプレートに感光させ、リガク製 IP スキャナで読み取りピッチ 50 μ m (500dpi 相当) のデジタル画像として取り込み、コントラスト調整と鮮明化処理を行った画像を調査に使用した。

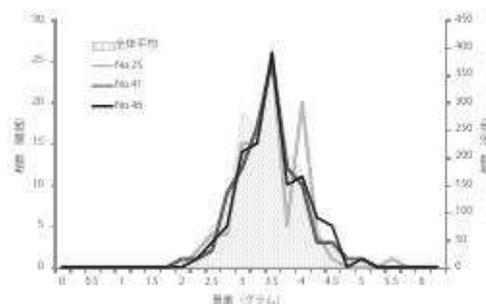
鑄巣が発生していない鑄造精度 A に分類できる銭は 512 枚あり、明銭（大中通寶、洪武通寶、永楽通寶、宣徳通寶）が多くを占める。明銭が内部構造の観察からも、良質な精銭であることが裏付けられた。唐銭である開元通寶にも鑄造精度 A が多く含まれ、北宋銭を上回る品質といえる。ただし鑄造技術が向上した後年の摸鑄銭である可能性は否定できない。

部分的に鑄巣が含まれる鑄造精度 B の銭は、1043 枚と全体の 63% を占める。北宋銭は今回調査したおおよそ 7 割にあたるが、とくに鑄造精度 B に分類される銭が多くみられた。

多孔質の鑄巣が発生していた鑄造精度 C の銭は 99 枚である。開元通寶と北宋銭の主要な銭種に一部前後含まれており、永楽通寶でも 3 枚を確認している。

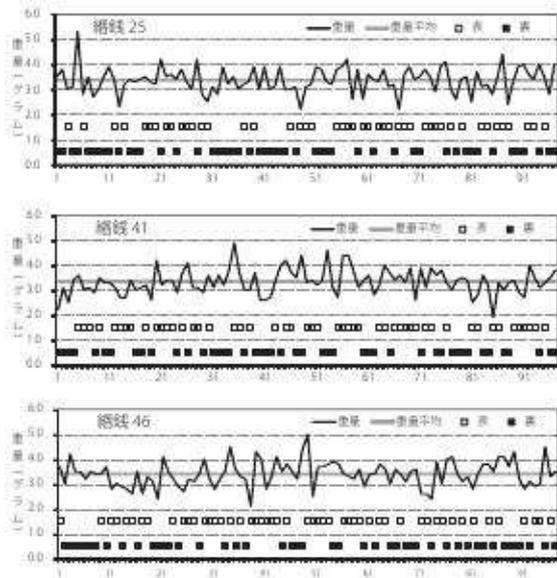
鑄造精度と文字鮮明度は相関し、鑄造精度が高い銭ほど外観も精緻な傾向にあるが、内部に多孔質の鑄巣がある場合でも、表面状態は他の銭と大差なく銭文が確認できる銭もあった。鑄巣は溶けた金属が冷えて固まるときの収縮とガスの発生が原因である。合金組成、鑄込み温度、鑄型の形状・材質などが複合的に関わるため、鑄巣の発生状況だけで技術的要因を特定することはできない。摸鑄銭の特徴のひとつとして鑄造不良が挙げられるが、年代が下るにつれて鑄造技術が向上・普及している可能性があるため、一概に摸鑄銭の判別をすることは難しい。唐銭だが鑄造精度の高い開元通寶などは本銭・摸鑄銭の判断には注意を要する。

緡銭の重量分布と表裏の配列 取り上げた銭のうち 97 枚が揃った 3 本の緡銭について、緡を作るさいに重量による銭の選別や表裏を揃えるといった恣意的行為が認められるかを検証した。大阪府能勢町の吉野遺跡出土銭の検討結果によると、緡銭を作るさいにあ



第79図 一括出土銭の重量別分布

らかじめ軽い銭を除外し、7枚から10枚単位でまとめて紐に通していき、最終的に一縗の重量が332g ± 5gに収まるように縗の一端で重量調整をしたと推測されている。また紐に通すときの銭のまとまりには、銭の表裏を意図的に揃えたものがいくつか認められると指摘されている。第79図には今回取り上げた銭1654枚全体と縗銭3本に使われた銭を、重量別分布のヒストグラムで示した。また第80図は縗銭の並び順に、銭の重量と表裏の分布を示したものである。あわせて、銭の表もしくは裏が連続して並んでいた回数を、計算上の期待値とともに示した。



第80図 縗銭表裏・重量グラフ

97枚を束ねた縗銭の重量は、No. 25が326.70g、No. 41が324.00g、No. 46が329.92gであった。銭の重量別分布としては、1654枚の全体では3.5gの銭が最多のピークとなっており、1.4gから5.6gの範囲で正規分布に近い曲線を描く。錆（腐食）による重量増減の影響はあるが、全体では最も軽い銭と重い銭で4倍の差がある。縗銭ごとの重量別分布はばらつきは認められるが全体とほぼ同様の傾向を示し、いずれの縗でも3.5gが最多であった。

／連続枚数	3枚	4枚	5枚	6枚	7枚
計算上の出現回数 (期待値)	6.063	3.000	1.484	0.734	0.363
縗銭25の実際値	9	3	1	2	0
縗銭41の実際値	4	5	3	0	0
縗銭46の実際値	3	4	1	1	1

(単位は回数)

第81図 縗銭の表裏出現期待値

縗銭を作るさいに重量を合わせようとした場合、縗の端部で軽い銭や重い銭を重ねて使って調整した可能性がある。ここで調査した3本の縗銭については重量がランダムに分布しており、意図的に重さを調整したとする要素を抽出することは難しい。

銭の表または裏が意図せず連続して出現する回数を、吉野遺跡出土銭の検討で用いられた計算式を使用して期待値と比較した(第81図)。連続枚数は7枚が最多である。3本の縗銭をそれぞれ比較すると一見して期待値とのずれがみられるが、出現回数を3本で平均した場合、連続枚数3枚から7枚で期待値からの誤差はいずれも1回以内に収まった。これらの結果から、今回調査した出土銭については、縗を作るさいに重量による選別や表裏を揃えるといった行為はなかったと考えられる。

銭種 取り上げた銭を銭種ごとで年代順および数量順でグラフにまとめた(第11・12表)。また取り上げた全点の銭種・鮮明度・法量などを一覧表にまとめた(第15表、付録CD-R収録)。

銭種は合計52種類を確認した。年代は唐銭の開元通宝(初鑄年代621年)を最古として、明銭の宣徳通寶(初鑄年代1433年)までが含まれていた。銭種をみて初鑄された王朝別にするると、北宋銭以前が7.7%(128枚)、北宋銭が70.9%(1175枚)、南宋銭が2.1%(36枚)、明銭

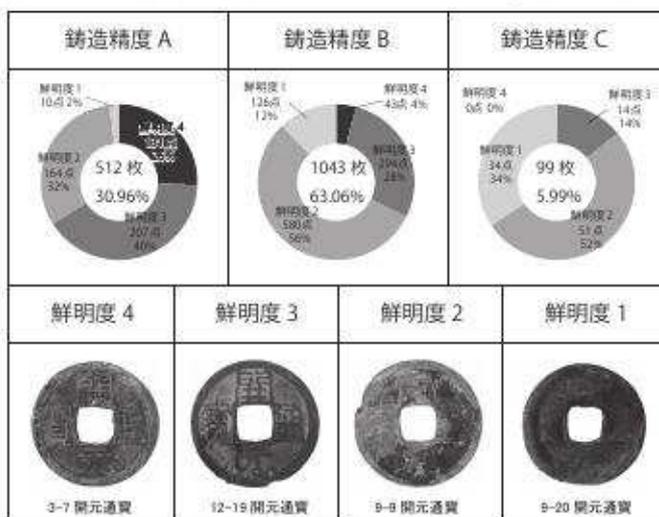
が17.4% (287枚)、金・朝鮮銭などが1.7% (28枚)で、さび取りを行っても銭種が不明なものも19枚を数える。主に南宋銭の裏面には「浙」などの鑄造施設の地名などがつけられるものみられる(1-52など)。また、孔は方形に鑄だされているが、方形の枠と異なった穿孔状態になっている「星形孔銭」(1-10など)や直径1mmにもみたくない円孔を鑄造後に穿った銭(1-8)も含まれている。なぜこのような銭があるのか詳細は不明であるが、不規則に混入することから一括出土銭の特徴というよりも、銭単体の特徴としてとらえられるものである。

銭の大きさや重さに注目すると、出土した銭は直径20.3～27.8mmと幅があり平均的な大きさは24mmである。洪武通宝は中国大陸で使用される際に区別された大きさによる銭の価値の違いがあり(4種類の大きさがあるとされる)、特に小さな20mm程度のものは特殊なものである。日本国内で使用されるときには大小の区別はなかったと考えられる。また、厚みも0.78mm～1.98mmと幅があり、数値以上に質感に違いを感じられる。

模鑄銭について 中世の貨幣経済を紐解くと国営の銭が存在しない日本において、大陸から大量の銭を輸入していた歴史がある。それでも不足すると国内で模鑄を始めるようになり、14世紀代には京都で宋銭を鑄造した鑄型が出土している。その他、博多や鎌倉でも鑄型が見つかり、16世紀には堺でも模鑄していたと考えられる。

模鑄銭の定義は確立していないが、比較的薄くて銭文が不鮮明なものが模鑄銭とされている。裏面の孔や額の高低差がなく、平坦なものほど模鑄銭の可能性が高い。母銭から型をとるため型の収縮により模鑄銭は小さくなりやすく、相対的に中心の孔が大きく感じられる。銭種が不鮮明なことも関係する。模鑄銭は最終的に無文銭となり、銭種すらも標文しなくなる。堺の環濠都市で出土した鑄型には無文銭の鑄型も多くあり、16世紀後半には無文銭が流通していたと考えられる。

出土した一括出土銭をみると、開元通寶、洪武通寶、永樂通寶、宣徳通寶がしっかりとした文字で認識でき、地金の質感も良質に感じる。これら以外の銭は比較的銭文の標示が不鮮明で、鑄造の精度が劣る。文字の鮮明度を任意の4段階(4がもっとも鮮明にみえ、1は文字の認識が不可能なもの)にすると(第82図および第11・12表)、この様相がはっきりとする。精銭は唐銭と明銭に集中する。明銭は出土した一括出土銭のなかで新しい様相の銭になるため、輸入された本銭である可能性が高い。しかし唐銭は初鑄から1000年近い年代の開きがあるにも関わらず、明銭と同等の質である。数で大半を占める北宋銭が鑄造精度と鮮明度で劣るのに対して際立つ存在といえる。開元通寶は鑄造技術が向上した後年の製造という可能性を含み、模鑄銭の抽出条件にも疑問を投げかける内容で位



第82図 鑄造精度ごとの銭文鮮明度比率

置づけは難しい。北宋銭は不鮮明なものが多く、模鑄銭が大部分を占める可能性が考えられる。また永楽通寶のなかにも文字の不鮮明なものもあり、一部模鑄が始まっているととらえられる。

一括出土銭の年代 壺の年代は15世紀代¹⁾、調査した銭の最新銭は宣徳通寶(初鑄年代1433年)である。一括出土銭の編年では、15世紀第4四半期から16世紀第1四半期(鈴木6期)²⁾の一括出土銭であると考えられる。埋納土坑は第2調査面の遺構(16世紀後半以降、桃山時代～江戸時代)として検出しており、遺物をもっとも新しく見積もっても年代差が100年近い。しかし永楽通寶の模鑄銭と考えられる銭も混入していることから、宣徳通寶を最新銭とする6期よりも新しい様相を示している可能性がある。鈴木7期以降の基準となる銭は鑄造量・流通量が極めて少なく出土例も希少であるとされる。また明銭の模鑄銭が含まれる場合は年代が下って時期区分がより困難になるため、現状ではこれ以上の識別は難しい。

註

1) 岡山市教育委員会乗岡実氏、備前市教育委員会石井啓氏の実見による。

2) 鈴木公雄1976「出土備蓄銭と中世後期の銭貨流通」『史学』第61巻第3・4号 但し、鈴木論文では銭名のみで判別しており模鑄銭を考慮していない。また7期以降の指標となる銭種の流通量がきわめて少ない貨幣に依っていることから単純に線引きできないところがある。(堺市教育委員会嶋谷和彦氏のご教示による。)

参考文献

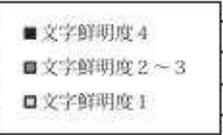
川本耕三1994「キレート剤による青銅錆の除去法の研究(1)」『考古学と自然科学』第27号

東北中世考古学会編2001『中世の出土模鑄銭』

嶋谷和彦2007「緡銭」『歴史考古学大辞典』吉川弘文館

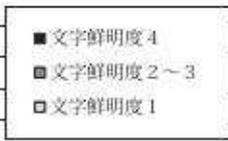
第11表 錢貨觀察表 (種別年代順)

番号	種別	鑄造国	初鑄年	数量 (割合)
1	開元通寶 (真書)	唐	武德四 (621) 年	115(6.95%)
2	貞元重寶	唐	貞元二 (759) 年	9(0.54%)
3	唐国通寶	南唐	交泰元 (985) 年	1(0.06%)
4	開元通寶 (篆書)	南唐	即位四 (966) 年	3(0.18%)
5	宋通元寶	北宋	建隆元 (960) 年	9(0.54%)
6	太平通寶	北宋	太平興国元 (976) 年	11(0.67%)
7	淳化元寶	北宋	淳化元 (990) 年	9(0.54%)
8	至道元寶	北宋	至道元 (995) 年	20(1.21%)
9	咸平元寶	北宋	咸平元 (998) 年	26(1.57%)
10	景德元寶	北宋	景德元 (1004) 年	29(1.75%)
11	祥符元寶	北宋	大中祥符元 (1008) 年	43(2.60%)
12	祥符通寶	北宋	大中祥符二 (1009) 年	21(1.27%)
13	天禧通寶	北宋	天禧元 (1017) 年	32(1.93%)
14	天聖元寶	北宋	天聖元 (1023) 年	71(4.29%)
15	明道元寶	北宋	明道元 (1032) 年	8(0.48%)
16	景祐元寶	北宋	景祐元 (1034) 年	30(1.81%)
17	皇宋通寶	北宋	宝元二 (1039) 年	150(9.07%)
18	至和元寶	北宋	至和元 (1054) 年	13(0.79%)
19	至和通寶	北宋	至和元 (1054) 年	5(0.30%)
20	嘉祐元寶	北宋	嘉祐元 (1056) 年	21(1.27%)
21	嘉祐通寶	北宋	嘉祐元 (1056) 年	30(1.81%)
22	治平元寶	北宋	治平元 (1064) 年	35(2.12%)
23	治平通寶	北宋	治平元 (1064) 年	5(0.30%)
24	熙寧元寶	北宋	熙寧元 (1068) 年	118(7.13%)
25	熙寧重寶	北宋	熙寧元 (1068) 年	1(0.06%)
26	元豐通寶	北宋	元豐元 (1078) 年	152(9.19%)
27	元祐通寶	北宋	元祐元 (1086) 年	118(7.13%)
28	紹聖元寶	北宋	紹聖元 (1094) 年	60(3.63%)
29	元符通寶	北宋	元符元 (1098) 年	23(1.39%)
30	聖宋元寶	北宋	建中靖国元 (1101) 年	52(3.14%)
31	大觀通寶	北宋	大觀元 (1107) 年	17(1.03%)
32	政和通寶	北宋	政和元 (1111) 年	63(3.81%)
33	宣和通寶	北宋	宣和元 (1119) 年	3(0.18%)
34	淳熙元寶	南宋	淳熙元 (1174) 年	7(0.42%)
35	慶元通寶	南宋	慶元元 (1195) 年	2(0.12%)
37	嘉泰通寶	南宋	嘉泰元 (1201) 年	1(0.06%)
38	開禧通寶	南宋	開禧元 (1205) 年	2(0.12%)
39	嘉定通寶	南宋	嘉定元 (1208) 年	5(0.30%)
40	紹定通寶	南宋	紹定元 (1228) 年	2(0.12%)
41	嘉熙通寶	南宋	嘉熙元 (1237) 年	1(0.06%)
42	淳祐元寶	南宋	淳祐元 (1241) 年	2(0.12%)
43	皇宋元寶	南宋	宝祐元 (1253) 年	7(0.42%)
44	景定元寶	南宋	景定元 (1260) 年	3(0.18%)
45	咸淳元寶	南宋	咸淳元 (1266) 年	4(0.24%)
46	正隆元寶	金	正隆三 (1158) 年	1(0.06%)
47	大中通寶	明	至正二十一 (1361) 年	3(0.18%)
48	洪武通寶	明	洪武元 (1368) 年	69(4.17%)
49	永樂通寶	明	永樂六 (1408) 年	208(12.58%)
50	宣德通寶	明	宣德八 (1433) 年	7(0.42%)
51	東国通寶	高麗	肅宗二 (1097) 年	3(0.18%)
52	海東通寶	高麗	肅宗二 (1097) 年	1(0.06%)
53	朝鮮通寶	李氏朝鮮	世宗五 (1423) 年	4(0.24%)
54	判読不可			19(1.15%)



第12表 錢貨觀察表 (種別数量順)

順位	種別	鑄造国	初鑄年	数量 (割合)
1	永樂通寶	明	永樂六 (1408) 年	208(12.58%)
2	元豐通寶	北宋	元豐元 (1078) 年	152(9.19%)
3	皇宋通寶	北宋	寶元二 (1039) 年	150(9.07%)
4	熙寧元寶	北宋	熙寧元 (1068) 年	118(7.13%)
4	元祐通寶	北宋	元祐元 (1086) 年	118(7.13%)
6	開元通寶 (真書)	唐	武德四 (621) 年	115(6.95%)
7	天聖元寶	北宋	天聖元 (1023) 年	71(4.29%)
8	洪武通寶	明	洪武元 (1368) 年	69(4.17%)
9	政和通寶	北宋	政和元 (1111) 年	63(3.81%)
10	紹聖元寶	北宋	紹聖元 (1094) 年	60(3.63%)
11	聖宋元寶	北宋	建中靖國元 (1101) 年	52(3.14%)
12	祥符元寶	北宋	大中祥符元 (1008) 年	43(2.60%)
13	治平元寶	北宋	治平元 (1064) 年	35(2.12%)
14	天禧通寶	北宋	天禧元 (1017) 年	32(1.93%)
15	景祐元寶	北宋	景祐元 (1034) 年	30(1.81%)
15	嘉祐通寶	北宋	嘉祐元 (1056) 年	30(1.81%)
17	景德元寶	北宋	景德元 (1004) 年	29(1.75%)
18	咸平元寶	北宋	咸平元 (998) 年	26(1.57%)
19	元符通寶	北宋	元符元 (1098) 年	23(1.39%)
20	祥符通寶	北宋	大中祥符二 (1009) 年	21(1.27%)
20	嘉祐元寶	北宋	嘉祐元 (1056) 年	21(1.27%)
22	至道元寶	北宋	至道元 (995) 年	20(1.21%)
23	判読不可			19(1.15%)
24	大觀通寶	北宋	大觀元 (1107) 年	17(1.03%)
25	至和元寶	北宋	至和元 (1054) 年	13(0.79%)
26	太平通寶	北宋	太平興國元 (976) 年	11(0.67%)
27	乾元重寶	唐	乾元二 (759) 年	9(0.54%)
27	宋通元寶	北宋	建隆元 (960) 年	9(0.54%)
29	淳化元寶	北宋	淳化元 (990) 年	9(0.54%)
30	明道元寶	北宋	明道元 (1032) 年	8(0.48%)
31	淳熙元寶	南宋	淳熙元 (1174) 年	7(0.42%)
31	皇宋元寶	南宋	寶祐元 (1253) 年	7(0.42%)
31	宣德通寶	明	宣德八 (1433) 年	7(0.42%)
34	至和通寶	北宋	至和元 (1054) 年	5(0.30%)
34	治平通寶	北宋	治平元 (1064) 年	5(0.30%)
34	嘉定通寶	南宋	嘉定元 (1208) 年	5(0.30%)
37	咸淳元寶	南宋	咸淳元 (1266) 年	4(0.24%)
37	朝鮮通寶	李氏朝鮮	世宗五 (1423) 年	4(0.24%)
39	開元通寶 (篆書)	南唐	即位四 (966) 年	3(0.18%)
39	宣和通寶	北宋	宣和元 (1119) 年	3(0.18%)
39	景定元寶	南宋	景定元 (1260) 年	3(0.18%)
39	大中通寶	明	至正二十一 (1361) 年	3(0.18%)
39	東國通寶	高麗	肅宗二 (1097) 年	3(0.18%)
44	慶元通寶	南宋	慶元元 (1195) 年	2(0.12%)
44	開禧通寶	南宋	開禧元 (1205) 年	2(0.12%)
44	紹定通寶	南宋	紹定元 (1228) 年	2(0.12%)
44	淳祐元寶	南宋	淳祐元 (1241) 年	2(0.12%)
48	唐國通寶	南唐	交泰元 (985) 年	1(0.06%)
48	熙寧重寶	北宋	熙寧元 (1068) 年	1(0.06%)
48	嘉泰通寶	南宋	嘉泰元 (1201) 年	1(0.06%)
48	嘉熙通寶	南宋	嘉熙元 (1237) 年	1(0.06%)
48	正隆元寶	金	正隆三 (1158) 年	1(0.06%)
48	海東通寶	高麗	肅宗二 (1097) 年	1(0.06%)



第13表 錢貨觀察表 (緡錢)

番号	種別	緡錢 25-1~97	緡錢 41-1~97	緡錢 46-1~97	全体 1~1654
1	開元通寶 (真書)	68.19%	68.19%	10(10.31%)	115(6.95%)
2	乾元重寶	0(0.00%)	2(2.06%)	0(0.00%)	9(0.54%)
3	唐國通寶	1(1.03%)	0(0.00%)	0(0.00%)	1(0.06%)
4	開元通寶 (篆書)	0(0.00%)	0(0.00%)	1(1.03%)	3(0.18%)
5	宋通元寶	0(0.00%)	0(0.00%)	1(1.03%)	9(0.54%)
6	太平通寶	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	11(0.67%)
7	淳化元寶	1(1.03%)	0(0.00%)	1(1.03%)	9(0.54%)
8	至道元寶	1(1.03%)	0(0.00%)	1(1.03%)	2(0.12%)
9	咸平元寶	0(0.00%)	2(2.06%)	1(1.03%)	26(1.57%)
10	景德元寶	0(0.00%)	1(1.03%)	3(3.09%)	29(1.75%)
11	祥符元寶	4(4.12%)	5(5.15%)	1(1.03%)	43(2.60%)
12	祥符通寶	2(2.06%)	2(2.06%)	1(1.03%)	21(1.27%)
13	天禧通寶	1(1.03%)	4(4.12%)	1(1.03%)	32(1.93%)
14	天聖元寶	7(7.22%)	3(3.09%)	5(5.15%)	71(4.29%)
15	明道元寶	0(0.00%)	0(0.00%)	1(1.03%)	8(0.48%)
16	景祐元寶	2(2.06%)	2(2.06%)	1(1.03%)	3(0.18%)
17	皇宋通寶	12(12.37%)	10(10.31%)	11(11.34%)	150(9.07%)
18	至和元寶	1(1.03%)	0(0.00%)	0(0.00%)	13(0.79%)
19	至和通寶	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	5(0.30%)
20	嘉祐元寶	2(2.06%)	0(0.00%)	0(0.00%)	21(1.27%)
21	嘉祐通寶	1(1.03%)	3(3.09%)	2(2.06%)	3(0.18%)
22	治平元寶	1(1.03%)	3(3.09%)	0(0.00%)	35(2.12%)
23	治平通寶	1(1.03%)	0(0.00%)	0(0.00%)	5(0.30%)
24	熙寧元寶	1(1.03%)	4(4.12%)	6(6.19%)	118(7.13%)
25	熙寧重寶	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	1(0.06%)
26	元豐通寶	6(6.19%)	5(5.15%)	13(13.40%)	152(9.19%)
27	元祐通寶	9(9.28%)	7(7.22%)	8(8.25%)	118(7.13%)
28	紹聖元寶	6(6.19%)	2(2.06%)	3(3.09%)	6(0.36%)
29	元符通寶	1(1.03%)	1(1.03%)	0(0.00%)	23(1.39%)
30	聖宋元寶	4(4.12%)	0(0.00%)	4(4.12%)	52(3.14%)
31	大觀通寶	2(2.06%)	1(1.03%)	0(0.00%)	17(1.03%)
32	政和通寶	1(1.03%)	7(7.22%)	5(5.15%)	63(3.81%)
33	宣和通寶	1(1.03%)	0(0.00%)	0(0.00%)	3(0.18%)
34	淳熙元寶	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	7(0.42%)
35	慶元通寶	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	2(0.12%)
37	嘉泰通寶	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	1(0.06%)
38	開禧通寶	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	2(0.12%)
39	嘉定通寶	1(1.03%)	1(1.03%)	1(1.03%)	5(0.30%)
40	紹定通寶	1(1.03%)	0(0.00%)	0(0.00%)	2(0.12%)
41	嘉熙通寶	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	1(0.06%)
42	淳祐元寶	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	2(0.12%)
43	皇宋元寶	3(3.09%)	0(0.00%)	0(0.00%)	7(0.42%)
44	景定元寶	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	3(0.18%)
45	咸淳元寶	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	4(0.24%)
46	正隆元寶	1(1.03%)	0(0.00%)	0(0.00%)	1(0.06%)
47	大中通寶	0(0.00%)	0(0.00%)	1(1.03%)	3(0.18%)
48	洪武通寶	3(3.09%)	4(4.12%)	1(1.03%)	69(4.17%)
49	永樂通寶	10(10.31%)			
50	宣德通寶	1(1.03%)	21(21.65%)	14(14.43%)	7(0.42%) 208(12.58%)
51	東國通寶	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	3(0.18%)
52	海東通寶	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	1(0.06%)
53	朝鮮通寶	1(1.03%)	0(0.00%)	0(0.00%)	4(0.24%)
54	判断不可	2(2.06%)	1(1.03%)	0(0.00%)	19(1.15%)

第5章 科学分析

寺町旧域出土絹銭紐の材質同定

1. はじめに

寺町旧域で出土した絹銭の紐について、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いた形状観察で材質の同定を行なった。なお同定に際し、東北大学の鈴木三男氏、帝塚山大学の村上智見氏、釜山大学の林 志暎氏のご教示を得た。

2. 試料と方法

試料は、備前焼の壺内から検出された絹銭の紐で、絹銭の腐食生成物によって形状が保たれた有機質の痕跡である。備前焼の壺は15世紀代であると考えられている。

試料はまず、実体顕微鏡にて形状観察および写真撮影を行なった。その後、紐の横断面と側面についてカミソリまたは手で切断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子（株）製 JSM-5900LV）にて検鏡および写真撮影を行なった。

3. 結果

絹銭紐と現生牛革の細胞組織を比較した結果、絹銭紐の材質は皮革と確認できた。次に、同定された皮革の特徴を記載し、図版に絹銭紐および現生牛革の実体・走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) 皮革 leather (第83図 1-6)

獣毛および膠原繊維束が確認された。獣毛の横断面形態は円状で、直径は5～10 μ mの綿毛と、20～50 μ mの刺毛がみられる。横断面の観察では獣毛中心には毛髄質がみられ、その周囲に毛皮質がみられる。またその周囲にみられる毛小皮は、側面観察では螺旋状となる。

横断面では、膠原繊維がまとまって多角形の太い繊維束となる。繊維束の径は約20～50 μ mである。側面観察では細分された膠原繊維が、緩やかに交錯するのが確認された。

以上の特徴から、試料は動物皮の真皮層であると考えられるが、皮革の種類までは確認できなかった。

(2) 現生牛革 Modern oxhide (第83図 7-8)

膠原繊維束が確認された。膠原繊維はまとまって多角形の太い繊維束となる。繊維束の径は約20～50 μ mである。側面観察では細分された膠原繊維が、緩やかに交錯するのが確認された。現生牛革では完全に脱毛されており、獣毛は確認できなかった。

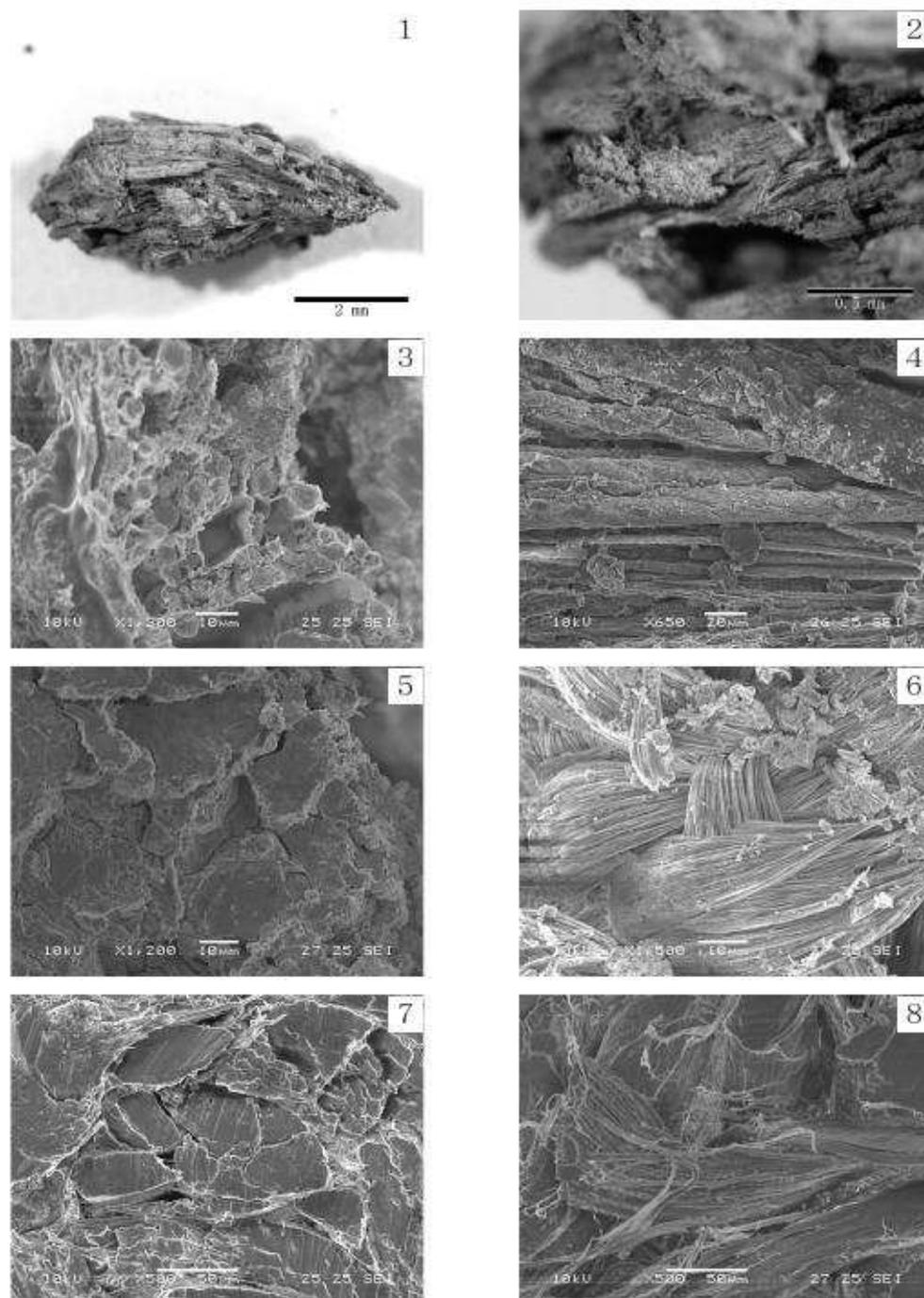
4. 考察

同定の結果、備前焼の壺内で検出された絹銭の紐の材質は、皮革であった。走査型電子顕微鏡

観察では、膠原繊維束の他に、刺毛および綿毛といった獣毛が真皮内から多数確認されたが、真皮表面に毛が観察されないことから、不完全な脱毛処理による毛根部の残存と考えられる。紐という用途からも毛皮であったとは考え難い。

参考文献

日本皮革技術協会編（1987）革および革製品用語辞典，268p，株式会社光生館。



第83図 寺町旧城出土縹銭紐と現生牛皮の実体・走査型電子顕微鏡写真

1. 縹銭紐の実体顕微鏡写真、2. 縹銭紐の実体顕微鏡拡大写真、3. 縹銭紐獣毛の横断面、
4. 縹銭紐獣毛の側面、5. 縹銭紐膠原繊維の横断面、6. 縹銭紐膠原繊維の側面、
7. 現生牛革膠原繊維の横断面、8. 現生牛革膠原繊維の側面

第6章 まとめ

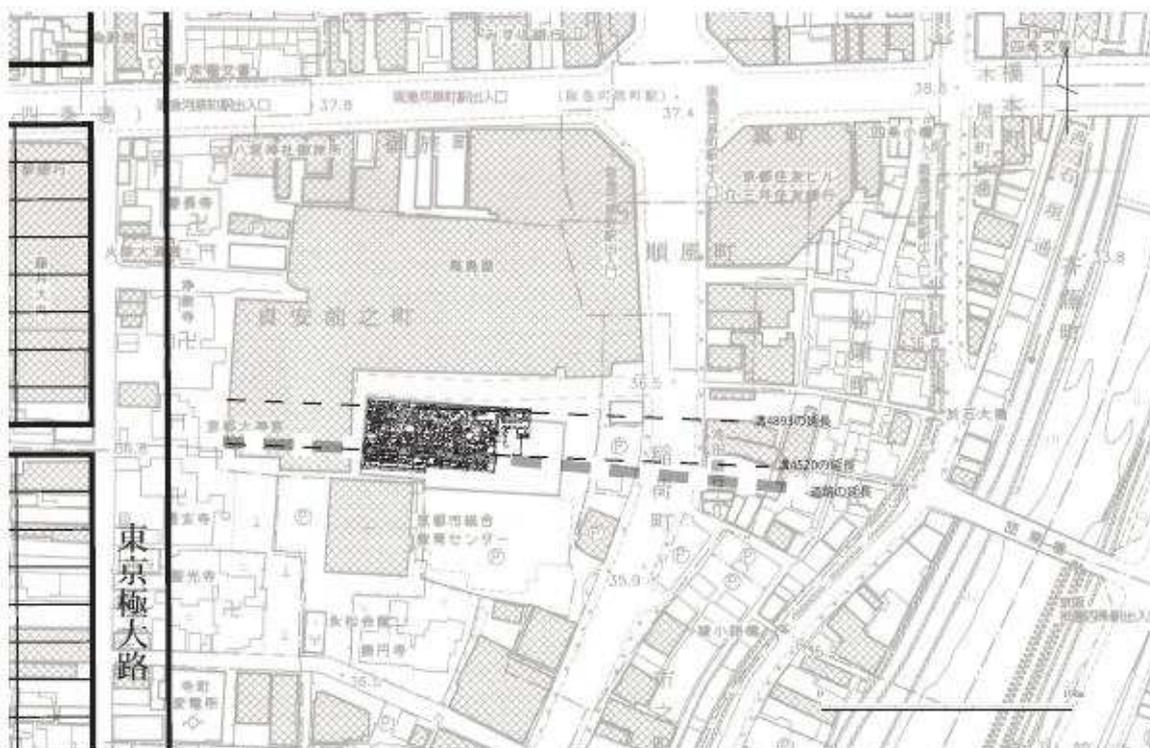
第1節 当該地の変遷

今回の調査では平安時代（11世紀後半）から現代にかけてのさまざまな遺構・遺物を調査することができた。ここでは調査地における各時代の土地利用の変遷を概観し、それに伴う各論をまとめてみたい。

1. 変遷 平安京の外側に位置する調査地が人為的に開発されるようになったのは、平安時代（11世紀後半）以降のことである。藤原良相（813 - 867）によって一族の子息を養う施設として設けられた崇親院の範囲に含まれるとされるが、定かではない。発掘によって明らかになった土地利用の嚆矢は道路利用である。平安時代後期の遺物を含む土砂で、堤防状に積み上げられた道路は幅5m、高低差0.7mを測り、綾小路よりさらに東側に伸びていたと考えられる。綾小路末とも呼ぶべき小路は方向を変えながら鴨川へ向かう。また、区画溝と考えられる溝を検出しており（溝4520、溝4893）、これらを基準にすると洛中と異なった洛外の変則的な区画が想定できる（第84図）。溝同士の距離はおよそ15mを測るため、四行八門における1戸主の区画と同じ間隔といえる。洛外での開発の基準となったと考えられる。

2. 道路遺構 検出した道路遺構は堤防状の道路で盛土によって形成されていた。上端は約5m、下端で6mを測る。検出長は約60mで、調査区の途中でわずかに方向を変える。平安京の綾小路（現綾小路通）を東に延長する位置で、現在鴨川に掛かる団栗橋の方向へと続く。

道路の構造は方向の変わる部位の東西で造り方が異なっており、西側は細かい層序で構成され



第84図 綾小路末想定図（縮尺1/3,000）

る版築構造で、東側は部分的な版築はみられるものの人頭大の礫を含むような粗い堆積によって造られている。道路側溝がなく、道路の下端に沿って直径30cm前後の柱穴が連続して検出できた。遺構の復元が困難であるが、道路の造成段階における痕跡ではないだろうか。道路には3ヵ所ほど補修と考えられる痕跡を確認している。この補修によって道路は枡形に掘りぬかれ、改めて道路面を造成している。その際、道路下端に連続するピットが埋没している状況が見取れた。

道路の構造上の特徴の一つとして、水はけに優れていることがあげられる。特に版築構造は密度の異なる物体を互層に積み上げることによって階層的に水を逃がし、全体に浸食しないような構造となっている。現在の道路工事でも採用される工法であり、強固に作られている。また、調査区の地層は水はけが非常によいため、側溝を設ける必要がなかったと考えられる。

それでは道路はどのような理由で造られたのであろうか。道路の先にある鴨川に掛かる団栗橋は文献資料によると1700年ごろに架けられた橋で、どの「洛中洛外図」にも描かれていない。さらにその先には建仁寺がある。建仁寺は鎌倉時代初頭に榮西によって開山し元久二年(1205)に落慶している。道路敷設以後のことで直接関係はないが、建仁寺は五条から七条に至る鴨川東岸に広がる六波羅の北部に位置しており、道路建設時の年代(12世紀前半ごろか)を考えると洛中と六波羅の平家との結びつきが推定される。交通の便から江戸時代に団栗橋が架けられていると考えられるため、平安時代に造られた道路の存在からそのきっかけを見いだすことができるかもしれない。鴨川を渡る橋は、基本的に徒歩のみで、牛車や荷車は川を渡っていることから、この道路は主に運搬道として利用されていたのかもしれない。今回、文献にも現れていない道路の存在を確認したが、その歴史的意義今後はさまざまな角度から検証していかなくてはならない。

3. 余部屋敷 出土した遺物の年代から見ると、平安時代から鎌倉時代に至る14世紀前半までは、道路の両脇に広がる領域で生活の痕跡が続いているが、少し間をおいた15世紀後半までの間で、整地と洪水堆積によってかさ上げされ、宅地が形成されている。このころになると、道路と周辺との比高は30cm程度と従来の半分程度となっており、道路の北側では路面を掘り込む遺構も確認できる。ただし、道路の南側は確認できないことから、道路規模は縮小しながらも、道路としての機能は働いていたと考えられる。だが、元来幅5mの道路であったのが、約半分の幅になっている。

室町時代にこの地域にあった河原者の宅地は、ある時期から余部(天部)あるいは余部屋敷とよばれるようになる。その範囲は、後の大雲院の全域と、春長寺、浄教寺、透玄寺を含めた広大な土地であった。さらに興味深いのは、16世紀に描かれた『洛中洛外図屏風』などの絵画資料の中に、この地域がかなりデフォルメされているが描かれていることである。

こうした絵画資料を検討した下坂守氏¹⁾は、四条付近の風景に頻出する図像を抽出して、この地域の宅地の状況を復元されている。そして絵画資料の中でも、四条河原の風景を最も顕著に描いている「洛外名所図」や「東山名所図」から、竹藪や垣(第85図①)で囲まれた中に、藁葺や板葺の家々(第85図②)が建ち並ぶ宅地があるとした。また、家々の側には、井戸から水をくみ上げる人や、井戸の横にある石敷の場所で桶の中で布を扱っている人が描かれているのが、

青屋の藍染めの作業場（第85図③）、そして家々の前の空間は、染めた布を干すのに必要不可欠な「もがり」とよばれる施設（第85図④）であるとした。

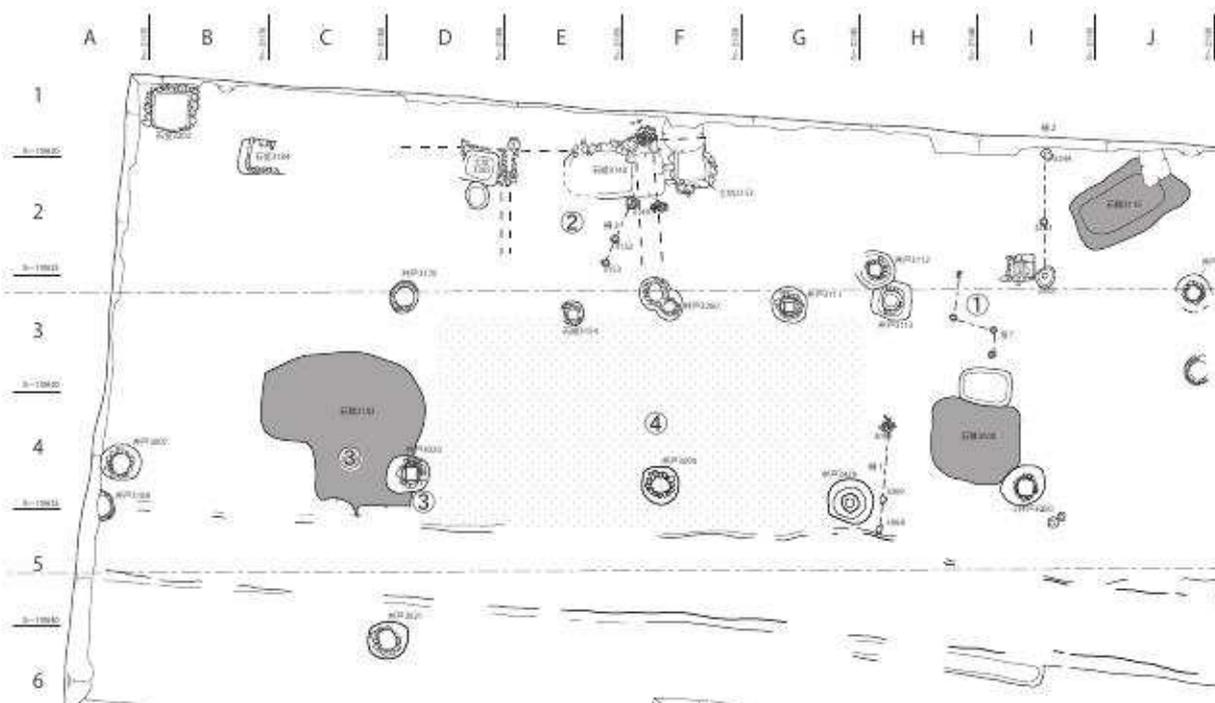
染色には、「生葉染め」と「藍玉」を用いる二通りのやり方がある。「生葉染め」は、文字通り収穫した藍を摘み取って、水に浸しながら布にもみこむ作業を繰り返すものである。この作業には、広い作業スペースと十分な水が必要となる。一方、「藍玉」を用いる染色は、藍をすり潰して水で溶くなどして固めた「藍玉」に、熱を加えながら甕の中に十日前後漬け込む作業方法である。前者を青屋、後者を紺屋と称して明確に分けられていた。

検出した遺構をみると、建物のない広い空間に、四方に広がった石積遺構と井戸が接した位置にあり（第86図③）、「東山名所図」に描かれた藍染めの様子を彷彿とさせるものである。次に、D～H区の2区と3区の境—綾小路の延長ライン上に井戸が並んでいる。その井戸に対応するかのように、D1・2～F1・2区では区画のための石列の一部が残っている。石列の残りは悪い

が、東西方向の石列は続いて行くものではなく、D区とE区の境、E区とF区の境の残存状況では、各々南北方向に折れていることから、町屋の建物の敷地の範囲を示したものと考えられる。それによって、D・E・F区に三軒の町屋の存在が



第85図 青屋の状景（「東山名所図」より）



第86図 青屋遺構（番号は第85図に対応）

推定できる（第86図②）。この石列で囲まれる町屋の範囲内には、それぞれ北寄りに土坑（土坑3365・石組3140・土坑2153）が伴う。その形状等よりみて、便所と考えられる。また、南側には2区と3区の境付近に並ぶ井戸（井戸3170・石組3154・井戸3260）が対応している。ただ町屋に伴う井戸は、「東山名所図」には描かれていない。あるいは町屋の屋外ではなく、屋内に伴う可能性も考えられる。このようにみると、F区より東にも井戸があることから、その配置からみて、さらに数軒町屋が並んでいたことが推定できる。

井戸の並ぶラインより南側で、4区と5区の境付近の道より北側に、ほとんど遺構の発見されていない一角がある（東西D～G区、南北3・4区）。これが染めた布を干す空間ではなからうか（第86図④）。

なおこれに関係して、埋甕遺構3157がその地域内より発掘されたことから、藍玉を用いる「紺屋」が併存するのではないかとの見方もあった。しかし、埋甕は平安時代後期—12世紀前半の東播系の須恵器で、第3面で検出した遺構とは時期がかけ離れており、藍染めとは関わりが無いものと思われる。また上部が失われていることなど出土状態からみて、第4面の埋甕が、整地などによって上半が削平されたのであろう。同じ東播系の須恵器の大甕を埋甕にしたものは、左京八条三坊二町でも類例がある²⁾。

4. 大雲院 安土桃山時代に至り、秀吉が京都の街を改造するなかで寺町形成がある。天正十五（1587）年に「余部屋敷」は移転させられ、天正十九（1592）年ごろには大雲院が四条河原に移転しているようである。一括出土銭は、この段階で埋められた可能性が高いが、第2節2で述べるように不確実である。

天皇、武家からの帰依を受けていた大雲院は、元の烏丸二条の寺地の数倍に拡張された。江戸時代中期に作成されたとみられる「大雲院境内絵図」から、本堂・御影堂・方丈・書院・庫裏等の中心となる建物の周囲を取り囲むように15の子院が立ち並んでいたことがみてとれる。その壮麗な伽藍は、本山にあたる知恩院の寛永の再建の際に範とされたという。

大雲院は天明八（1788）年に大火で全焼する。その時に多量の廃材を処理するために廃棄土坑



第87図 調査区第1遺構面と『大雲院境内地坪建坪縮図』（明治4年）合成図（縮尺任意）

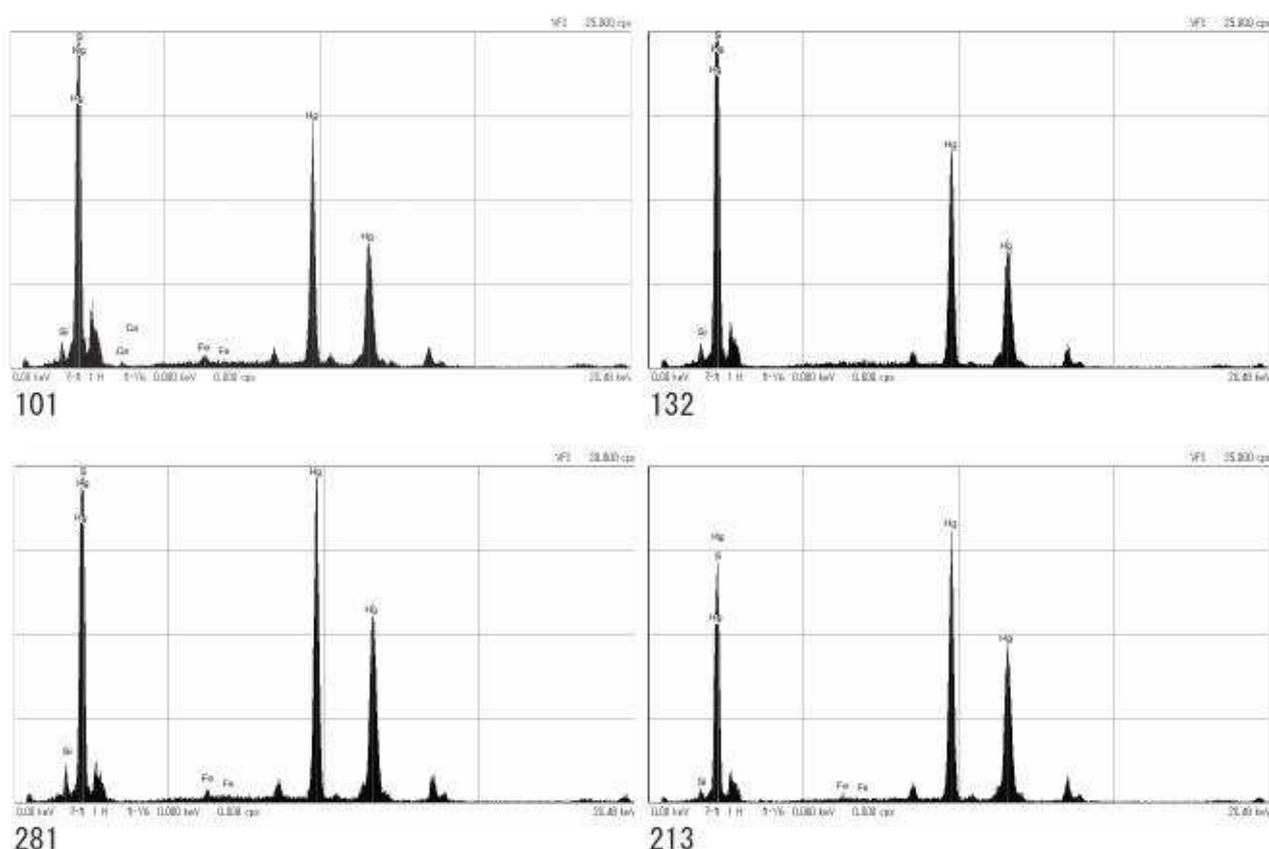
を掘削して不用物を捨てた痕跡を確認した。ひとつは位牌や柿経などの木製品である。もうひとつは大量の墓石である。802基におよぶ墓石は火事によって倒壊してしまったものと考えられる。中には豊臣秀次の供養塔の発見もあり、文字としては抹殺されてしまった人物にスポットをあてるきっかけを作ることができた。

大火後に伽藍は再建され、以前と同様の威容を誇っていたようである。明治四（1871）年に作成された「大雲院境内地坪并建坪縮図」（天明の大火以後の伽藍を表していると考えられる）を見ると、土地により寺域がやや縮小しているが、本堂他の諸堂を10余りの塔頭が取り囲む伽藍配置が描かれている。この図と照合すると、調査区は北側、西側が得住院・信養院・智徳院・藏春院の各塔頭にあたり、南東側は墓所にあたりと考えられる（第87図）。しかし、発掘調査では再建後の大雲院の遺構はほとんど建物を復元するに至らず、不明確なものであった。

今回の調査区は、以上のような歴史をたどっていたと確認することができた。平安京外ではあるが、御土居の内側にある、いわゆる洛中（京都）の縁辺にあたり、平安時代後期以降における開発の歴史を垣間見ることができたと考えられる。鴨川をはさんだ洛東の開発としては白河街区や六波羅があり、新興開発地と洛中を結ぶ地域の様相を示すことができたと考えられる。

第2節 出土遺物

1. 赤色顔料付着土器 今回の調査で内面に赤色顔料の付着した灰釉陶器、山茶碗が6点出土した。顔料付着面は134を除き、いずれも磨滅し平滑である。



第88図 赤色顔料元素分析結果（蛍光X線分析法）

これらのうち、101・132・281の3点の付着顔料と、比較資料として213の高台内の朱書きの顔料について、蛍光X線定性分析を行った。その結果、いずれの資料からも水銀(Hg)と硫黄(S)が極めて多く検出された(第88図)。使用顔料は水銀朱(辰砂)であると考えられる。成分、内面の状態から朱墨用の転用硯と考えられる。また、213の朱書きが同成分であることから、やはり朱墨である可能性が高い。

群馬県富岡清水遺跡、関根細ヶ沢遺跡、山梨県滝沢遺跡³⁾からも同様の灰釉陶器等が出土しており、朱墨用の転用硯と報告されている。

なお、281の内面には赤色顔料の他に微細な金箔あるいは金泥がみられるが、これについては用途や赤色顔料との関連は判然としない。

2. 一括出土銭 桃山時代～江戸時代初頭にあたる第2遺構面で、備前焼の壺に収められた一括出土銭を検出した(埋設土坑2201)。上部の1654枚を整理した結果、唐銭から明銭までの52種類を確認した。また総点数は、8万枚前後に及ぶと考えられる。

外容器(備前焼の壺)の年代は15世紀代、内容物(銅銭)は調査した範囲では15世紀第4四半期から16世紀第1四半期と考えられる。埋められた地層は16世紀末と考えられる大雲院造成期の整地土である。つまり、遺物と層位の年代には1世紀近い差が開く。大雲院が移転する以前、室町時代には青屋の遺構群が想定されているが、壺を埋納した遺構とは層位的に明らかな隔たりがある。このため一括出土銭は青屋遺構よりも新しく、同年代であるとは考えられない。銅銭には新しい様相が認められるため年代が下る可能性があるが、壺は伝世したものと考えられる。

調査区は大雲院の塔頭寺院と墓地の一部の敷地にあたる。明治四年に作成された境内図と今回の調査区を照合してみると、一括出土銭埋設土坑2201は、塔頭寺院の智徳院のほぼ中央付近に位置すると推定される。また、江戸時代中期(天明の大火以前)の絵図では長さや面積の正確性に欠け、照合は難しいが、本堂・塔頭・門等の配置は大火の前後で大きな変更はないとみられ、大雲院の移転当初も土坑2201は塔頭の位置に当たると考えられる。

一括出土銭を埋設した当事者および用途・目的としては、①塔頭寺院が寺の所有物として備蓄した、②大雲院造成時の地鎮として埋納した、③以前の土地所有者が寄進した等々、様々な可能性が考えられるが、いずれも想像の域を出ない。当地の歴史的な事象と出土状況を結びつけるのは難しいといえる。

銅銭には摸鑄銭を多く含み、当時流通した貨幣の実態に即した資料である。また、緡銭を束ねるのに革紐を使用しているが、緡紐の材質としてこれまで確認された中には類例がない。近世には一括出土銭の検出例・埋納枚数が減少傾向にあるといわれており、そうした中での大量の出土例である。

第3節 豊臣秀次塔をめぐる

1. 院殿の院号をもつ石塔 墓石に彫られた法名のうち、桃山時代の古い五輪塔に、院殿の院号のあるものが2基見られた。院殿の院号は、この時代だれもが用いられるものではなく、将軍や大名クラスの限られた人に用いられた法名である。したがって、そのような人物の没年を調べる

と、S5にみられる「文禄四年七月十五日」に該当するのが、豊臣秀次が高野山で切腹した日であることがわかった。またこの五輪塔にある「禅昌院殿龍叟道意大居士」の法名にみられる「道意」は、秀次が高野山に追放され出家したときの法号でもある。ちなみにこれまで知られるものでは、高野山の「高巖寺殿道意」、京都瑞泉寺でも「瑞泉寺殿前関白秀次入道高巖道意尊儀」「瑞泉寺殿高巖一峰道意」と、「道意」が用いられている。また、秀次の母日宗尼が建てた善正寺に祀られる秀次の法名も、「善正院殿高巖（岸）道意大居士」で「道意」がある。こうしたことから、S5の五輪塔は、豊臣秀次の供養塔と考えて間違いない。

その意味で、今回の大雲院から発見された五輪塔に見られる法名は、各所に残る秀次の法名に、新たな一例を加えたものである。

いま一つ、院号をもつS8の「寶林院殿花岳了英大姉」について考えてみたい。文禄の時期大雲院と関係する大名クラスの縁者は、歴史的にみても豊臣秀次関係者に限られそうである。そこで秀次事件の生き残りの女性についてみると、母日秀尼、『池田家履歴略記』や『寛永諸家系図傳』にみえる秀次の室であった若政所（池田恒興娘）などに限定される。その中で、母日秀尼は菩提寺を文禄五年春に建立していることから、大雲院の貞安上人との縁で逆修の供養塔を建立できるのは、若政所の可能性が高い。

2. 秀次供養塔造立の時期 出土した五輪塔基礎の側面比率から見ると、文禄年間の紀年銘を有するものの中では、S5はわずかに背が高い。また、側面比率の数値からいうと、慶長四年銘のS10～12と同じで、それ以降のものとは異なる。このことからS5の製作年代の下限を、慶長四年ごろに設定できる。一方、製作年代の上限は、秀次が死んだ文禄四年である。こうしたことから、五輪塔の製作時期は、形式学上では文禄四年以降、慶長四年ごろまでの時期が推定できるのである。ただこの時期幅では、秀次没後問のない時期の造立説から、慶長三年の秀吉没後の造立説まで、いくつかの解釈が成り立つ。とりわけ秀吉の勘気にふれ、高野山に追放されて切腹し、その後三条河原にさらし首にされ、側室や子息までが処刑されたことを考えると、悪逆非道の謀反人とされていた当時に、供養塔を造立することは難しいとの考えも一考である。その場合、供養塔の造立は、早くとも慶長三年の秀吉没後のことと考えられる。そうであれば、形式学より求められた下限の慶長四年は、魅力的な時期である。

それに対してS8の宝休院殿花岳了英大姉が、秀次事件後、処刑を免れた秀次の母の日秀尼か、秀次の最初の正室であった池田恒興の娘である若政所ではないかとする見解がある。この場合、S5とS8の基礎を比較してみると、正面上端幅の寸法は同じであるが、高さには5mmほど差があるため、側面比率が異なっている。しかし、総高四尺以下の小形塔の場合、基壇をもたずに直接地上に据え付ける式の基礎底部の仕上げは、切離しのままできわめて雑である。その証拠にS5に彫られた戒名下部には、高さが不揃いのため、正面に入りきらなかった文字もある。そのため上端幅とは異なり、高さは測る位置によって若干の差が生じる。そうした点を考慮すれば、小形塔での5mmほどの違いは、誤差の範囲と見てよい。そう考えると、S5とS8は同規格のものであり、紀年銘からもほぼ同時期に製作されたものとみることがもできる。その場合、S8は生前に造立したことを表す逆修塔であることから、文禄五年十月十五日以前でのものである。そう考え

ればS5の没年文禄四年十月以降、同五年十月以前の間に製作された塔ということになる。

S5、S8の二基の五輪塔の検討結果をもとに仮説を提示するなら、秀次没後そう時間をおかず、命ながらえた母日秀尼か若政所のうち、おそらく若政所が、秀次生前に関係深かったと思われる貞安上人との縁で、大雲院境内に秀次供養塔を建て、合わせて自らもその側に逆修塔を建てたと考えられるのである。

註

- 1) 下坂守2010「中世「四条河原」考―描かれた「四てうのおおや」をめぐって―」『奈良史学 第二十七号』奈良大学史学会
- 2) 古代学協会編1985『平安京跡研究調査報告第16輯 平安京左京八條三坊二町―第2次調査―』財団法人古代学協会
- 3) 山梨県埋蔵文化財センター編2015『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第304集滝沢遺跡(第3・4次) ―一般国道137号吉田河口湖バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書―』

参考文献

上山春平「大雲院の歴史」、下坂守「大雲院境内絵図(解説)」「大雲院境内地坪并建坪縮図(解説)」(ともに築達榮八編1994『龍池山大雲院』本山龍池山 大雲院)

第14表 出土遺物観察表

遺物番号	遺構	種類	器種	法量			成形・調整		色調	備考	時期
				口径	器高	底径	外面	内面			
1	土坑 1010	土師器	皿	5.5	1.0	-	指オサエ	ナデ・ハケ目残る	10YR7/3 に近い 橙色	中央に穿孔あり	X III
2	土坑 1010	土師器	皿	10.8	2.1	-	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ・一定方向ナデ	S4 灰色		X III
3	土坑 1010	施釉陶器	鉢鉢	32.0	12.8	16.0	ロクロナデ	ロクロナデ	7.5YR2/2 黒褐色	胎土目あり	X III
4	土坑 1010	染付磁器	鉢	(16.0)	5.5	(10.0)	施釉	施釉	5B7/1 明青灰色	高台内蛇の目状	X III
5	土坑 1010	石製品	石仏	高さ: [9.9]	幅:7.3	奥行:8.0				砂岩 地藏菩薩の頭部	江戸時代
6	土坑 1034	土師器	皿	10.4	1.2	-	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ・ナデ	10YR7/4 に近い 黄橙色		X III
7	土坑 1034	土師器	皿	8.8	3.1	5.2	ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ切り	2.5Y8/2 灰白色		X III
8	土坑 1034	土製品	燗台	4.8	1.1	4.0	ナデ	ナデ	5YR7/6 橙色	中央に鉄芯が刺さる	X III
9	土坑 1034	施釉陶器	碗	9.4	5.4	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR7/8 黄橙色	京焼(系)。銘あり	X III
10	土坑 1034	染付磁器	皿	13.4	4.3	7.8	施釉	施釉	2.5 G Y 7/1 明 オリーブ灰色	見込みコンニャク 印判五弁花文	X III
11	土坑 1034	国産青磁	香炉	15.0	6.5	5.2	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/2 灰白色	三脚付き	X III
12	土坑 1034	国産青磁染付	筒型碗	(8.0)	6.0	4.1	施釉	施釉	5 G Y 7/1 明オ リーブ灰色	見込みコンニャク 印判五弁花文	X III
13	石組 1040	土師器	皿	8.4	1.7	-	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ	7.5YR7/6 橙色		X III
14	石組 1040	土師器	皿	9.3	1.6	-	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ	7.5YR8/4 浅黄 橙色	加飾的回廊線	X III
15	石組 1040	土師器	皿	10.3	2.0	-	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ・ナデ	10YR8/3 淡黄橙 色	加飾的回廊線	X III
16	石組 1040	土師器	皿	11.4	3.5	-	ロクロナデ	ロクロナデ	2.5Y8/2 灰白色		X III
17	石組 1040	土製品	塩釜蓋	6.8	2.0	-	ナデ	布当痕跡	5YR5/8 明褐色	内面布目あり	X III
18	石組 1040	土製品	塩釜	5.5	9.5	8.0	ナデ	布当痕跡	5YR7/6 橙色	刻印「泉州麻生」 内面布目あり	X III
19	石組 1040	施釉陶器	蟹型	短辺4.2	2.2	-	ナデ	ナデ	7.5YR7/8 黄橙 色		X III
20	石組 1040	染付磁器	筒型碗	7.1	5.4	3.8	施釉	施釉	5B7/1 明青灰色	見込みコンニャク 印判五弁花文	X III
21	井戸 2001	土師器	皿	12.6	2.4	-	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ・ナデ	10YR7/4 に近い 黄橙色		X 新～XI 中
22	井戸 2001	施釉陶器	皿	16.0	5.5	5.8	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/2 灰白色	重ね焼き痕あり	X 新～XI 中
23	井戸 2001	施釉陶器	広口壺	12.8	[10.2]	-	ロクロナデ	ロクロナデ	7.5YR2/2 黒褐色		X 新～XI 中
24	井戸 2001	輸入色絵磁器	皿	-	[2.3]	(13.6)	施釉	施釉	10YR/1 灰白色	銀化。中国産か	X 新～XI 中
25	土坑 2006	土師器	皿	11.0	2.1	-	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ	10YR6/3 に近い 黄橙色		X 新～XI 古
26	土坑 2006	輸入染付磁器	皿	(22.0)	4.5	(11.0)	施釉	施釉	S8/ 灰白色	漳州窯	X～XI
27	土坑 2006	輸入染付磁器	皿	-	[2.3]	(6.3)	施釉	施釉	5B7/1 明青灰色	長徳様	X～XI
28	土坑 2006	染付磁器	碗	(10.0)	7.5	(5.0)	施釉	施釉	S8/ 灰白色	初期伊万里。「天下」の文字	XI
29	土坑 2009 (2004)	土師器	皿	9.5	2.2	-	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ・底部ハケ目残る	10YR8/3 浅黄橙 色		XI
30	土坑 2009 (2004)	土師器	皿	10.9	2.6	-	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ・ナデ	7.5YR7/6 橙色		XI
31	土坑 2009 (2004)	施釉陶器	碗	10.0	7.0	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/2 灰白色		XI
32	土坑 2009 (2004)	輸入染付磁器	皿	-	(3.6)	16.4	施釉	施釉	5B7/1 明青灰色	長徳様	XI

遺物番号	遺構	種類	器種	法量			成形・調整		色調	備考	時期
				口径	器高	底径	外面	内面			
33	土坑 2009 (2004)	輸入染付磁器	皿	(20.8)	3.6	(11.0)	施釉	施釉	5B7/1 明青灰色	長徳鏡	X～XI
34	土坑 2009 (2004)	輸入染付磁器	碗	(15.2)	5.9	(6.7)	施釉	施釉	5B7/1 明青灰色		XI
35	土坑 2009 (2004)	染付磁器	碗	(11.0)	7.4	4.4	施釉	施釉	5B7/1 明青灰色	初期伊万里	XI
36	土坑 2023	土師器	皿	8.5	2.1	-	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ・一定方向ナデ	7.5YR8/6 淡黄橙色		IX～X
37	土坑 2023	土師器	皿	(16.4)	2.6	-	ヨコナデ	ヨコナデ・一定方向ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色		IX新～X中
38	土坑 2023	施釉陶器	鉢	(23.1)	[4.5]	-	ロクロナデ	ロクロナデ	5Y7/3 淡黄色	卸し目あり	Ⅷ～IX
39	土坑 2023	白磁	皿	-	[1.5]	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	7.5Y8/1 灰白色	外面曇痕あり	不明
40	土坑 2085	土師器	皿	10.3	1.8	-	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ・ナデ	10YR8/3 淡黄橙色		XⅢ
41	土坑 2085	土師器	皿	9.4	3.4	-	ロクロナデ	ロクロナデ	2.5Y8/2 灰白色	ロクロ成形	XⅢ
42	土坑 2085	施釉陶器	碗	(10.6)	6.1	(4.0)	施釉	施釉	2.5Y8/1 灰白色	全体に被熱している	XⅢ
43	土坑 2085	施釉陶器	香炉	11.9	7.4	9.8	ロクロナデ	ロクロナデ	2.5Y7/2 灰黄色	赤切り痕あり。口縁端部に部分的に釉薬の剥落あり。	XⅢ
44	土坑 2085	染付磁器	碗	(10.0)	5.3	3.8	施釉	施釉	10GY8/1 明緑灰色	コンニャク印判	XⅢ
45	土坑 2085	磁器	筒型碗	7.3	5.5	4.0	施釉	施釉	7.5GY8/1 明緑灰色		XⅢ
46	土坑 2101	土師器	皿	12.4	2.2	-	ナデ	ナデ	10YR8/2 灰白色	内面墨書。外面に金部が残る	X古～新
47	土坑 2101	土師器	皿	12.7	2.1	-	ナデ	ナデ	2.5Y8/2 灰白色	内面墨書。外面に金部が残る。年号あり	X古～新
48	土坑 2101	土製品	壺蓋	4.8	8.5	5.0	ナデ	不調整	5YR7/6 橙色		XI～Ⅷ
49	土坑 2101	施釉陶器	皿	5.3	1.7	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	5Y7/3 淡黄色	古瀬戸	桃山か
50	土坑 2101	焼締陶器	摺鉢	(30.4)	10.3	(14.0)	ロクロナデ	ロクロナデ・ナデ	5YR5/6 明赤褐色	丹敷	X
51	土坑 2119	土師器	皿	(9.4)	[1.5]	-	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色		X中～新
52	土坑 2119	土師器	皿	(12.0)	1.8	-	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色		X中～新
53	土坑 2119	施釉陶器	碗	10.8	[5.5]	-	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR2/1 黒色	天目茶碗	X
54	土坑 2119	青磁	碗	-	[3.0]	(6.0)	施釉	施釉	5GY7/1 明オリープ灰色		X
55	土坑 2152	土師器	皿	6.8	1.6	-	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ	10YR7/4 にぶい黄橙色		X
56	土坑 2152	土師器	皿	11.0	2.1	-	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ・一定方向ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙色		X新～XI古
57	土坑 2152	土師器	皿	12.4	1.7	-	ナデ	ナデ	2.5Y8/2 灰白色	内面墨書	IX新～X中
58	土坑 2152	土師器	皿	12.6	2.2	-	ナデ	ナデ	2.5Y8/2 灰白色	内面墨書	IX新～X中
59	土坑 2152	施釉陶器	碗	(10.7)	[6.1]	-	施釉・ロクロヘラケズリ	施釉	7.5YR3/4 暗褐色	天目茶碗	X中～XI古
60	土坑 2152	焼締陶器	壺	-	[5.8]	14.0	ロクロナデ	ロクロナデ	7.5YR4/2 灰褐色		X～XI
61	埋藏土坑 2201	焼締陶器	壺	28.0	65.2	26.0	ナデ・ケズリ			縮前	Ⅷ～IX
62	柱穴 3017	土師器	皿	6.9	1.1	-	ヨコナデ	ヨコナデ・一定方向ナデ	2.5Y8/2 灰白色		VI新～Ⅷ古
63	柱穴 3017	土師器	皿	(9.1)	1.2	-	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR7/4 にぶい黄橙色		VI新～Ⅷ古
64	柱穴 3017	土師器	皿	12.4	2.3	-	ヨコナデ	ヨコナデ・一定方向ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙色		VI新～Ⅷ古

遺物番号	遺構	種類	器種	法量			成形・調整		色調	備考	時期	
				口径	器高	底径	外面	内面				
65	柱穴 3017	白色土器	高杯	-	[11.7]	-	ケズリ	ナデ	10YR8/2 灰白色		VI	
66	柱穴 3017	瓦器	碗	13.8	[3.7]	-	ナデ	ナデ・ミガキ	10YR4/1 褐灰色	漆付着。輪葉型	VI	
67	柱穴 3017	瓦質土器	鍋	27.2	[12.8]	-	ナデ・指オサエ	ナデ・ハケ	10YR7/1 灰白色		VI新～VII古	
68	柱穴 3017	瓦質土器	羽釜	20.2	[8.7]	-	ナデ	ナデ	10YR2/1 黒色		VI新～VII古	
69	井戸 3020	土師器	羽釜	24.6	[9.2]	-	ナデ	ナデ・ハケ	10YR8/3 浅黄褐色		IX～X	
70	井戸 3020	灰釉陶器	碗	-	[2.0]	8.0	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/1 灰白色	内面に自然釉	III	
71	井戸 3020	青磁	皿	(12.6)	3.2	(5.6)	施釉・ロクロナデ	施釉	10Y6/2 オリーブ灰色	輪花。わずかに陰刻あり	IX～X	
72	井戸 3097	土師器	皿	(7.0)	1.6	-	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ	7.5Y7/2 にぶい、橙色		IX	
73	井戸 3097	土師器	皿	(9.2)	1.9	-	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ	7.5YR7/4 にぶい、橙色		IX	
74	井戸 3097	瓦質土器	羽釜	18.0	[6.0]	-	ナデ・指オサエ	ナデ・ハケ	10YR4/1 褐灰色		IX	
75	井戸 3097	灰釉陶器	花瓶	7.5	[13.5]	8.8	ロクロナデ	ロクロナデ	薄緑色	古瀬戸	IX	
76	井戸 3097	青磁	碗	-	[3.9]	(6.4)	施釉・ロクロナデ	施釉	10Y6/2 オリーブ灰色		IX	
77	井戸 3097	金属製品	古銭	タテ：24.77mm	ヨコ：24.63mm	内径：5.74mm	厚さ：1.27mm 重さ：2.6g				水菜通覆	IX
78	石積 3103	土師器	皿	6.5	1.7	-	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ	2.5YR8/2 灰白色		VII	
79	石積 3103	土師器	皿	11.5	2.1	-	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ	2.5YR8/2 灰白色		VII	
80	石積 3103	土師器	碗	-	[2.0]	6.0	ナデ	ナデ・ミガキ	10YR8/1 灰白色	麻台に墨書「一」	VIIか	
81	石積 3103	瓦質土器	鍋	23.2	[7.0]	-	ナデ・指オサエ	ナデ・ハケ	10YR4/1 褐灰色		VII	
82	石積 3103	白磁	碗	-	[6.2]	5.8	施釉・ロクロナデ	施釉	5Y7/2 灰白色		VII	
83	石積 3103	施釉陶器	甕	(52.6)	[12.7]	-	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	7.5YR5/3 灰オリーブ色	常滑	VII	
84	石積 3103	瓦	軒平瓦	高さ：2.0	幅：[7.8]	厚さ：1.4	ナデ	ナデ	5YR7/1 灰色	刷頭文	VII	
85	土坑 3105	土師器	皿	8.6	1.4	-	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR4/1 褐灰色		VI	
86	土坑 3105	土師器	皿	9.5	1.7	-	ヨコナデ	ヨコナデ	7.5YR7/3 にぶい、橙色		VI	
87	土坑 3105	土師器	皿	(12.2)	2.3	-	ヨコナデ・マメツ	ヨコナデ・一定方向ナデ	10YR7/3 にぶい、橙色		VI	
88	土坑 3105	土師器	皿	(14.8)	3.5	-	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ	10YR8/3 浅黄褐色		V新～VI前半	
89	土坑 3105	土師器	皿	15.4	3.3	-	ナデ	ナデ	10YR7/3 にぶい、黄褐色		VI	
90	土坑 3105	土師器	皿	10.5	3.1	-	ヨコナデ・マメツ	ヨコナデ	10YR8/2 灰白色		VIか	
91	土坑 3105	土師器	皿	11.1	3.0	-	ナデ	ナデ	10YR8/1 灰白色		VI後半か	
92	土坑 3105	土師器	不明	-	(3.2)	6.0	ナデ	ナデ	10YR7/6 橙色		VIか	
93	土坑 3105	土師器	羽釜	19.4	[6.0]	-	ナデ	ナデ	10YR8/3 浅黄褐色		平安前期	
94	土坑 3105	須恵器	鉢	(37.8)	[4.5]	-	ロクロナデ	ロクロナデ	85/ 灰色		VI	
95	土坑 3105	須恵器	甕	(28.6)	[13.0]	-	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR2/1 黒色		VI	
96	土坑 3105	瓦器	碗	9.6	3.6	4.9	ナデ	ナデ・ミガキ	10YR4/1 褐灰色		VI	
97	土坑 3105	瓦器	碗	13.1	3.1	2.4	ナデ	ナデ・ミガキ	10YR4/1 褐灰色	和泉型	VI新	

遺物番号	遺構	種類	器種	法量			成形・調整		色調	備考	時期
				口径	器高	底径	外面	内面			
98	土坑 3105	瓦質土器	鍋	27.0	11.8	10.5	ナデ・指オサエ	ナデ・ハケ	10YR4/1 褐灰色		VIか
99	土坑 3105	山茶碗	鉢	33.4	17.3	15.3	ロクロナデ	ロクロナデ・ケズリ	5Y7/1 灰白色	常滑産	VI
100	土坑 3105	白磁	碗	(16.4)	[4.4]	-	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/1 灰白色		VI
101	土坑 3107	山茶碗	碗	-	[2.1]	9.0	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR7/1 褐灰色	赤色顔料付着	V～VI
102	土坑 3107	瓦	軒丸瓦	高さ：(16.0)	幅：-	厚さ：2.8			10YR7/2 に近い黄褐色	瓦当に梵字	V古
103	埋裏 3157	須恵器	甕	-	[74.0]	-	樹枝文タタキ	ナデケシ	S7/ 灰白色	東播磨	V
104	井戸 3111	土師器	皿	10.5	2.0	-	ヨコナデ・指オサエノチナデ	ヨコナデ(ナデアゲ)	7.5YR8/4 浅黄褐色		X新～XI古
105	井戸 3111	土師器	皿	12.0	2.2	-	ヨコナデ・指オサエノチナデ	ヨコナデ(ナデアゲ)	7.5YR8/4 浅黄褐色		X新～XI古
106	井戸 3111	土師器	皿	14.5	2.8	-	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ	10YR7/4 に近い黄褐色		X中～XI古
107	井戸 3111	焼締陶器	播鉢	(31.8)	12.9	12.6	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR7/6 明黄褐色	内面煤付着。信楽	X～XI
108	井戸 3111	白磁	碗	(16.6)	6.1	(5.2)	施釉・ロクロナデ	施釉	2.5Y6/4 に近い黄色		X
109	井戸 3112	土師器	皿	(15.0)	2.3	-	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ・一定方向ナデ	10YR7/3 に近い黄褐色		IX新～X古
110	井戸 3112	白色土器	蓋	10.0	2.2	-	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/3 浅黄褐色		平安後期
111	井戸 3112	須恵器	鉢または碗	-	[5.2]	7.8	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/1 灰白色		平安中期
112	井戸 3112	施釉陶器	皿	10.5	2.3	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ	5Y8/1 灰白色	志野	IX新～X古
113	井戸 3112	施釉陶器	碗	11.5	[5.2]	-	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR2/1 黒色	天目茶碗。瀬戸美濃	X
114	井戸 3112	施釉陶器	不明	-	[12.8]	13.0	ロクロナデ	ロクロナデ	2.5YR7/4 黄褐色	底部に付着物。被熱痕	X
115	井戸 3112	焼締陶器	鉢	25.4	14.6	8.2	ロクロナデ	ロクロナデ	赤褐色		X
116	井戸 3112	青磁	碗	-	[3.7]	(5.4)	施釉・ロクロナデ	施釉	5GY7/1 明オリブ灰色	見込みに花文。外面に蓮弁文	X
117	土坑 3117	土師器	皿	(7.6)	1.6	-	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ	10YR7/3 に近い黄褐色		IX新～X古
118	土坑 3117	土師器	皿	(14.6)	2.6	-	ヨコナデ	ヨコナデ・一定方向ナデ	7.5YR7/6 橙色		IX新～X古
119	土坑 3117	施釉陶器	碗	11.8	6.4	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR2/1 黒色	天目茶碗	X
120	土坑 3117	施釉陶器	皿	11.0	2.5	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	5Y7/3 浅黄褐色	古瀬戸。施釉は口縁部のみ。底部糸切り痕	X
121	土坑 3117	施釉陶器	蓋	4.4	1.3	-	施釉	ロクロナデ	5Y7/3 浅黄褐色	古瀬戸	X
122	土坑 3117	青磁	皿	(14.2)	4.0	(8.4)	施釉	施釉	10Y6/2 オリーブ灰色	底部内外面趾の目状に輪掻き取り	X
123	井戸 3170	土師器	鍋	37.0	[7.6]	-	ヨコナデ	ヨコナデ・ハケ	10YR8/4 浅黄褐色	外面と内面の一部煤付着	X
124	井戸 3170	施釉陶器	皿	11.5	2.7	6.0	施釉	施釉	7.5YR3/4 暗褐色	目跡。重ね焼き痕あり。瀬戸	X
125	井戸 3170	焼締陶器	播鉢	-	[3.9]	15.8	ヨコナデ	摩滅により不明	10YR8/4 浅黄褐色	外面工具により削り取られている	X
126	井戸 3170	焼締陶器	播鉢	30.6	[8.5]	-	ヨコナデ	ヨコナデ	2.5YR5/6 明赤褐色	内面煤付着	X
127	土坑 3207	施釉陶器	耳付花生	-	[23.0]	13.0	ナデ・ケズリ	ナデ	2.5Y6/6 明黄褐色	信楽	X中～XI古
128	土坑 3207	青磁	皿	(10.2)	3.4	(6.0)	施釉・ロクロナデ	施釉	10Y6/2 オリーブ灰色	蓮弁文	X中～XI古
129	土坑 3207	青磁	碗	17.4	[5.4]	-	ロクロナデ	ロクロナデ	5Y7/3 浅黄褐色		X中～XI古
130	土坑 3207	瓦	軒丸瓦	高さ：15.0	幅：14.8	厚さ：3.0	ナデ	ナデ	5Y6/1 灰色	模弁八葉蓮華文	平安後期

遺物番号	遺構	種類	器種	法量			成形・調整		色調	備考	時期
				口径	器高	底径	外面	内面			
131	包含層3	土師器	耳皿	2.6~5.1	1.4	1.2~1.8	ナデ	ナデ	2.5Y8/1 灰白色		VI~VIIか
132	包含層3	灰釉陶器	皿	10.0	2.0	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/1 灰白色	赤色顔料付着	III新
133	包含層3	灰釉陶器	碗 <small>(ヒコテウ)</small>	5.2	2.0	2.6	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/1 灰白色		IIIか
134	包含層3	山茶碗	入子	6.2	2.7	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	10Y7/1 灰白色	内面に自然釉、赤色顔料付着	V~VI
135	包含層3	輸入陶器	四耳壺	9.4	[14.5]	-	施釉・ロクロナデ	施釉	5Y6/4 オリーブ色	褐色施釉陶器	VI中~新
136	包含層3	白磁	皿	-	[0.8]	(3.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	7.5Y8/1 灰白色	底部外面に墨書あり	
137	包含層3	瓦	軒平瓦	高さ: 2.5	幅: [6.5]	厚さ: 1.2				御頭文	VII
138	包含層3	石製品	未成品	長さ: [10.0]	幅: 7.8	厚さ: 1.7					
139	包含層3	石製品	瀧石	長さ: 11.0	幅: [6.0]	厚さ: 1.2				石鏝の転用。線刻ありか	12C ~ 16C
140	包含層3	石製品	瀧石	長さ: [7.6]	幅: 3.9	厚さ: 1.5				穿孔2ヶ所。	12C ~ 16C
141	道路4001	土師器	皿	(10.0)	1.2	-	ナデ	ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙色		V
142	道路4001	土師器	皿	(10.0)	1.7	-	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR7/2 にぶい黄橙色		V新~VI前半
143	道路4001	土師器	皿	(10.0)	1.9	-	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色		V新~VI前半
144	道路4001	土師器	皿	(12.6)	2.3	-	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR7/4 にぶい黄橙色		V新~VI前半
145	道路4001	土師器	皿	(13.0)	3.0	-	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR7/4 にぶい黄橙色		V新~VI前半
146	道路4001	土師器	皿	14.3	2.6	-	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色		V中~VI前半
147	道路4001	白色土器	碗	-	-	4.7	ロクロナデ	ロクロナデ	7.5Y8/1 灰白色		V~VI
148	道路4001	白色土器	高杯	-	[11.0]	-	ケズリ	ナデ	10YR8/2 灰白色		Vか
149	道路4001	緑釉陶器	円埴	4.9	2.2	-	ナデ	ナデ	10Y8/2 灰白色		V
150	道路4001	灰釉陶器	碗	-	[2.0]	7.2	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/1 灰白色		III
151	道路4001	山茶碗	鉢	-	[4.1]	14.0	ロクロナデ・ケズリ	ロクロナデ	10YR7/1 灰白色	内面摩滅。	VI古
152	道路4001	山茶碗	皿	8.6	1.9	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/1 灰白色	糸切り痕あり	V古
153	道路4001	瓦器	碗	16.6	[4.3]	-	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	10YR4/1 褐灰色	内面はあまり灰化していない	V新~VI古
154	道路4001	瓦質土器	羽釜	21.8	[7.3]	-	ナデ	ナデ	10YR2/1 黒色		V新~VI古
155	道路4001	白磁	皿	(11.0)	2.7	(4.4)	施釉・ロクロナデ	施釉	5Y8/2 灰白色		V新~VI古
156	道路4001	白磁	碗	(16.4)	[5.5]	-	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/1 灰白色		V新~VI古
157	道路4001	白磁	碗	-	[2.9]	5.6	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/1 灰白色		V新~VI古
158	道路4001	白磁	碗	-	[3.2]	(6.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/1 灰白色		V新~VI古
159	道路4001	白磁	碗	-	[2.3]	(6.6)	施釉・ロクロケズリ	施釉	7.5YR8/1 灰白色	墨書あり	V新~VI古
160	道路4001	白磁	碗	(18.0)	6.7	(7.4)	施釉・ロクロナデ	施釉	5Y8/1 灰白色		V新~VI古
161	道路4001	瓦	軒平瓦	高さ: 5.6	幅: (10.0)	厚さ: 3.8	ナデ・指オサエ	ナデ	5YR6/1 灰色	均整唐草文	
162	道路4002	土師器	皿	10.0	2.0	-	ナデ・指オサエ	ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色		IV中~V古
163	道路4002	土師器	皿	10.2	1.2	-	ナデ・指オサエ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙色		IV中~V古

遺物番号	遺構	種類	器種	法量			成形・調整		色調	備考	時期
				口径	器高	底径	外面	内面			
164	道路 4002	土師器	皿	12.6	[2.5]	-	ナデ・指オサエ	ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色		IV
165	道路 4002	土師器	台付皿	-	[4.3]	-	ナデ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙色		V古～中
166	道路 4002	白色土器	高杯	-	[12.3]	-	ケズリ	ナデ	10YR8/2 灰白色		Vか
167	道路 4002	山茶碗	皿	-	1.6	5.1	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/1 灰白色	朱付着。裏ね焼き痕残る	V
168	道路 4002	灰釉陶器	皿	12.0	3.4	7.0	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/1 灰白色		IV
169	道路 4002	灰釉陶器	碗	-	[3.0]	8.0	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/1 灰白色		Ⅲ古～中
170	道路 4002	灰釉陶器	壺	-	[13.1]	-	ロクロナデ	ロクロナデ	5Y/ 灰色		Ⅱ新～Ⅲ古
171	道路 4002	白磁	碗	(16.0)	[4.7]	-	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/1 灰白色		V
172	道路 4002	白磁	碗	(16.2)	[5.5]	-	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/1 灰白色		V
173	道路 4002	白磁	碗	—	[1.0]	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/2 灰白色		V
174	道路 4002	白磁	皿	—	[2.9]	6.1	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/1 灰白色		V
175	道路 4002	白磁	碗	—	[2.4]	6.5	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/1 灰白色		V
176	道路 4002	白磁	碗	—	[3.7]	6.5	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/1 灰白色		V
177	道路 4002	白磁	碗	(12.0)	[3.1]	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/1 灰白色		V
178	道路 4002	青白磁	瓶	6.2	[10.0]	-	ロクロナデ	ロクロナデ	2.5Y7/2 灰黄色		V
179	土坑 4032	土師器	皿	7.6	1.6	-	ナデ・指オサエ	ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙色		IV
180	土坑 4032	土師器	皿	9.8	1.4	-	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ・ナデ	2.5Y7/2 灰黄色		VI
181	土坑 4032	土師器	皿	(11.6)	2.4	-	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR6/4 にぶい黄橙色		Ⅵ中～Ⅵ古
182	土坑 4032	土師器	皿	14.4	2.8	-	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ・ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙色		Ⅵ古～中
183	土坑 4032	土師器	皿	12.5	3.3	-	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ・ナデ	2.5Y8/3 淡黄色		Ⅵ中～Ⅵ古
184	土坑 4032	瓦質土器	鍋	23.0	[10.5]	-	ナデ・指オサエ	ナデ・ハケ	10YR2/1 黒色		VI
185	土坑 4032	瓦質土器	釜	66.0	13.0	42.0	ナデ	ミガキ			VI
186	土坑 4316	土師器	皿	9.7	1.7	-	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・一定方向ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色		VI
187	土坑 4316	土師器	皿	14.0	2.7	-	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	7.5YR7/6 橙色		VI
188	土坑 4316	土師器	皿	15.0	2.7	-	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ・ナデ	10YR7/4 にぶい橙色		VI
189	土坑 4316	土師器	移動式かまど	口径：(34.0)	7.4	-	ナデ・ハケ目・ケズリ	ナデ・ハケ目	2.5YR6/6 橙色		VI
190	土坑 4316	白色土器	高杯	(13.4)	21.4	(10.4)	ロクロナデ・ナデ	ロクロナデ	10YR7/4 にぶい黄橙色		VI
191	土坑 4316	瓦器	碗	13.5	[5.4]	5.0	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	10YR4/1 褐灰色		VI
192	土坑 4316	白磁	碗	17.5	[4.8]	-	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/1 灰白色		VI
193	土坑 4316	白磁	碗	-	[3.7]	(6.6)	ロクロナデ	施釉	7.5Y7/1 灰白色		VI
194	土坑 4316	白磁	壺	-	[6.5]	8.0	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/2 灰白色		VI
195	土坑 4316	石製品	硯	長さ：[9.0]	幅：8.0	厚さ：1.0			10YR2/1 黒色	中央に深い使用痕	VI
196	土坑 4410	焼締陶器	壺	-	[30.0]	22.0	ナデ	ナデ		信楽が	Ⅸ新～Ⅹ古

遺物番号	遺構	種類	器種	法量			成形・調整		色調	備考	時期
				口径	器高	底径	外面	内面			
197	溝 4520	土師器	皿	10.0	1.9	-	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ・ナデ	7.5YR7/6 橙色		IVか
198	溝 4520	土師器	皿	10.4	2.1	-	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ・ナデ	7.5YR7/6 橙色		IV中～新
199	溝 4520	土師器	皿	14.6	2.9	-	ナデ・指オサエ	ナデ	5YR8/4 浅黄橙色		IV
200	溝 4520	土師器	皿	15.2	3.3	-	ナデ・指オサエ	ナデ	5YR8/6 浅黄橙色		IV
201	溝 4520	灰釉陶器	碗	-	[2.5]	7.8	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/1 灰白色		IV中
202	溝 4520	灰釉陶器	壺	-	[7.5]	12.0	ロクロナデ	ロクロナデ	S7/ 灰色		III新
203	溝 4520	白磁	皿	(11.0)	3.2	(4.8)	施釉・ロクロナデ	施釉	7.5Y7/2 灰白色		IV
204	溝 4520	白磁	碗	-	[1.2]	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/1 灰白色		IV
205	溝 4520	白磁	碗	-	[1.8]	6.6	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/1 灰白色		IV
206	土坑 4543	土師器	皿	5.4	1.5	-	ヨコナデ	ヨコナデ・ハケ目残る	10YR8/3 浅黄橙色		X
207	土坑 4543	土師器	皿	6.6	1.5	-	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ	10YR8/3 浅黄橙色		IX後半～X古
208	土坑 4543	土師器	皿	11.7	2.5	-	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ・一定方向ナデ	7.5YR8/1 灰白色		IX
209	土坑 4543	土師器	皿	14.3	2.6	-	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ・一定方向ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙色		IX新～X古
210	土坑 4543	施釉陶器	花瓶	-	[4.0]	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	薄緑色	古瀬戸。施釉	IX
211	土坑 4543	青磁	碗	-	[3.9]	(5.2)	施釉・ロクロヘラケズリ	施釉	5GY7/1 男オリーブ灰色	見込みに不明文様あり	IX
212	土坑 4543	青磁	碗	-	[2.7]	5.7	施釉・ロクロヘラケズリ	施釉	5GY7/1 男オリーブ灰色	見込みに双魚文	IX
213	土坑 4543	白磁	皿	-	[1.5]	3.5	ロクロナデ・ケズリ出し高台	ナデ	2.5YR8/2 灰白色	高台内に朱書き	IX
214	土坑 4585	土師器	皿	9.1	1.5	-	ナデ・指オサエ	ナデ	10YR8/4 にぶい黄橙色		V中～VI古
215	土坑 4585	土師器	皿	9.8	1.7	-	ナデ・指オサエ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙色		V中～VI古
216	土坑 4585	土師器	皿	14.5	2.5	-	ナデ・指オサエ	ナデ	10YR8/2 灰白色		V中～VI古
217	土坑 4585	灰釉陶器	壺	-	[14.9]	15.0	ロクロナデ	ロクロナデ	S7/ 灰色		平安中期
218	土坑 4585	白磁	碗	-	[2.8]	5.6	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/1 灰白色		V中～VI古
219	土坑 4590	土師器	皿	8.7	1.9	-	ナデ・指オサエ	ナデ	10YR8/2 灰白色		V新～VI前半
220	土坑 4590	土師器	皿	9.4	1.9	-	ナデ・指オサエ	ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙色		VI
221	土坑 4590	土師器	皿	10.0	1.8	-	ナデ・指オサエ	ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙色		VI
222	土坑 4590	土師器	皿	10.0	1.8	-	ナデ・指オサエ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	内面に漆付着	V新～VI前半
223	土坑 4590	土師器	皿	10.4	1.7	-	ナデ・指オサエ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	煤付着	V中～VI古
224	土坑 4590	土師器	皿	14.3	3.2	-	ナデ・指オサエ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙色		V中～新
225	土坑 4590	土師器	皿	14.5	3.5	-	ナデ・指オサエ	ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙色		V中～新
226	土坑 4590	土師器	皿	9.2	2.3	5.2	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/3 浅黄橙色		V～VI
227	土坑 4590	土師器	皿	9.4	1.9	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/3 浅黄橙色		V～VI
228	土坑 4590	土師器	皿	15.0	3.8	8.2	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/4 浅黄橙色		V～VI
229	土坑 4590	土師器	皿	16.2	4.5	8.2	ロクロナデ	ロクロナデ	7.5YR8/4 浅黄橙色		V～VI

遺物番号	遺構	種類	器種	法量			成形・調整		色調	備考	時期
				口径	器高	底径	外面	内面			
230	土坑 4590	土師器	皿	9.1	1.8	-	ロクロナデ	ロクロナデ	7.5YR6/4 浅黄橙色		V~VI
231	土坑 4590	土師器	皿	9.5	1.5	-	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR7/2 にぶい黄橙色		V~VI
232	土坑 4590	土師器	皿	9.5	1.5	-	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/3 浅黄橙色		V~VI
233	土坑 4590	土師器	皿	-	[4.9]	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR7/2 にぶい黄橙色		V~VI
234	土坑 4590	土師器	皿	(14.6)	3.6	6.0	ロクロナデ	ロクロナデ	7.5YR6/4 浅黄橙色		V~VI
235	土坑 4590	土師器	皿	14.8	3.5	6.3	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR7/2 にぶい黄橙色		V~VI
236	土坑 4590	土師器	耳皿	6.0 ~ 10.8	2.0	4.0	ロクロナデ	ナデ	10YR8/2 灰白色		V~VI
237	土坑 4590	灰釉陶器	皿	10.0	1.9	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/1 灰白色	赤色顔料付着	IV
238	土坑 4590	瓦器	皿	10.8	1.4	6.0	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	10YR4/1 褐灰色	底部内面に鋸歯状暗文	V~VI
239	土坑 4605	土師器	皿	10.0	2.0	-	ナデ・指オサエ	ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙色		V古~中
240	土坑 4605	土師器	皿	10.2	2.1	-	ナデ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙色		V古~中
241	土坑 4605	土師器	皿	10.4	1.7	-	ナデ・指オサエ	ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙色		V古~中
242	土坑 4605	土師器	皿	15.0	2.8	-	ナデ・指オサエ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙色		V古~中
243	土坑 4605	土師器	皿	15.0	3.0	-	ナデ・指オサエ	ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙色		V古~中
244	土坑 4605	土師器	皿	15.6	4.0	-	ナデ・指オサエ	ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙色		V古~中
245	土坑 4605	土師器	皿	25.5	3.1	-	ナデ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙色		V
246	土坑 4605	土師器	鉢	29.8	11.0	15.0	ナデ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	外面に輪積み糸が残る。即付き	V
247	土坑 4605	須恵器	甕	(33.6)	[7.4]	-	格子状タタキ・ヨコナデ	ヨコナデ	N7/ 灰色		V
248	土坑 4605	白磁	皿	9.8	2.5	3.0	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/1 灰白色		V
249	土坑 4605	白磁	碗	18.0	[5.7]	-	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/3 浅黄橙色		V
250	土坑 4623	土師器	皿	9.8	1.6	-	ナデ	ナデ	5YR7/6 橙色		V中~新
251	土坑 4623	土師器	皿	9.3	2.7	5.7	ナデ	ナデ	5YR7/6 橙色		V
252	土坑 4623	瓦質土器	壺	8.7	[3.0]	-	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/1 灰白色		V
253	土坑 4623	青磁	碗	(17.0)	[4.8]	-	施軸	施軸	10Y6/2 オリーブ灰色		V
254	溝 4627	土師器	皿	9.3	1.7	-	ナデ・指オサエ	ナデ	10YR8/4 浅黄橙色		V中~VI古
255	溝 4627	土師器	皿	10.0	1.8	-	ナデ・指オサエ	ナデ	10YR8/4 にぶい黄橙色		V中~VI古
256	溝 4627	土師器	皿	16.0	2.5	-	ナデ・指オサエ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙色		V中~新
257	溝 4627	土師器	皿	-	[2.6]	9.6	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/3 浅黄橙色		V
258	溝 4627	土師器	皿	16.5	4.7	7.0	ロクロナデ	ロクロナデ	5YR7/6 橙色		V
259	溝 4627	瓦器	碗	15.8	5.5	7.0	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	10YR2/1 黒色		V
260	土坑 4670	土師器	皿	10.0	1.5	-	ナデ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙色		IV中~V古
261	土坑 4670	土師器	皿	12.6	2.0	-	ナデ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙色		IV中~新
262	土坑 4670	土師器	皿	14.2	3.4	-	ナデ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙色		V古~中

遺物番号	遺構	種類	器種	法量			成形・調整		色調	備考	時期
				口径	器高	底径	外面	内面			
263	土坑 4670	土師器	皿	15.6	3.0	-	ナデ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙色		V古～中
264	土坑 4670	瓦器	碗	15.5	[4.7]	-	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	10YR4/1 褐灰色		V
265	土坑 4670	瓦質土器	鉢	32.5	[6.7]	-	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	10YR7/1 灰白色		V
266	土坑 4670	白磁	碗	-	[3.0]	7.4	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR7/1 灰白色	外面煤付着	V
267	土坑 4723	土師器	皿	13.9	3.2	-	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ・一定方向ナデ	7.5YR7/4 に近い橙色		V中～新
268	土坑 4723	灰釉陶器	鉢	(30.8)	12.0	(13.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	N7/ 灰白色	常滑産	V
269	土坑 4723	灰釉陶器	鉢	(34.0)	11.1	(17.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	N7/ 灰白色	常滑産	V
270	土坑 4723	青磁	碗	(16.0)	6.4	(5.0)	施釉・ロクロナデ	施釉	5Y6/4 オリーブ黄色		V
271	土坑 4723	白磁	碗	15.6	12.0	5.8	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/1 灰白色		V
272	土坑 4791	土師器	皿	9.5	2.7	-	ナデ・指オサエ	ナデ	5YR7/4 に近い橙色		V新～VI古
273	土坑 4791	土師器	皿	9.6	1.8	-	ナデ・指オサエ	ナデ	5YR7/4 に近い橙色		V新～VI古
274	土坑 4791	土師器	皿	9.9	1.7	-	ナデ・指オサエ	ナデ	10YR7/4 に近い橙色		V新～VI古
275	土坑 4791	土師器	皿	14.4	3.0	-	ナデ・指オサエ	ナデ	10YR7/4 に近い橙色		V中～VI古
276	土坑 4791	須恵器	壺	-	[24.9]	(11.0)	ナデ・ケズリ	ナデ	N6/ 灰色		V
277	土坑 4791	瓦器	皿	9.4	1.8	8.0	ナデ	ナデ	10YR4/1 褐灰色	底部内面に磨歯状略文	V
278	土坑 4791	瓦器	碗	12.5	5.2	3.8	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	10YR4/1 褐灰色		V
279	土坑 4791	瓦器	碗	17.4	[8.0]	-	ナデ	ナデ・ミガキ	10YR4/1 褐灰色		V
280	土坑 4791	白磁	碗	-	[2.4]	3.0	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/1 灰白色		V
281	土坑 4844	灰釉陶器	鉢	(27.4)	[9.1]	-	ロクロナデ	施釉	10Y7/1 灰白色	内面に赤色顔料、金の痕跡あり	V
282	土坑 4867	土師器	皿	10.0	2.0	-	ナデ・指オサエ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙色		V中～新
283	土坑 4867	土師器	皿	14.0	2.8	-	ナデ・指オサエ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙色		V古～中
284	土坑 4867	土師器	皿	15.0	2.9	-	ナデ・指オサエ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙色		V～VI古
285	土坑 4867	山茶碗	皿	9.5	1.9	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/1 灰白色		V
286	土坑 4869	土師器	皿	10.0	1.9	-	ナデ・指オサエ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙色		V中～新
287	土坑 4869	土師器	皿	10.2	1.8	-	ナデ・指オサエ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙色		V古～中
288	土坑 4869	土師器	皿	14.9	2.4	-	ナデ・指オサエ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙色		V中～新
289	土坑 4869	土師器	皿	15.1	3.0	-	ナデ・指オサエ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙色		IV新～V中
290	土坑 4869	須恵器	鉢	(29.6)	[10.4]	-	ロクロナデ	ロクロナデ・ナデ	N4/ 灰色	使用痕あり。束插系	V
291	土坑 4869	白磁	碗	-	[2.7]	6.4	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/1 灰白色		V
292	土坑 4869	瓦	軒平瓦	高さ:3.5	幅: [11.5]	厚さ:1.7	ナデ	ナデ	5Y6/1 灰色	均整唐摺文	V
293	土坑 4968	土師器	皿	9.2	1.5	-	ナデ・指オサエ	ナデ	5YR7/4 橙色		V新～VI中
294	土坑 4968	土師器	皿	9.6	1.9	-	ナデ・指オサエ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙色		V中～VI古
295	土坑 4968	青磁	碗	-	[1.2]	4.0	回転ナデ	施釉	5Y7/1 灰白色		V

遺物 番号	遺構	種類	器種	法量			成形・調整		色調	備考	時期
				口径	器高	底径	外面	内面			
296	土坑 4968	白磁	碗	16.4	[3.7]	-	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/1 灰白色		V
297	土坑 4968	石製品	温石	長さ： 11.0	幅：8.2	厚さ：2.0				滑石製。穿孔あり	V

報告書抄録

ふりがな	てらまちきゅういき
書名	寺町旧城
副書名	貞安前之町における埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	イビソク京都市内遺跡調査報告
シリーズ番号	第10輯
編著者名	持田 透、小池智美
編集機関	株式会社イビソク関西支店
所在地	〒612-8425 京都府京都市伏見区竹田田中殿町86番地 TEL 075-632-8109
発行年月日	2014年11月

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
寺町旧城	京都市下京区 寺町通四条下 る貞安前之町 614-2	26106	170	35° 09' 39"	135° 46' 06"	20131021 } 20140306	1592 m ²	土地開発

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
寺町旧城	寺院跡	平安時代後期	道路 4001・4002、区画溝、井戸、ピット	土師器・緑釉陶器	
		室町時代	土坑、石組遺構、石積遺構、井戸、ピット	土師器・陶磁器・銭	
		安土桃山時代～江戸時代後期	土坑、石組遺構、井戸	土師器・陶磁器・瓦・石塔・木製品（位牌、柿経）・銭	一括出土 銭出土
		江戸時代後期以降	土坑、石組遺構、井戸、溝、建物跡	土師器・瓦	
要約		<p>1) 平安時代後期の綾小路を延長する道路遺構を確認した。</p> <p>2) 室町時代の青屋とよばれる染色に伴う遺構を検出した。</p> <p>3) 安土桃山時代に埋設されたと考えられる備前壺に収めた一括出土銭埋設土坑を検出した。</p> <p>4) 安土桃山時代以降では天明の大火後に整理されたとみられる多量の墓石を廃棄した土坑、位牌・柿経等を廃棄した土坑等、大雲院に関連する遺構・遺物を多数検出した。廃棄された墓石から、豊臣秀次及びその縁者の女性のものと考えられる供養塔を発見した。</p>			

寺 町 旧 域

—貞安前之町における埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行日 2014年11月

編 集 株式会社イビソク関西支店
発 行

住 所 京都府京都市伏見区竹田田中殿町8番地
〒612-8425 TEL 075-632-8109

印 刷 富士出版印刷株式会社